

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（10）

県畑地帯総合土地改良事業西京地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浅川牧（Ⅰ・Ⅱ）遺跡

1994年 3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、県営ほ場整備事業（西之表市西京地区）の実施にあたり、昭和54年度に西之表市教育委員会が調査主体となり、発掘調査を実施した「浅川牧遺跡」発掘調査報告書です。

調査の結果、当遺跡は縄文時代後期の市来式土器や屋久・種子を中心に分布する一湊式土器を主体に、多くの貴重な遺物が出土しました。また、一湊式の時期の竪穴住居が初めて発見され、南九州との関係や種子・屋久の独特な文化を知ると共に考古学の研究にとって貴重な資料となるものと思います。併せて、県農政部の協力で遺跡の一部は設計変更によって現地保存されたことは喜ばしいことと存じます。

本報告書が、関係者の学術研究の資料として活用され、併せて、県民の皆様の文化財保護意識の高揚のお役に立てば幸いです。

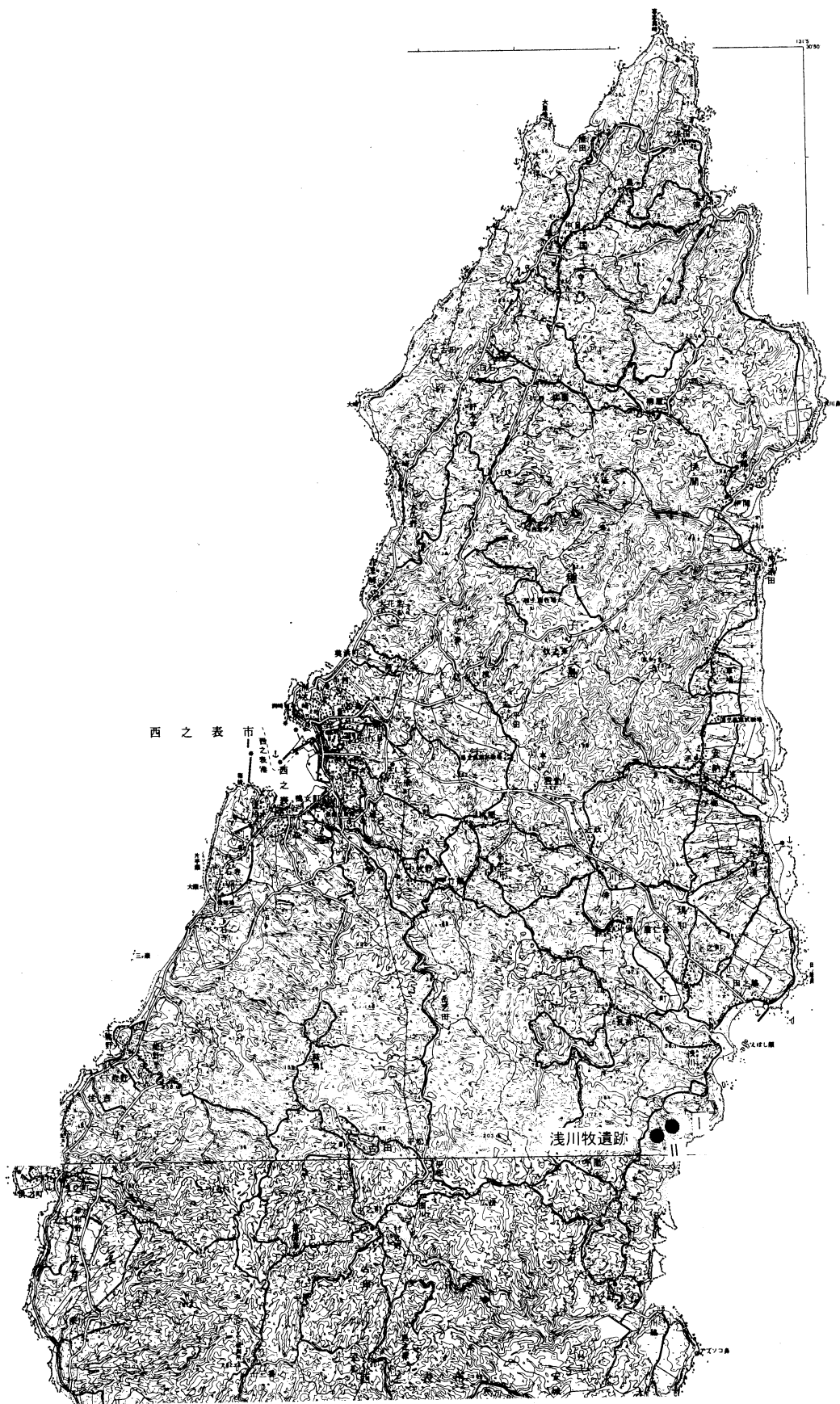
最後に発掘調査にご協力いただきました熊毛耕地事務所、西之表市教育委員会、地元の作業員の皆様に心から感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 大久保 忠 昭

報告書抄録

ふりがな	あさごうまき いせき							
書名	浅川牧遺跡							
副書名	県畑地帯総合土地改良事業西京地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(10)							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編集者名	青崎和憲							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさごうまき いせき 浅川牧遺跡	かごしまけんくまげぐん 鹿児島県熊毛郡 にしのおもてしげんな 西之表市現和 あさごうまき 浅川牧	46213	55	131°3′	30°40′	19791210 ～ 19791220 19800116 ～ 19800211	1,500m ²	県畑地帯 総合土地 改良西京 地区に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
浅川牧遺跡		縄文時代後期	竪穴住居跡 土坑	1基 31基	土器, 石器(磨 石・石皿) 異形土器			



西之表市

浅川牧遺跡

例 言

1. この報告書は，昭和54年12月10日～20日，同55年1月16日～2月11日にかけて実施した，西之表市西京地区ほ場整備事業に係る発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡の調査については，西之表市教育委員会が昭和54年度に県農政部（熊毛支庁）の委託を受け，調査主体は西之表市教育委員会，調査は県文化課が実施した。
3. 整理・報告書作成については，平成5年度に県立埋蔵文化財センターが実施した。
4. 遺物番号は，本文及び挿図・図版の番号と一致する。
5. 本報告書の編集は青崎，石器の執筆については，中原一成が，その他については青崎が担当執筆した。

目 次

序 文	
報告書抄録	
例 言	
目 次	
第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 作成の組織	1
第4節 日誌抄	2
第II章 遺跡位置と環境	3
第III章 浅川牧(I)遺跡	8
第1節 調査概要	8
第2節 土 層	8
第3節 出土遺物	8
第IV章 浅川牧(II)遺跡	12
第1節 調査概要	12
第2節 土 層	12
第3節 遺 構	12
1 竪穴住居跡	12
2 土 抗	15
第4節 出土遺物	22
1 土 器	22
2 石 器	26
第V章 まとめにかえて	104

表 目 次

表1 周辺遺跡	4	表6 石器観察表5	101
表2 石器観察表1	98	表7 石器観察表6	102
表3 石器観察表2	98	表8 石器観察表6	103
表4 石器観察表3	99	表9 石器観察表6	103
表5 石器観察表4	100	表10 石器観察表6	103

挿 図 目 次

第1図	浅川牧遺跡及び周辺遺跡	4	第36図	V類土器	47
第2図	浅川牧 (I・II) 遺跡	5	第37図	異形土器 (壺形土器)	48
第3図	地形図及び調査区	6	第38図	出土土器	49
第4図	土層図	7	第39図	VI A類土器	50
第5図	出土遺物	9	第40図	VI A類土器	51
第6図	出土遺物	10	第41図	VI B - 1類土器	52
第7図	出土遺物	11	第42図	VI B - 1類土器	53
第8図	円形竪穴住居跡	13	第43図	VII B類土器	54
第9図	出土土器	14	第44図	VII B類土器	55
第10図	土坑配置図	16	第45図	VII A類土器	56
第11図	土坑実測図	17	第46図	VII A類土器	57
第12図	土坑内出土遺物 (その1)	18	第47図	VII B類土器	58
第13図	土坑内出土遺物 (その2)	19	第48図	VII C類土器	59
第14図	遺物分布図	20	第49図	VII C類土器	60
第15図	遺物出土状況	21	第50図	底部	61
第16図	I類土器	27	第51図	底部	62
第17図	II A類土器	28	第52図	VIII類土器	63
第18図	II B類土器	29	第53図	VIII類土器	64
第19図	II類土器	30	第54図	底部	65
第20図	II A類土器	31	第55図	石器	66
第21図	III A - 1類土器	32	第56図	石器	67
第22図	III A - 2・3類土器	33	第57図	石器	68
第23図	III B類土器	34	第58図	石器	69
第24図	III B類土器	35	第59図	石器	70
第25図	III B類土器	36	第60図	石器	71
第26図	III A - 3・4類土器	37	第61図	石器	72
第27図	IV A - 1類土器	38	第62図	石器	73
第28図	IV A - 1類土器	39	第63図	石器	74
第29図	IV B類土器	40	第64図	石器	75
第30図	IV A - 4類土器	41	第65図	石器	76
第31図	IV類土器	42	第66図	石器	77
第32図	IV A - 3類土器	43	第67図	石器	78
第33図	IV A - 3類土器	44	第68図	石器	79
第34図	IV A - 3類土器	45	第69図	石器	80
第35図	IV A - 3類土器	46	第70図	石器	81

第71図	石器	82	第78図	石器	89
第72図	石器	83	第79図	石器	90
第73図	石器	84	第80図	石器	91
第74図	石器	85	第81図	石器	92
第75図	石器	86	第82図	石器	93
第76図	石器	87	第83図	軽石製品	94
第77図	石器	88	第84図	円盤形加工品	95

図 版 目 次

図版 1	浅川牧(I・II)遺跡遠景	108	図版19	出土土器	126
図版 2	発掘調査風景他	109	図版20	出土土器	127
図版 3	浅川牧(II)遺跡土坑他	110	図版21	出土土器	128
図版 4	出土状況他	111	図版22	出土土器	129
図版 5	浅川牧(I)遺跡土器・石器	112	図版23	出土土器	130
図版 6	出土土器	113	図版24	出土土器	131
図版 7	竪穴住居出土土器	114	図版25	出土土器	132
図版 8	土坑内出土土器他	115	図版26	出土土器	133
図版 9	出土土器	116	図版27	出土土器	134
図版10	出土土器	117	図版28	出土土器	135
図版11	出土土器	118	図版29	出土石器	136
図版12	出土土器	119	図版30	出土石器	137
図版13	出土土器	120	図版31	出土石器	138
図版14	出土土器	121	図版32	出土石器	139
図版15	出土土器	122	図版33	出土石器	140
図版16	出土土器	123	図版34	出土石器	141
図版17	出土土器	124	図版35	出土石器	142
図版18	出土土器	125	図版36	軽石製品他	143

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査の経過

鹿児島県教育委員会（以下、県文化課）は、文化財の保存・活用を図るため、開発事業実施に先立って文化財の有無及びその取り扱いについて各開発部局との間で事前に協議・調整を図っている。

鹿児島県農政部（農地整備課・熊毛支庁土地改良課）は、昭和52年に熊毛郡西之表市西京地区に県営ほ場整備事業を計画し、事業計画地内の埋蔵文化財の有無について県文化課に照会した。

これを受けて、県文化課は当該地区の埋蔵文化財分布調査を実施し、2か所（浅川牧Ⅰ遺跡・浅川牧Ⅱ遺跡）で遺跡を発見した。この結果に基づき、農地整備課、県文化課、西之表市教育委員会の三者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、事業実施前に確認調査を実施することとなった。

確認調査の結果、2遺跡の取り扱いについて再度三者で協議し、当初の工事計画を変更し浅川牧Ⅰ遺跡は盛り土で遺跡の現状保存を図り、浅川牧Ⅱ遺跡については切り部分や道路敷部分について発掘調査することとなった。

発掘調査は県文化課の支援・協力で西之表市教育委員会が主体となり、昭和54年12月10日～12月20日、同55年1月16日～2月11日まで実施した。整理報告については平成5年度に実施した。

第 2 節 発掘調査の組織

調査主体	西之表市教育委員会		
調査責者	西之表市教育委員会	教育長	小原 季丸
調査事務担当者		社会教育課長	山内 孝男
		主査	鮫島 安豊
		主事	奥村 学
発掘調査責任者	鹿児島県教育庁	文化課長	山下 典夫
		主事	池畑 耕一 (S54.12.10~20)
		主事	青崎 和憲 (S54.12.10~20・S55.1.16~2.11)
		主事	長野 真一 (S55.1.16~2.11)

第 3 節 報告書作成の組織

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	県立埋蔵文化財センター	所長	大久保忠昭
事務担当		次長兼総務課長	水口 俊雄
		主査	成尾 雅明
作成企画		調査課長	戸崎 勝洋
作成者	県教育庁文化課兼県立埋蔵文化財センター	文化財主事	青崎 和憲

出土遺物については河口貞徳氏（鹿児島県文化財保護審議会委員）、上村俊雄氏（鹿児島大学法文学部教授）、本田道輝（同助手）の指導・助言を得た。

第4節 日誌抄

- 12/10 市教委，熊毛支庁調査打ち合わせ。4mグリッドを基本にトレンチを設定し杭打ち作業。
- ／11 発掘調査開始。I地点，AからEグリッド掘り下げ作業。
 - ／12 J・K区の調査開始。
 - ／13 引き続き調査区域を広げての作業。磨製石鏃が出土した。
 - ／14 6D～F区掘り下げ。6区北側のグリッドを新たに設定する。
 - ／15 5区掘り下げ。6区以北のグリッド設定。遺跡の南側谷を隔てた丘陵台地で，土地改良工事中に遺物が散布していることが確認されたため，その取り扱いについて市教委は熊毛支庁，県文化課と協議した。その結果，設計変更も図りながら当地区も発掘調査を実施することとなり，第2地点を浅川牧Ⅱ遺跡とした。
 - ／17 第1地点（浅川牧Ⅰ遺跡）遺物出土状況写真撮影，土層断面実測を行う。
 - ／18 4F，4G，3G，3Hの掘り下げ作業。浅川牧Ⅱ遺跡一部確認調査開始。
 - ／19 第1地点・第2地点平行して掘り下げ作業。遺物平板実測，地形実測。
 - ／20 第1地点（浅川牧Ⅰ遺跡）埋め戻し作業で調査終了した。
- 1/16 市教委，熊毛支庁打ち合わせ。浅川牧Ⅰ遺跡は盛土工法による設計変更で保存。
- ／17 浅川牧Ⅱ遺跡本格的に調査開始。
 - ／18 2FG，4E，6B，8E，10K区調査。縄文後期遺物が出土し，第Ⅲ層が遺物遺物包含層。
 - ／19 2・3D-E，6B・16K掘り下げ。安城中生徒見学。
 - ／21 2D遺物多数出土。4H掘り下げ。16K乳房状の底部出土する。
 - ／22 14-15F-J，11-12-H・I区掘り下げ作業。
 - ／23 9～13-K～O，9～17-J・K掘り下げおよび遺物取り上げ。
 - ／24 前日NO継続作業。12-M，14-K等遺物取り上げ。
 - ／25 9～17-J・K，9～13-K～O掘り下げ。市来，一湊式土器，石器が多数出土した。
 - ／26 昨日に引き続き継続作用。
 - ／29 2F・G掘り下げ作業。F・G区平板実測。市議会議員視察。
 - ／30 9-Lより異形土器が出土した。ピットが多数検出する。
 - ／31 16-K，13～15K区平板実測および遺物取り上げ。市議会議長視察。
- 2/1 雨のため現場作業中止。雨の中，平板実測。南日本新聞記者来跡。
- ／2 調査区外南側で工事中遺物が発見され，遺跡の範囲が拡大することが判明した。県財政課視察。
 - ／4 9～13-J～O区掘り下げ。遺跡が拡大する旨を熊毛合庁に伝える。
 - ／5 一湊式に伴う竪穴住居発見する。遺跡拡大力所については協議することとなった。
 - ／6 5～9-J・K掘り下げ作業。平板実測。
 - ／7 県道以西の台地確認調査。遺物包含層は無し。市文教委員視察。
 - ／8 5～9-J・K平板実測。ピット検出作業。
 - ／9 遺構実測。竪穴住居址周辺の3000㎡については設計変更で保存することとなった。
 - ／10 平板実測。遺物取り上げ。
 - ／11 平板実測，発掘器財整理し本日で調査終了。市教委・熊毛支庁挨拶。

第Ⅱ章 遺跡の環境

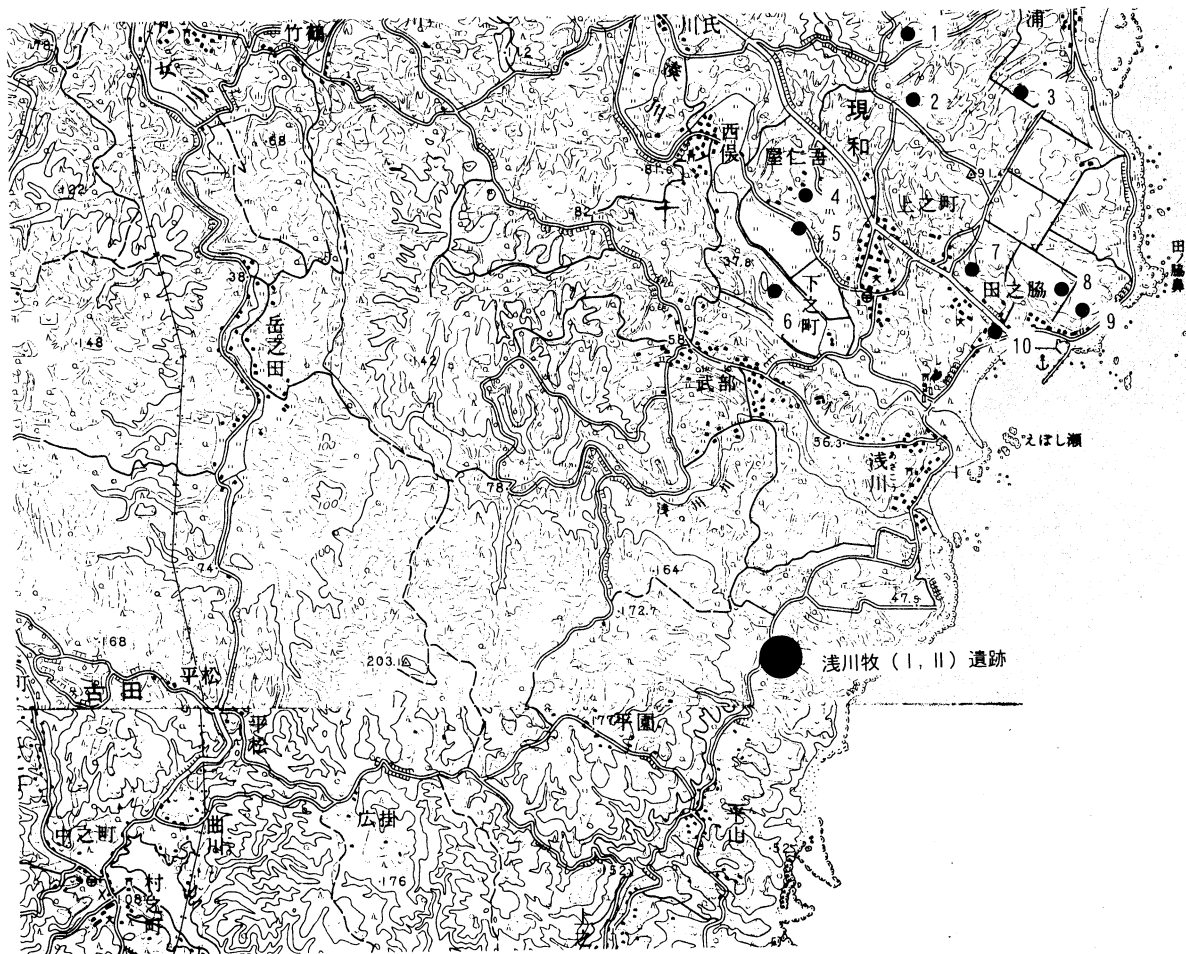
種子島は、鹿児島本土大隅半島最南端の佐多岬から南南東に約54km隔てた海上に位置する。南北約52km、東西約12kmのほぼ南北に細長く延びた、島の最高部でも標高が約282mの平坦な島である。北から南へ西之表市、中種子町、南種子町の1市2町となる。地形は丘陵状の山地と島の北部、中部の東側、南の西側は海岸段丘が発達し、中央西側、南の東側は砂丘が形成され、大川田川、早稲田川など河川周辺は沖積低地で水田となる。浅川牧遺跡は西之表市東海岸の太平洋に注ぐ現和川右岸側の幾重にも延びた丘陵に位置し、丘陵の末端は段丘となる

考古学的調査による南西諸島は、種子島・屋久島・トカラ列島からなる薩南諸島を南島北部文化圏(本土南九州の影響を受けた南九州文化圏)、奄美大島・琉球諸島を南島中部圏(奄美の宇宿上層・下層式と沖縄の伊波式・荻堂式の南島式土器文化圏)、宮古島・八重山諸島を南島南部圏(外耳式土器に代表される八重山式土器)の三域に分けられる。

南九州文化圏に包括される種子島を考古学的に概観すると、旧石器時代についてはこれまで遺跡の存在は知られていなかったが、平成4年に発掘調査された横峯C遺跡は、AT層の下位から礫群が発見された。約3万年以前の後期旧石器時代の年代値が測定されている。種子島における旧石器時代の遺跡の存在が初めて明らかとなった貴重な遺跡である。

縄文時代については、アカホヤ下層から早期の吉田式、下剥峯式・桑ノ丸式が出土する西之表市下剥峯遺跡、押形文・手向山式土器が出土する西之表市久保田遺跡、塞ノ神式土器を伴う西之表市屋久川遺跡・中種子町千草原遺跡等、苦浜式が出土する南種子町横峰C遺跡がある。なお、平成5年に調査した西之表市西俣遺跡は、縄文早期前葉の前平式土器を伴う遺跡である。種子島ではこれまで前平式の発見例は無く、新たな発見となった。前期からは轟式を伴う西之表市下剥峯遺跡・東方ノ平遺跡、中種子町大園遺跡・千草原遺跡、南種子町赤石牟田遺跡、曾畑式が出土する西之表市寺ノ門遺跡・古浜遺跡・本城遺跡・柳原遺跡・城ノ浜遺跡・東方ノ平遺跡・指辺遺跡、中種子町二十番遺跡・千草原遺跡・田島遺跡・中田遺跡、南種子町赤石牟田遺跡が知られている。中期の遺跡は皆無に等しく西之表市大田遺跡で凹線文の報告があるのみである。後期については指宿式土器が西之表市大田遺跡、中種子町向町遺跡・原尾遺跡から、一湊式土器は中種子町下之町遺跡、南種子町大野A遺跡、市来式土器は西之表市寺ノ門遺跡・大田遺跡、中種子町阿高磯遺跡・向町遺跡・中田遺跡・原尾遺跡、納曾式土器は西之表市納曾遺跡から出土している。晩期については黒川式土器を伴う中種子町大園遺跡がある。

弥生時代の遺跡は主に砂丘に位置する。埋葬形態や貝製品の副葬品の豊富さ等、南種子町広田遺跡をはじめ西之表市上能野遺跡、田ノ脇遺跡、中種子町鳥ノ峯遺跡がある。広田遺跡は中期～後期にかけての埋葬遺跡で、副葬品には貝札など多数の貝製品が出土した。鳥ノ峯遺跡は中期から後期終末にかけての遺跡で、土坑中に屈葬人骨を埋葬し、砂で被いその上に十数個の丸い自然石で覆った28基の覆石墓の埋葬遺跡である。貝符やゴホーラ・イモガイ製の腕輪など多数出土している。



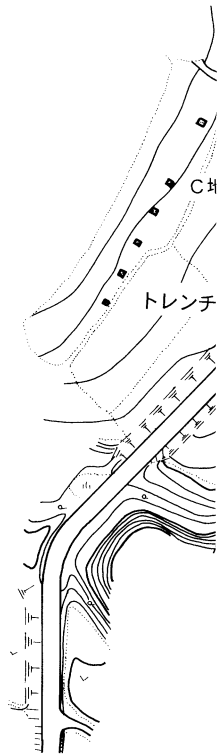
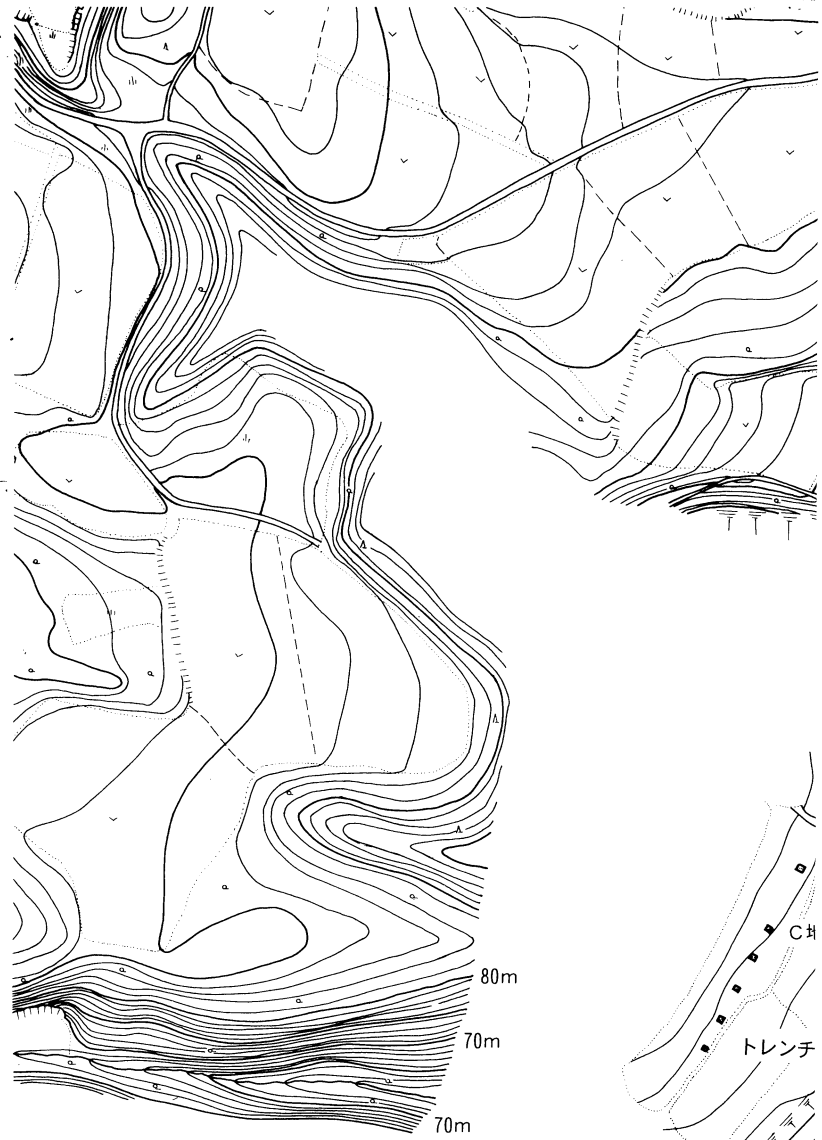
第1図 周辺遺跡

第1表 周辺遺跡

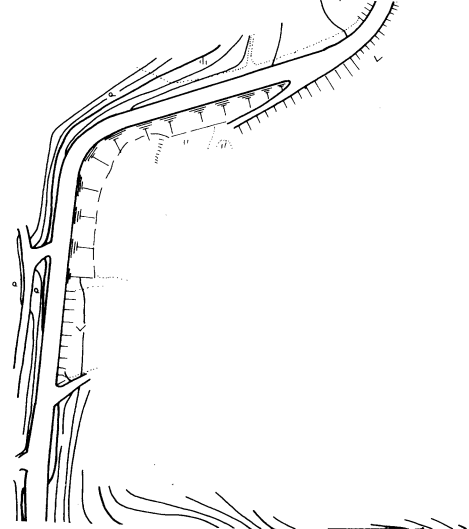
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	文献
1	横 峰	現和字横峯	台地		円形遺構	鹿児島県埋蔵文化財報告書 5
2	中 之 峯	現和中之峯	台地		打製石斧	昭和59年確認調査
3	指 辺	現和指辺	台地	縄文前期	曾畑式	昭和50年確認調査
4	寺 之 門	国上寺之門	台地	縄文早期		平成 5 年分布調査
5	西 侯	現和西侯	台地	縄文早期	前平式	鹿児島県埋蔵文化財報告書24
6	道月ノ峯	現和月ノ峯	平地	中世	土師器・須恵器	
7	泉 原	現和泉原	平地	弥生中期・後期	土器片・打製石斧・磨石	
8	東方ノ平	現和東方ノ	平地	弥生中後期	土器片・打製石斧・叩石	
9	屋 仁 吾	現和屋仁吾		縄文・平安		平成 7 年農政分布
10	田 ノ 脇	現和田ノ脇	砂丘	弥生後期	埋葬址	本城田ノ脇道跡概報 S. 43



第2図 浅川牧 (第I, II地点) 遺跡

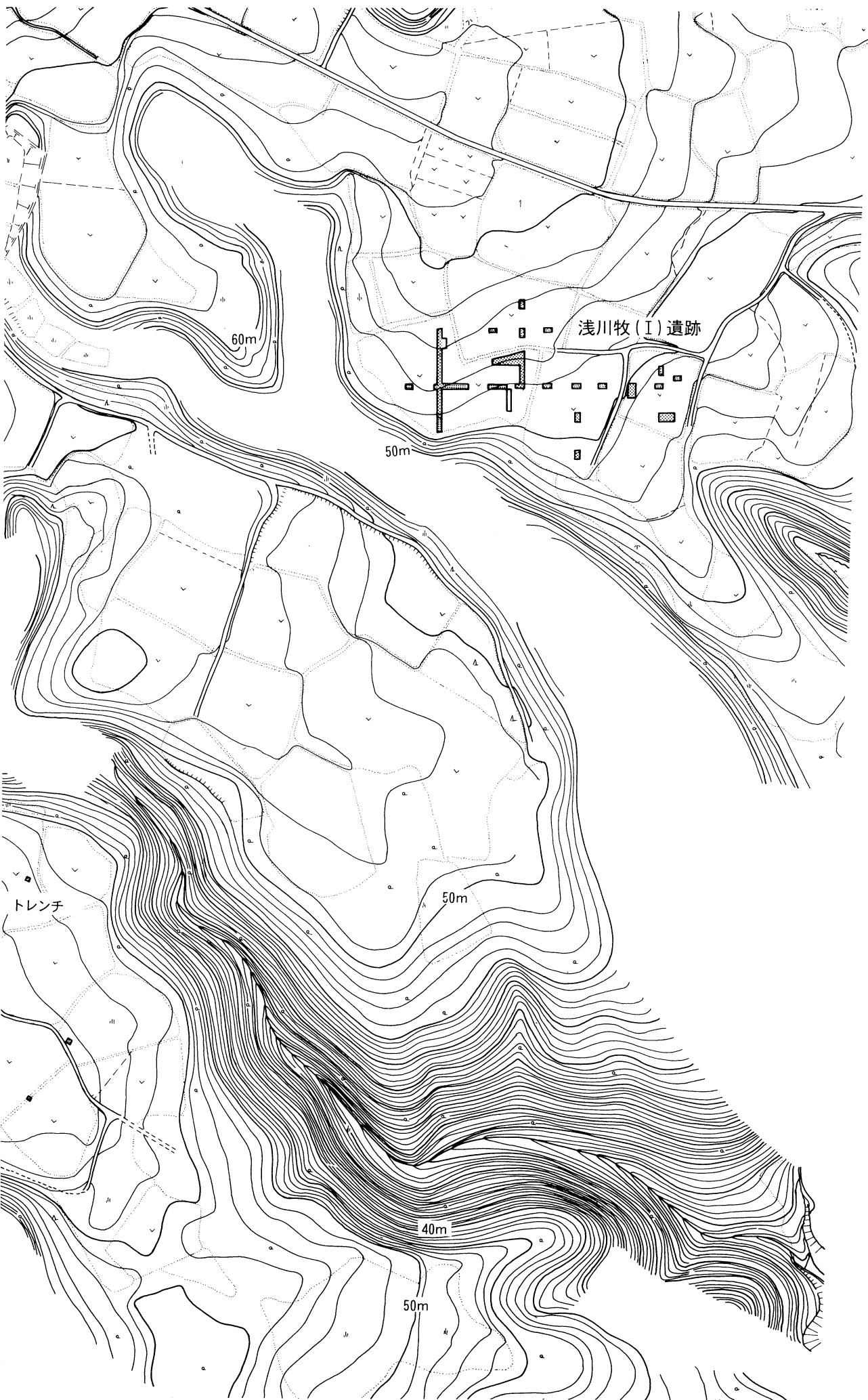


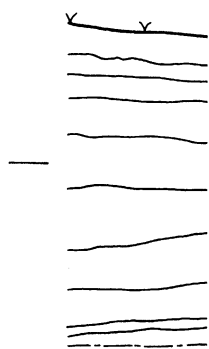
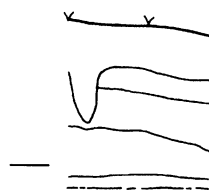
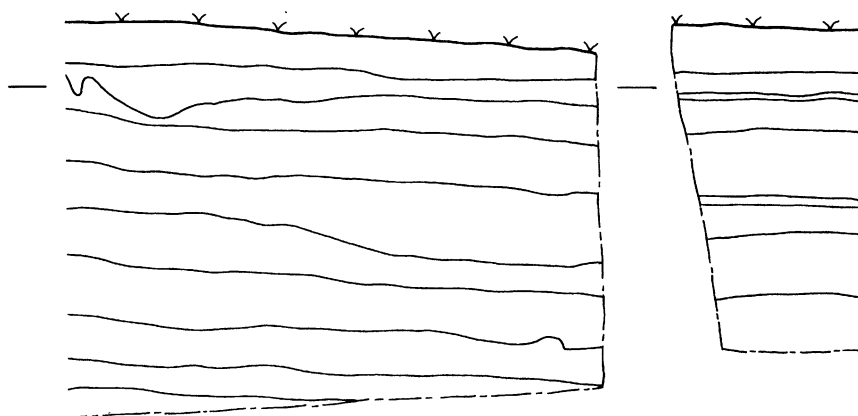
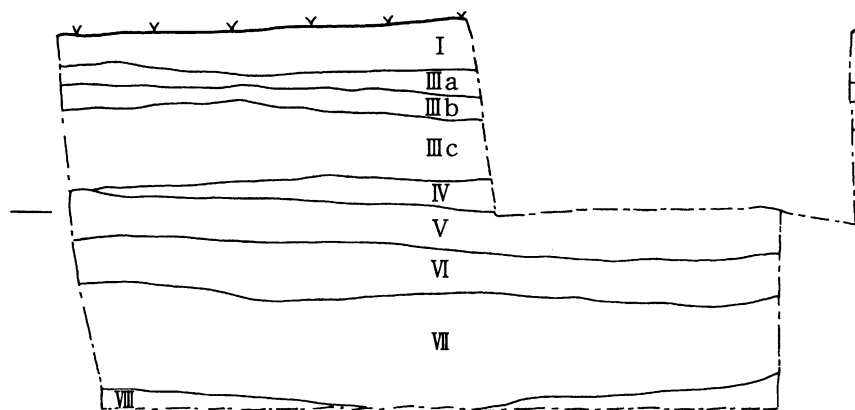
県道国上安城中種線

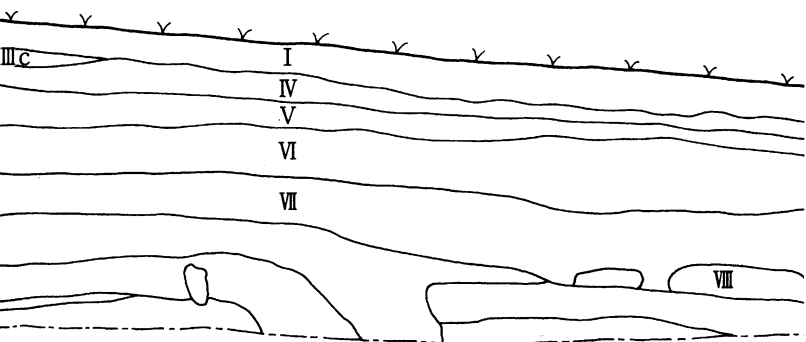
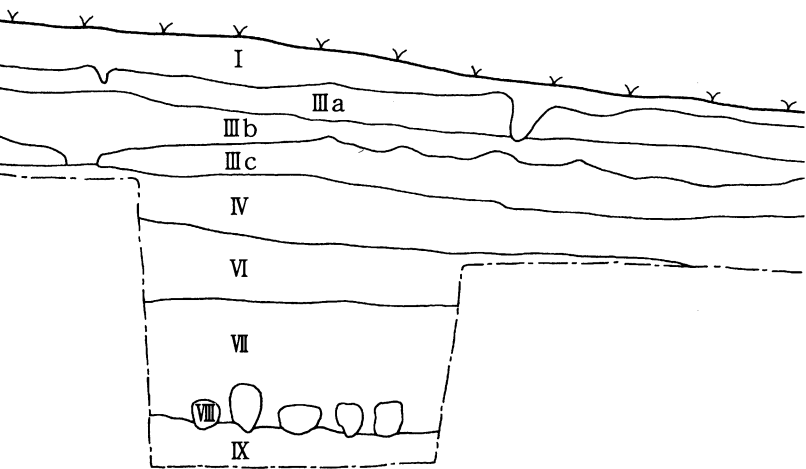
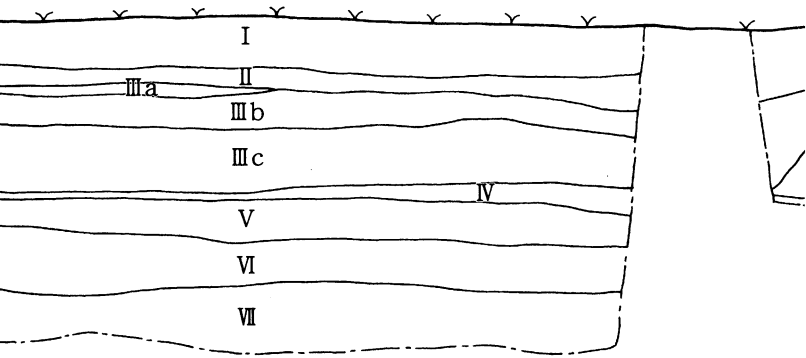
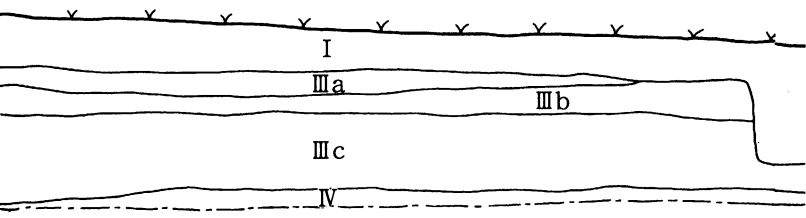




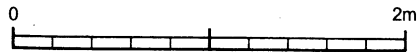
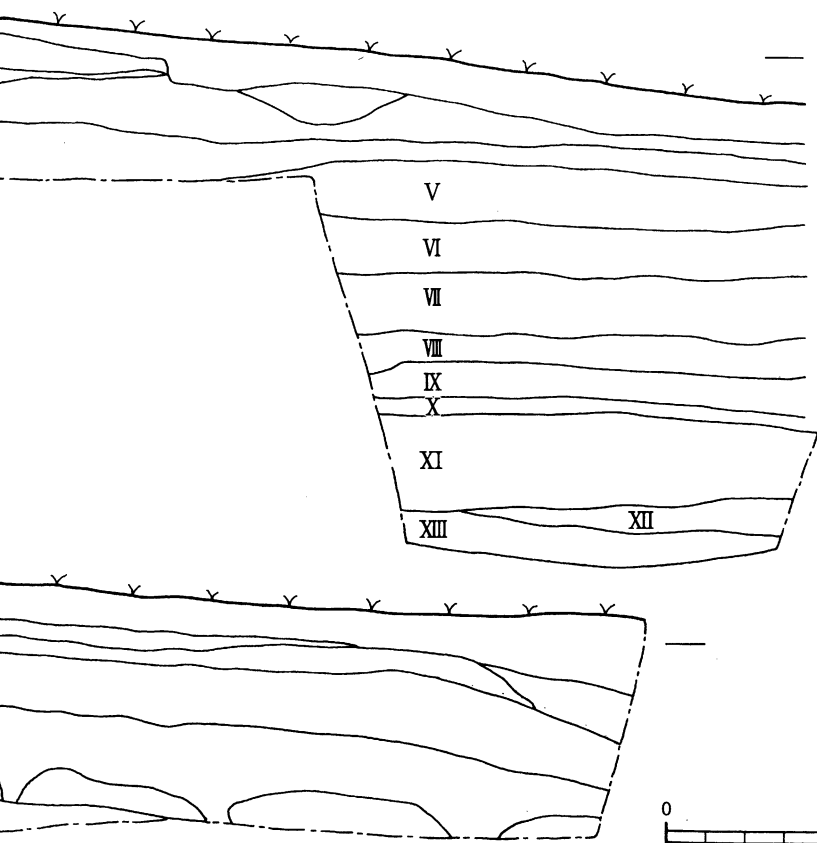
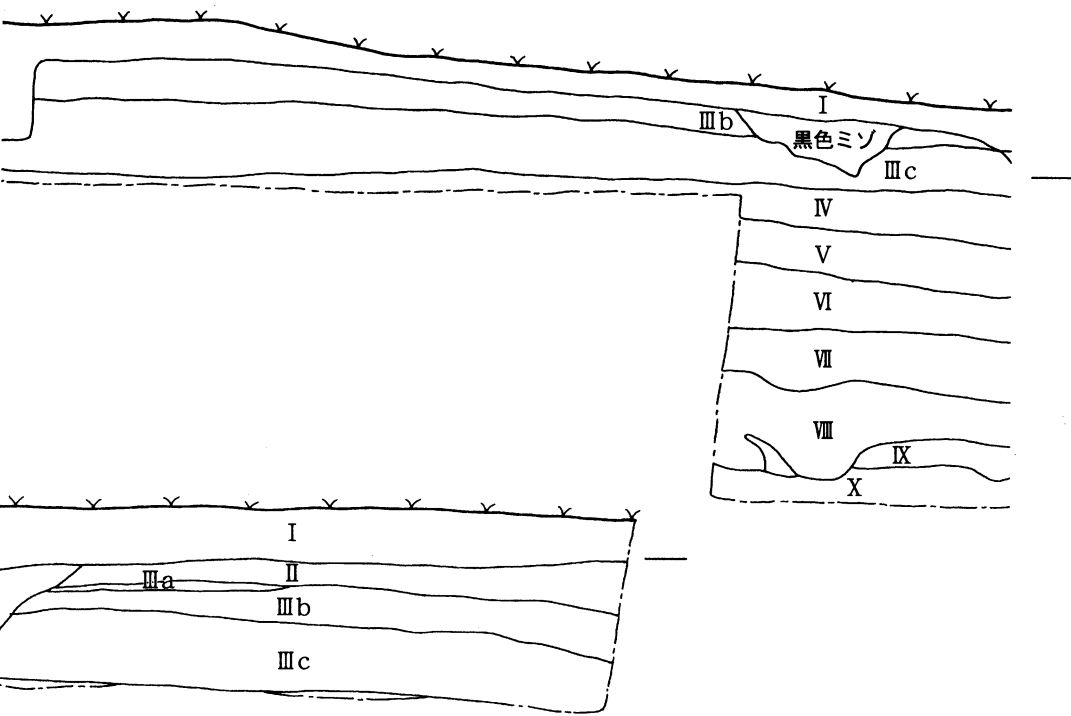
第3図 地形図及び調査区







第4図 土層図



第Ⅲ章 浅川牧(I)遺跡

第1節 調査概要

現和地区の台地は、東側の海岸線に向かって台地が延び末端で急峻な崖となる。その間には狭い谷が幾重にも入り込んで小台地が形成されている。第I地点の調査区もそうした台地のひとつで、南側には狭い谷を控えた小台地の中央付近にあたる。西側の海岸線に向かって緩やかに下降している傾斜面には、さとうきび、サツマイモなどが栽培されており、狭い谷は水田となっている。

調査は約9,000㎡の畑地を対象とした。

調査の結果、Ⅲa層上部に縄文時代後期、前期轟式土器や磨製石鏃、石斧、Ⅳ層からは塞ノ神式土器、口縁部に突起を有す細隆起線文土器が出土した。

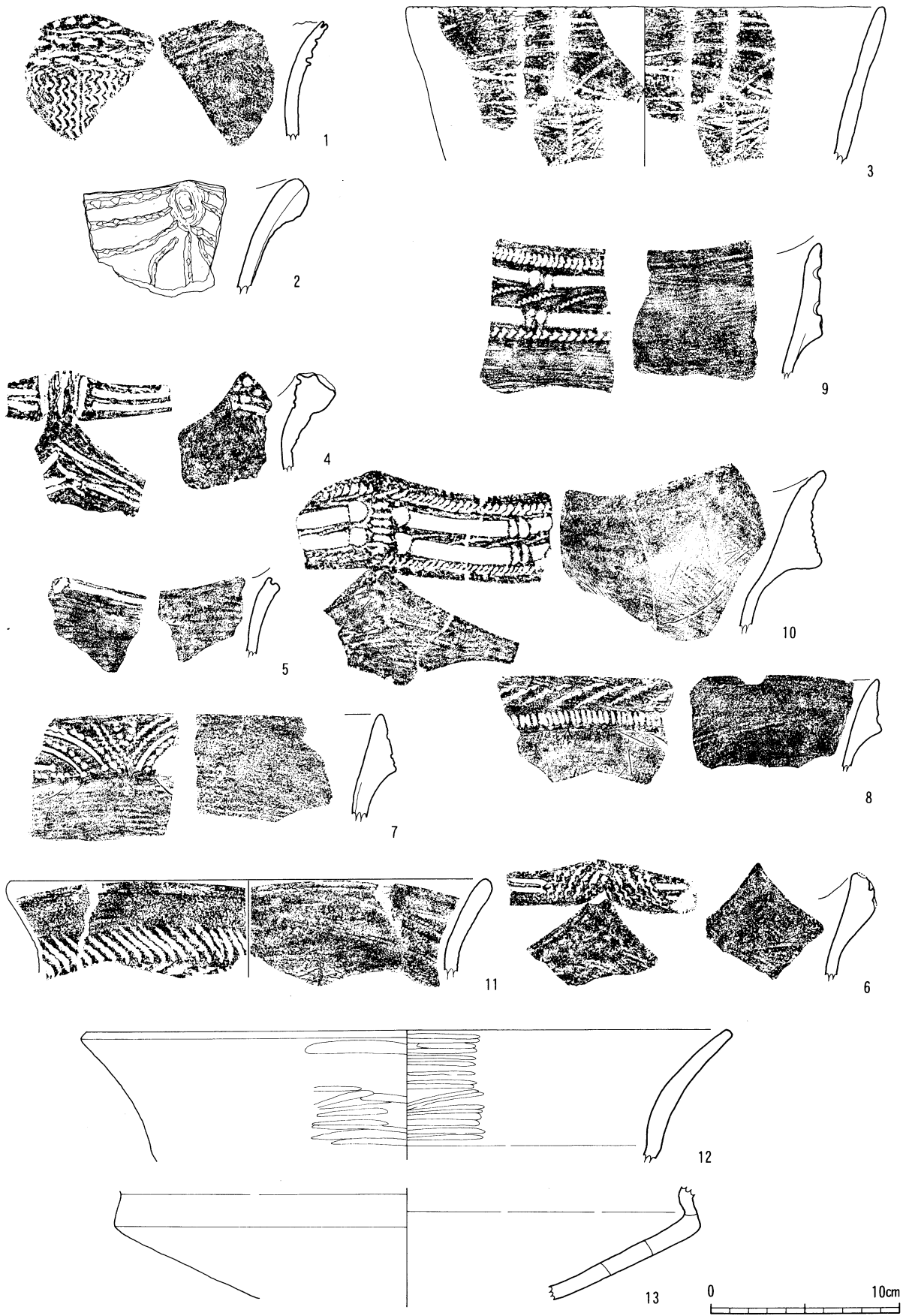
第2節 土層(第4図)

I層—工作土層、II層—黒褐色火山灰層、Ⅲ層—赤ホヤ層で黄褐色を呈す。約6,500y. B. Pの鬼界カルデラ噴出物での火山灰層である。Ⅲ層は a・b・cに細分でき、aは2次堆積、b・cは軽石を含む。Ⅳ層・Ⅴ層は橙褐色粘質土層、Ⅵ層は褐色土層でやや粘質をおびる。Ⅶ層はロームで茶褐色を呈す。Ⅷ層は軽石層で桜島噴出起源で約15,000y. B. Pの年代を示す。Ⅸ層はローム層、X層・XI層は橙褐色のローム層、XII層は明褐色、XIII層は茶褐色ローム層、XIV層は種子島の基盤をなす熊毛層群(古第三紀)で砂岩の風化層である。

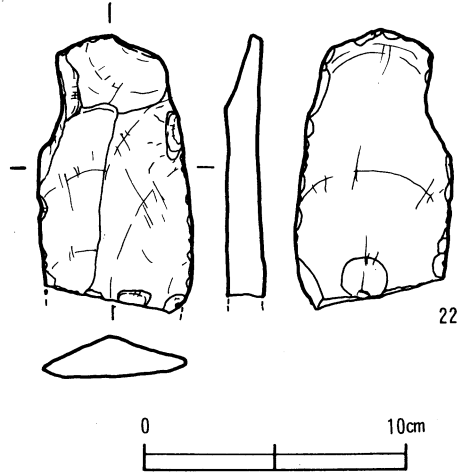
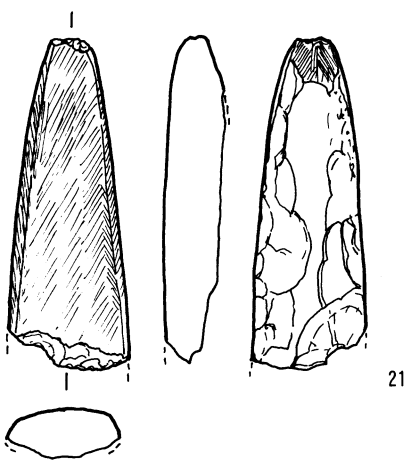
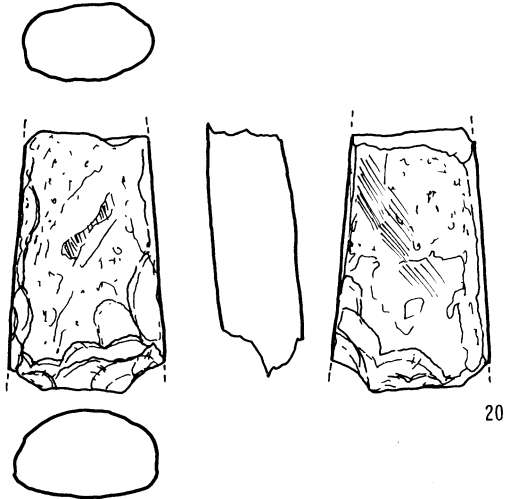
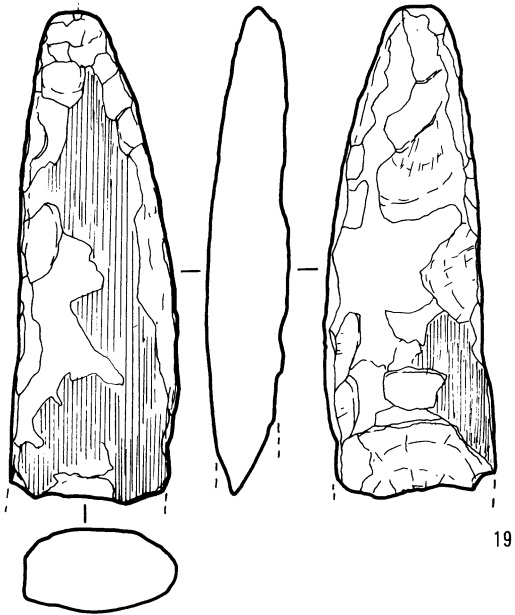
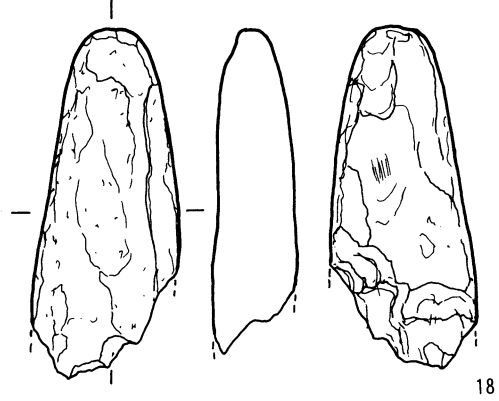
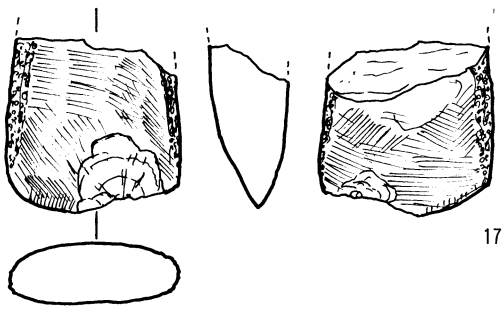
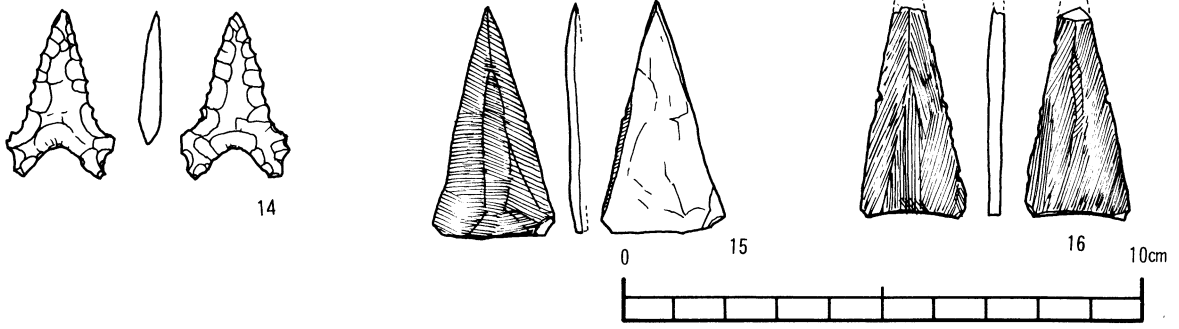
第3節 出土遺物(第5～7図)

1 土器(第5図)

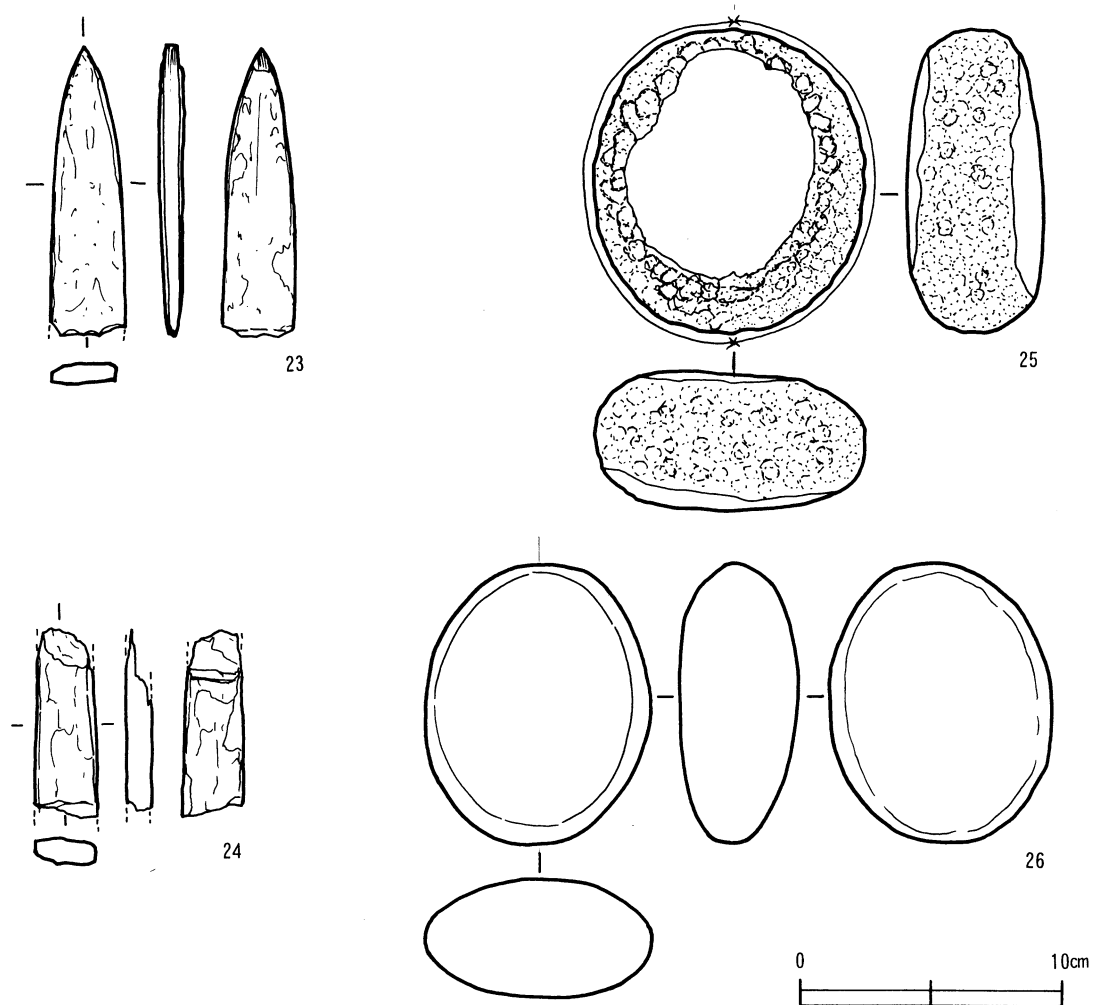
1は外反する口縁部である。波状口縁を呈す深鉢形土器と思われる。丸みを帯びた口唇部には、刺突文と外側口縁部には横2列の刺突文帯を設けている。体部には小型の押形文を縦位に施文する。色調は灰褐色、胎土に石英を含み堅緻である。2は山形を呈する口縁部片である。山形の部位直下に瘤状の突起が施され、口縁端部から下位には横3列と縦位に微隆起文を施している。色調は灰褐色、胎土に石英粒を含みの堅緻である。3は外開きで直行する口縁部である。口唇部は丸くおさめる。器面には縦・斜めにへら描き文を施文する。色調は灰褐色、胎土に石英を含む。いずれも縄文早期に相当する。4・6は外反する山形口縁となる。口唇部は肥厚し断面は小型の三角形を呈し、山形部には縦横にきざみ目と口唇部の平坦部に2本の沈線文を巡らす。5は口唇部がわずかに肥厚、山形口縁となる。山形部位に刺突文、口唇部に1状の沈線を施す。縄文後期の松山式土器である。9～10は外反する口縁部で口唇部は肥厚し、口縁部直下は張り出して稜を有す鉢形土器である。口縁部には凹線文を挟んで上下に半竹筒文状の文様帯を有す。器面は貝殻腹縁による調整が施されている。縄文後期市来式土器である。11は口縁部が外反し、口縁部は丸く仕上げる貝鉢形土器である。頸部には貝殻腹縁を押圧して文様を斜めに付した後期後葉の丸尾タイプの土器である。12・13は研磨土器で浅鉢形で12は口縁部は外反し、13は胴部が「く」字型に屈曲する縄文晩期土器である。



第5圖 出土遺物



第6圖 出土遺物



第7図 出土遺物

2 石器 (第6・7図)

14～16は頁岩製の石鏃である。14は抉りを持ち外開きの脚を有する打製石鏃である。15・16は二等辺三角形の磨製石鏃である。15の裏面半分は剥離している。16は先端が欠落してるが基部は緩やかに弧状を呈する。いずれも丁寧な研磨が施されている。17～21はホルンフェルスの石斧である。17は刃部、18・19・21は刃部、20は刃部と基部が欠落している。22は砂岩で、主要剥離面を残す剥片石器で先端は欠損し、上部の両サイドに抉りを有し両面が刃部となる。23は扁平で先端部は鋭利に仕上げ刃部となる。24も同様なものであるが基部や先端部が欠損しているため詳細は不明。23・24はホルンフェルス。いずれも磨製品である。25はタタキ石、26は磨石である。いずれも砂岩である。

第IV章 浅川牧(Ⅱ)遺跡

第1節 調査概要

第Ⅱ地点は、第Ⅰ地点から一つの台地を挟んだ南側の標高約65m、南・北側は比高差約20mの急傾斜の谷となる台地の基部にあたる。台地は県道側の基部で幅約120m、中程で約50mとくびれ先端で拡張し、緩やかに太平洋側の東海岸線にむかって舌状に延びた丘陵となる。

第Ⅱ地点は、第Ⅰ地点の調査中に今回の発掘調査計画区域外から工事中に遺物が発見されたことにより遺跡の範囲確認を行ない、その結果、遺跡は約6,600㎡にわたって遺跡の範囲が拡張することが確認された。そこで緊急にその対応策について市教委・熊毛支庁・県文化課の三者で協議し、すでに遺跡範囲の一部が工事進行中であること、工期が押し迫っていること、作物の作付け時期等、受益者（農家）に多大の迷惑を懸けることや調査予算措置が不可能である等により、当初の事業計画を変更し、A地点の切り土部分と農道部分の1,600㎡については全面調査、B・D地点の約5,000㎡については盛り土工法的设计変更を行い、遺跡の保存を図り、住居址については平面プランの確認後、盛り土して現地保存をすることとなった。なお、C地点は確認調査の結果、遺物包含層は削平されており遺跡は存在していなかった。

調査の結果、第Ⅲ層の上面を遺物包含層として、縄文時代後期の指宿式、市来式、一湊式土器を中心に石皿、磨石、タタキ石などが多数出土し、土坑や一湊式土器に伴う円形竪穴住居が発見された。

第2節 土層

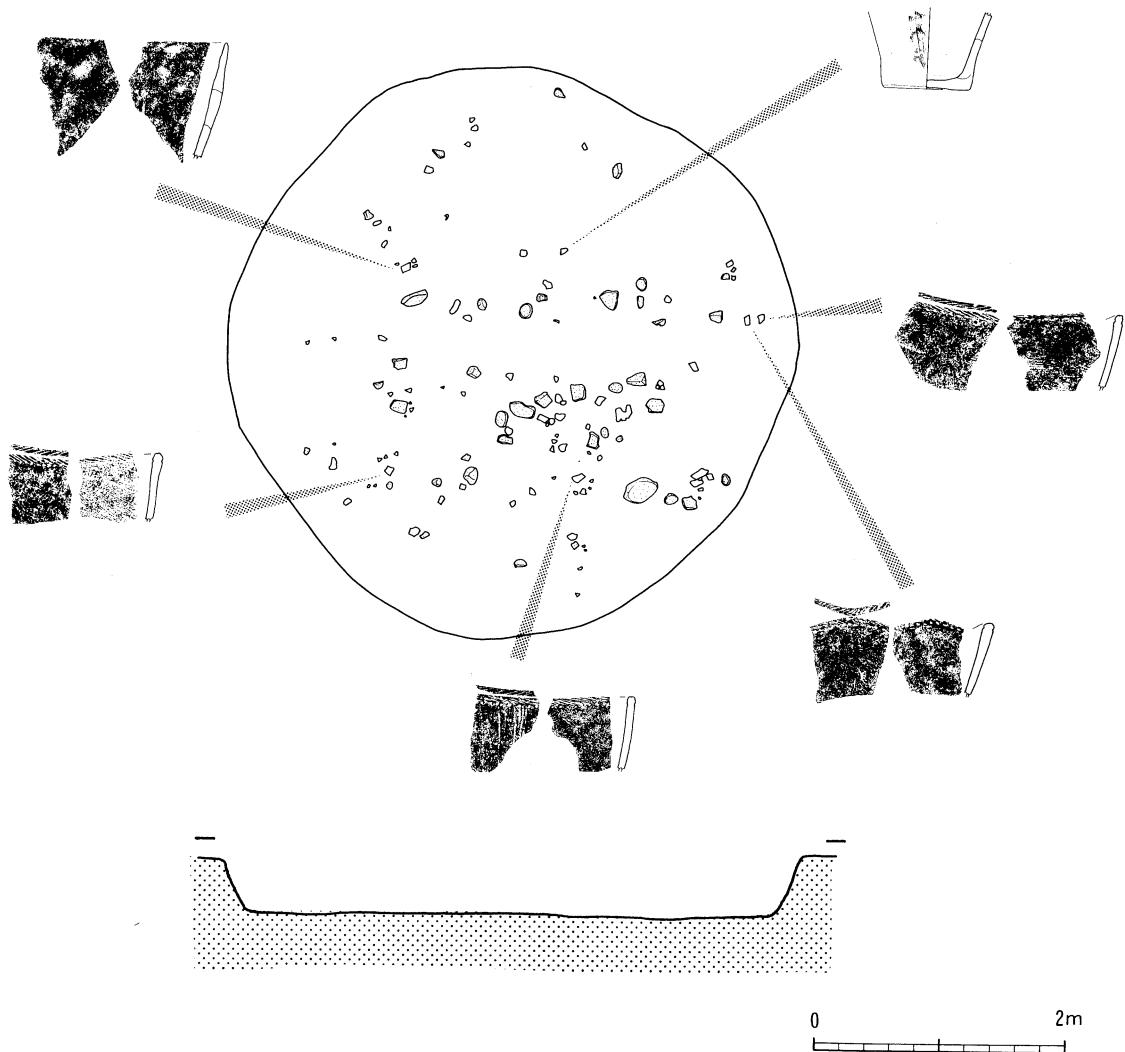
I層—工作土層、II層—黒褐色火山灰層、III層—赤ホヤ層で黄褐色を呈す。約6,500y. B. Pの鬼界カルデラ噴出物での火山灰層である。III層は a・b・c に細分され、III a は2次堆積、III b・III c は軽石を含む。IV層・V層は橙褐色粘質土層、VI層は褐色土層でやや粘質をおびる。VII層はロームで茶褐色を呈す。VIII層は軽石層で桜島噴出起源で約15,000y. B. Pの年代を示す。IX層はローム層、X層・XI層は橙褐色のローム層、XII層は明褐色、XIII層は茶褐色ローム層、XIV層は種子島の基盤をなす熊毛層群(古第三紀)で砂岩の風化層である。

第3節 遺構

1 竪穴住居跡（第8図）

竪穴住居址は、台地中央部のD地区に位置する。住居址が位置する部分は、発掘調査対象外の地点で造成工事中に発見されたものである。工事を中止し範囲を広げて本調査と並行して周辺の確認調査も実施した。その結果遺跡は先端部部までは広がらないことを確認するとともに、住居址については、その性格等を把握するため拡張して調査を行った。なお、住居址が発見された周辺は土盛り工法で現地保存を図ることとなった。

住居址はIII層を掘り込んでいる。住居址の検出面での平面プランは、径4.5mでほぼ円形を呈す。深さは約50cmであった。壁の立ち上がりはやや傾斜する。床面はほぼ平坦に仕上げるが硬化面や柱穴は検出出来なかった。住居内の覆土の上部から一湊式土器片が多数出土した。

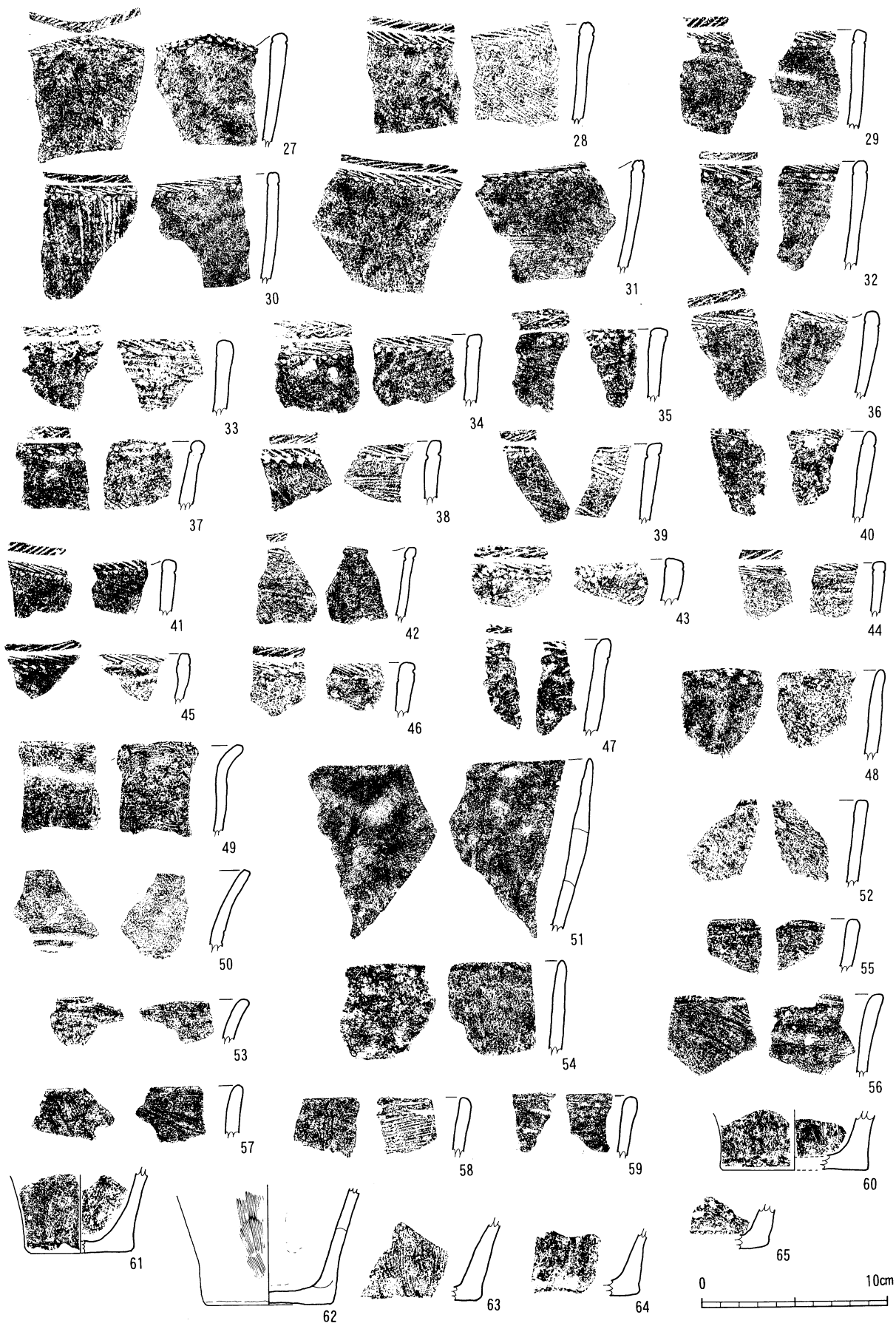


第8図 円竪穴住居跡

出土土器 (第9図)

27~56はの胴部から外開きで口縁部はやや内傾する鉢形土器であるが、全体的に器壁は薄く均一である。胎土に金雲母を含み赤褐色を呈し、焼成は軟弱である。27, 31, 36, 41, 42は緩い山形口縁で、27~49には口唇部および口縁部内外には鋭利な篋先による斜めの刻み目文と連点文、口唇部には細かな刻み目を丁寧に施している。49, 50, 53は口縁部が外反するものもある。その他は平坦または平縁口縁となる。50~59は無文土器で、体部に弱い条痕がみられる52, 53, 55~58がある。

60~65は平底の底部である。底部は小型の平底で立ち上がりはわずかに丸みを帯びて内傾して胴部へ続く。



第9圖 出土土器

2 土坑 (第10～11図)

A地点からは総計66基の土坑が (pitも含む) 発見された。平面プランは楕円形および円形を呈する。

主な土坑については次の通りである。

2号土坑(N-12・13区)は長径90cm, 短径65cmで楕円形を呈し, 深さは16cmを測る。

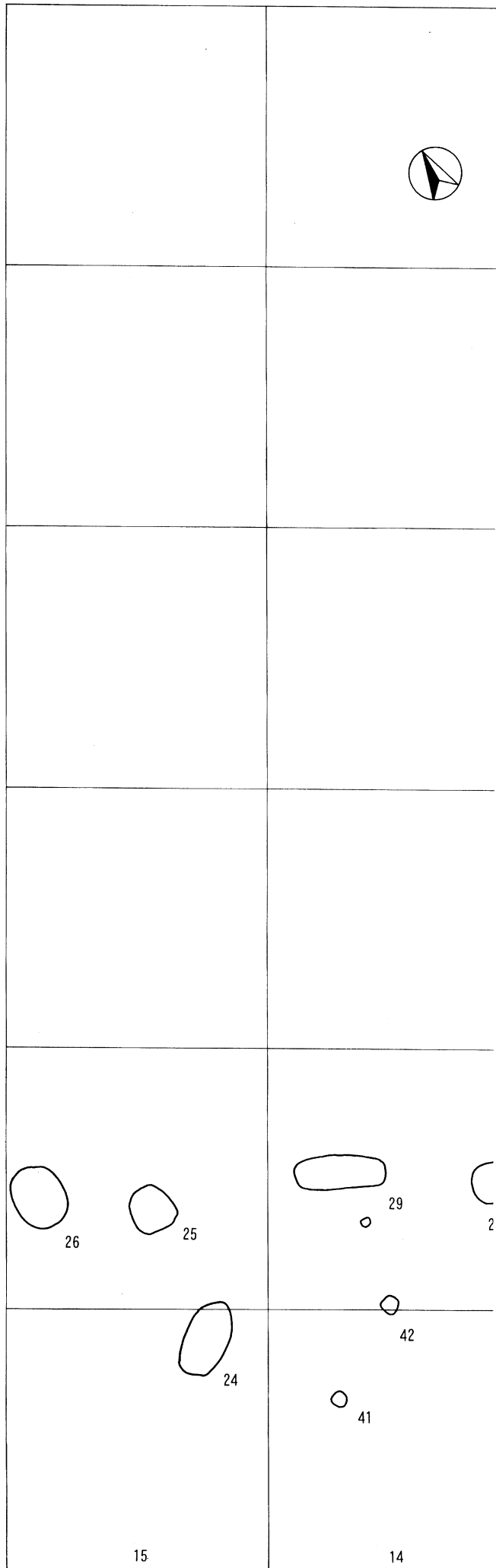
3号土坑(O-11区)は長径82cm, 短径76cmで略円形を呈し, 深さ85cmを測る。握り拳大から人頭大の角礫が覆土中に浮いた状態で検出される。6号土坑(K-15区)は長軸約82cm, 短軸約45cmで長方形を呈す。深さは20cmを測る。11号土坑(O-11区)は長径50cm, 短径47cmでほぼ円形で, 深さは約18cmを測る。12号土坑(O-12区)は長径78cm, 短径約62cmで略円形を呈す。深さは9cmを測る楕円形を呈す。13号土坑(N-12区)は長径98cm, 短径78cmで楕円形, 深さ32cmを測る。覆土内に浮いた状態で土器片や角礫片が出土した。14号土坑(O-12区)は長径51cm, 短径40cmで楕円形を呈す。深さは21cmを測る。16号土坑(M-11区)は長径107cm, 短径68cm, 深さは12cmを測る楕円形を呈す。土坑内からは縄文後期の土器片や磨石が出土した。24号土坑(J-15区)は長径75cm, 短径42cmの楕円形を呈し, 深さは約8cmで底面は傾斜している。26号土坑(K-15区)は長径75cm, 短径68cmで略円形を呈す。深さは約20cmを測る。27号土坑(M-11区)は長径38cm, 短径37cmで円形を呈す。深さは12cmを測る。37号土坑(N-11区)は長径64cm, 短径52cmで楕円形となる。深さは8cmで浅い土坑である。

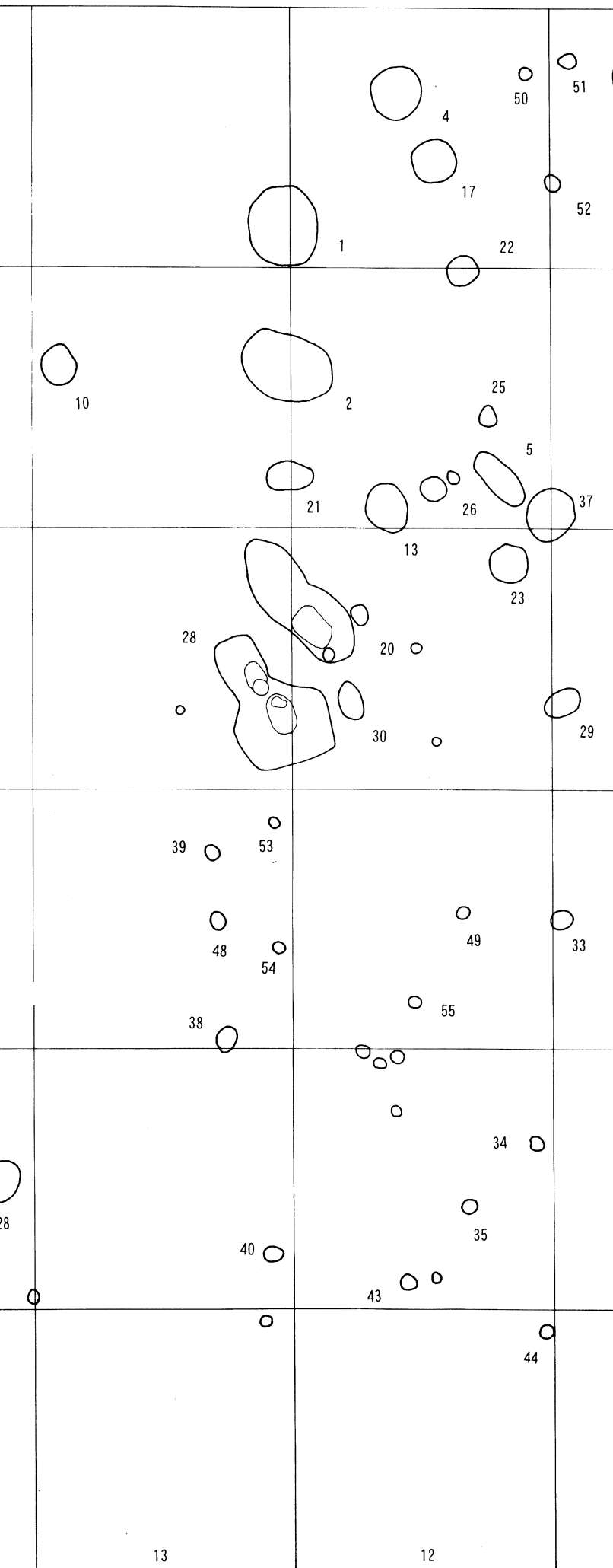
出土遺物 (第12・13図)

1号土坑(66, 67, 69), 3号土坑(70), 4号土坑(68), 12号土坑(71～78), 13号土坑(79～84), 15号土坑(85), 16号土坑(86, 87), 19号土坑(88), 20号土坑(89, 95, 96), 22号土坑(90～93), 27号土坑(97～99, 102, 103), 28号土坑(100), 29号土坑(104～108), 31号土坑(109), 32号土坑(110～112), 36号土坑(113, 114), 43号土坑(115～121), 44号土坑(122～123)からは遺物が出土した。76, 81, 90, 101, 107, 115, 118は口縁部が肥厚し, 口縁断面が三角形を呈し口縁部の文様帯には1～3本の沈線文を施す。81は山形口縁となる。松山式土器に相当する。68～72, 79, 80, 82, 88, 89, 93, 97, 99, 105, 106, 108, 110, 111, 113, 116, 119, 121, 122～124は頸部が絞まり外反する口縁部となる。口縁部は充実して口縁断面は縦長の三角形を呈し, 「く」の字状で稜を有す。口縁部は山形口縁となるものが多数を占める。口縁部には太形凹線文を挟んで口唇部端部と稜部に爪形状にキザミ目文や貝殻腹縁刺突文, 連点文を施すもので市来式土器に包括される。85は口縁部が直行し2本の平行沈線とその間に貝殻腹縁刺突による擬縄文を施している。指宿式土器系統の土器である。85は平坦な口唇部にキザミ目文, 117は口唇部と口縁部に貼り付け突帯を有し, 胴部には2本の並行する沈線の間キザミ目文を付す指宿式土器系。75, 83, 91, 92, 98, 104, 114, 120は間延びした口縁部となり, 頸部に貝殻腹縁刺突文を斜めに施文する土器である。丸尾タイプ土器系統に比定されよう。

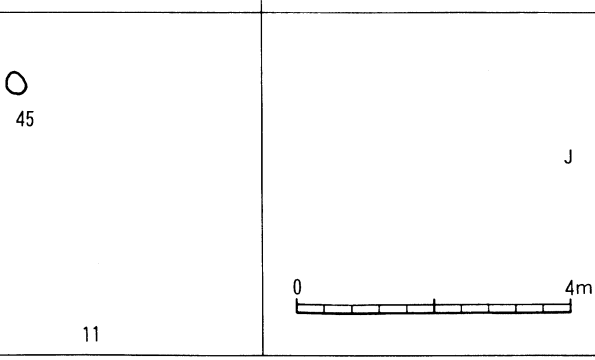
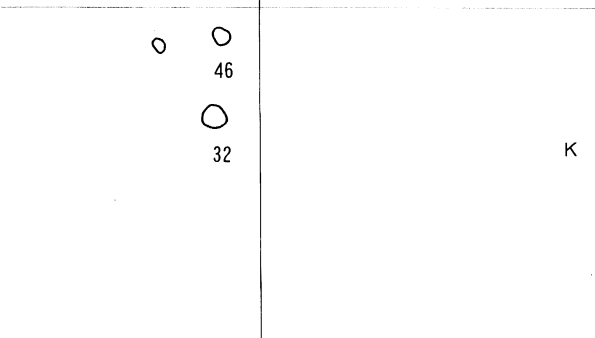
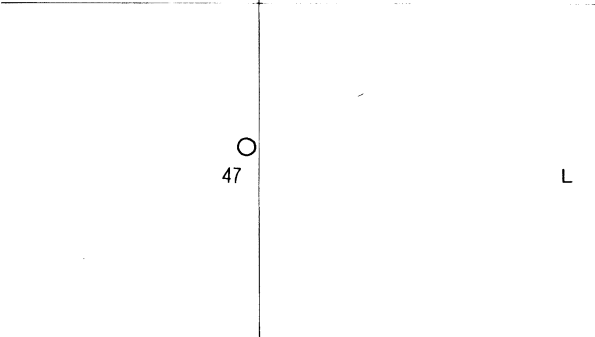
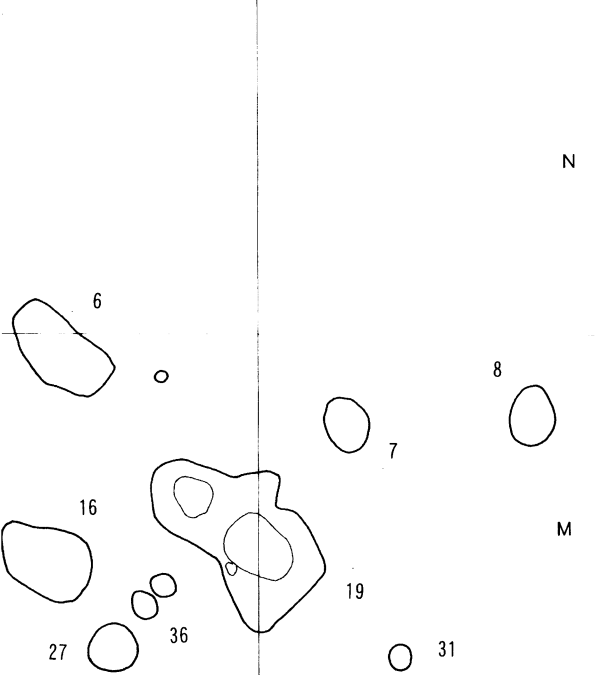
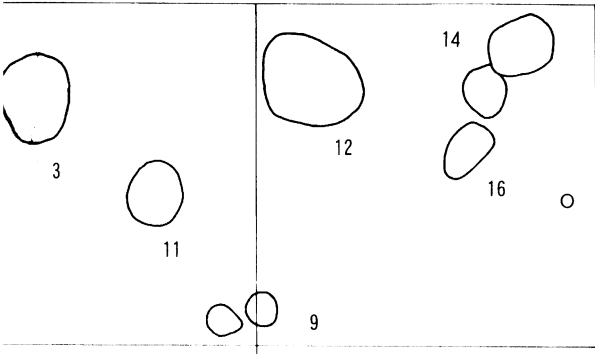
71, 72, 94, 95, 84, 125, 126は一湊式土器の口縁部と底部である。78の口縁部と口唇部には篋先施文具によるキザミ目文を丁寧な施し, 口縁部端部には連点文を施文する。86は復元口径24, 6cmを測る。器形は直行する口縁部で4か所に山形状の突起を設ける。内外面に貝殻腹縁条痕がみられる形式は不明であるが縄文後期のものであろう。その他の土器については小片のため形式不明である。

87, 127～129は石器である。88, 127は磨石で砂岩を素材として片刃に剥離調整を施した剥片石





第10图 土坑配置图



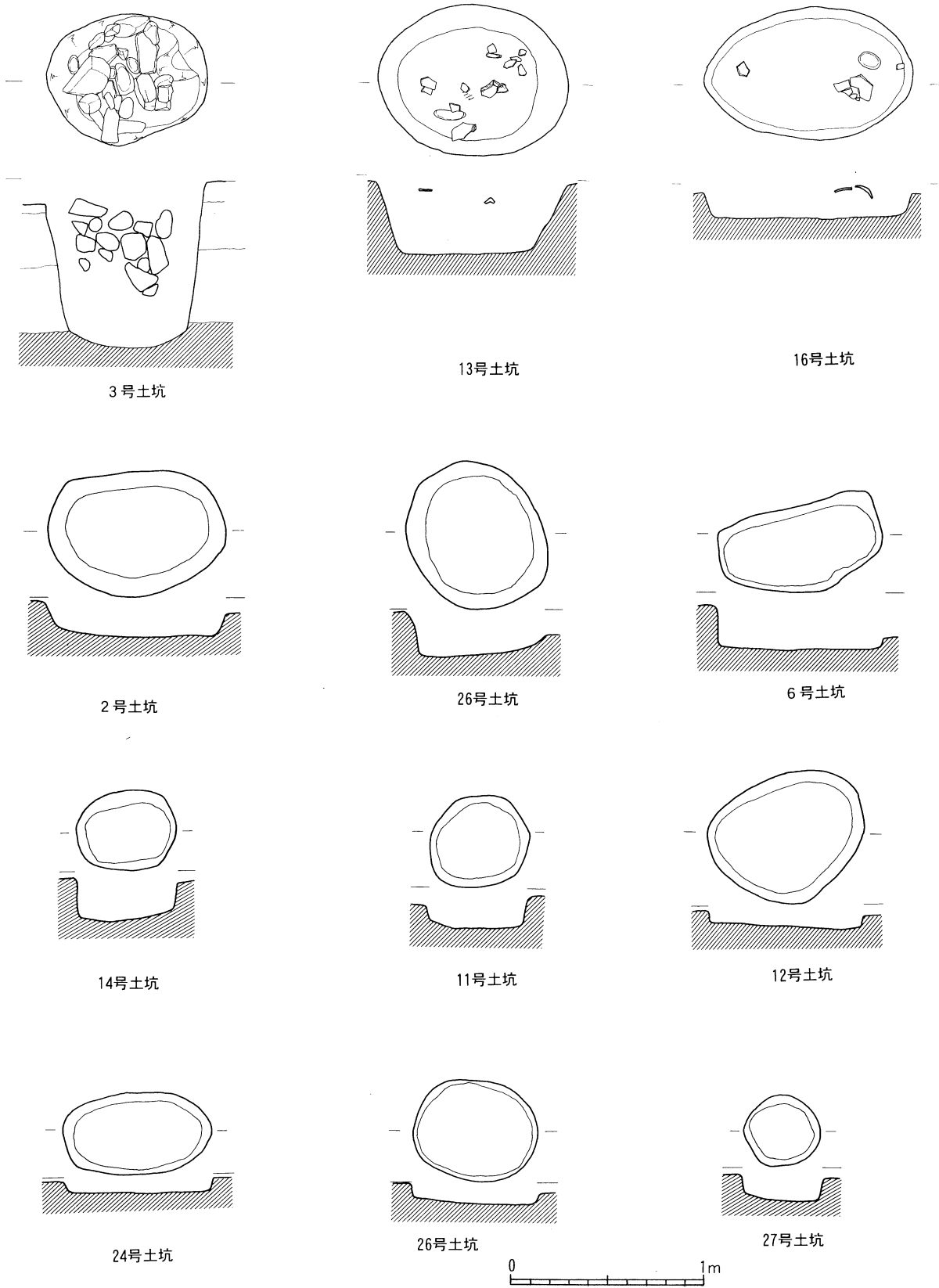
N

M

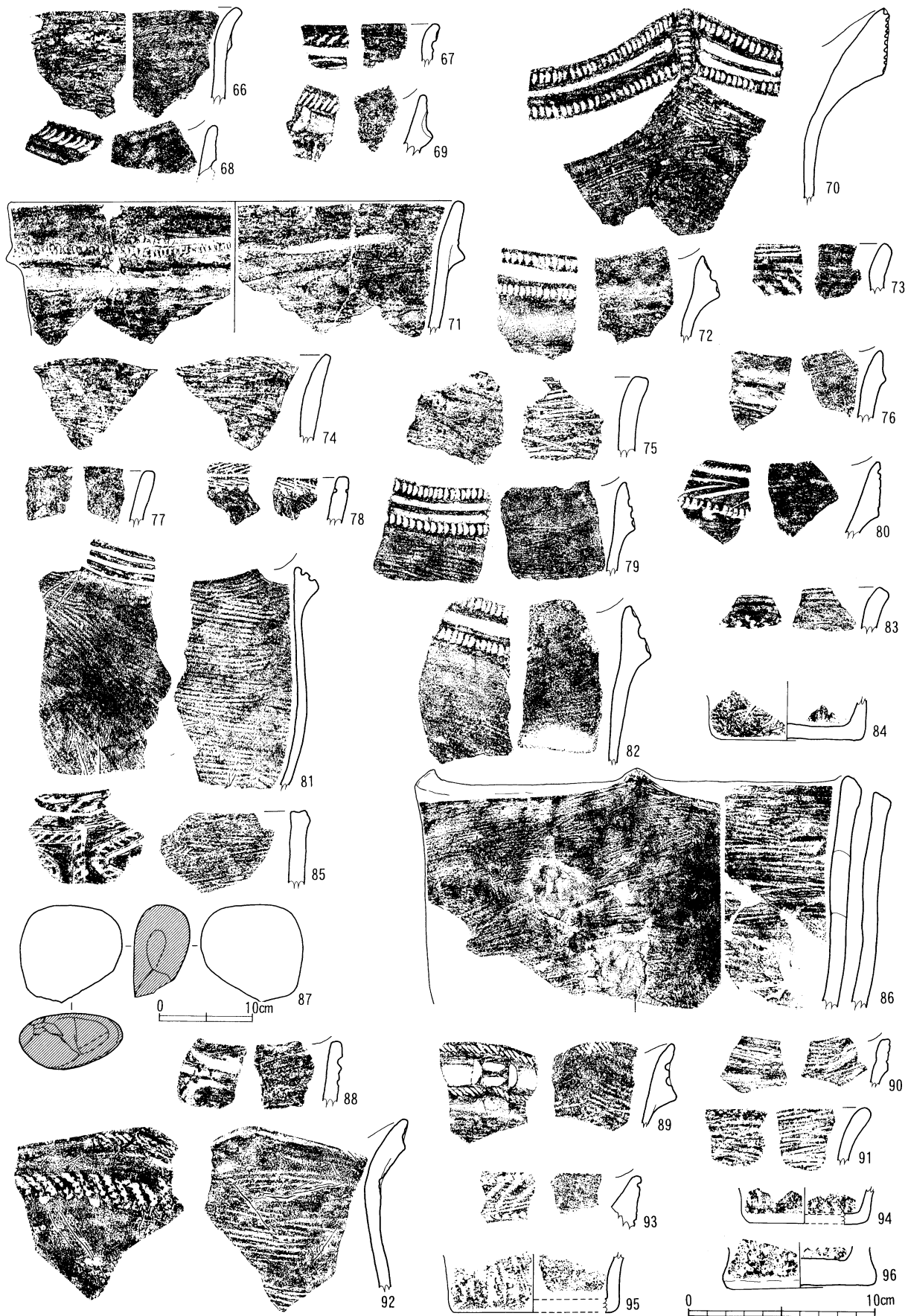
L

K

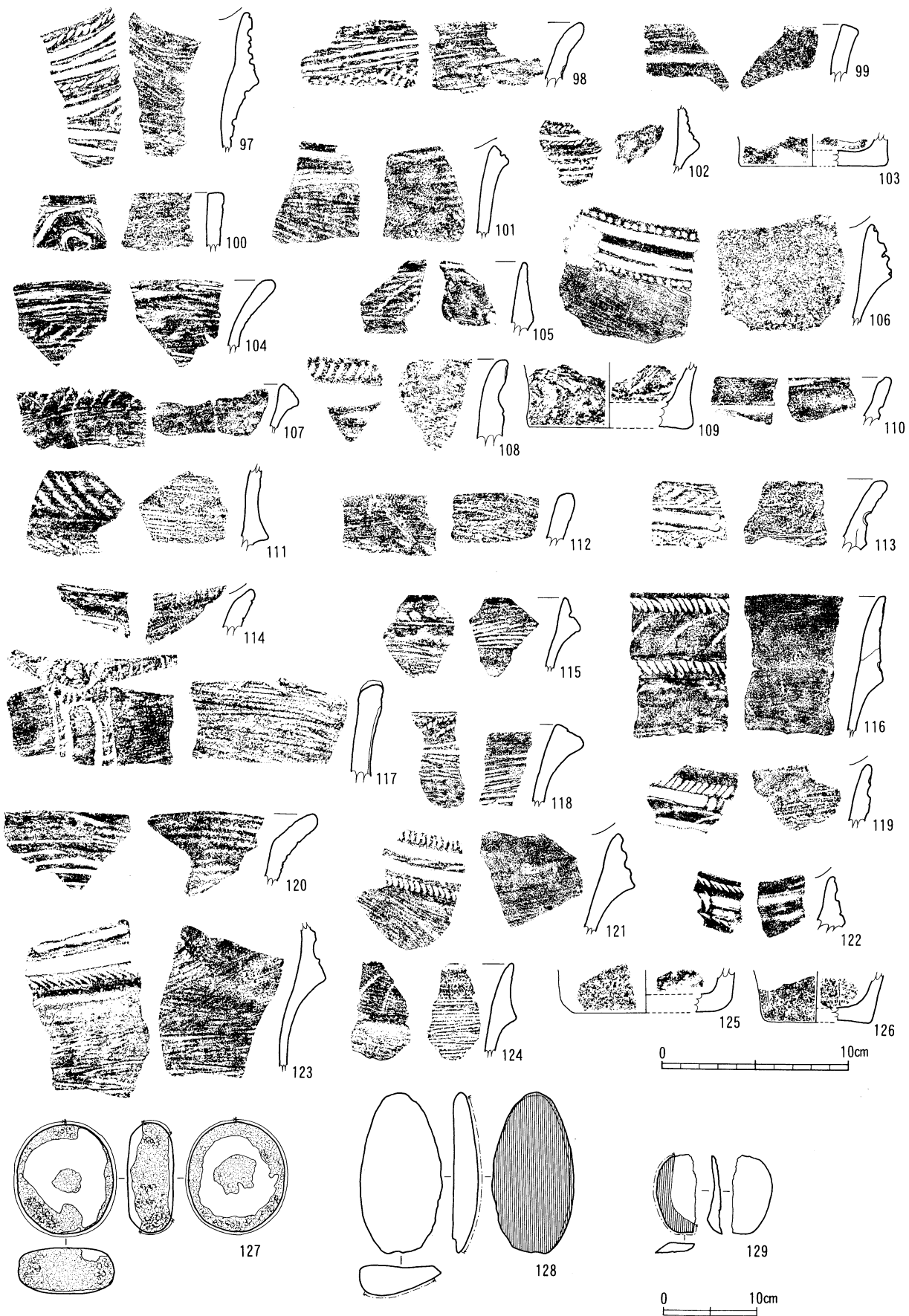
J



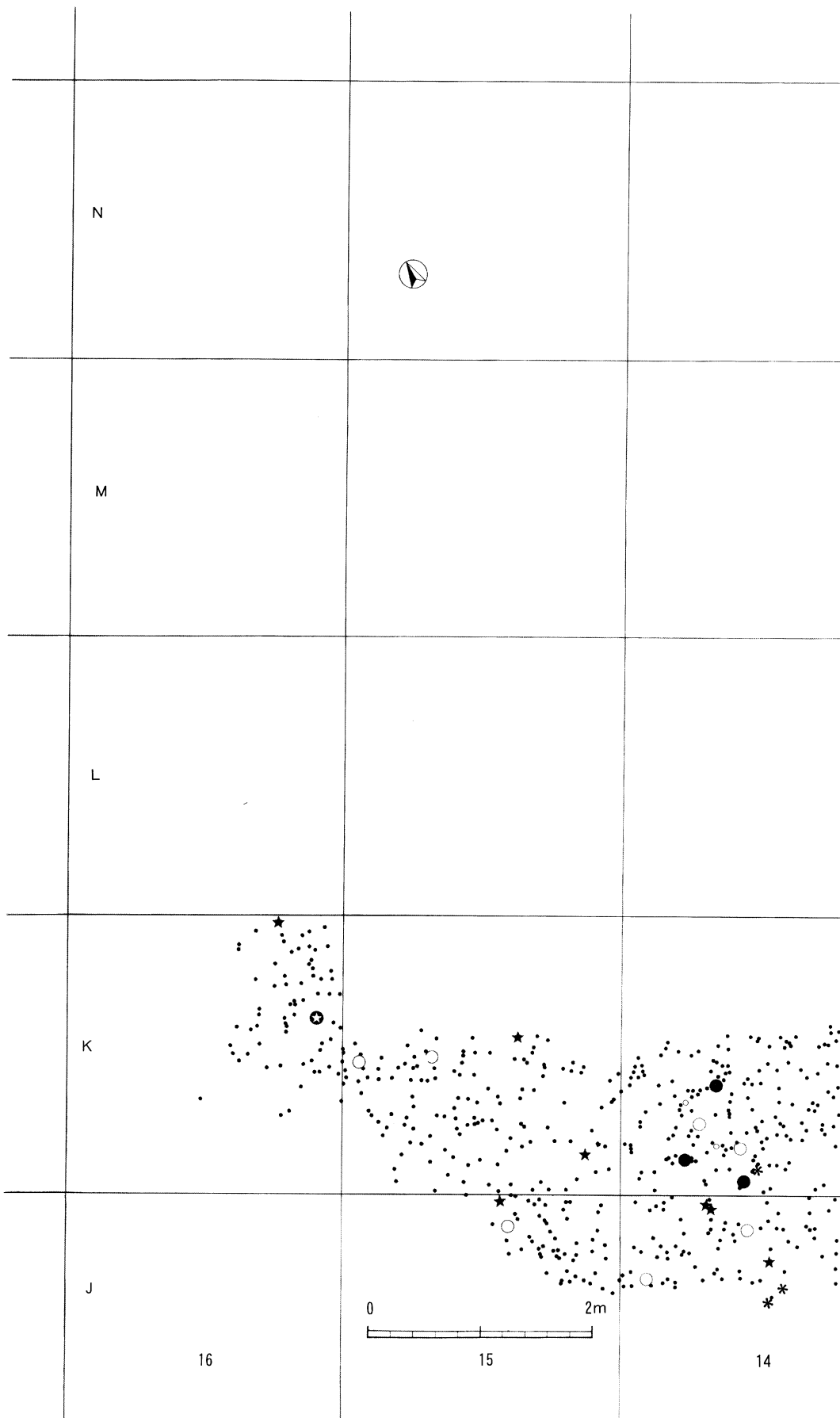
第11图 土坑实测图

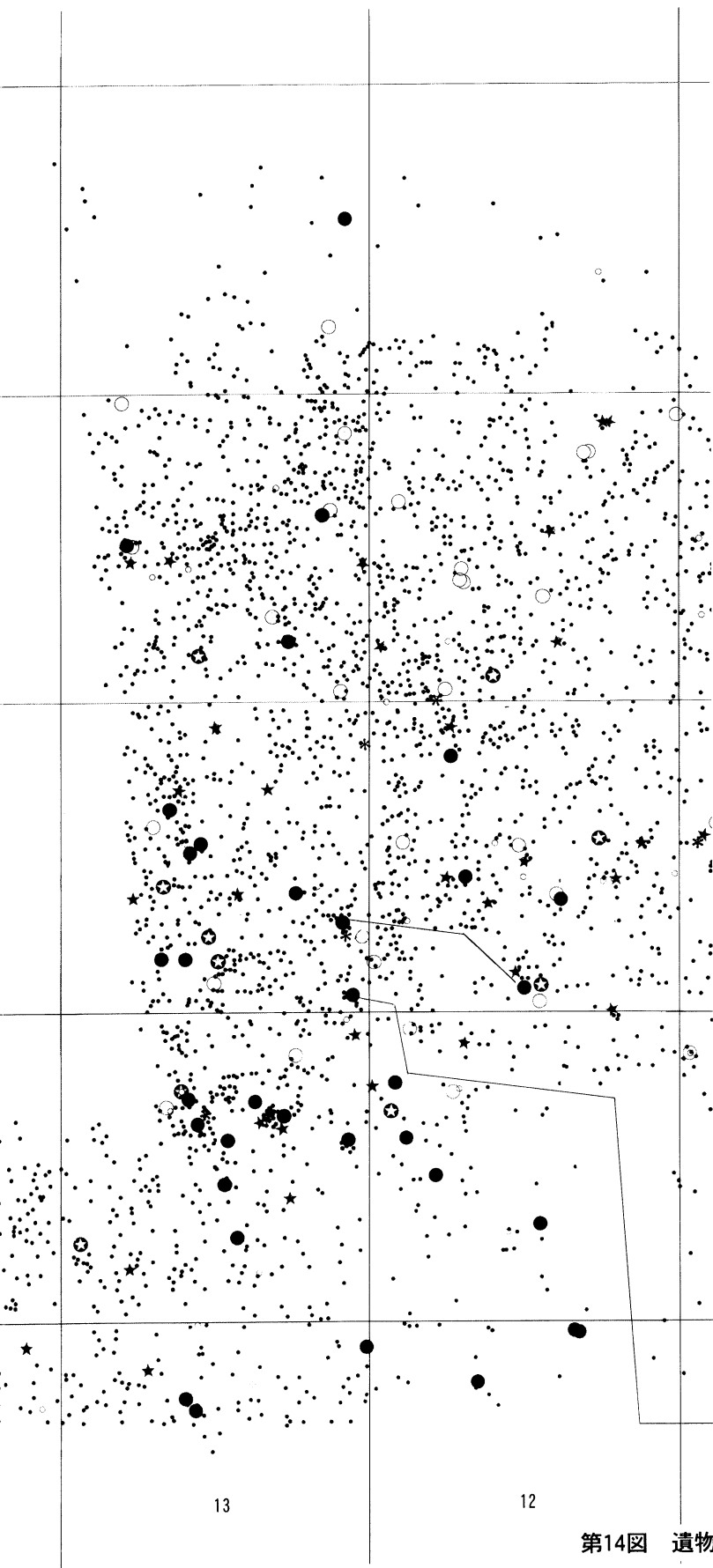


第12図 土坑内出土遺物（その1）

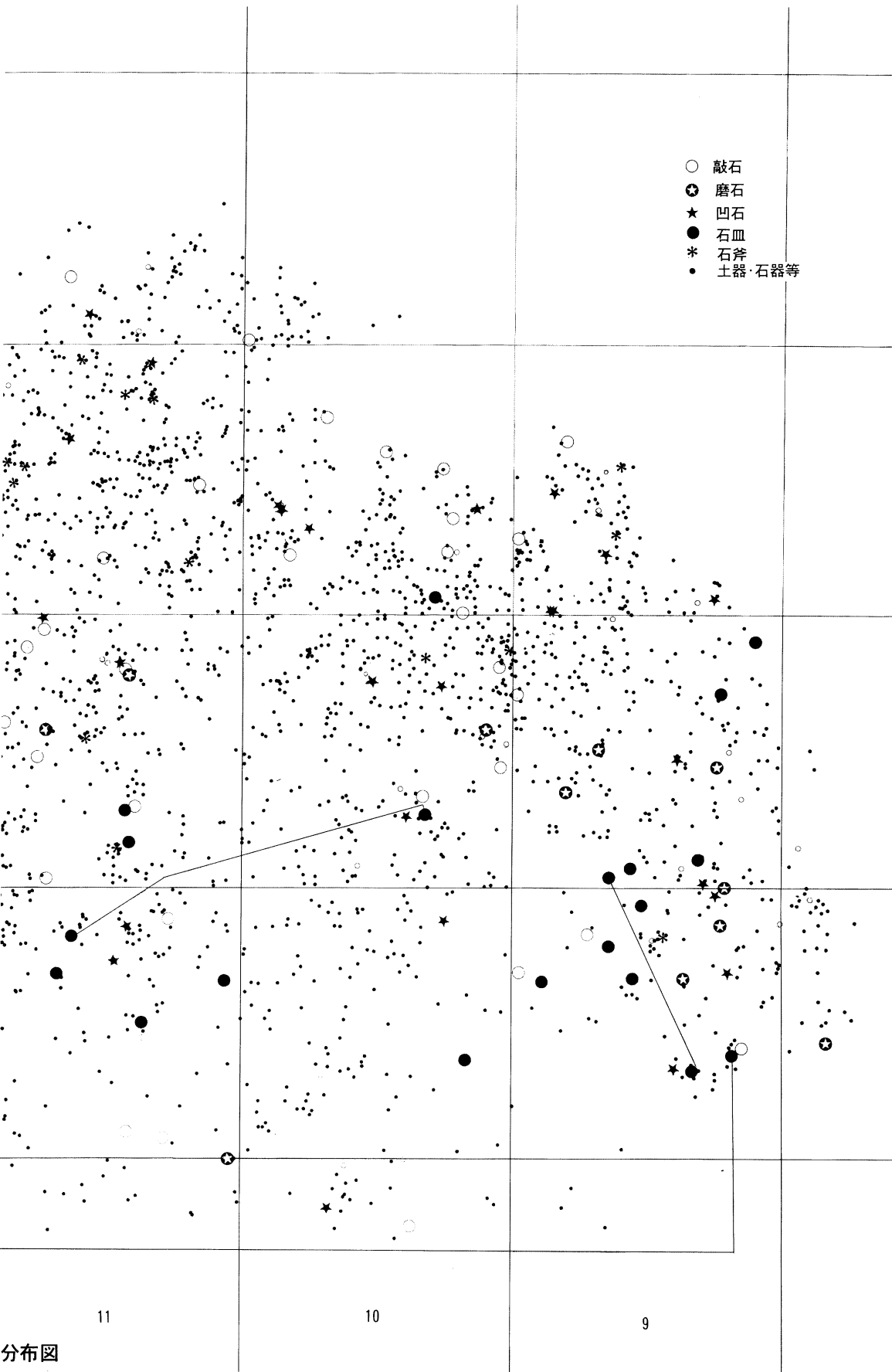


第13図 土坑内出土遺物（その2）

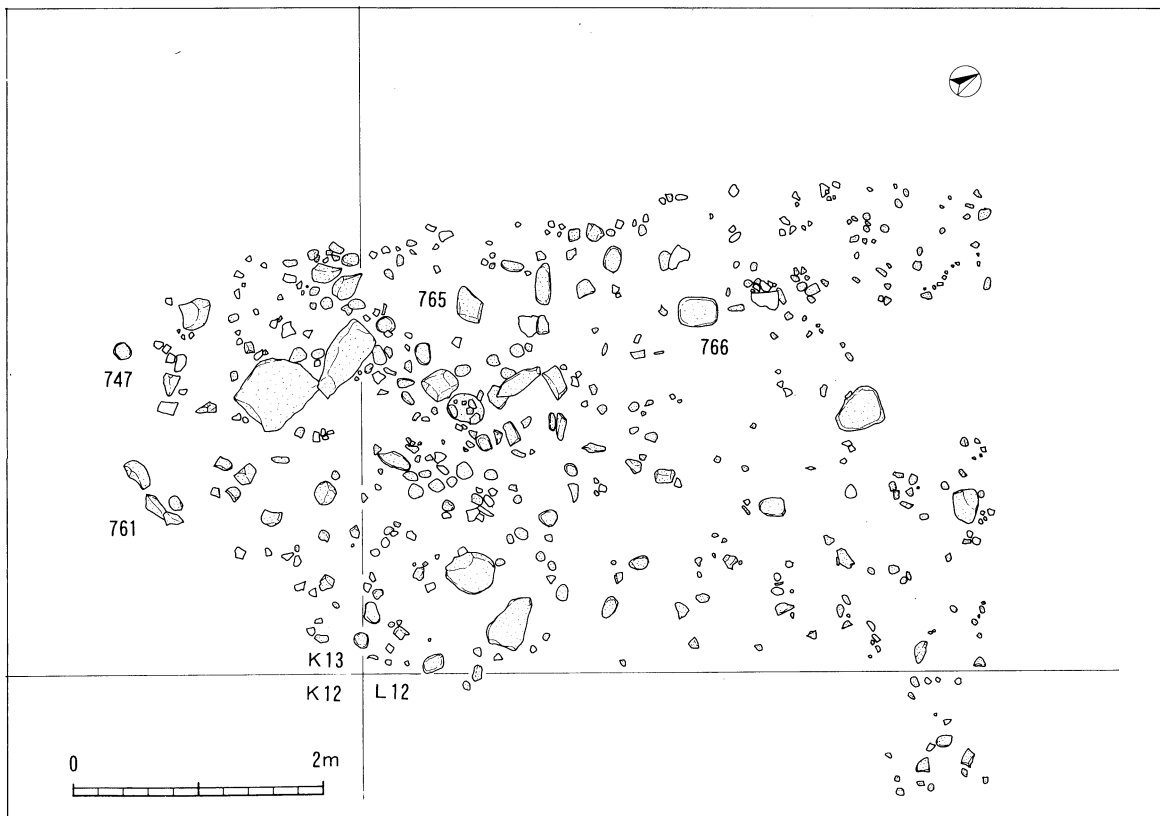
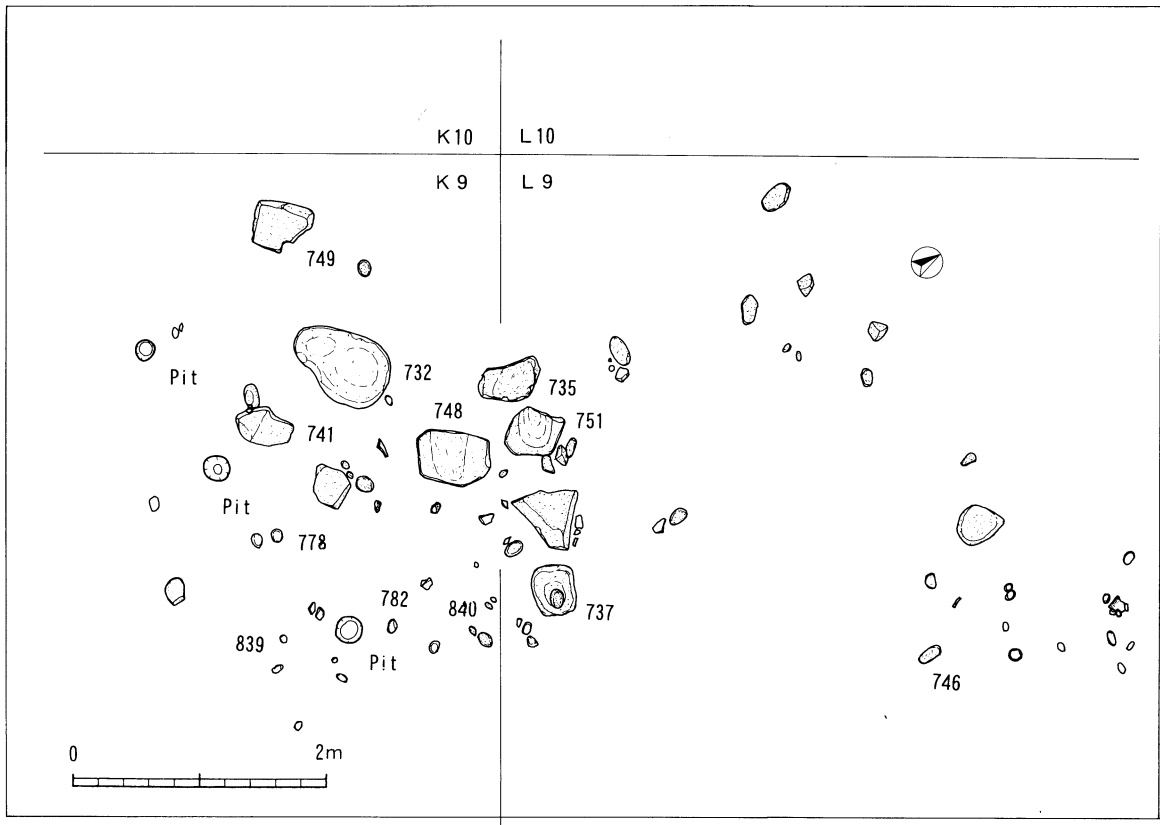




第14図 遺物



分布图



第15図 遺物出土状況（上L・K-9・10区）

器である。

第4節 出土遺物（第14～84図）

出土遺物は、第Ⅲ層の赤ホヤ層の上部を縄文後期の遺物包含層として、市来式土器を主体とした土器や磨製・打製石斧、石皿等多数出土した。

1 土器（第16～54図）

出土土器には松山式・市来式・一湊式・丸尾式土器等があり大まかに5つに分類される。

I類（第16図130～138）

磨消縄文を施文する土器群である。胴部には単線を連結して横位・斜位・弧状に3本の平行する沈線文と沈線文の文様帯に磨消縄文を施文する。沈線文の始点・終点の両端部は小さく湾曲し、さらに深く窪みを呈する。130は胴部は丸く膨らみ頸部が絞まり口縁部は外反する鉢形土器である。口径約25cmで山形口縁を呈する。口縁部はわずかに肥厚し、口唇部は平坦に仕上げる。口唇部には刻目文を施文する。器壁は薄く比較的しっかりした造りである。胎土には金雲母・細粒を含み、色調は明黒色を呈す。焼成は良好である。131, 132, 134, 137は137を除いて口縁部がわずかに外反する口縁部である。131, 134は口唇部に凹線文を巡らす。その特徴は福田K式土器に類似するものと思われる。

II類（第17～20図139～188）

口縁部および胴部中程に2本の平行沈線文を基本に施文する土器群である。器面の内外には条痕文がみられ、貝殻腹縁による器面調整が施されている。

II A類(139～154, 181～188)口縁部が直行する139, 140, 141, 145, 146, 182と外反する148, 181, 184, 山形口縁を呈する142, 148, 184のタイプがある。口唇部は大半が丸くおさめるが、139, 144は平坦に仕上げ沈線を巡らす。139は口縁部が直行し、口縁部はわずかに肥厚する深鉢形土器である。復元口径は35cmである。平坦な口唇部には凹線文を巡らす。口縁端部には1状の沈線文を巡らし、口縁部から胴部中程には2本の平行する沈線文を曲線や渦巻状に施文する。

II B類(155～166)は、器形や文様についてはII A類の範疇にあるが平行沈線文内に貝殻腹縁や棒状施文具による細かい刺突文を施したいわゆる擬縄文の文様を有す一群である。口縁部の器形には頸部が絞まり口縁部がゆるやかに外反して山形口縁となる155, 156や口縁端部が小さく外反して山形口縁部を呈する156, 158, 159, 163, 口縁部が凸起状に山形口縁部となる177, 口唇部が平坦となる157, 161, 169, 170, 177等がある。155は頸部が絞まり外反して山形口縁部となる。復元口径33cmである。頸部には平行な2本の沈線文とその間に篋による刺突文を施している。山形口縁部の頂部には押圧で凹文を付す。157, 158, 168は口唇部は平坦で沈線ときざみ目文を巡らす。口縁部から胴部には擬縄文で沈線文と蕨文の文様を付す。158は胴部は丸く、口縁端部が小さく外反して山形口縁となる。復元口径35, 3cmである。山形の頂部に3個のきざみ目文を付し、口縁部には直線文、雷文、渦巻文からなる擬縄文を施文する。161は頸部がわずかに屈曲し外開きの口縁部となる。復元口径33, 2cm。平坦な口唇部には沈線文と刺突文を廻らす。文様は直線文と蕨手状文と沈線文間に擬縄文を施す。163の口縁部には円形の補修孔を有す。165はほぼ垂直に立つ口縁部で復元口径23, 4cmである。文様は方画文と円文の連点状に擬縄文を付す。169は口縁部は

わずかに外反し山形口縁で平坦な口唇部となる。復元口径28cmである。2本の沈線文を基本に4画形の中に襷文と襷文が交差する部分に横位の沈線文の繰り返しの文様を施す疑縄文である。山形口縁部の頂部にはきざみ目文と口唇部には沈線文を巡らす。170も同様である。177は山形口縁で山形部は三角形の凸形状となる。凸起直下には円孔が穿かれている。復元口径23,2cmである。180は連点文による擬縄文となる。Ⅱ類は縄文後期初頭指宿式土器系統土器である。

Ⅲ類 (第21～26図189～272)

器形は深鉢で胴部が張り、口縁部は外反する。口縁部の断面が三角形を呈し、狭い口縁端部が文様帯となる。内外面とも貝殻条痕調整が顕著に施されている。口縁部は平縁と口縁4か所に山形隆起を持つ波状口縁がある。平縁口縁をA、波状口縁をBとして分類した。

ⅢA-1(189～201)は口縁部が「く」の字に屈折し内湾する。狭い文様帯に貝殻腹縁による刺突文(191, 193, 200, 201), 沈線文と連点文の組み合わせ(190, 194～199)の文様となる。

ⅢA-2(202～210, 213, 215)は口縁部は肥厚し、口縁断面が三角形を呈する。文様は狭い口縁部の文様帯に限られ、長楕円形と縦位に沈線文を施す(202, 204, 206, 207, 210), 貝殻腹縁刺突文(208)がある。210は平縁口縁で頸部がややしまり、口縁部は外反する。口縁断面は三角形を呈し狭い口縁端部が文様帯となる。復元口径は28cmである。口縁部には横長の沈線文とその中に横線文・サイドに3～4本の縦列線文を単位とした文様を施文する。内外面には貝殻腹縁による器面調整が施されている。

ⅢA-3(211, 212, 214, 216, 253～263)はⅢA-2の口縁部が小型化して口縁部がわずかに肥厚し、口縁端部の文様帯はさらに狭い。文様帯には1本(214, 216, 254)と2本(209, 212, 263)の沈線文を巡らもの、沈線文と縦列文(253, 259), 斜位(258, 260), 貝殻腹縁刺突文(256, 261)がある。

ⅢA-4(260～272)は口縁端部は「コ」字形を呈し平坦となる。文様帯は無紋となる。

ⅢB(217～250)は口縁部の形態はⅢA-2と同様だが、山形口縁となる一群である。4か所の山形隆起部は特に隆起し、隆起外面に連点・縦位の沈線文・きざみ目文などを施し、文様帯には1～3本の沈線文と沈線文の上下や沈線文間に連点文を複合した文様を構成している。口縁文様帯には沈線文と連点文(218, 220, 223～225, 227, 229, 233～241, 243, 244), 沈線文と貝殻腹縁刺突文(217, 219, 231), 沈線文と縦線文(226)を組み合わせた文様とがある。また、口縁部と頸部に文様を施す(242, 246～249)ものもある。219は肥厚する口縁部で復元口径25cmである。山形口縁部の文様帯に3個の点文と両サイドに貝殻腹縁による刺突文を4本施文する。217も同様である。

Ⅳ類 (第27～35図 273～371)

口縁部は間延びして肥厚し、口縁断面は「く」字形の充実した稜を持つ。内側口縁部にも弱い稜が施される。この肥厚した口縁部が文様帯となる。平縁口縁のA類と口縁4か所に山形隆起を持つ波状口縁のB類がある。縄文後期の市来式土器である。

ⅣA-1(277～283, 285, 288, 291)は平縁口縁で口縁部が文様帯となる。口縁文様帯には棒状施文具による1～2本の太型凹線文と凹線文を挟んで上下にきざみ目文を巡らす。なお凹線文の両端部は施文具を強く押圧する。278は復元口径25cmで、平縁口縁部となる。文様帯の口縁部には1本の太めの短い凹線文を繰り返し、これを挟んで上下に爪形状のキザミ目文を施文する。258は2段に短線の凹線文間に貝殻腹縁刺突文を施している。

IV A-2(324, 332~340, 342, 344)は平縁口縁で口縁部と頸部が文様帯となる。322は復元口径30, 4 cmの深鉢形土器である。口縁部には細く短い沈線文を2段に、端部には貝殻腹縁刺突文を付す。さらに、頸部には羽状に貝殻腹縁刺突文と両端を弧状におさめた細く短い沈線文を施文している。

IV A-3(348~371, 358~371)は口縁断面が三角形をなし、肥厚部を文様帯とする。文様は斜めに付した貝殻腹縁刺突文と、上位・下位に爪形状の刺突文を複合した文様を施す(348~357, 363), と貝殻腹縁刺突文(358~362, 364, 366~368, 367, 370, 371), 沈線文を巡らす(365, 369), 口縁部と頸部を文様帯とする(324, 332~335)がある。332は口縁文様帯に2本の平行する短線で凹線文と口縁直下に貝殻腹縁刺突文, 頸部には羽状に貝殻腹縁刺突文と凹線文を施す。

IV A-4(303~318)は口縁部はわずかに肥厚し口縁断面が三角形となり無紋土器である。内外面に器面調整の貝殻条痕が見られる。

IV B-1(273~276, 284, 286, 287, 290, 292~302)は山形口縁となる。文様はIV A-1と同様である。なお、文様帯は口縁部に設けるものが一般的である。凹線文と爪形状のきざみ目文を丁寧に施す。凹線文には太い凹線文(273, 286, 292等)や沈線状(293, 294)のものがある。波状口縁部位には刺突文や押圧点文を施す。数は少ないが文様帯を口縁部と頸部とする(292~302)ものもある。

V類 (第36図372~377)

外反する口縁部はやや肥厚して、口唇部や口縁端部には瘤状の突起をもつ土器である。373は山形口縁となり、山形口縁の頂部と口縁端部に装飾が施された小型の円柱突起が施されている。頸部には沈線文や貝殻腹縁刺突文を施文する。いわゆる草野式土器に相当する。

VI類 (第39~42図401~452)

平縁口縁と山形口縁を呈する2分類される。主に貝殻腹縁刺突文を口縁部や頸部に施し、市来式に後続する丸尾タイプの土器群である。

VI A(401~410, 413~415, 417~429, 440, 441, 449, 450)は胴部から口縁部にかけて器壁の厚さは一定を保ち、頸部は内行して絞まり、比較的短い口縁部は外反する平縁口縁となる。口唇部はわずかに肥厚し口唇部は丸く仕上げる。頸部が文様帯となり貝殻腹縁刺突文を斜めに施文する。404は口径は31cmである。頸部が絞まり短い口縁は外反し、口縁部はわずかに肥厚する。頸部には貝殻刺突文を斜めに施文する。内外面に器面調整痕を顕著に残す。

VI B-1は(412, 416, 430~439, 442~448, 451, 452)は胴部から口縁部にかけて器壁の厚さは一定を保ち頸部は内行して絞まり、間延びした口縁部は外に開く。口縁部は弱い「く」字状を呈し山形口縁となる。口縁下位に小さな三角突帯を廻らし稜が付される。口縁内側にも弱い稜を有す。口縁部と頸部が文様帯となり、山形部の口縁部には貝殻腹縁刺突文と短線の沈線文を横位・斜位に施す。沈線の両端部は施文具を強く押圧する。頸部には貝殻腹縁刺突文を羽状に施文する。

VII類 (第43~51図453~640)

胴部から外開きで口縁部は直行するもの、やや内傾するもの、短い口縁部が外反を呈する鉢形土器である。全体的に器壁は薄く均一である口縁部がわずかに肥厚する。有文土器の平縁口縁VII Aと波状口縁VII B, VII Cがある。口唇部は平坦あるいは丸く仕上げる。有文土器の文様は篋キザミ目文や連点文を丁寧に施文し、文様帯は口縁端部の内外の小範囲に限定される。胎土に金雲母を含み赤褐色を呈し、焼成は軟弱である。なお、胎土に金雲母を含むのもVII類の特徴である。市来

式土器平行期の一湊式土器で、極めて地方色の強い土器である。

Ⅶ A (496～557)は口唇部と口縁端部には篋先で細かく羽状に施文する。496～557の口唇部直下の内外面に櫛による刺突文連点文を廻らす。506, 551の口縁直下に円形の補修孔が穿かれている。器面調整は大半がナデ調整となるが、532, 535には貝殻調整が施されている。

Ⅶ B (453～495)は波状口縁となる。器形や文様はⅦ Aと同様である。

Ⅶ C (569～585)は無文土器の一群で、平縁口縁で口縁部がやや内湾する(569～573)とやや直行する(576～585)があり、(574)は波状口縁となる。器面には貝殻条痕がほどこされ器面調整とする。

558～568は胴部片で565は縦位に篋調整、他は内外とも貝殻腹縁調整が施されている。

Ⅷ類 (第52・53図641～667)

無文土器の鉢形土器である。平縁口縁(641～647, 649～655, 657, 659, 661, 663, 666, 667)と波状口縁(648, 656, 658, 660, 662, 664, 665)の2種がある。口縁部の器形は口縁部が短く外反する(648, 650, 651, 655)、やや長めの口縁部が外反する(641, 64, 3646)、内湾する(659, 661, 663, 666)、直行する(657)等ある。波状口縁の662, 664は頂部に凹圧文を1個施文する。市来式様式の無文土器である。

胴部 (第47図558～568)

Ⅶ類の胴部である。560には円孔の補修孔が施されている。

底部 (第50・51図586～640, 第54図668～678)

586～640は平底の底部である。底部は小型の平底で外底部は丸みを呈し、立ち上がりはわずかに内傾して外開きの胴部へ移行する。一湊式土器に伴う底部である。

668～678は円盤状の平底で、外底部に網代の圧痕を残す。676～678は尖底で、乳房状の底部となる。

台付皿形土器 (第36図378～386)

378は台付皿形土器の皿部である。復元径12, 8cmを測る。口縁部は直行し「く」字となり口縁部直下で稜を有し、山形口縁となる。体部は充実して器壁は厚い。口縁部上下には刺突文と3本の短い沈線と中央に2個の太い押圧文、体部には篋刻線文と連点文を施す。379は皿部で体部から口縁部にかけてやや内湾する。口縁端部は肥厚する。山形口縁で頂部の3か所にきざみ目文を押圧する。内外面はナデ調整となる。380は器台の脚である。充実した円柱形を呈し全体的に雑な造りである。方形の透かしを施す。381は開脚する器台の脚で内側は空洞となる。脚下位に円孔が穿かれ、連点文と篋書き文が施されている。382, 383は外開きする脚で器壁は薄く内側は空洞となる。器面に篋書文を付す。384は器台の脚で透かし部の残片である。底辺には横位にきざみ目文と沈線文、脚部にはきざみ目文を付す。358, 386弧状に開脚し、空洞となる。358は皿接合部に三角突帯を2状廻らす。脚下部に2個の円孔を穿つ。

異形土器 (第37・38図387～400)

387は中空で、それぞれが張り出した文様帯を設けた上部・中部・下部と片方の上部と下部は橋状に繋がった把手部の4部門からなる、長頸の壺形土器口縁部と思われる。断面は下部で広く中部ですばまり上部の口縁部でラッパ状に外反する。現存する高さは山形口縁部で約9cmを測る。全面に装飾が施されて丹念に仕上げられている。

上部口縁部の平面形は長径10.7cm、短径4cmの楕円形を呈し、肥厚帯を設けて両端が弓なりにせり上がった山形口縁となる。先端部は舟の舳先を思わせる。口縁部は肥厚し断面は三角形を呈す。口縁部の文様はキザミ目文を施す。片方の口唇部内側には凹線文と爪形状のキザミ目文を施す。中部はすぼまり内径約2cm弱の中空となる。外面の平面形は把手部の内側中程を頂点に三角形の底辺となる三角形に幅約1cmの帯状突起を設けている。下部は中部と同様な平面形であるが中部よりひとまわり大きい三角形となり、幅約1cm強の帯状突起を設けている。いずれも三角形の各頂部は山形にせり上がり、口縁部には爪形状のキザミ目文と頂部には凹点文や押圧文とキザミ目文を施文する。把手部は上部と下部が繋がり中部の帯状突起を挟んで上下2個の空洞が設けられている。把手中程には長さ4cm、幅約1cm強の水平な帯状突起を設けている。突起には凹線文とキザミ目文、両端には凹点文とそれを囲むようにキザミ目文を付す。両側面には弓状に2本の沈線文と短い沈線文とキザミ目文を付す。

388～390も同様な形状・形態の土器片である。なお、388の把手部は1個の空洞を有し、890の沈線文は太形となる。391、392は爪形状刺突文を付す円形の把手部である。

異形土器については、西之表市納曾遺跡や指宿市大渡遺跡でその類例が報告されているが、口縁部の造りや文様構成等から市来式土器と極めて類似していることから市来式に伴う壺形土器と思われる。

393は頸部で絞まり短い口縁部はやや外反する壺形土器の把手部である。口縁端部に接合する二股の足は弧状に延び体部中程で繋がる。口縁端部と口縁部直下、把手に櫛先による連点文をランダムに刺突する。色調は赤みを帯び、胎土は粒子が粗い。396も397同様なものである。

394は短頸小型壺である。太形の短線と連点文、395は短い口縁部がわずかに外反する小型の鉢と思われる。口唇内側端部に連点文と直下に凹線文を付す。398は頸部に2本の沈線文と連点文、399、400は小型の壺形でV字文・重弧文ときざみ目文(399)、沈線文ときざみ目文(400)を施す。

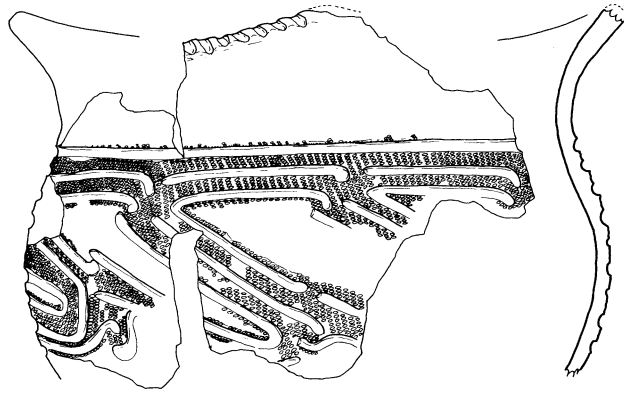
2 石器

①石斧(第55図679～712)

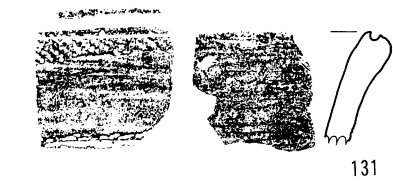
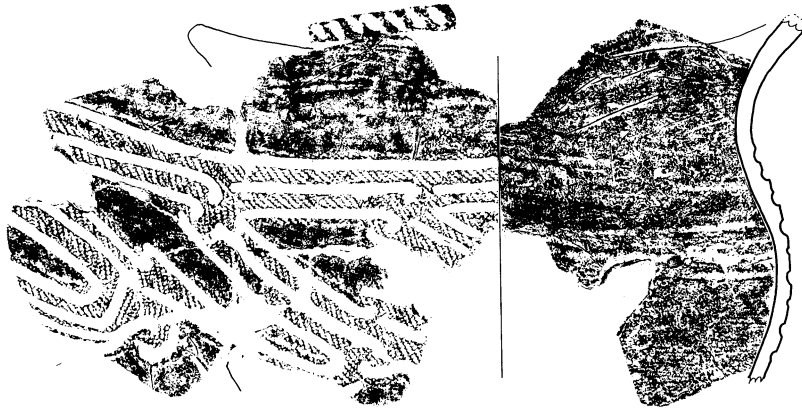
磨製石斧には断面形が楕円形を呈し、頭部が細くすぼまる乳棒状石斧と、左右に側面を持ち、断面形が隅丸方形を呈する定角式石斧がみられる。石材のほとんどがホルンフェルスであり、かつ風化が激しいこと、欠損後の転用が行われた資料が多いことから、研磨痕等の詳細な観察が不可能な場合がある。刃部断面形態は表裏に同等の膨らみをもつ両凸刃が、平面形態では刃縁が緩やかに外湾する外湾刃を有するものが多い。

定角式磨製石斧としたものには、基端部へ向い極端にすぼまり長形の二等辺三角形の平面形をとるものと、基端部の幅がやや広いものがある。断片的な観察ながら、一般的に剥離→敲打→研磨による製作過程が伺われるが、剥離痕、敲打痕が残置される部分が多く見られ、比較的粗略な仕上がりとなっている。

687は硬質の頁岩製の定角式の磨製石斧である。基部は薄手で刃部表側は短く直線的な平面を、裏面側は緩い膨らみをもつ弱凸弱平刃である。刃部尖端は使用による刃こぼれが生じているが、直線状を呈する直刃で、擦切り技法により製作された可能性がある。頭部には研磨面が見られ丁寧な仕上げが行われている。694は平面形状は定角形の磨製石斧に類似するが、断面



130



131



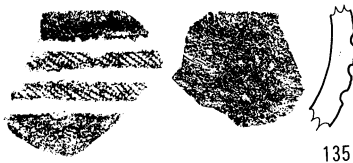
132



133



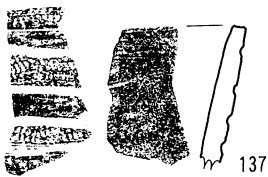
134



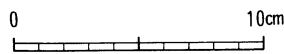
135



136

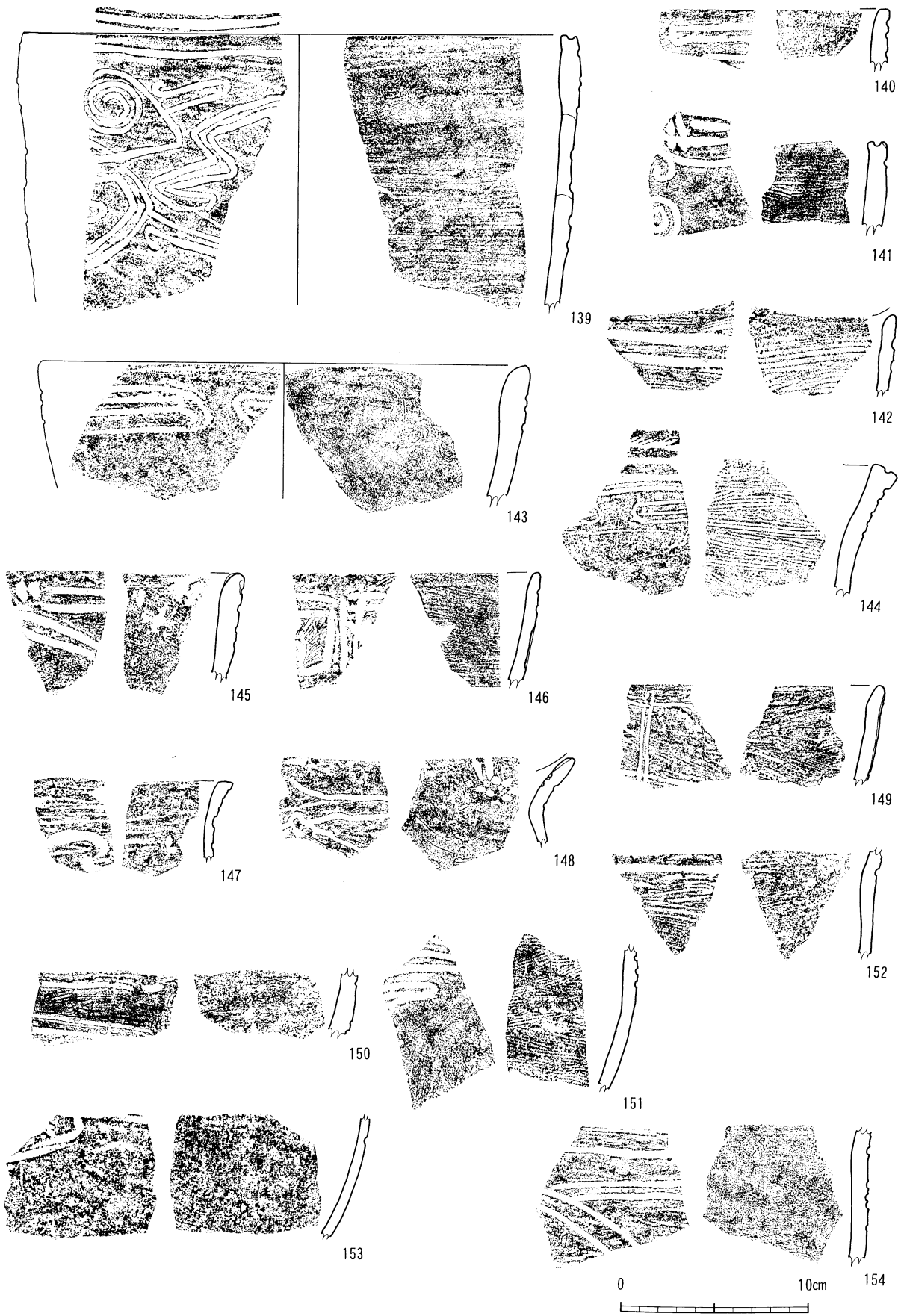


137

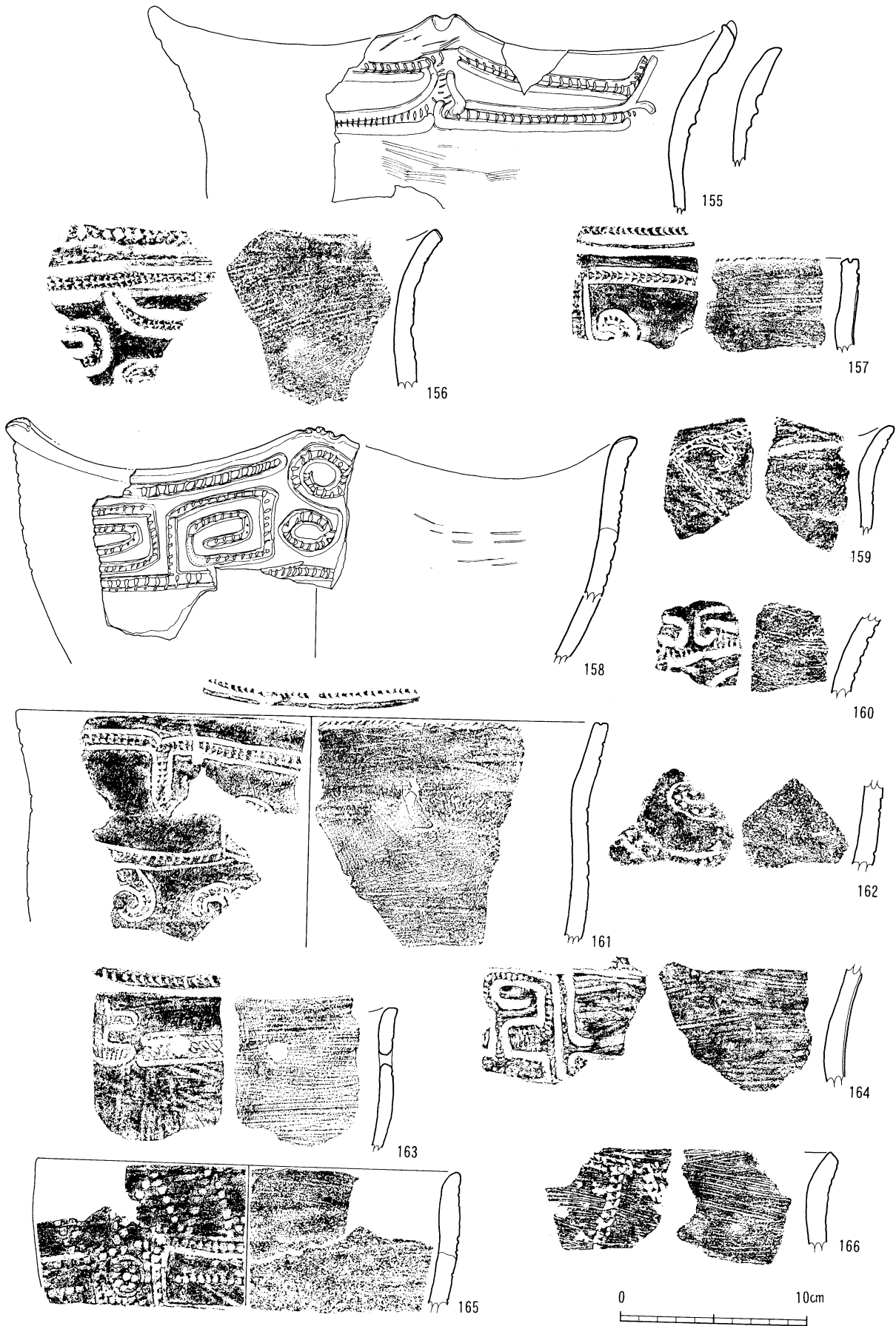


138

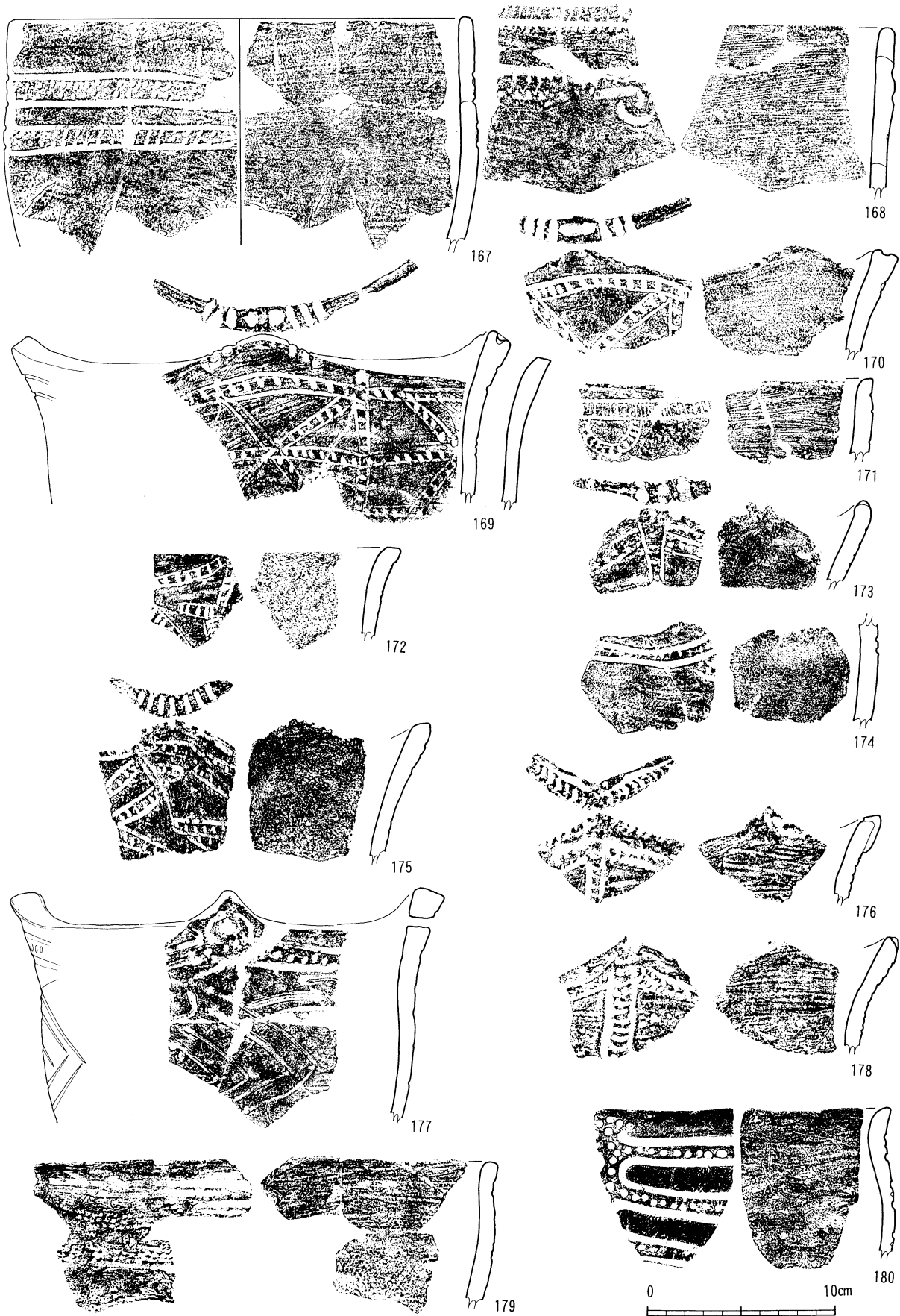
第16圖 I類 出土土器



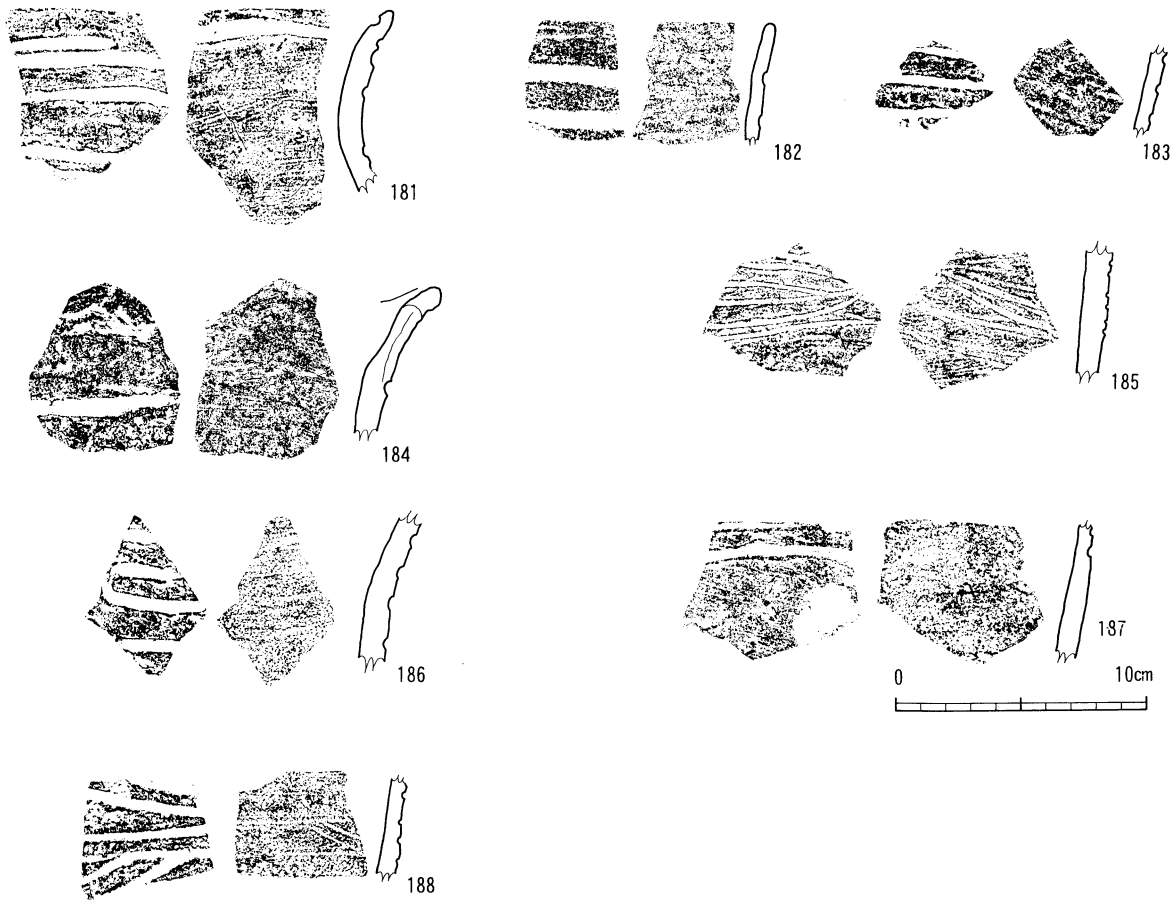
第17図 II A類 出土土器



第18图 II B類 出土土器



第19圖 II類 出土土器



第20図 II A類 出土土器

形はレンズ状を呈し、側面をもたない。刃部が磨耗し、基部に研磨の痕跡が認められないことから打製石斧とした。その他、欠損資料の多くで上端部及び下辺部の階段状の剥離や「つぶれ」、刃部及び器面の摩耗など、転用後の使用の痕跡がみられる。

②石 核 (第60図713~716)

3点を図示したが、この他にも多数の砂岩礫製の石核が出土している。円礫あるいは分割礫の比較的平坦な自然面を打面として左右に作業位置を移動しながら剥片を剥離するものと、礫の周縁を順に移動しながら求心的に剥片を剥離するものがみられる。713は厚みのある砂岩剥片を素材とし、周縁から求心的に剥片剥離を行った残核の上下両辺に剥離調整を加えスクレイパーとして転用したものとみられる。

③スクレイパー (第60図717~720)

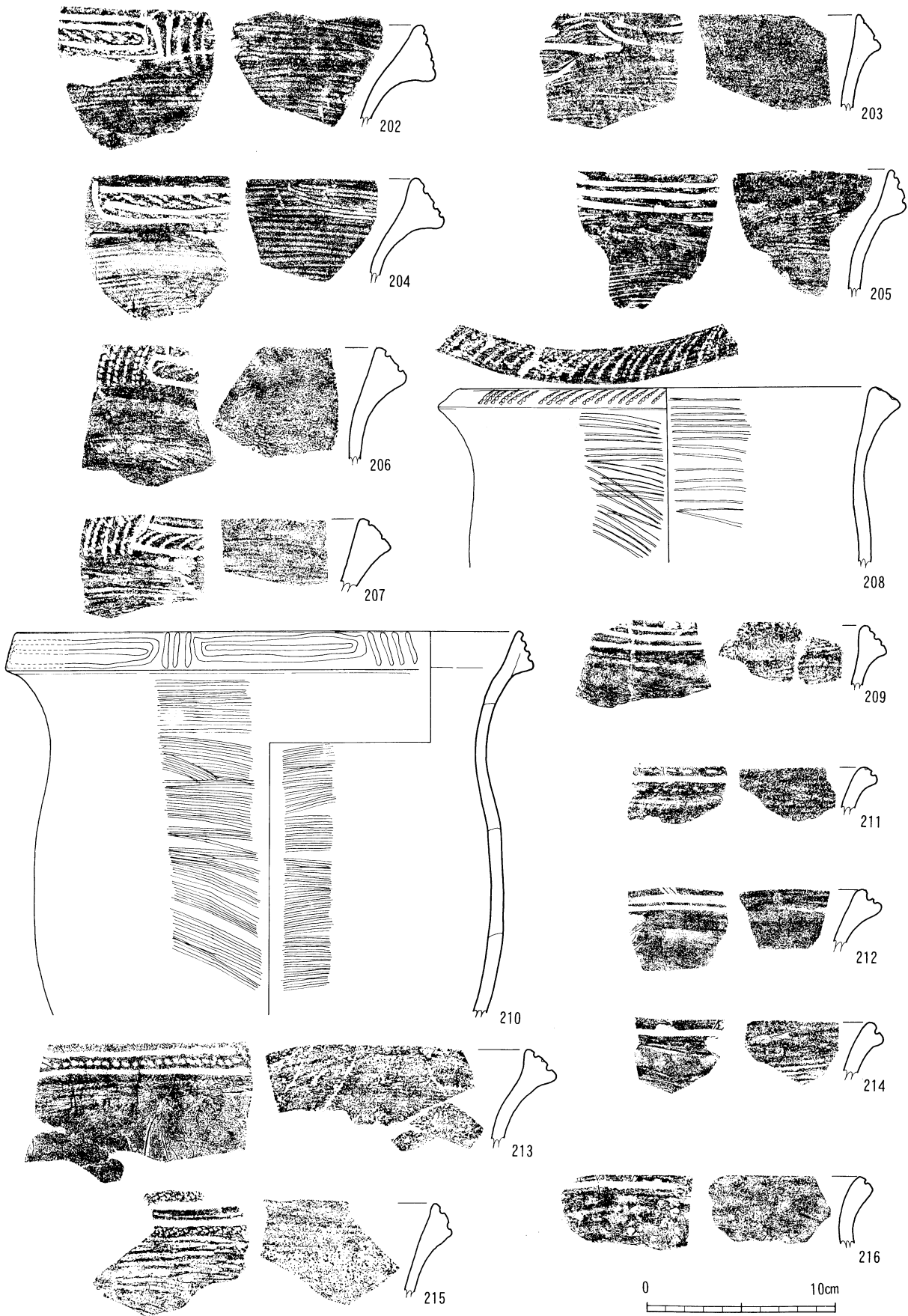
砂岩円礫から剥離された厚みのある剥片で、717・718は表裏からの、719は裏面側からの細かい剥離で調整された刃部をもつ。刃部縁辺にはわずかに磨耗を認める。720はやや荒い剥離調整が施され、刃部は鋸歯状を呈する。いずれも一辺のみに二次加工が施されるもので、スクレイパーとして分類した。同様の剥片は、二次加工の有無をふくめ多数出土している。

④礫 器 (第61・62図721~731)

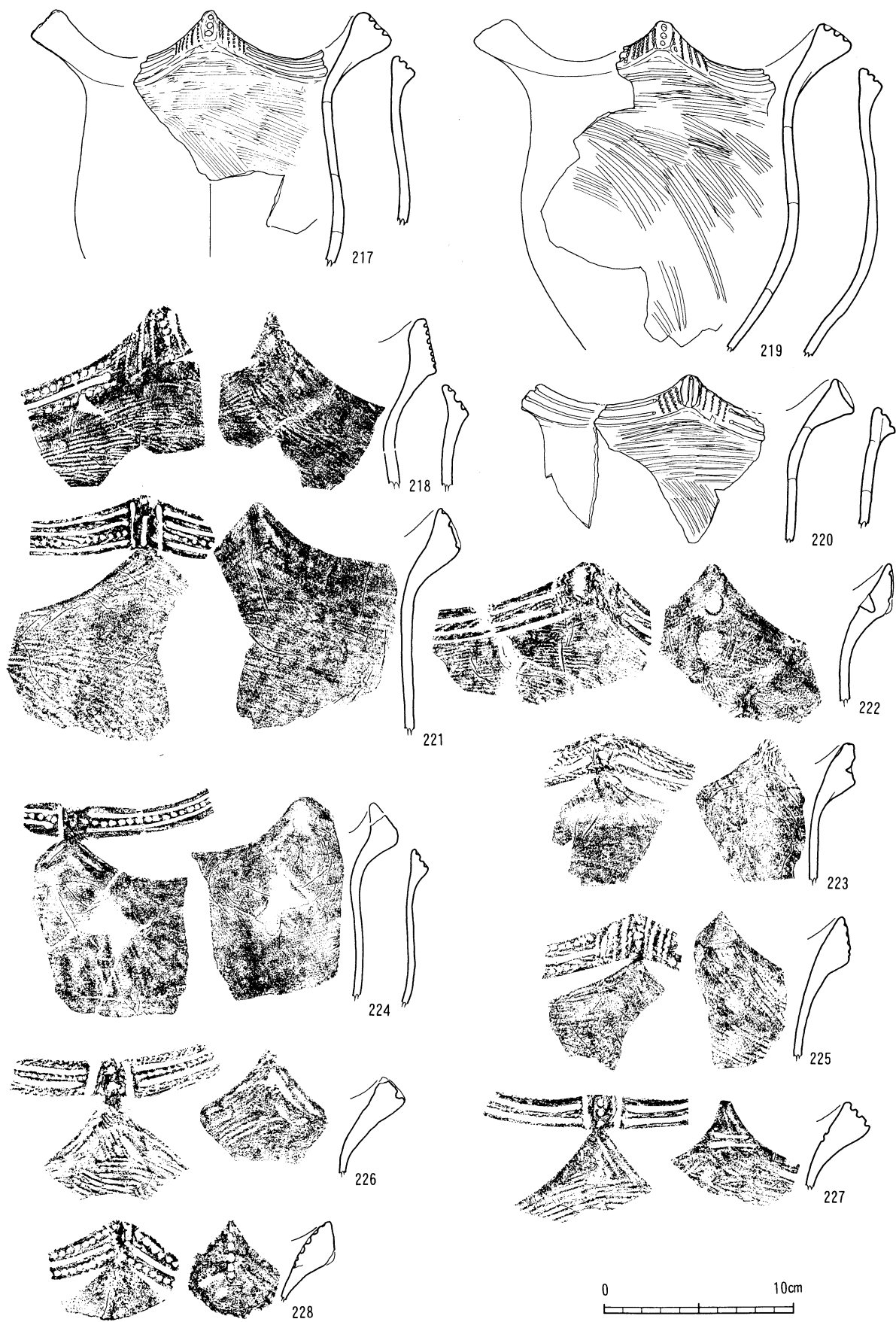
11点を図示した。砂岩の円礫もしくは背面に自然面を残す厚みのある剥片を素材とし、剥離



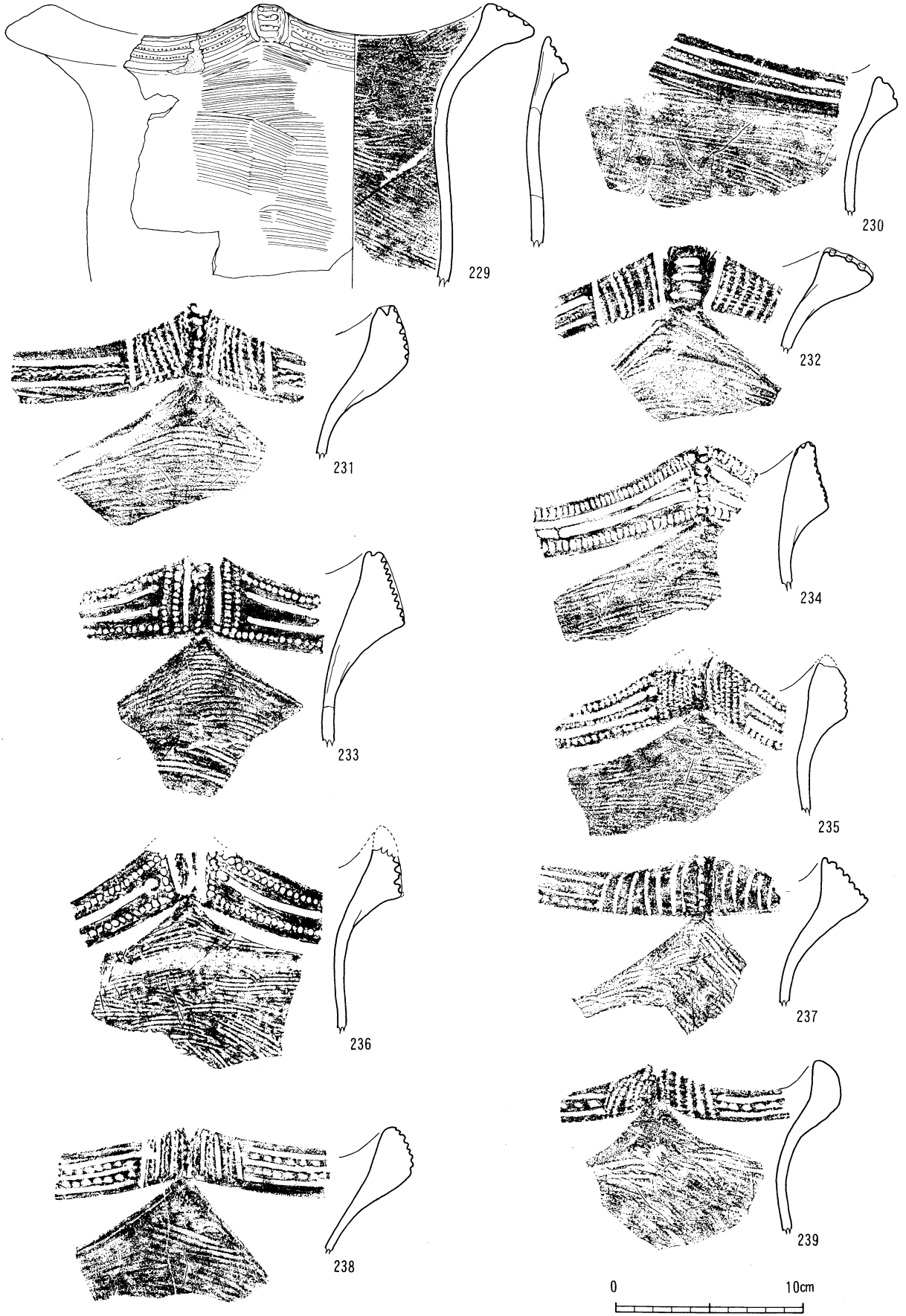
第21图 II A-1 类 出土土器



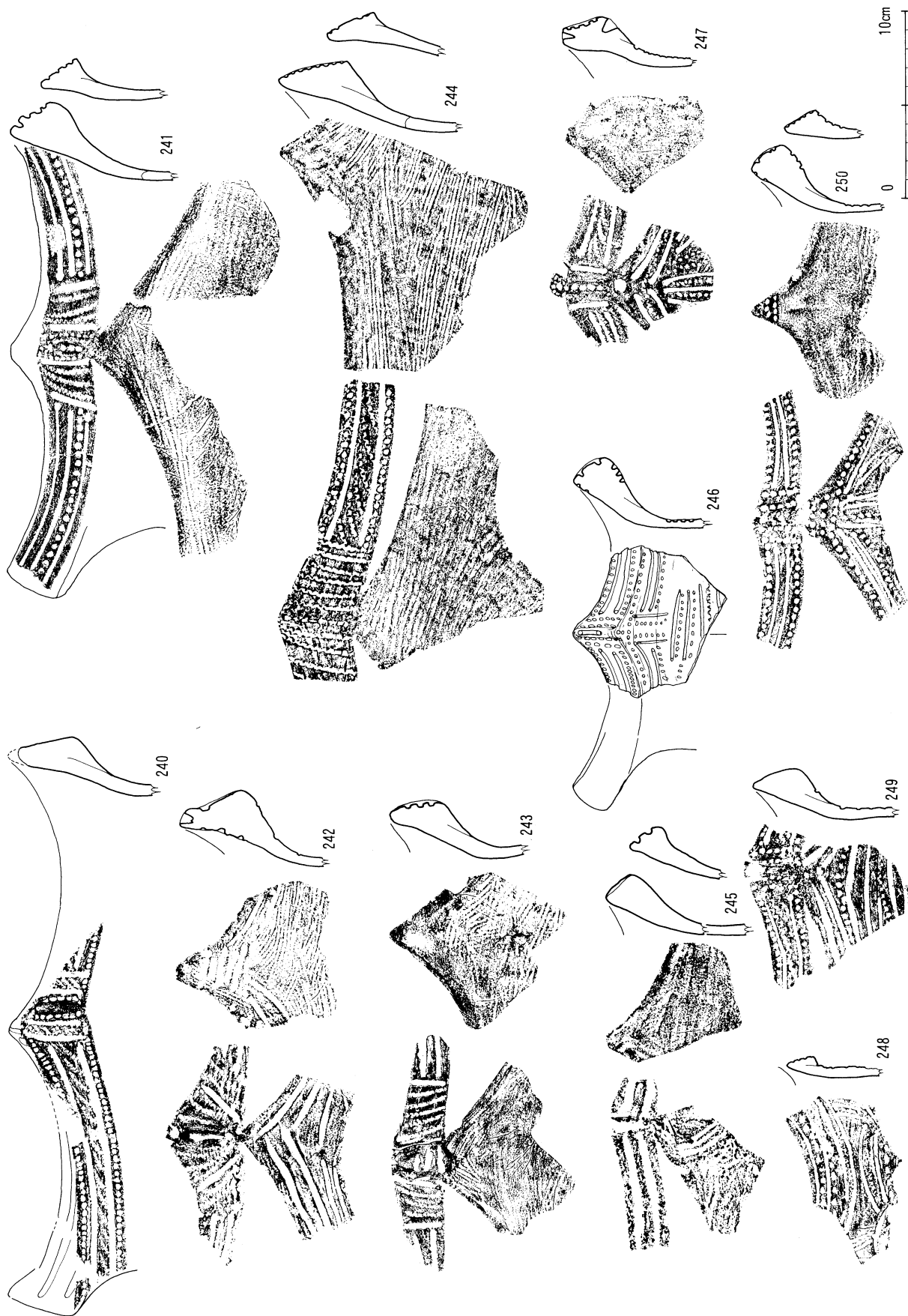
第22図 II A-2・3類 出土土器



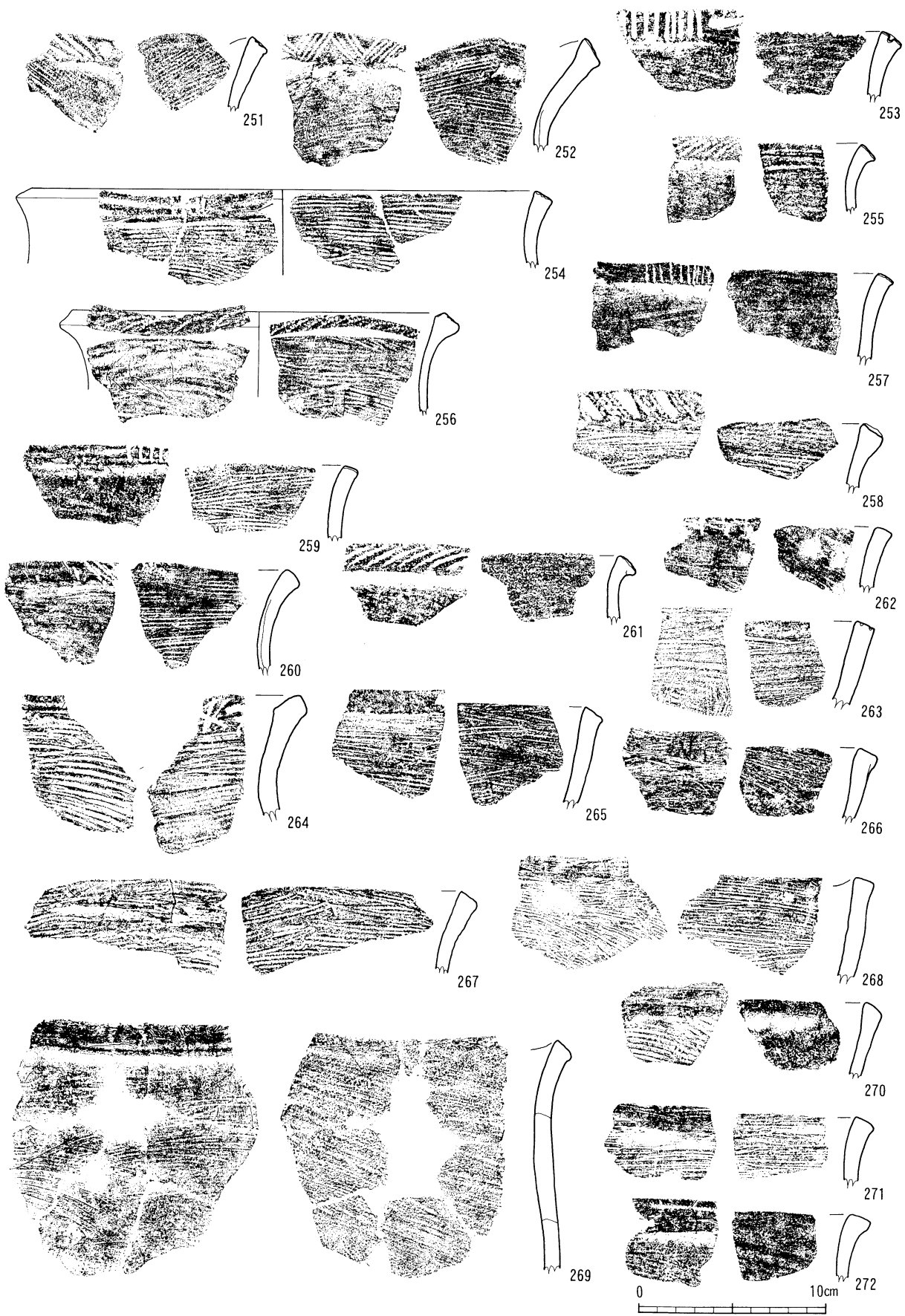
第23圖 III B類 出土土器



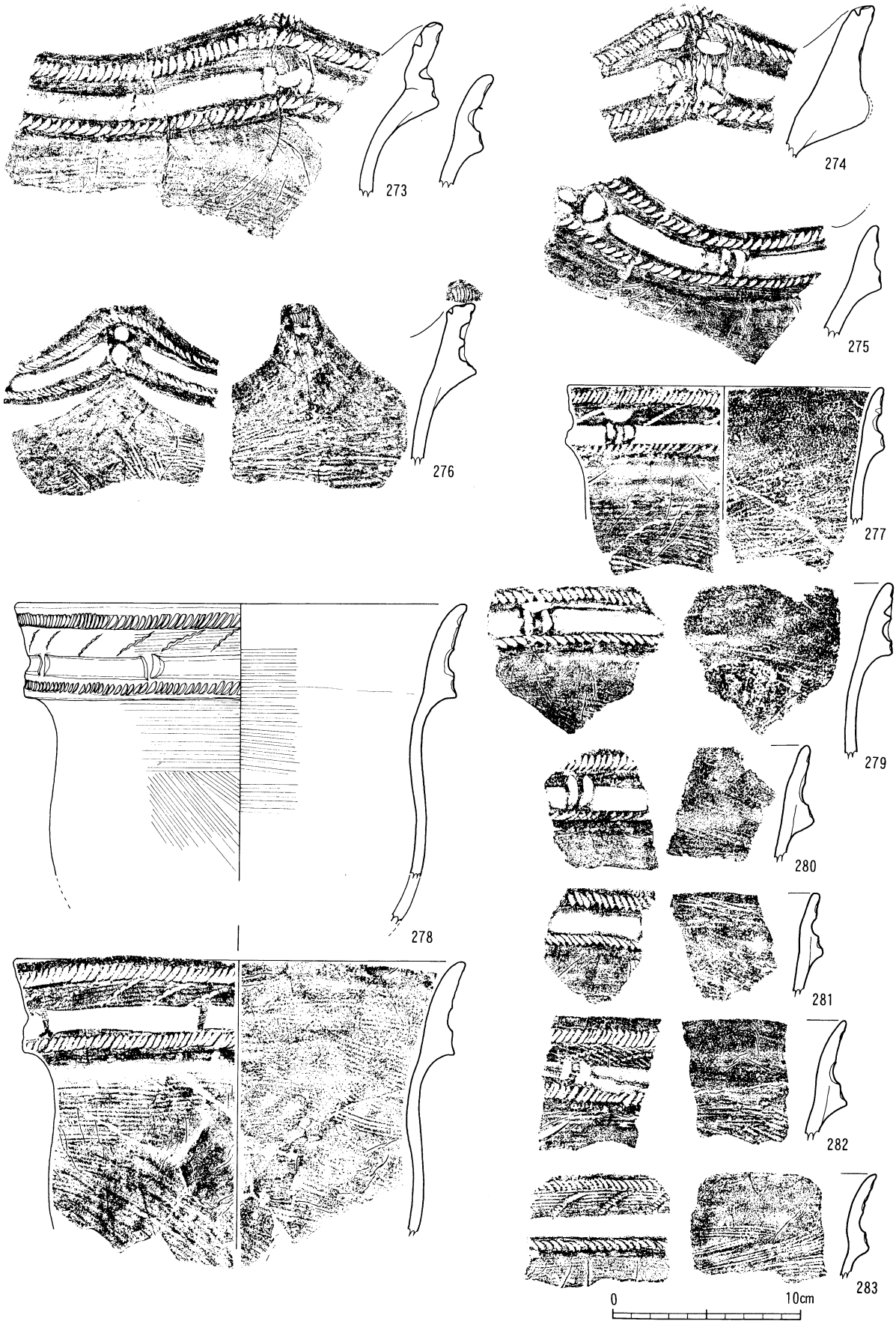
第24图 ⅢB类 出土土器



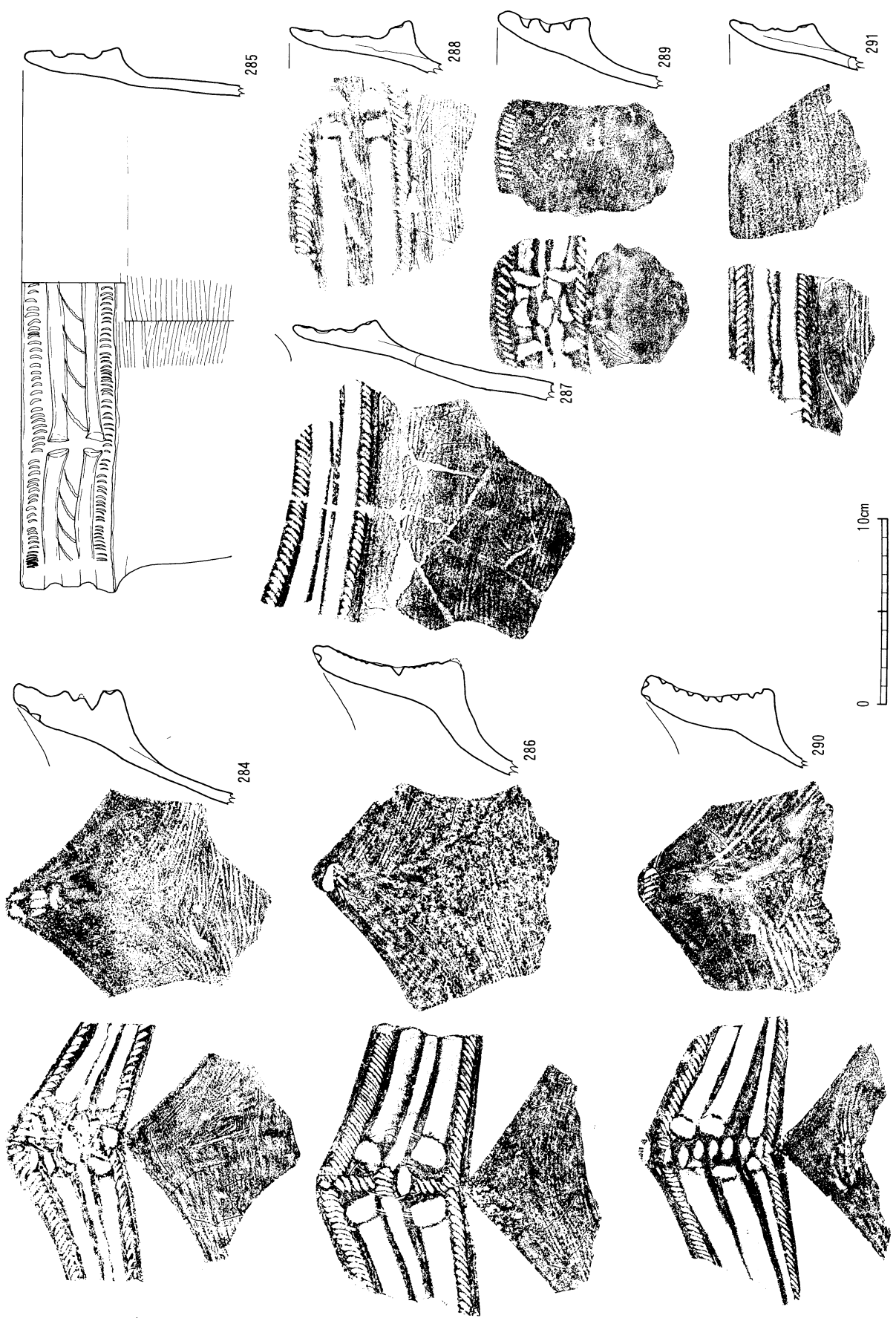
第25图 ⅢB類 出土土器



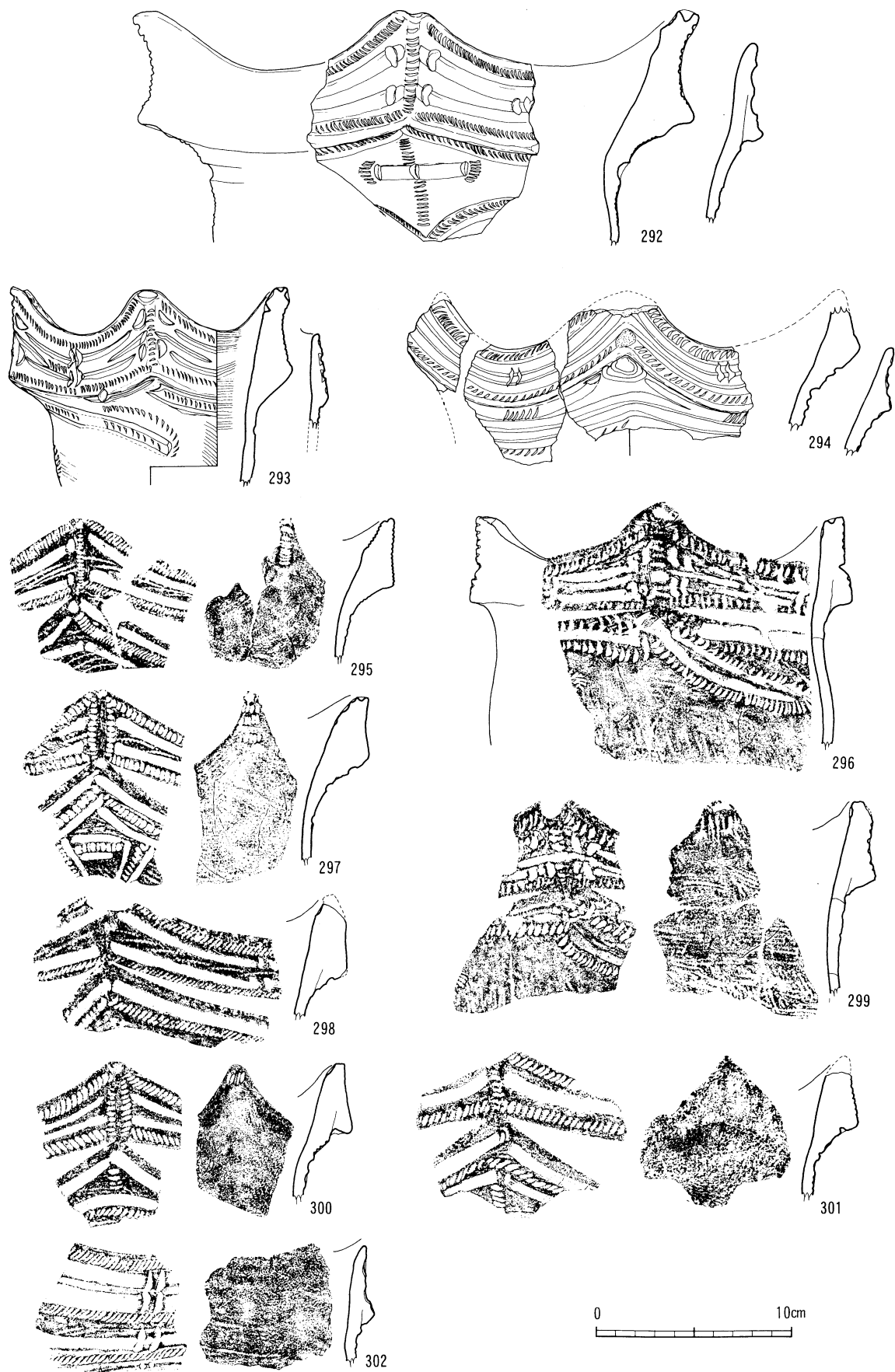
第26図 ⅢA-3・4類 出土土器



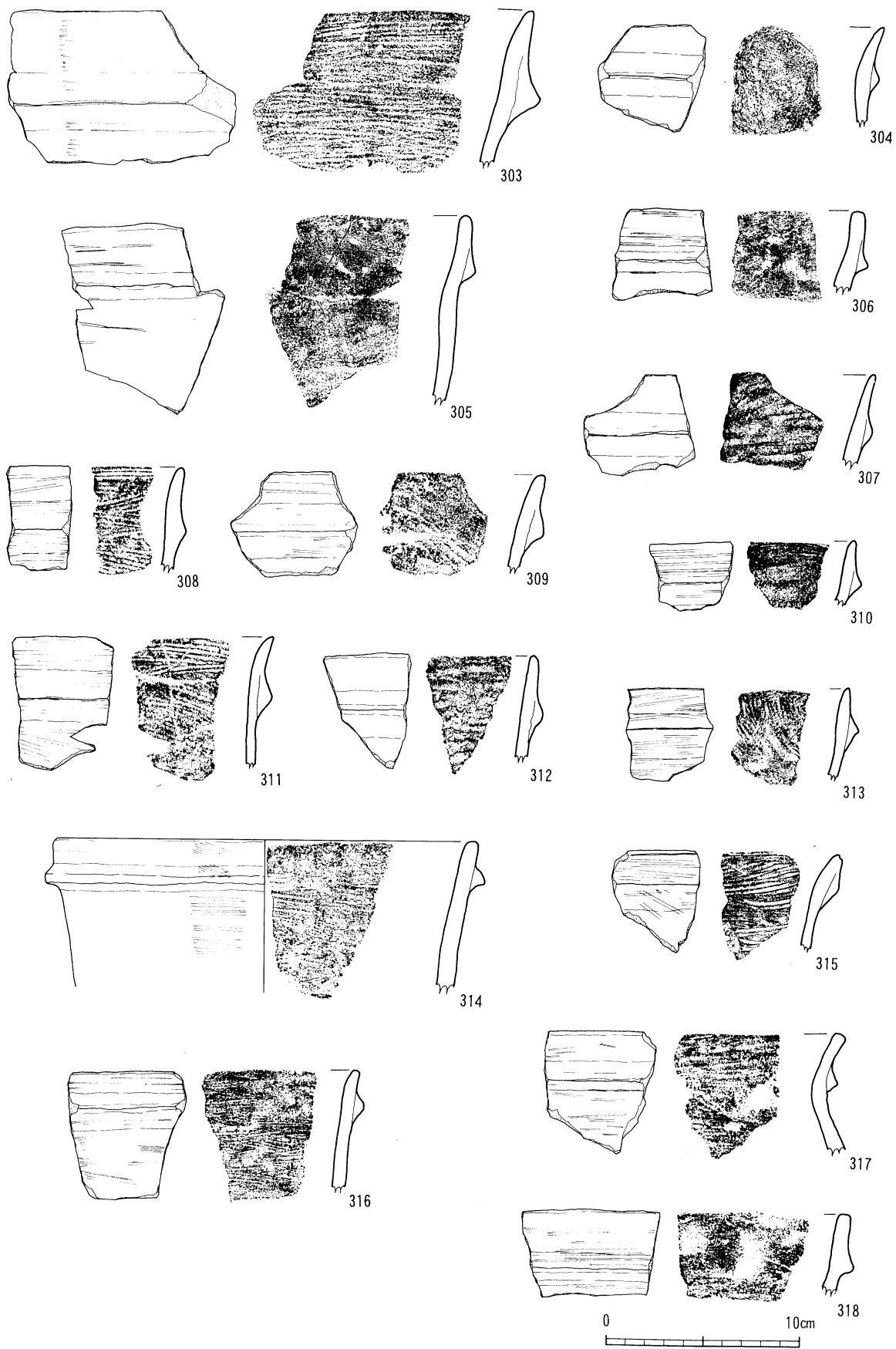
第27圖 IVA-1類 出土土器



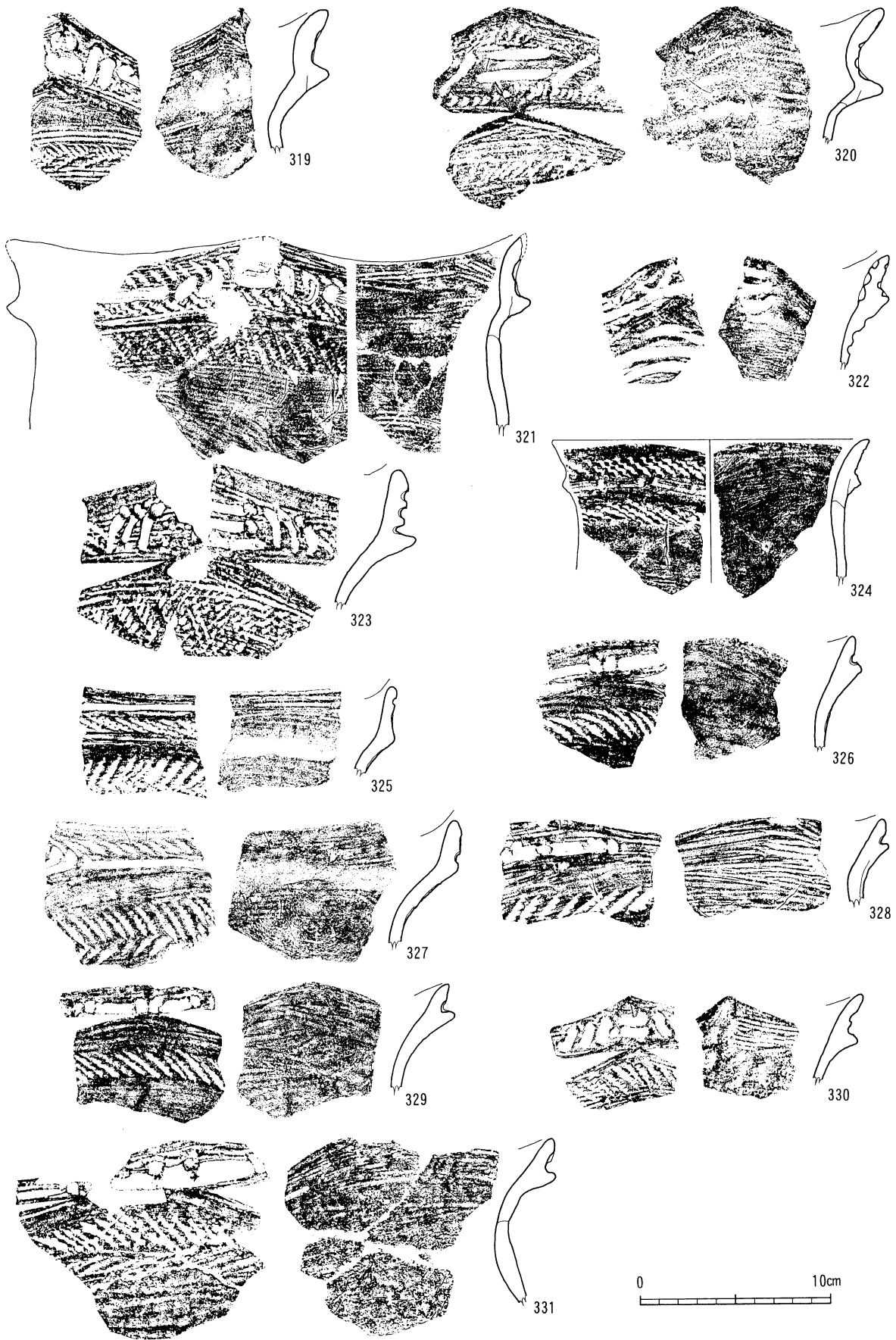
第28图 IVA-1类 出土土器



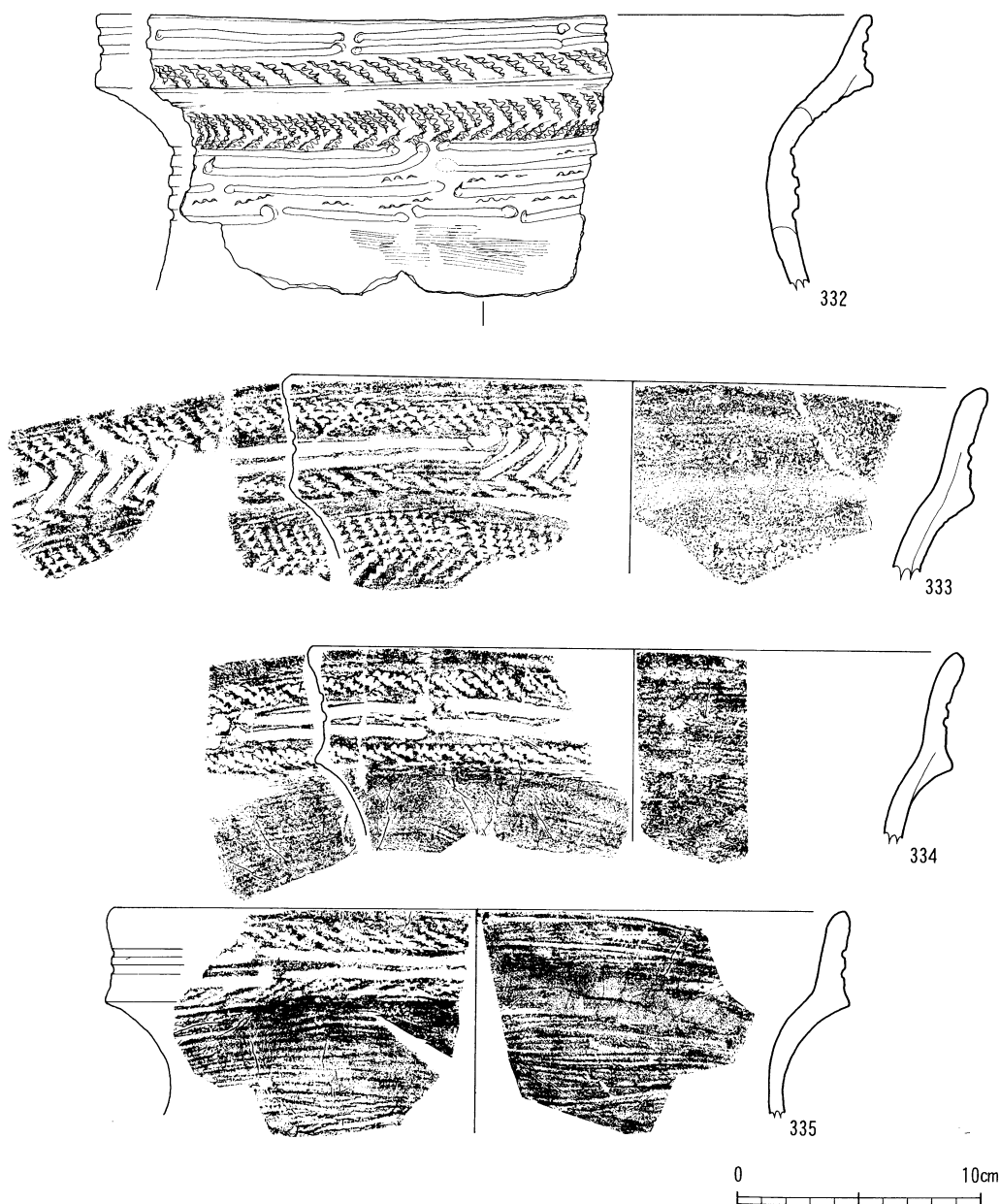
第29図 IV B-1類 出土土器



第30図 IV A-4類 出土土器



第31圖 IV類 出土土器



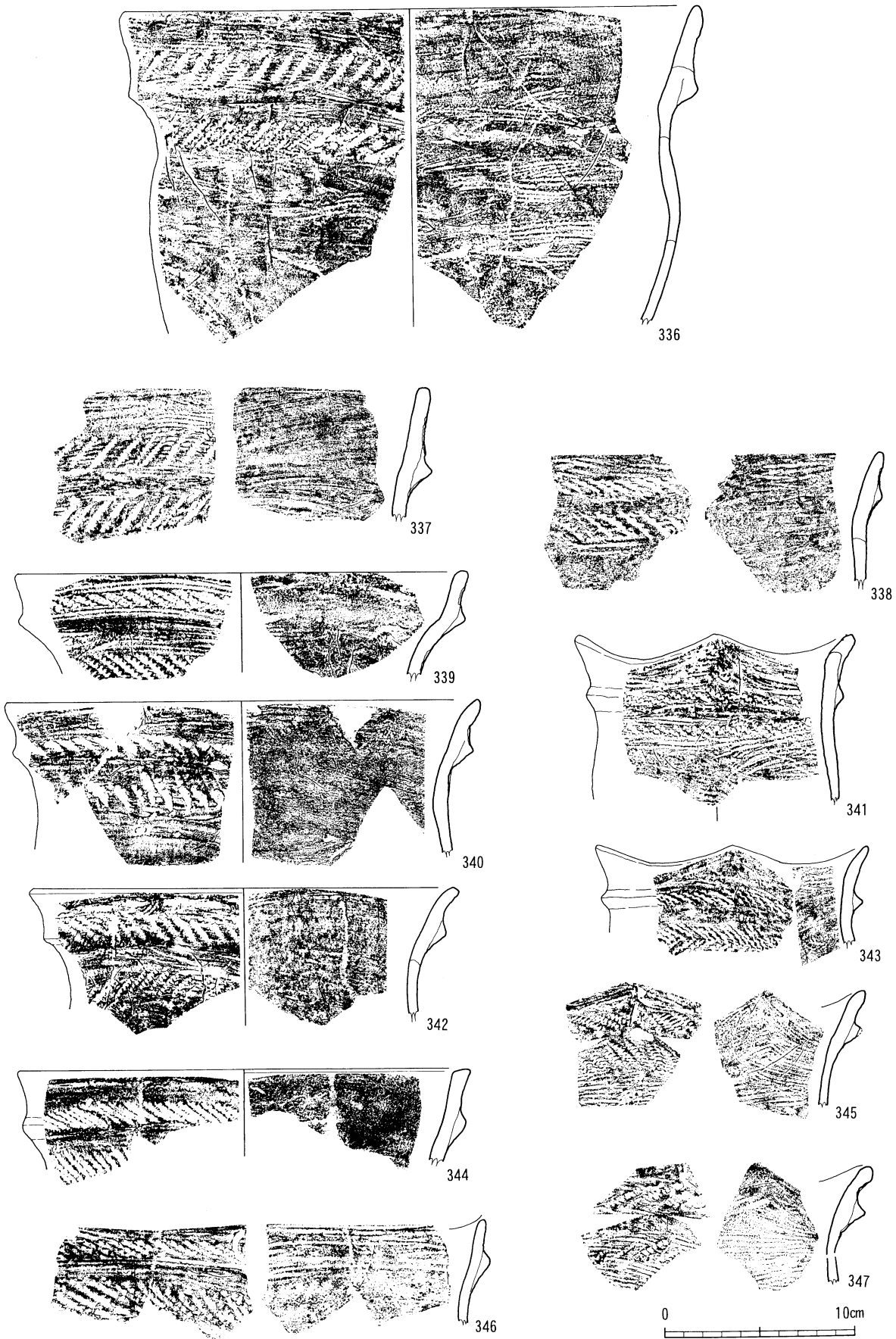
第32図 IV A-3類 出土土器

調整により刃部つくりだすもので、①片面のみに剥離を加えたもの(723・724・727)、②片面の剥離に加え表裏に細かい剥離が見られるもの(725・726・729・731)、③表裏に剥離を加えたもの(721・722・728・730)がある。刃部主角は概ね70°前後の鈍角であるが、724・727・728を除き刃部には使用による刃部の磨耗や「つぶれ」が認められる。

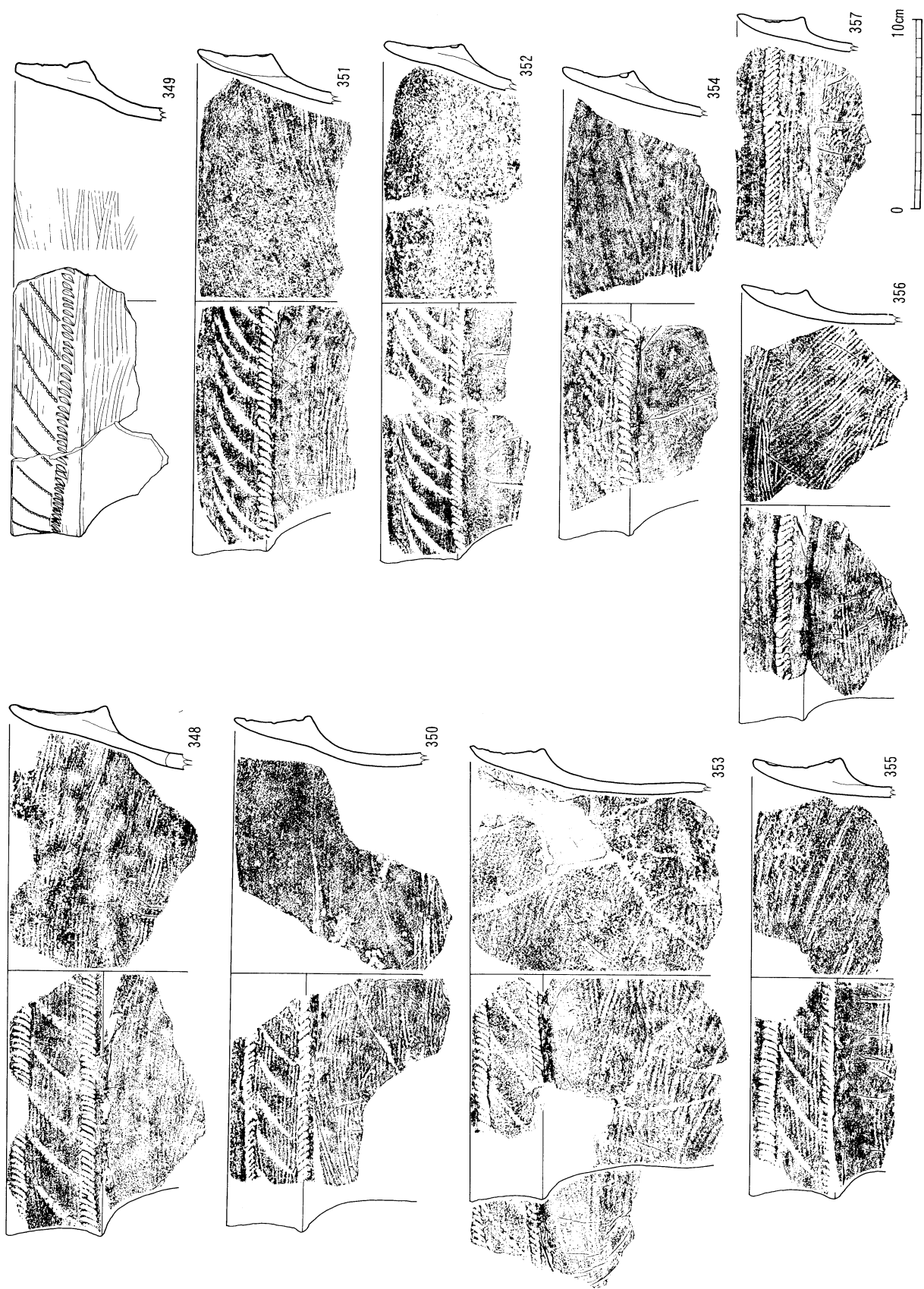
728・725は表裏面上にアバタ状の敲打痕、磨痕が見られ、磨石・敲石類のⅡ類を転用したものである。また、726については石核からの転用とみられる。

⑤石皿・台石(第63～67図732～775)

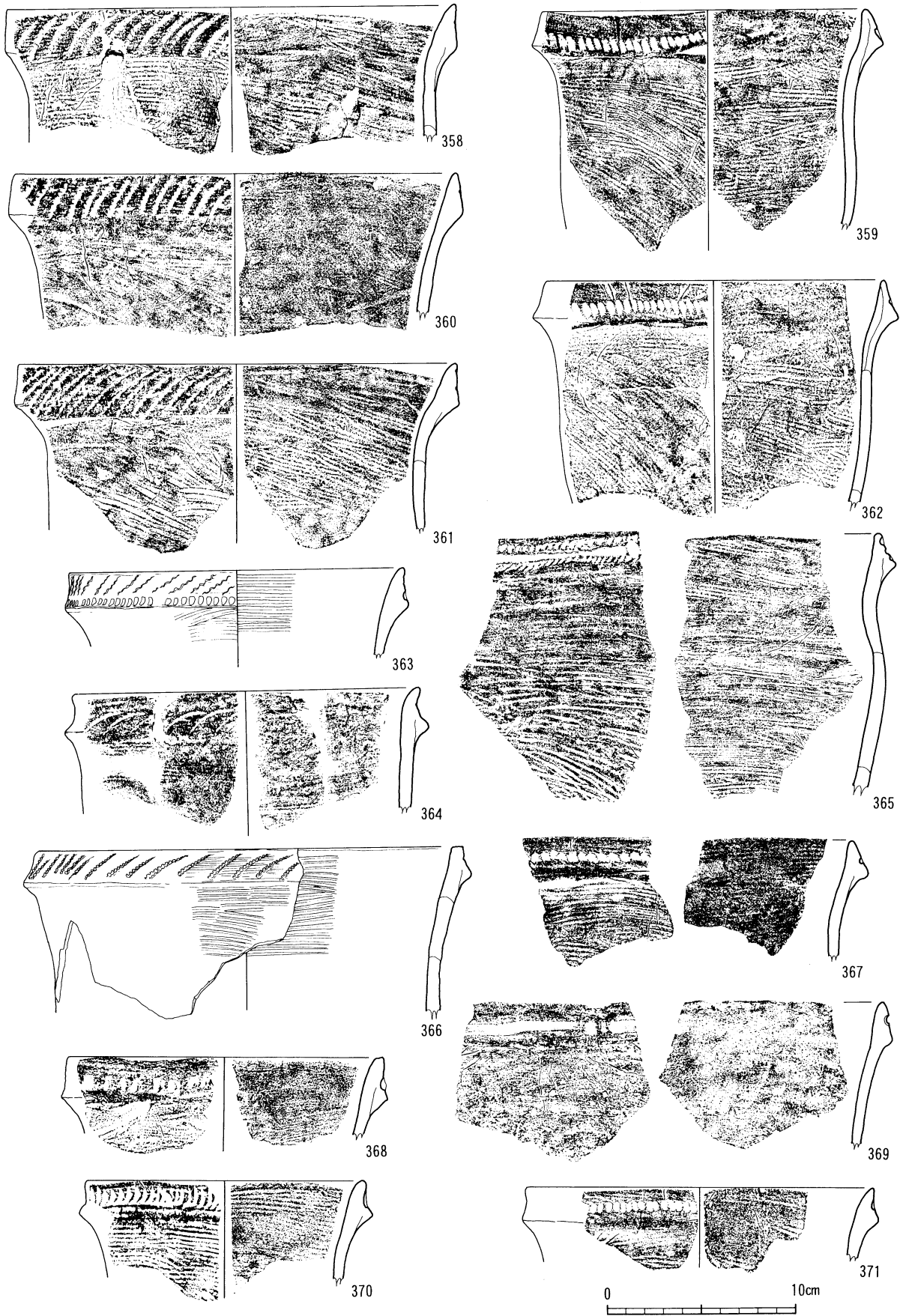
破片資料を含め多数の石皿が出土しており、このうち44点を図示した。いずれも砂岩製のである。大型のものが多くみられ、最大のものは重量で83kgに達する。備考欄において複数の出土区を記したものは、個別に出土した資料が接合したことを示す。赤化等の比熱の痕跡を持



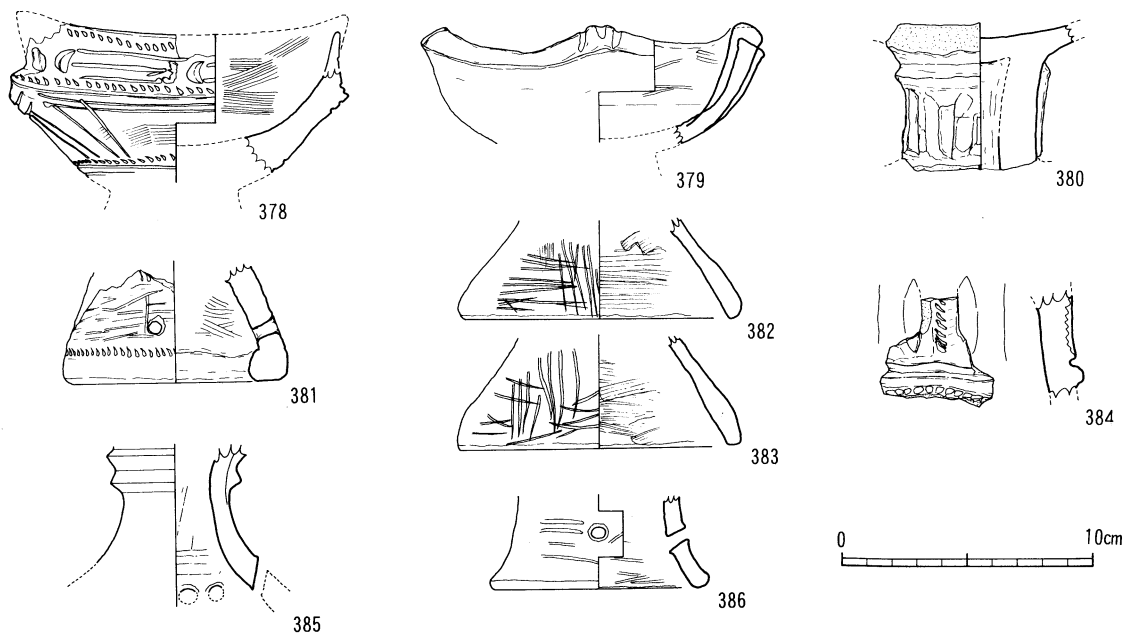
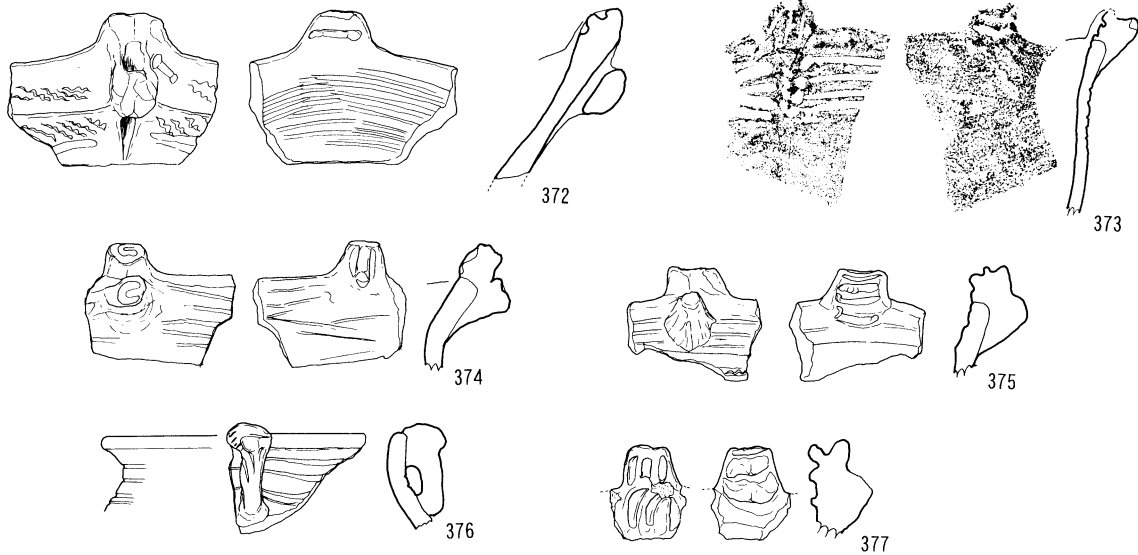
第33図 IV A-2類 出土土器



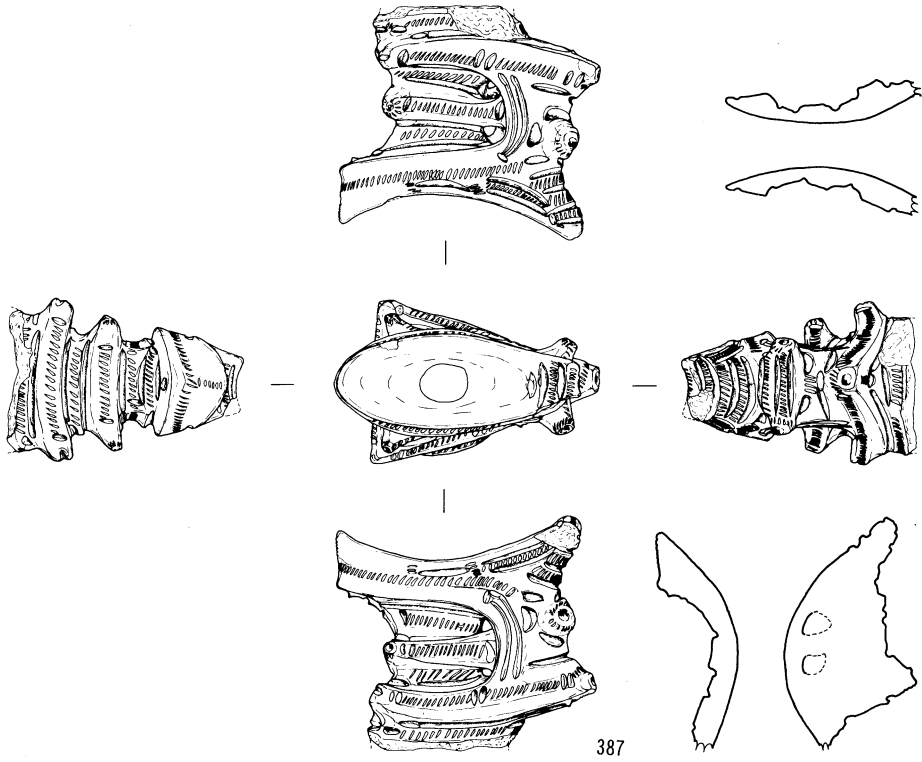
第34図 IV A - 3類 出土土器



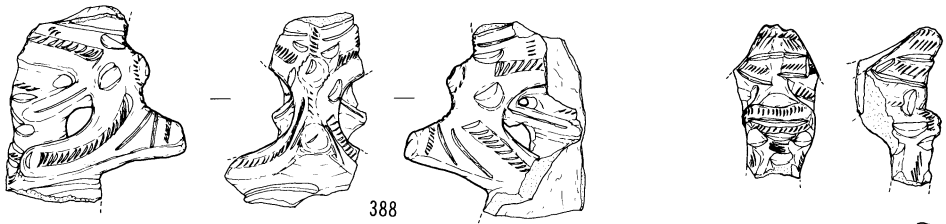
第35図 IV A-3類 出土土器



第36图 V類 出土土器

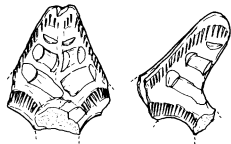
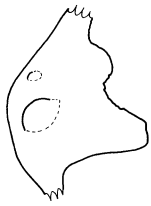


387

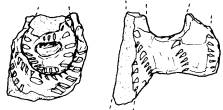


388

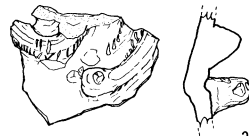
389



390



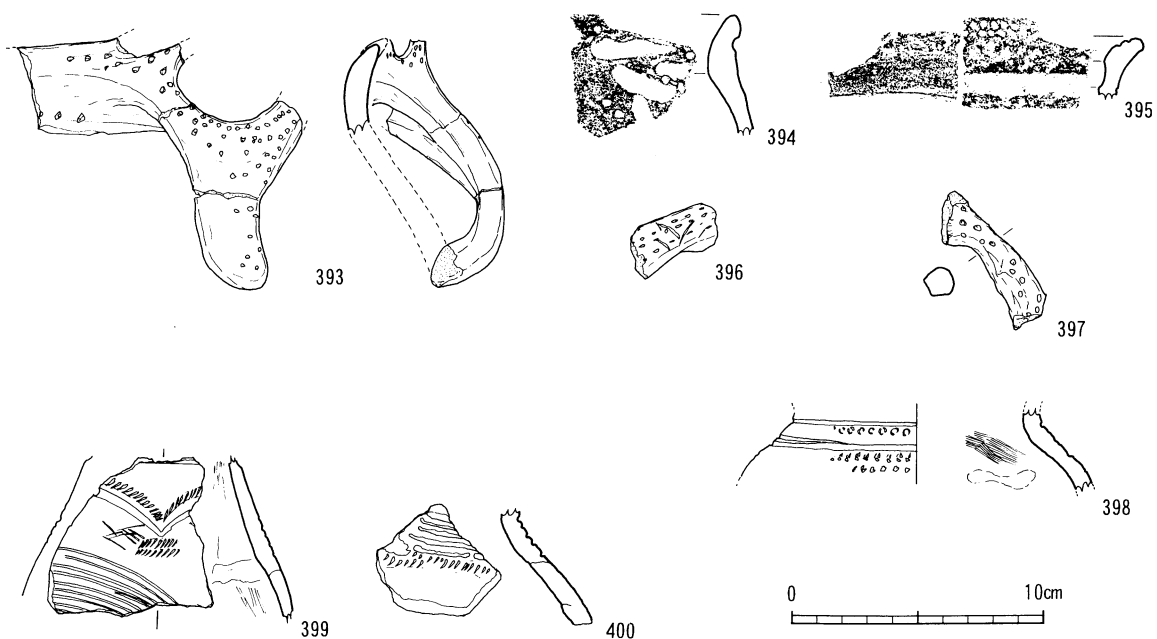
391



392



第37图 异形土器（壺形土器）



第38図 出土土器

つ資料が散見され、観察表に示した以外にもその可能性のあるものが存する。平・断面の形状及び機能部の凹み等に基づき以下に分類した。

I 平坦、もしくは全体的に浅い凹面を呈し、面上に磨痕・磨滅が認められるもの

- a 扁平な円礫，亜円礫などの転礫を用いたもの
- b 扁平な角礫，分割礫，大型の剥片等を用いたもの

II 縁を残して，中央が弓なりに凹むもの

- a 楕円形に近い形状のもの
- b 台形状もしくは盾形を呈するもの
- c 不定形な形状のもの

III 中央が溝状に凹み断面形がU字形を呈する。幅広の縁を持つもの

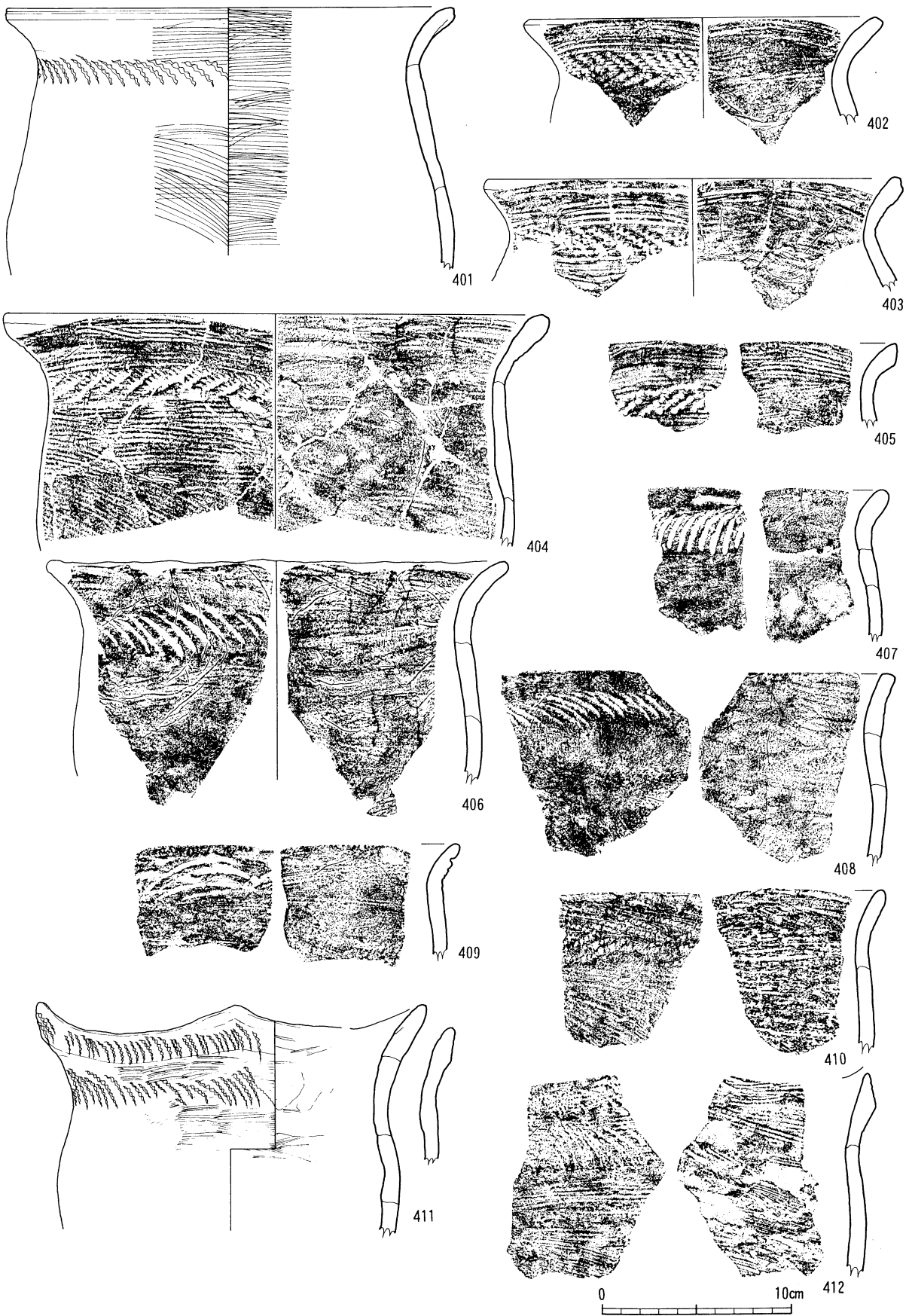
- a 楕円形に近い形状のもの
- b 台形もしくは盾形を呈するもの
- c 不定形な形状のもの

I a類 (732・733・739・740・742～744・746・747・753・756・763・764・766・768・771～774)

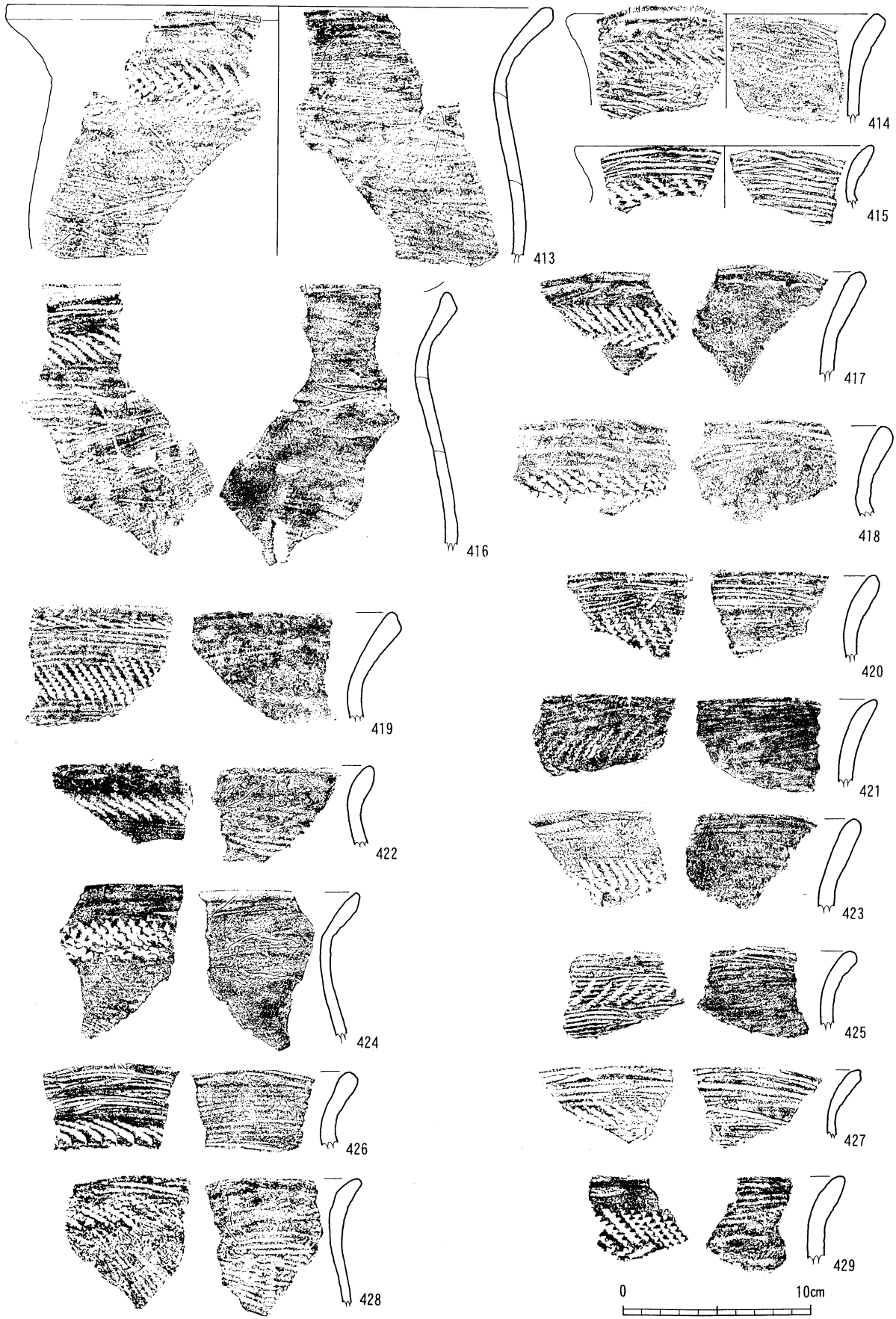
平面形が円形及び楕円形を呈するものと，隅丸方形に近い形状のものがある。732は出土資料中最大で，最大長が58.4cm最大幅84.1cm重量83kgを計り，表面の左右に2箇所の機能部をもつ。739は縦長の機能部をもち，掃出し部周辺にアバタ状の敲打痕がみられ，平面形状も含め後述する745に類似する。740・747・753では機能部の周辺にアバタ状の敲打痕がみられる。756は機能面上に長径20cm程度の楕円形の範囲でドーナツ状に赤化し，被熱の痕跡を残す。

I b類 (735・738・741・748・757・758・761)

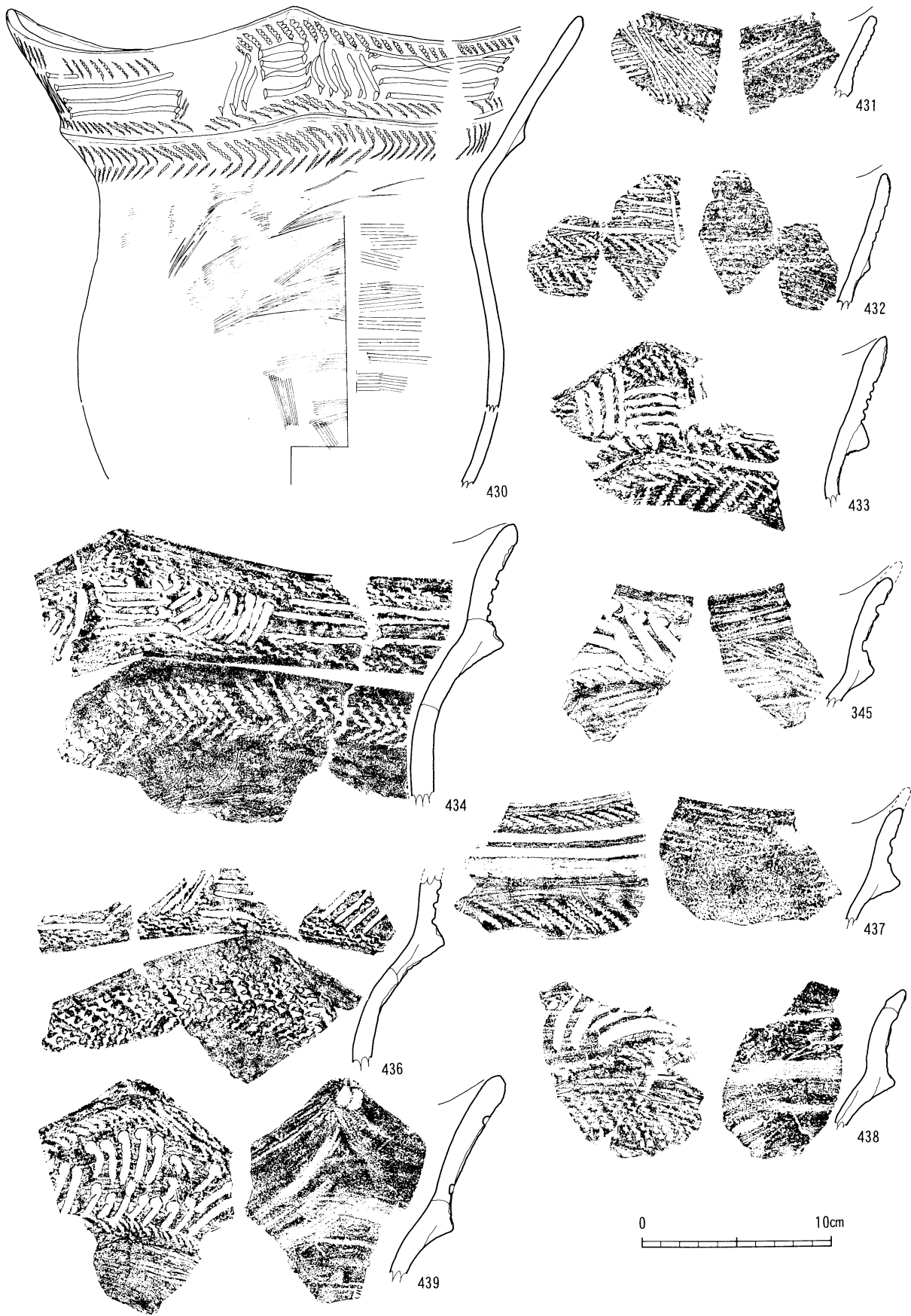
738・748はいずれも背面に自然面を有する剥片の主剥離面を機能面とするもので，周縁には剥離による整形が施されている。757は背面に剥離面をもつ剥片を素材とするもので，欠損を



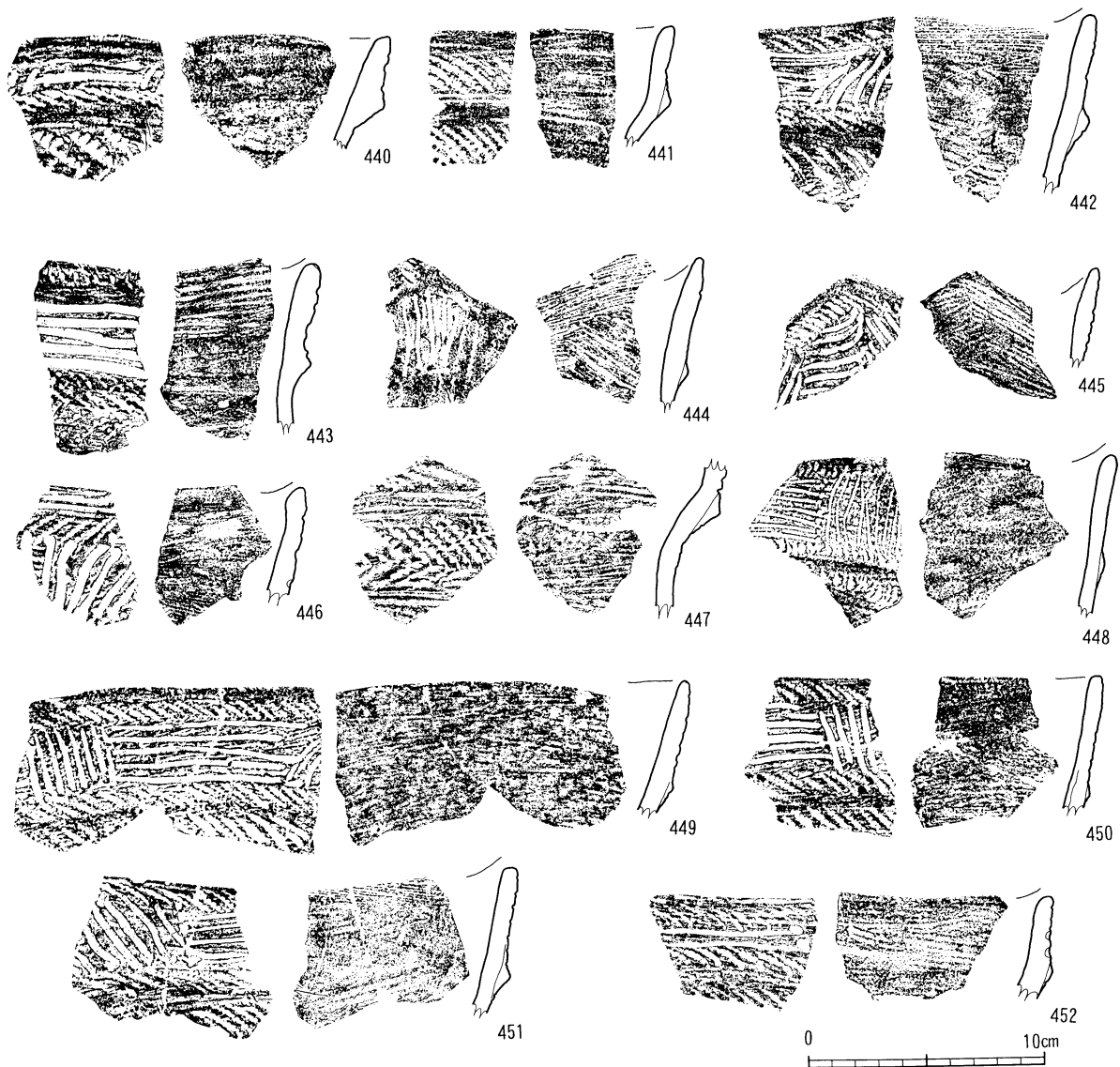
第39圖 VIA類 出土土器



第40図 VIA類 出土土器



第41图 VI B-1类 出土土器



第42図 VI B-1類 出土土器

免れた上縁から右縁にかけて敲打による丁寧な整形が施されるほか、表面機能部周縁にアバタ状の敲打痕がみられる。758は機能面に磨痕とアバタ状の敲打痕がみられ、石皿とともに台石としての使用も考えられる。

II a類 (750・765)

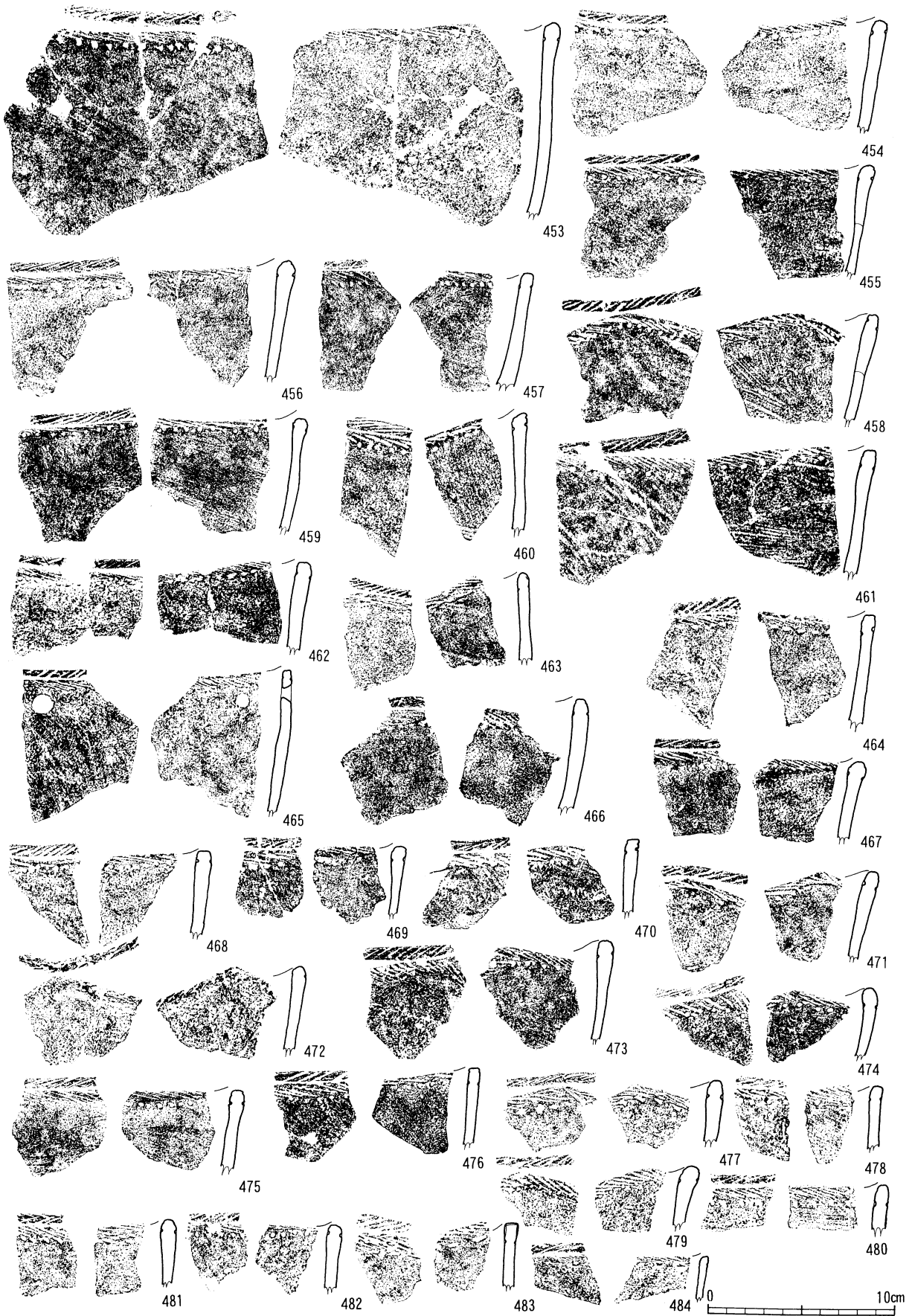
いずれも楕円形状の自然円礫を使用したもので、759では下方に明瞭な掃出し口がみられる。

II b類 (737・760・762・767・775)

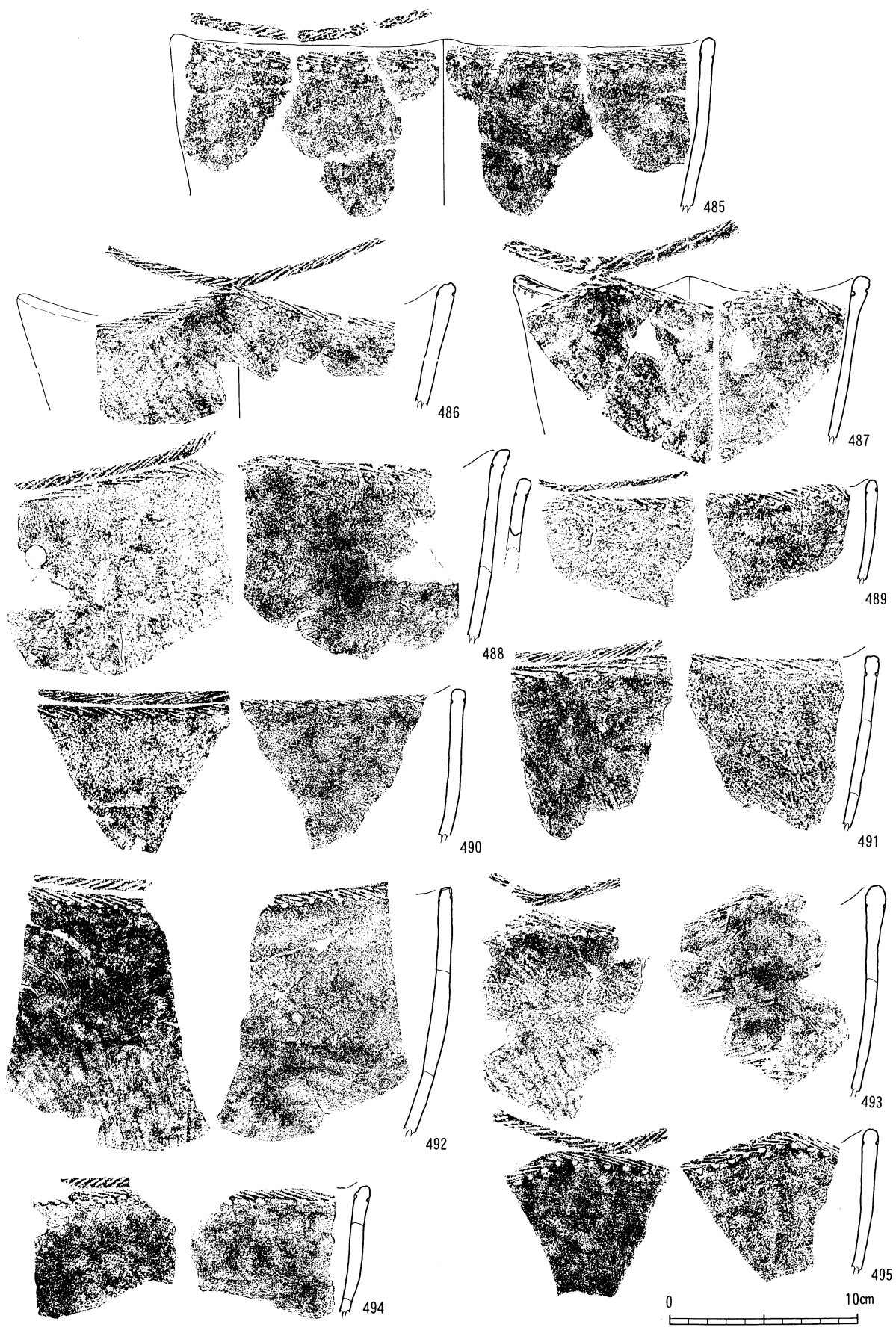
737は扁平な転礫を利用したもので、掃出し口のある下辺側面には剥離と敲打痕がみられる。762は破片のため全体形は不明であるが、表裏にアバタ状の敲打痕がみられる。762は下辺左隅を欠損する。表面の機能部上縁から右側辺上部かけてアバタ状の敲打痕がみられるほか、掃出し口のある下辺の残存部分には敲打整形が施されている。

II c類 (734・736・749)

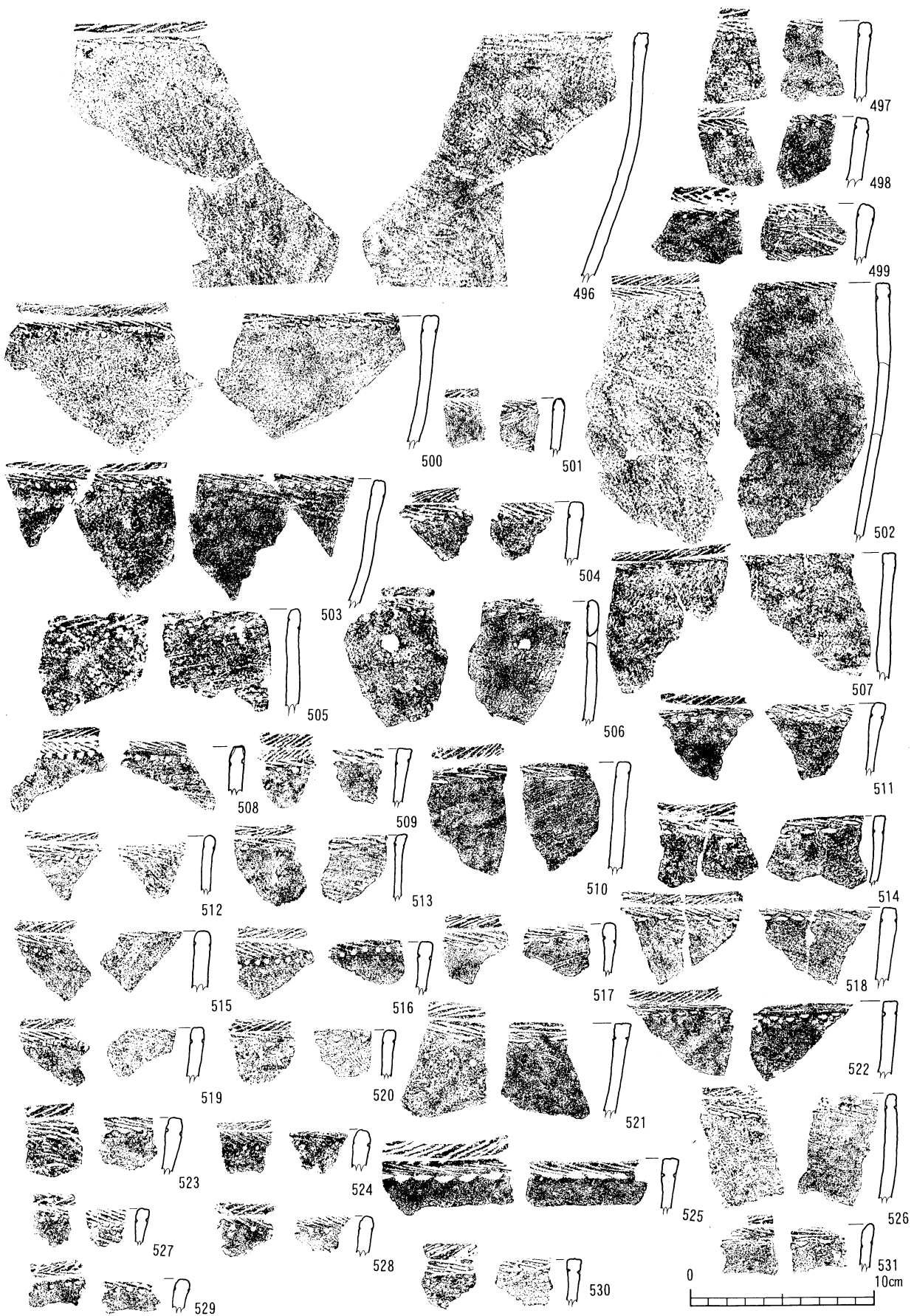
734・749はいずれも大型の剥片を利用したもので中心が深く凹むすり鉢状の機能面をもつ。



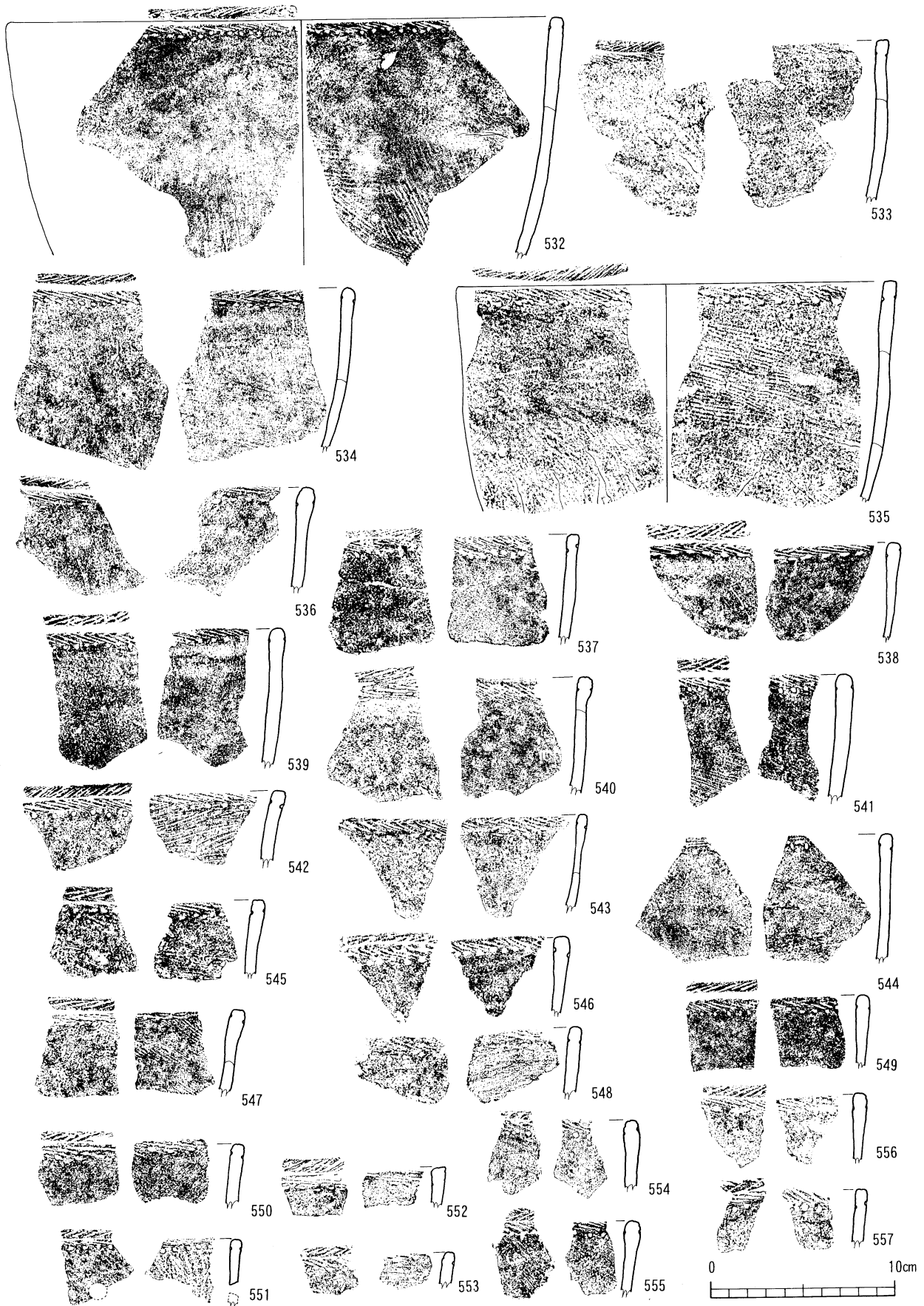
第43图 VII B类 出土土器



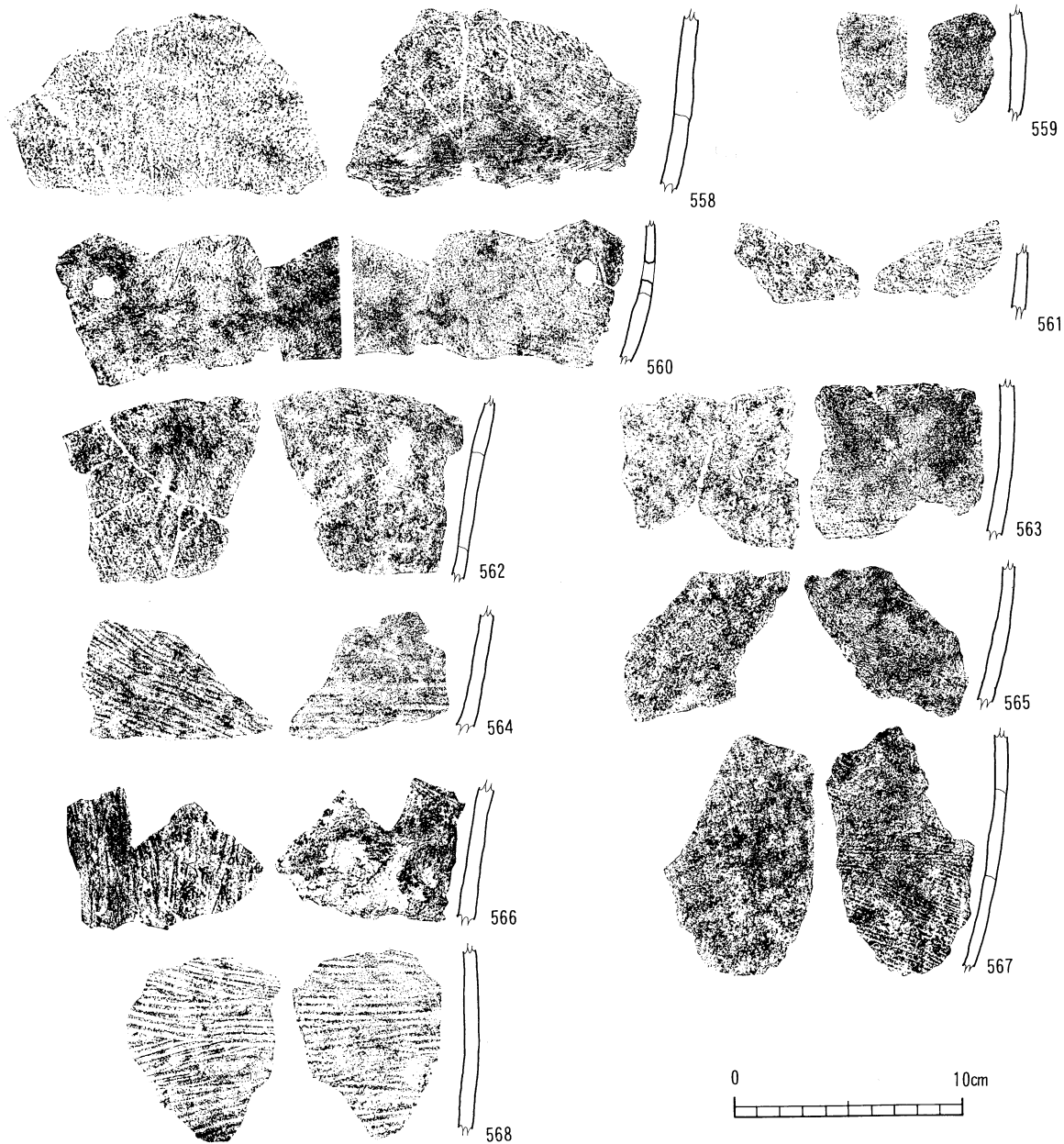
第44图 VII B类 出土土器



第45図 VIIA類 出土土器



第46图 VII A類 出土土器



第47図 VII B類 出土土器

736は扁平な垂円礫を用いたもので縁がないが、凹面状の明瞭な機能部をもつ。

Ⅲa類 (754)

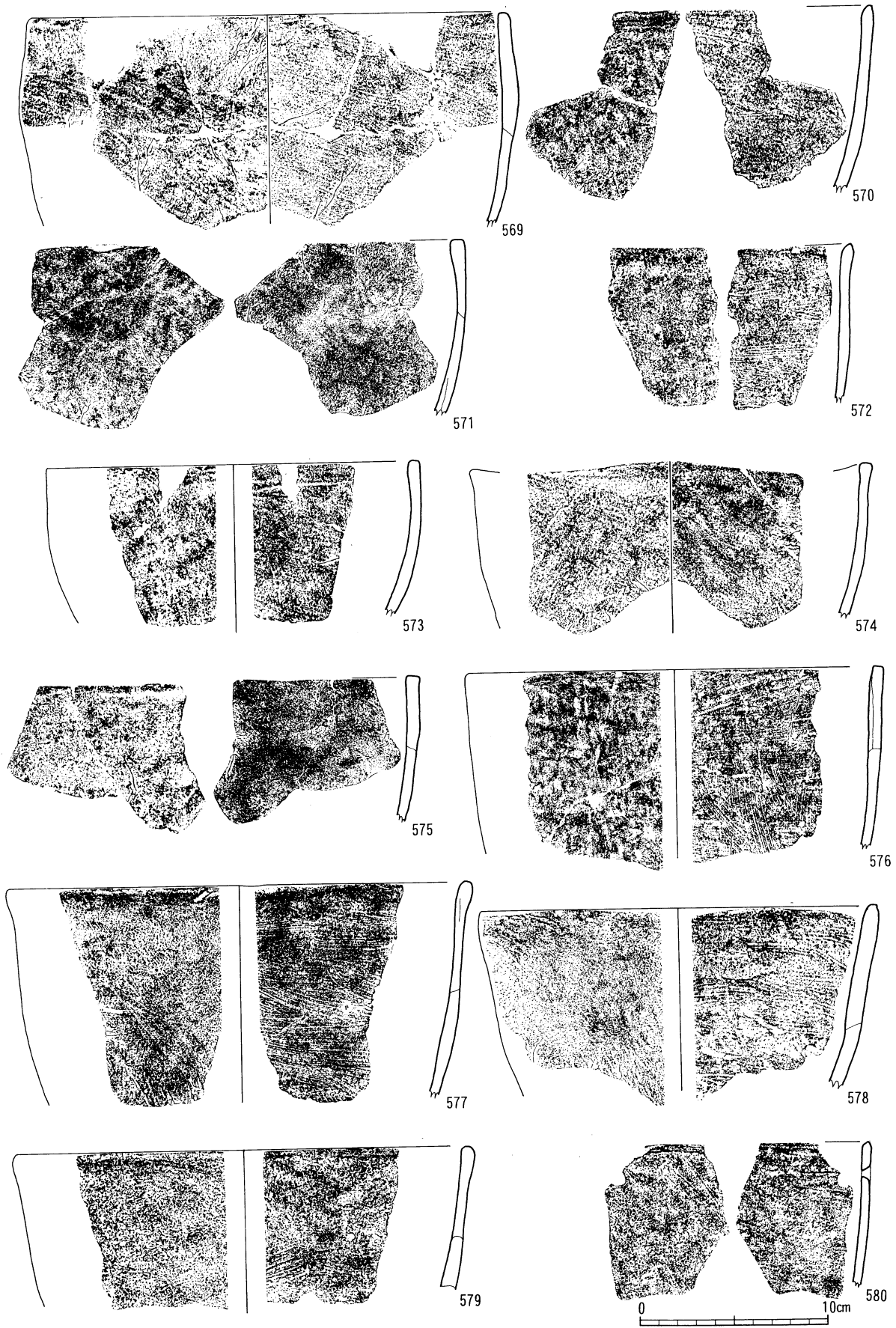
丸みのある扁平な円礫を用いたもので、表面外縁部分に幅の広い縁が残され、下方に掃出し口をもつ。

Ⅲb類 (745・755)

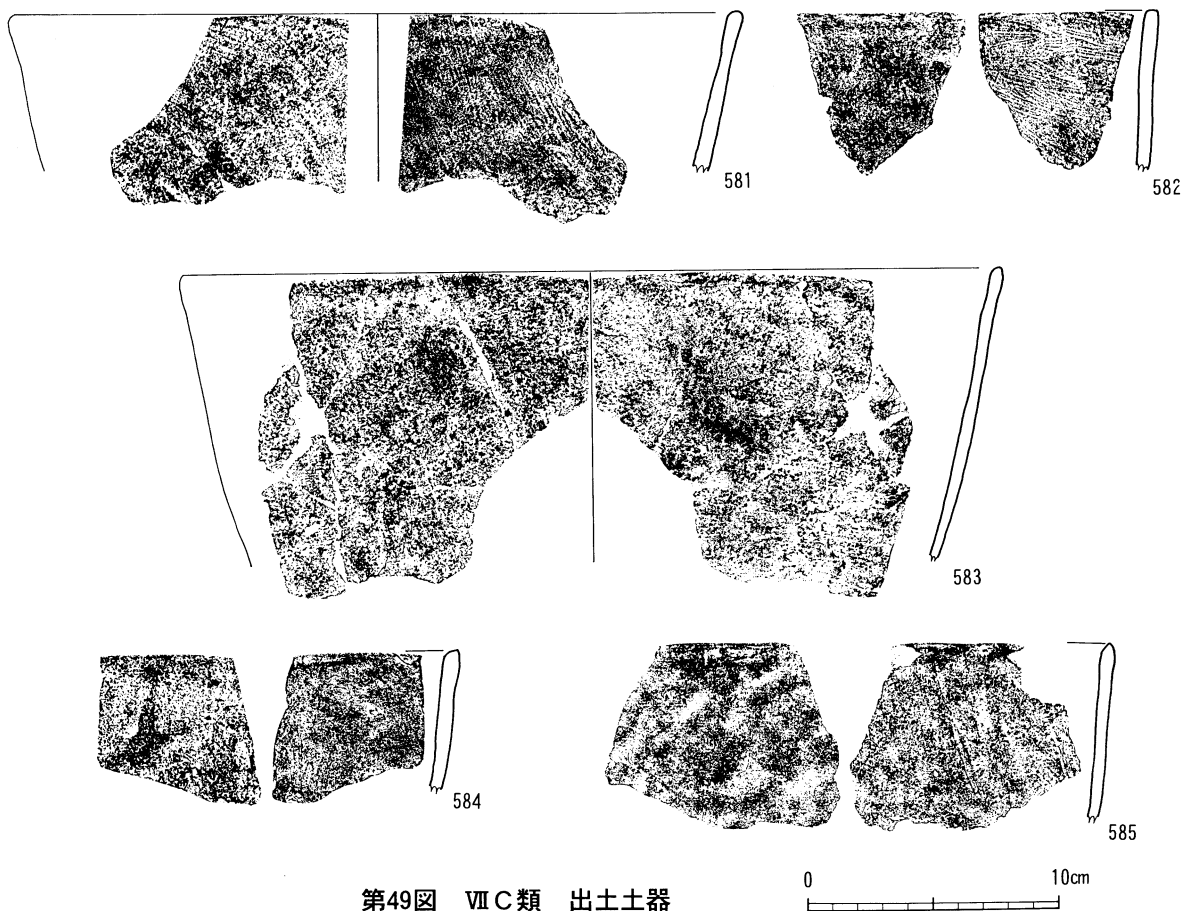
755は右半分を欠くため全形の推定に疑問が残るが、いずれも機能部の外側に平坦な幅の広い縁を残す。745は機能部上場のラインが裾広がりであるのに対し、下場ラインは掃出し口に向かい箒星状にすぼまり、周縁にアバタ状の敲打痕がみられる。

Ⅲc類 (751・759)

いずれも全体外形が不定形であるが、Ⅲb類同様、明瞭に凹む機能部を持ち、機能部外縁に



第48図 VII C類 出土土器



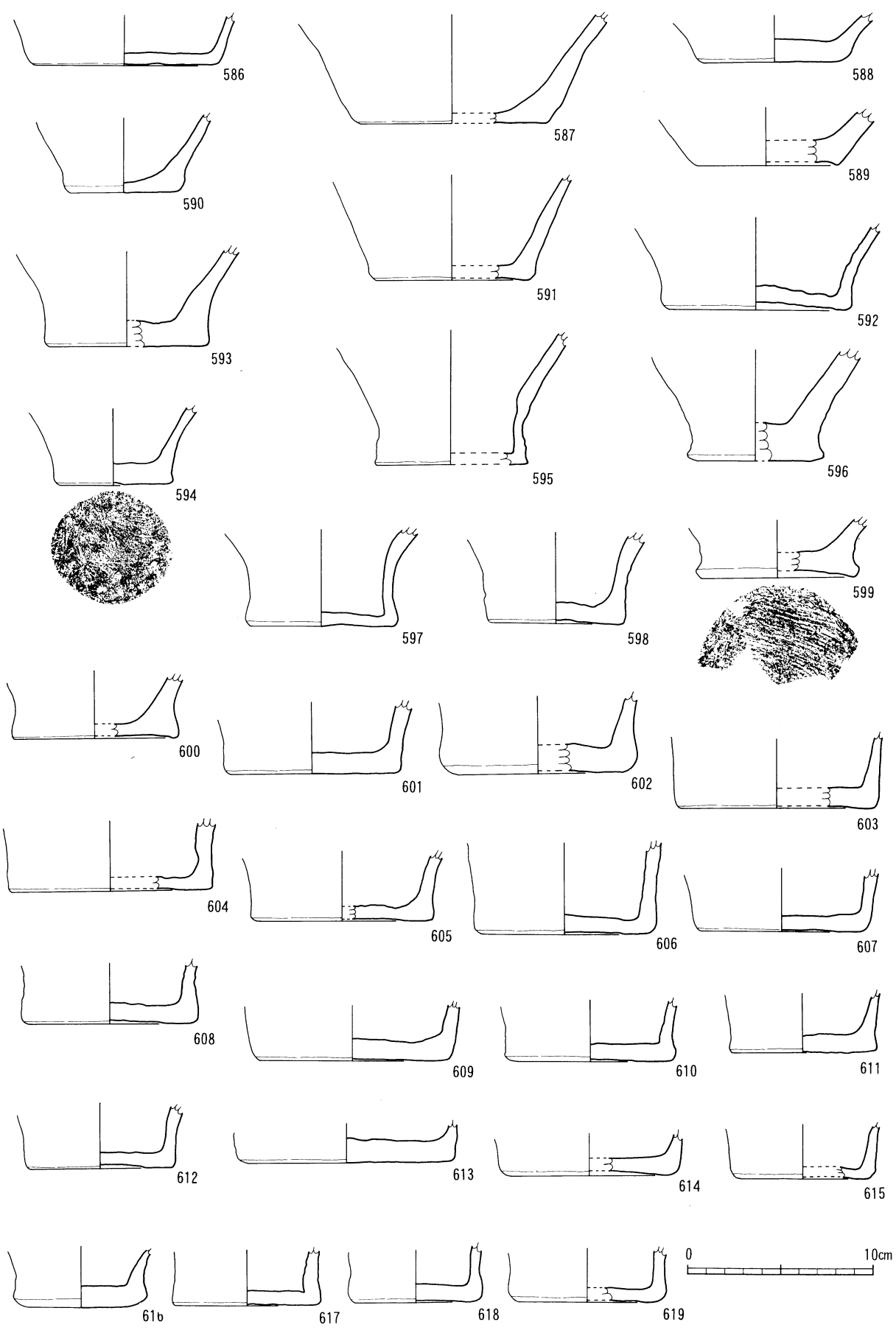
第49図 VII C類 出土土器

幅広の平坦な縁が残される。

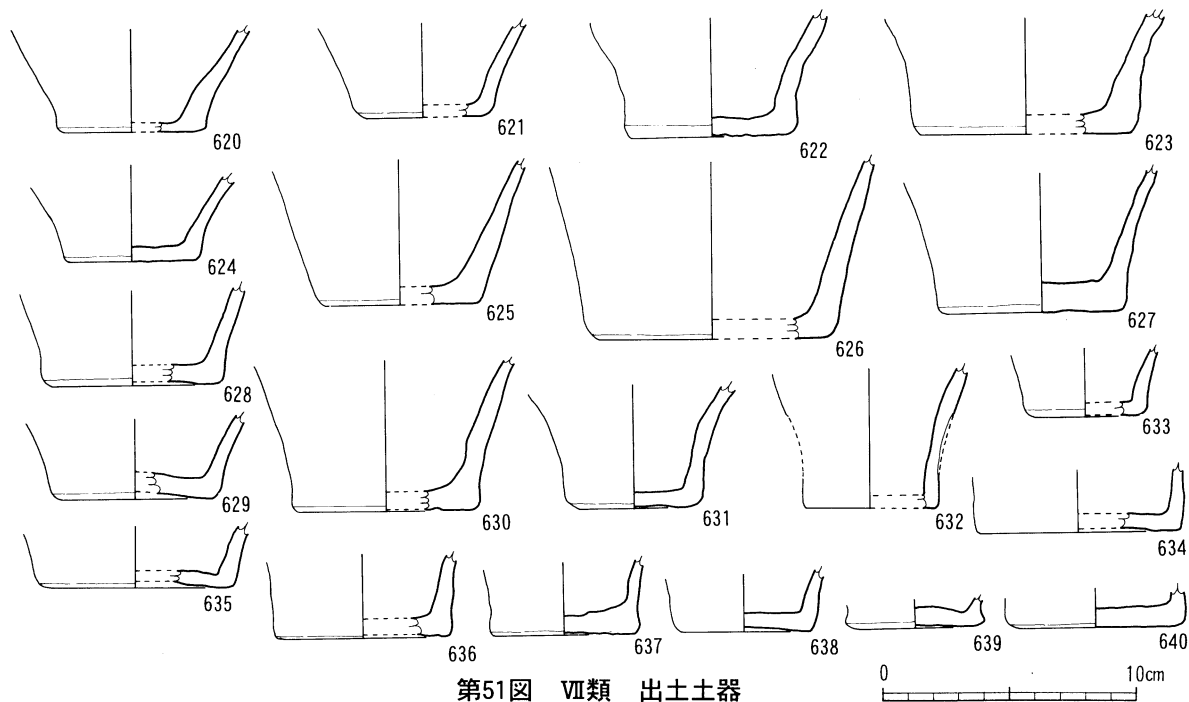
⑥磨石・敲石類 (第68～82図776～958)

図示した以外にも破片資料を含め大量の磨石・敲石類が出土している。形状や形態，使用痕等の特徴により以下に分類した。

- I 平面形が円形・楕円形を呈する円礫で表裏面上に明瞭な磨面があるもの（面上に敲打痕の認められないもの）
 - a 側縁もしくは側面のほぼ全周に敲打痕が認められるもの
 - b 側縁の一部に敲打痕が認められるもの
 - c 側縁に明瞭な敲打痕が認められないもの
- II やや大きめの円礫で，表裏面に磨面のほか敲打痕が認められるもの
 - a 側縁もしくは側面のほぼ全周に敲打痕が認められるもの
 - b 側縁の一部に敲打痕が認められるもの
 - c 側縁に明瞭な敲打痕が認められないもの
- III 手に持てる程度の小型円礫で，表裏面上に凹みや敲打痕がみられるもの
 - a 円形もしくは楕円形の明瞭な窪みを有するもの
 - b 皿状の浅い凹みをもつもの
 - c 部分的に集中する敲打痕のみられるもの



第50图 VII类 出土土器



第51図 VII類 出土石器

IV 扁平・不定形な垂円礫で、直線的、もしくは緩やかな弧状の側縁に面取り状に敲打による「つぶれ」面や擦れ状の面（擦過面）が認められるもの

V 卵形、乳棒状、棒状の礫で、突出する端部に集中する敲打痕が認められるもの

a 端部にわずかに敲打の痕跡を認めるもの

b 端部一円にアバタ状の敲打痕、「つぶれ」が見られるもの

c 端部に小さく面取りしたような敲打による「つぶれ」や擦れ状の面（擦過面）が認められるもの

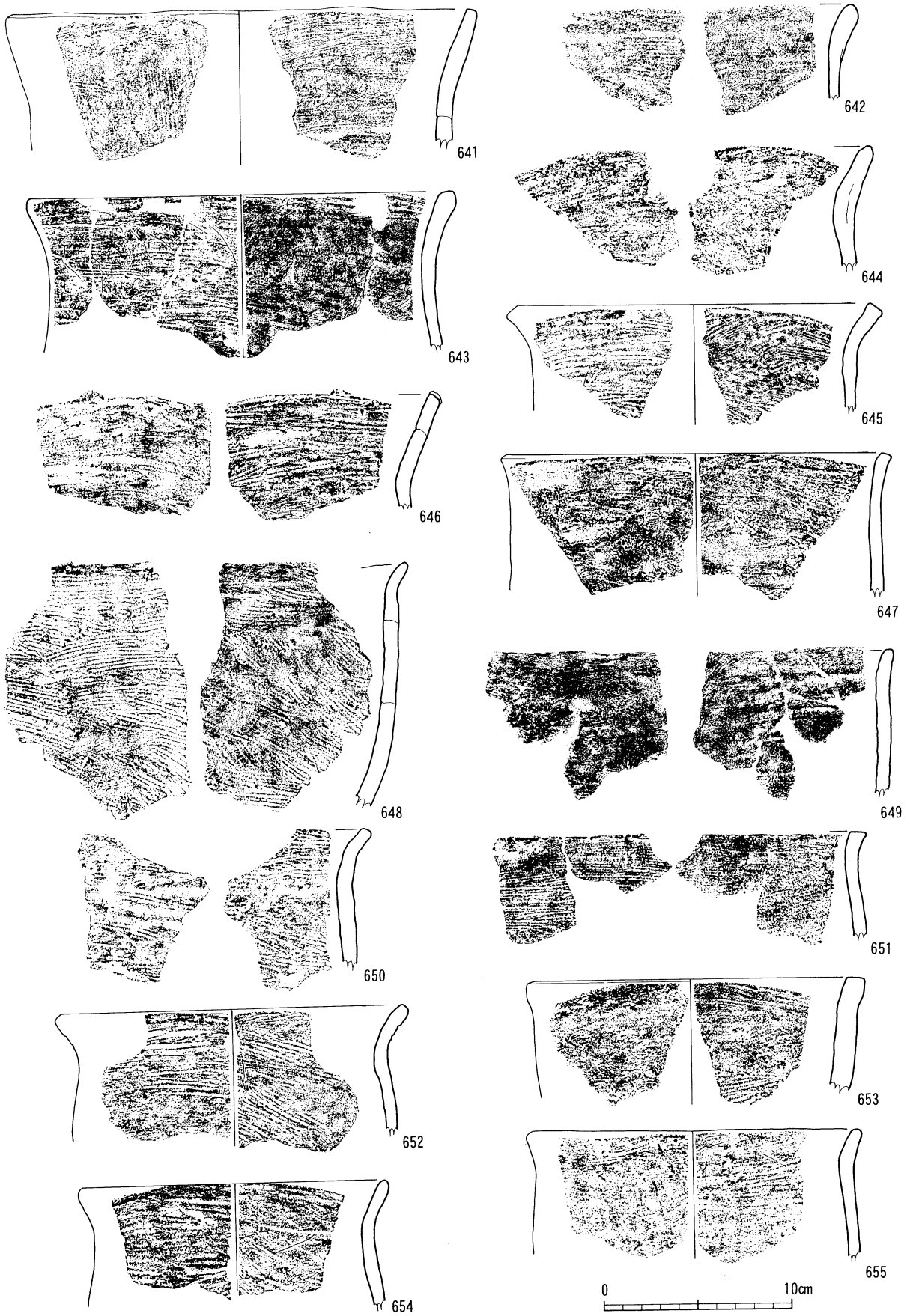
I 類 いずれも比較的明瞭な磨面を有するもので、狭義の磨石に相当する。

I a類 (783・784・786・883) 側縁のほぼ全周にアバタ状の敲打痕がみられ、断面形は楕円形を呈する。表裏面とも磨面があるが、表裏で磨面の発達に強弱がある。

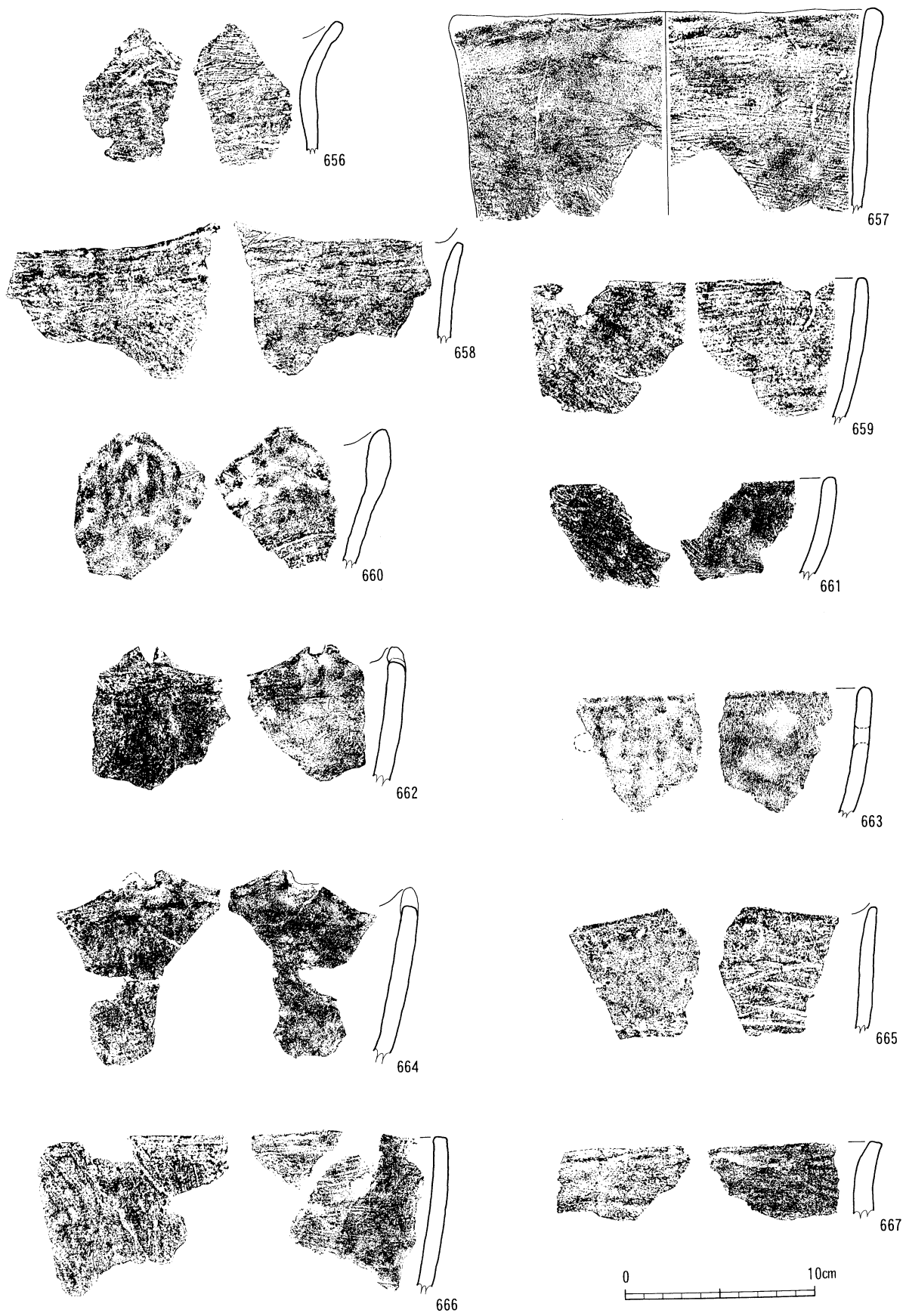
I b類 (782・789・881・893) 側縁の一部にアバタ状の敲打痕が見られるもので、782は鏡面状の極めて発達した磨面をもち、左右の緩やかに外湾する側縁部にIV類と共通する敲打による擦過面が見られる。

I c類 (785) 平面楕円形の扁平な円礫で、表裏面各2箇所（箇所）に磨滅により稜を生ずる発達した磨面がある。

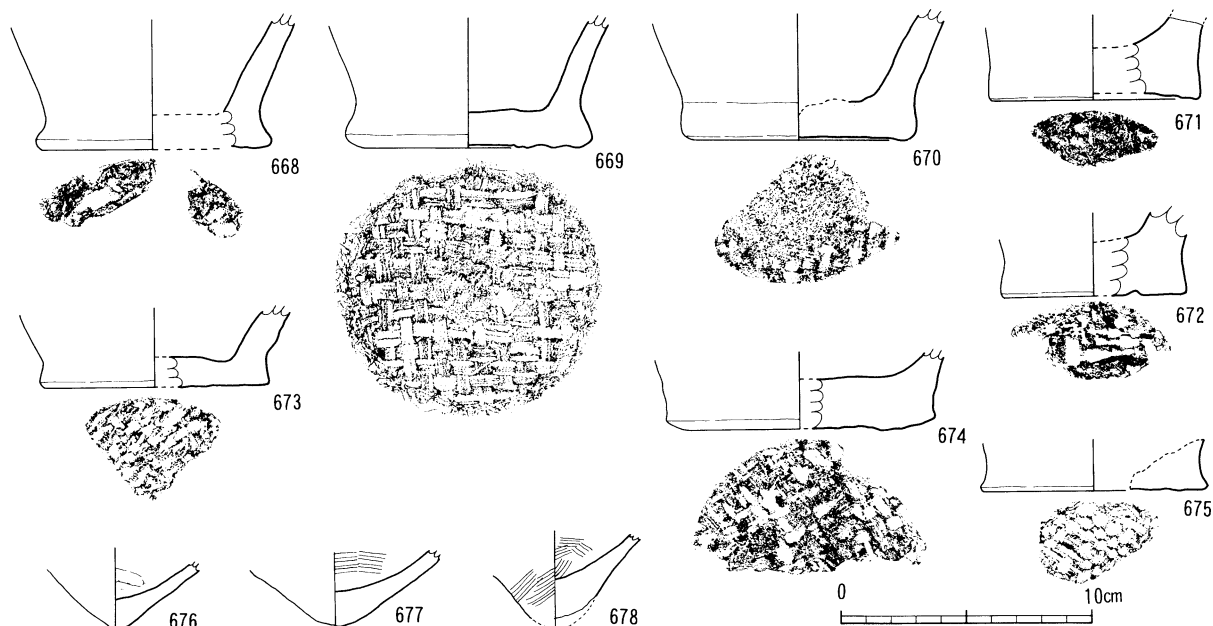
II 類 表裏面上にアバタ状の敲打痕、敲打による「つぶれ」、凹みがみられるもの。876・886は表裏面の外縁部分にアバタ状の敲打痕があるが、それ以外では表裏面のほぼ中央部分を中心に敲打痕がみられる。877は表面中央に敲打痕とともに、凹みをもつ。固体に強弱の度合いに違いがあるが、すべて面上に磨面をみとめる。表裏両面に磨面がある場合、I類と同様、表裏で磨滅の度合いに差異がある場合が多い。敲打痕と磨痕の先後関係は、一般に敲打痕を磨痕が磨消す例が多い。石材は761のみ輝石安山岩、他はすべて砂岩である。780・876・896は礫表面が部分的に赤化しており、被熱しているとみられる。



第52図 VIII類 出土土器



第53图 VIII类 出土土器



第54図 出土土器（底部）

Ⅱa類（776～778・780・781・790・791・814・816・822・875～878・880・896） 断面が楕円形を呈し周縁部分にアバタ状の敲打痕・敲打による「つぶれ」がみられることが多い。776・777は断面が隅丸長方形となる円盤形の形状を持つ。781・790は側面に敲打により斜めに擦れた擦過面がみられる。

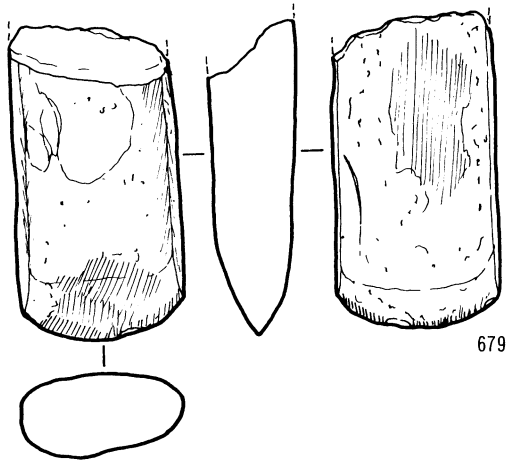
Ⅱb類（787・788・792・815・817・874・886・887・890） 総じて長形の礫では、緩く湾曲する左右の側辺に敲打痕がみられるものが多いが、874・887は端部に特徴的な敲打痕がみられる。

Ⅱc類（812・813・821） いずれも平面形が円形に近い円礫で、表裏両面に磨面をもつ。812・813は表面の、821は表裏両面の中央にアバタ状の敲打痕がみられる。

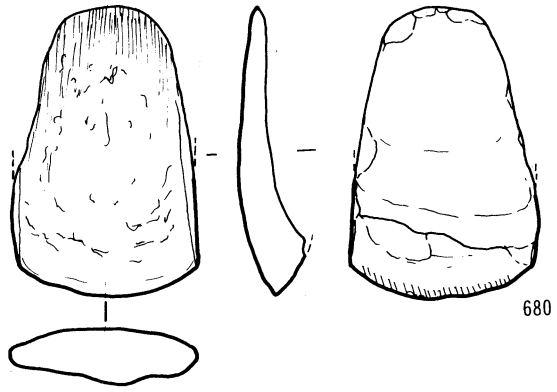
Ⅲ類 凹み、浅い凹み、敲打痕は、同一個体中に共存してみられるため、便宜的に、（a）明瞭な凹み、（b）皿状の浅い凹み、（c）面上のアバタ状の敲打痕の順に優先順位を与え、その有無にしたがってⅢa～Ⅲb類に細分した。

表裏面上に見られる凹み、浅い凹み、敲打痕の箇所数は1～3ヶ所程度のものが多く、小型の円形礫では表裏面中央に各1ヶ所のものが多い。また、楕円形・長楕円形礫では2～3箇所に凹み等が見られる場合が多く、互いに連結し溝状を呈する。使用痕の切り合い関係から、長形の礫では一般に上端・下端よりが先に使用され、後に中央部に使用部が移動する傾向がみれる。ほとんどの資料で、表裏面上には全面もしくは部分的な磨面がみられるが、Ⅰ・Ⅱ類に比べ顕著に発達した磨面がみられるものは少ない。部分的磨面の場合凹み等に近接して見られる例が多い。そのほか、長形の円礫には上下の丸みを帯び突出した端部にⅤ類と同様の敲打痕がみられる例、左右の側縁（側面）部分にアバタ状の敲打痕がみられる例が多い。石材は800～807が花崗岩、808が頁岩、他はすべて砂岩である。

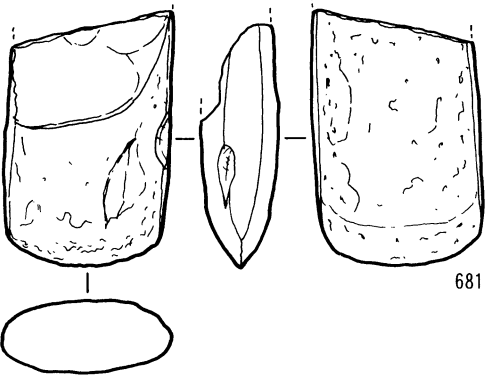
Ⅲa類（800・807・811・819・820・827・847・849・852・853・860・862・864・869・872・873） 複数以上の凹み・敲打痕等が共存する場合が多く、使用の進んだ状態が伺われる。①凹み



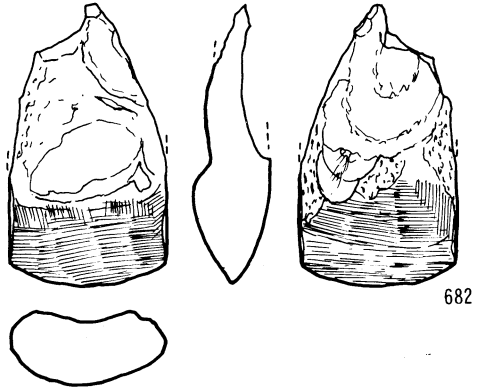
679



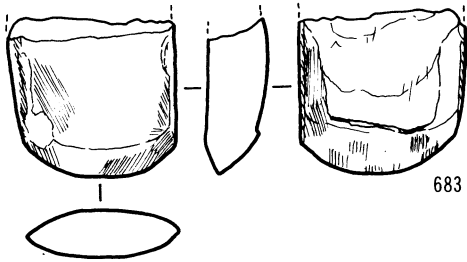
680



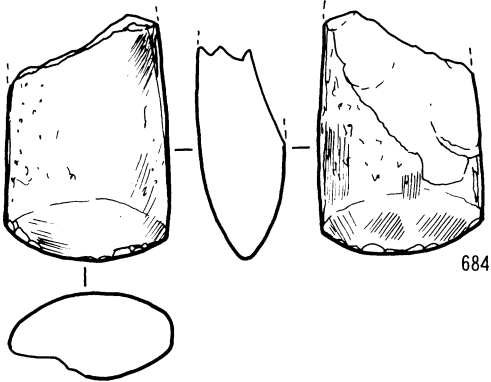
681



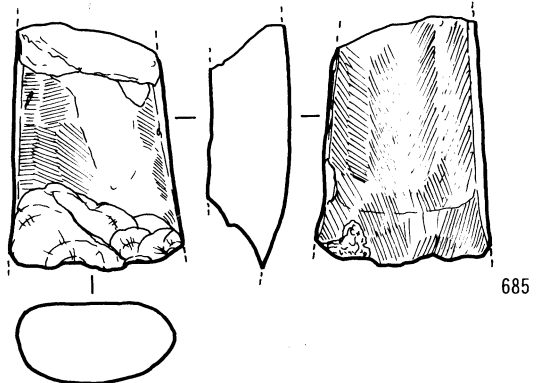
682



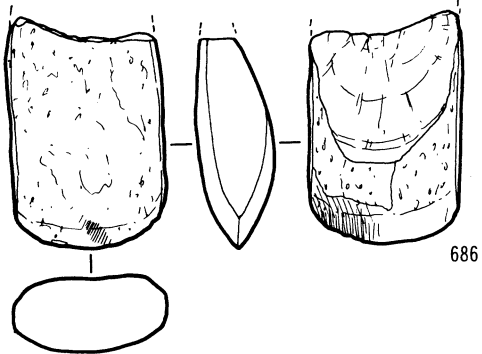
683



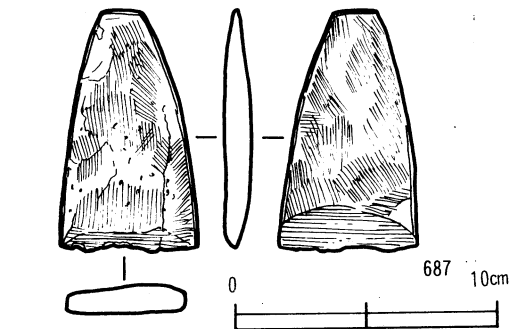
684



685



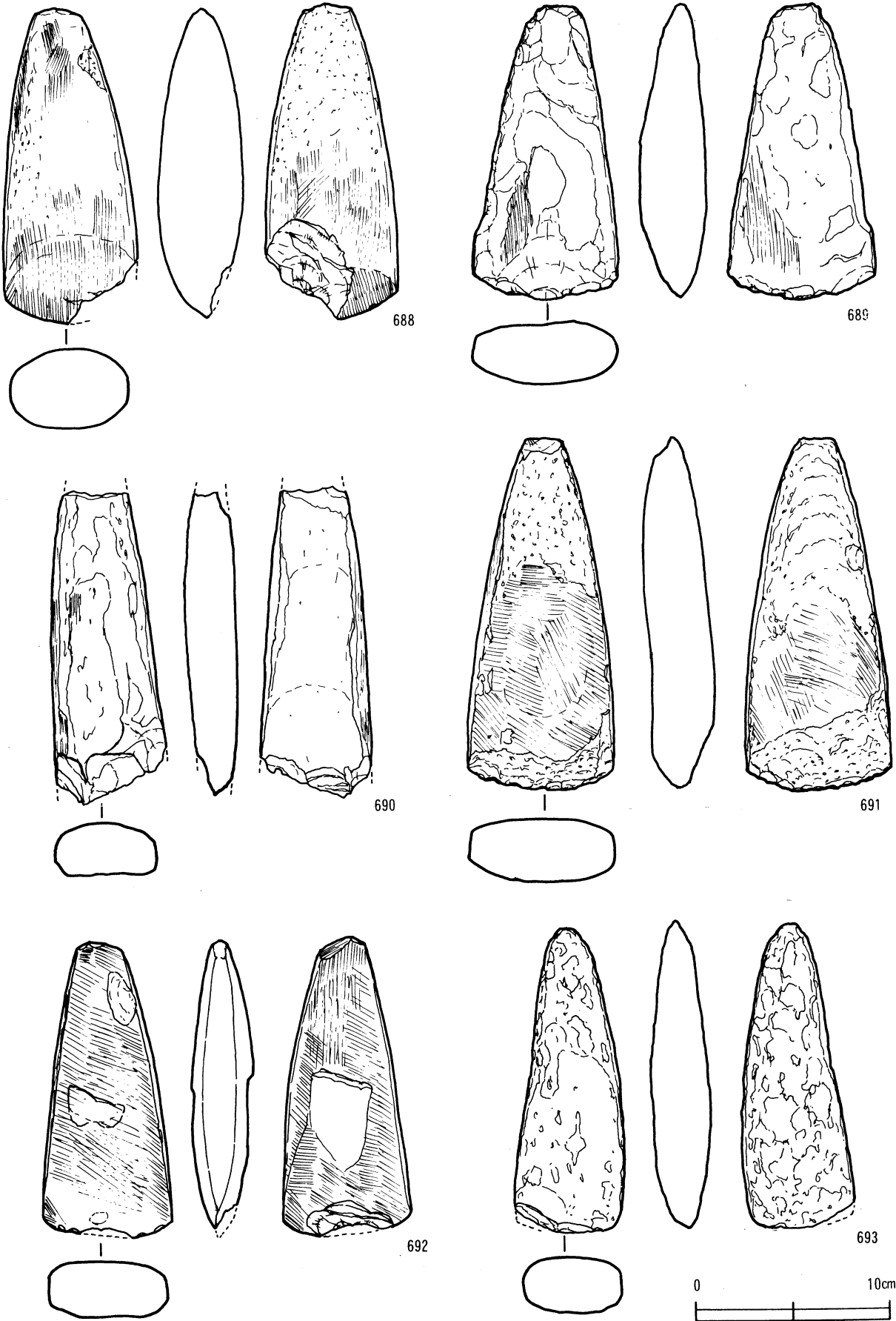
686



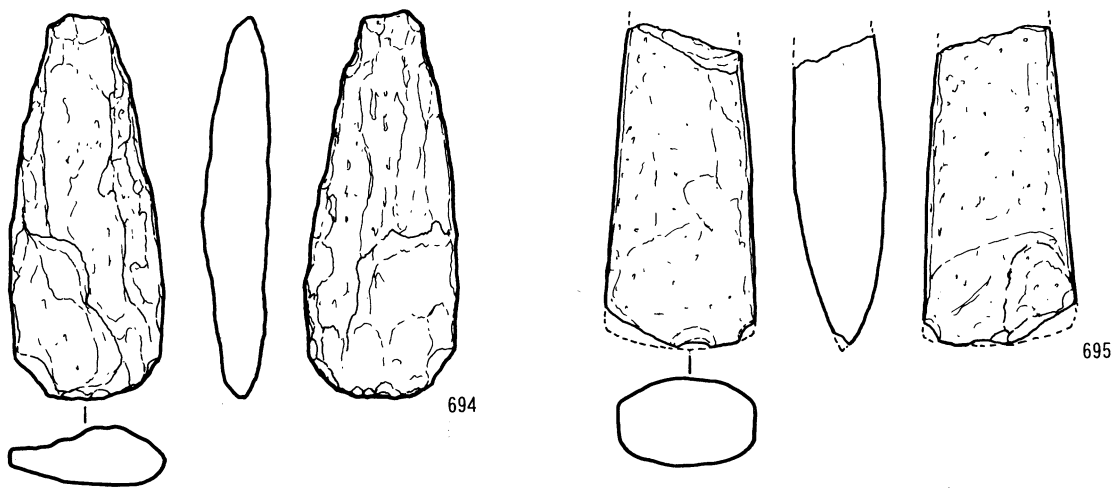
687

10cm

第55图 出土土器

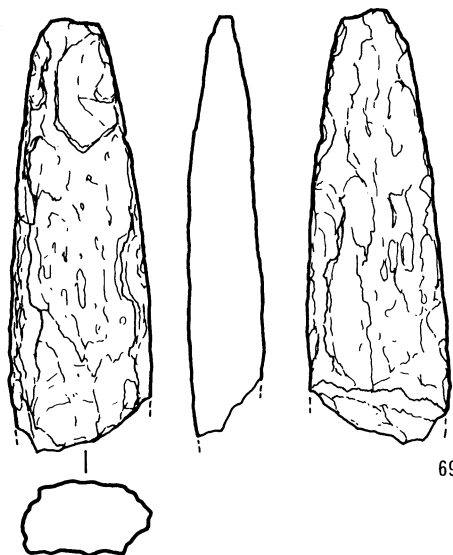


第56图 出土土器

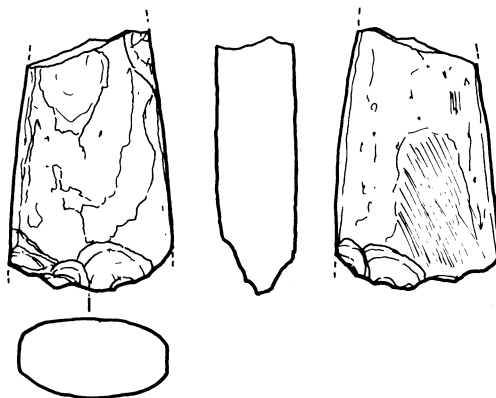


694

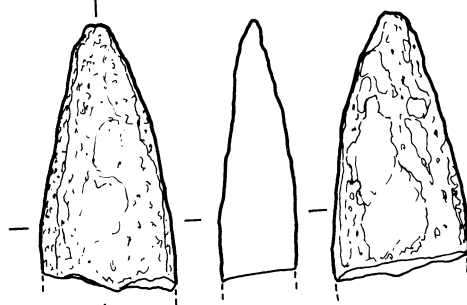
695



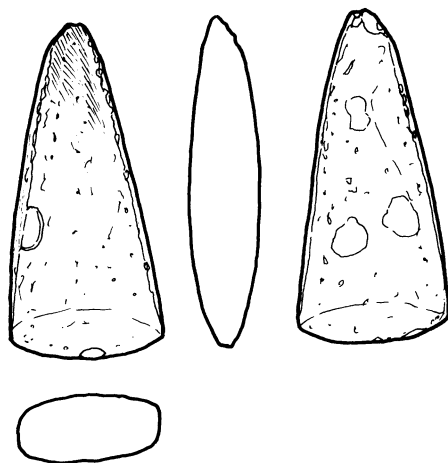
697



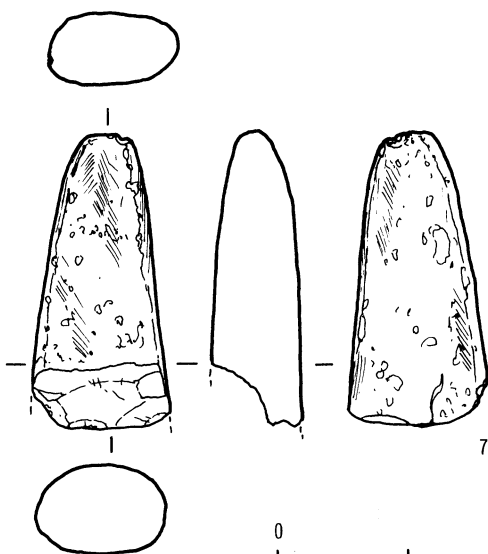
696



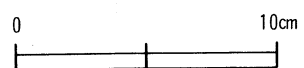
698



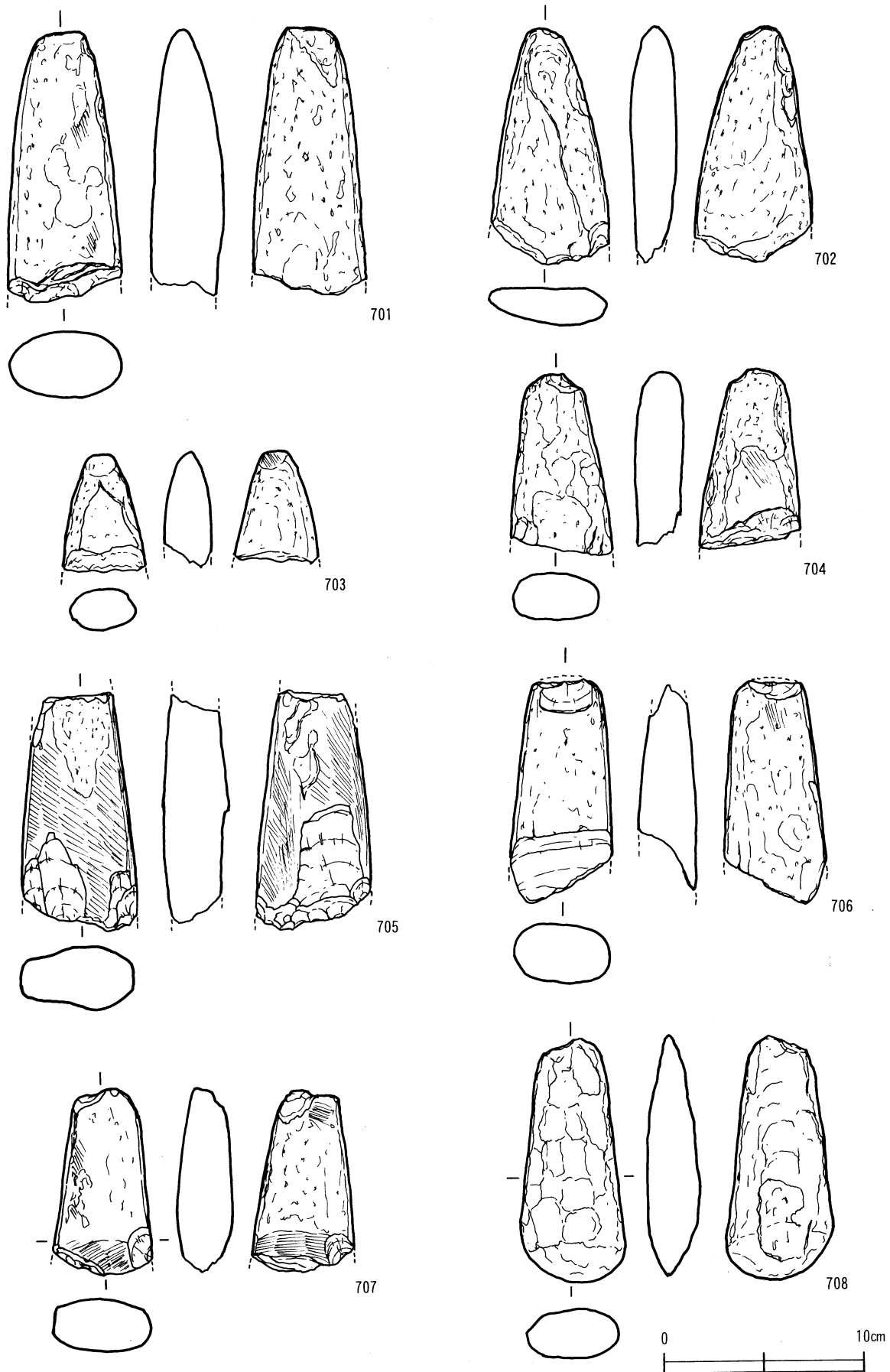
699



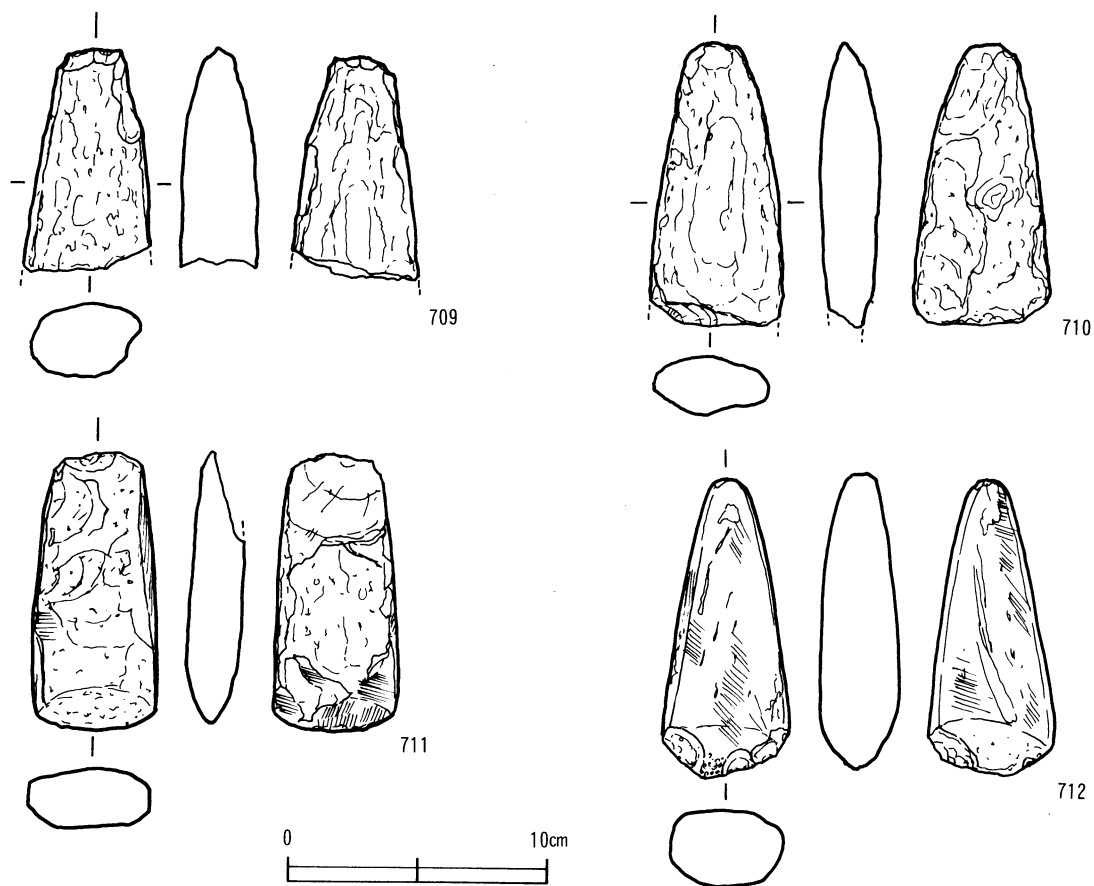
700



第57图 出土土器



第58图 出土土器

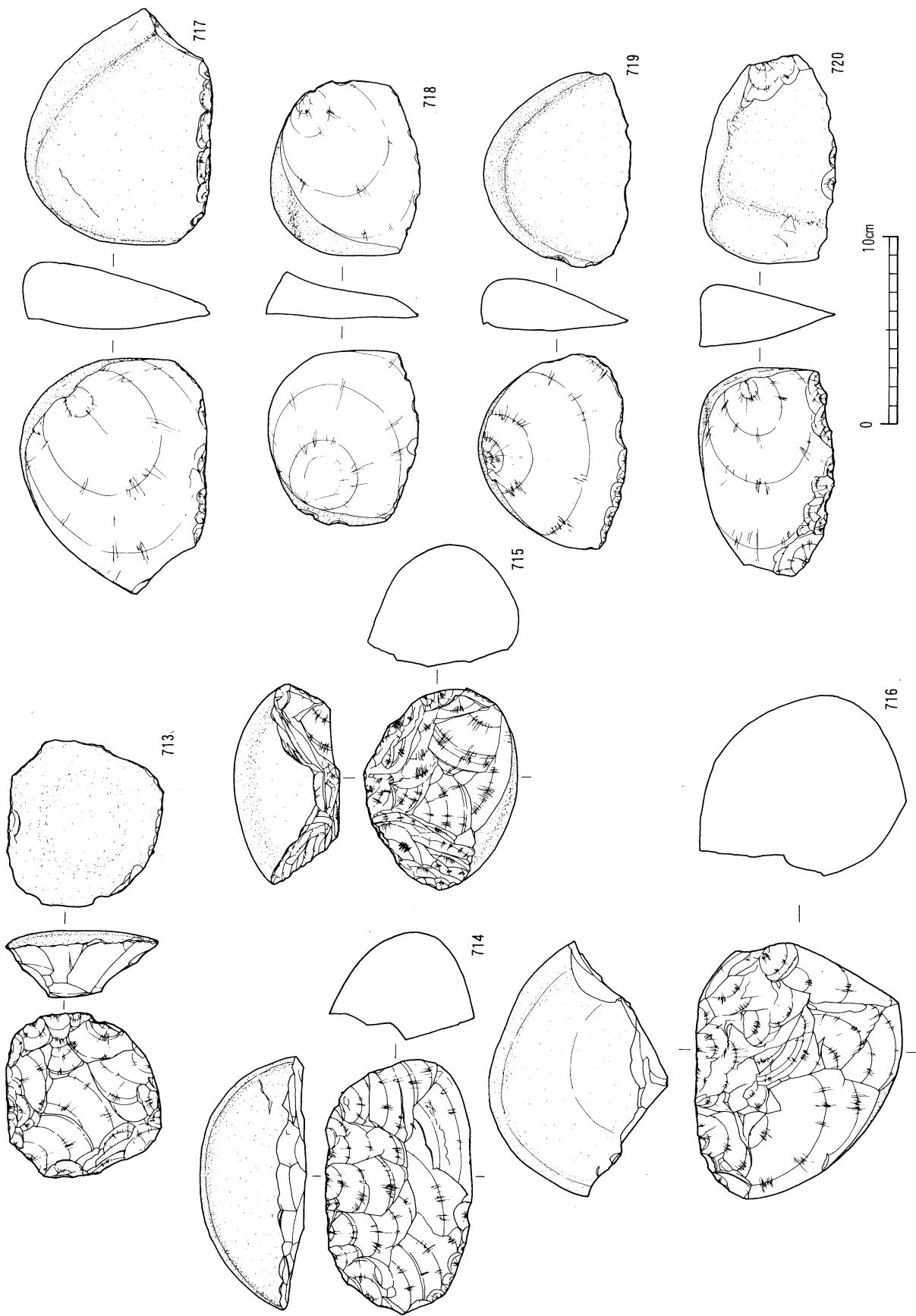


第59図 出土土器

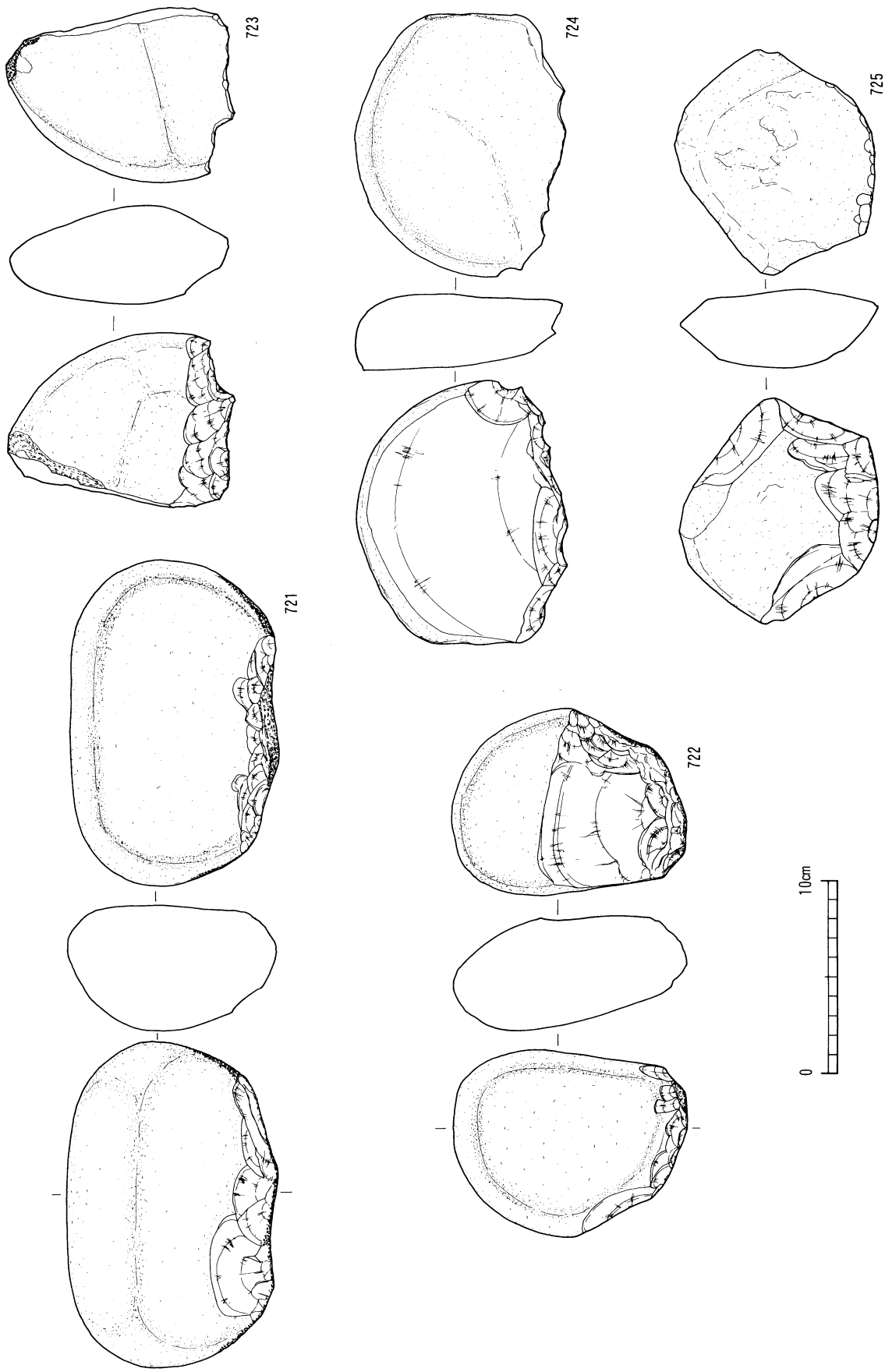
には略円形の椀状の凹み，②前後に尾を引いたように窄まる凹み，③V字状に深く抉られた②に類似した上面形を有する凹みがある。①，②については凹みの内部及び周辺にアバタ状の敲打痕或いは敲打による「つぶれ」が見られ，使用の進行により，生じたものとも考えられるが，③については引っかいたような線状の傷を伴う場合が見られ，用途・用法の差異も考えられる。

Ⅲb類 (801・806・809・823・826・828・831・836・840・841・843・844・846・848・856・859・861・863・865・866・867・870) 敲打による「つぶれ」が進行し，皿状の浅い凹みを生じたものとみられ，凹みの平面形状は略円形のものが多し。Ⅲa類に比べ表裏の各1箇所を使用するものが多いが，2連の浅いくぼみが連続するもの，アバタ状敲打痕と併せ3連の細長い使用部をもつものなどⅢa類との共通性もみられる。

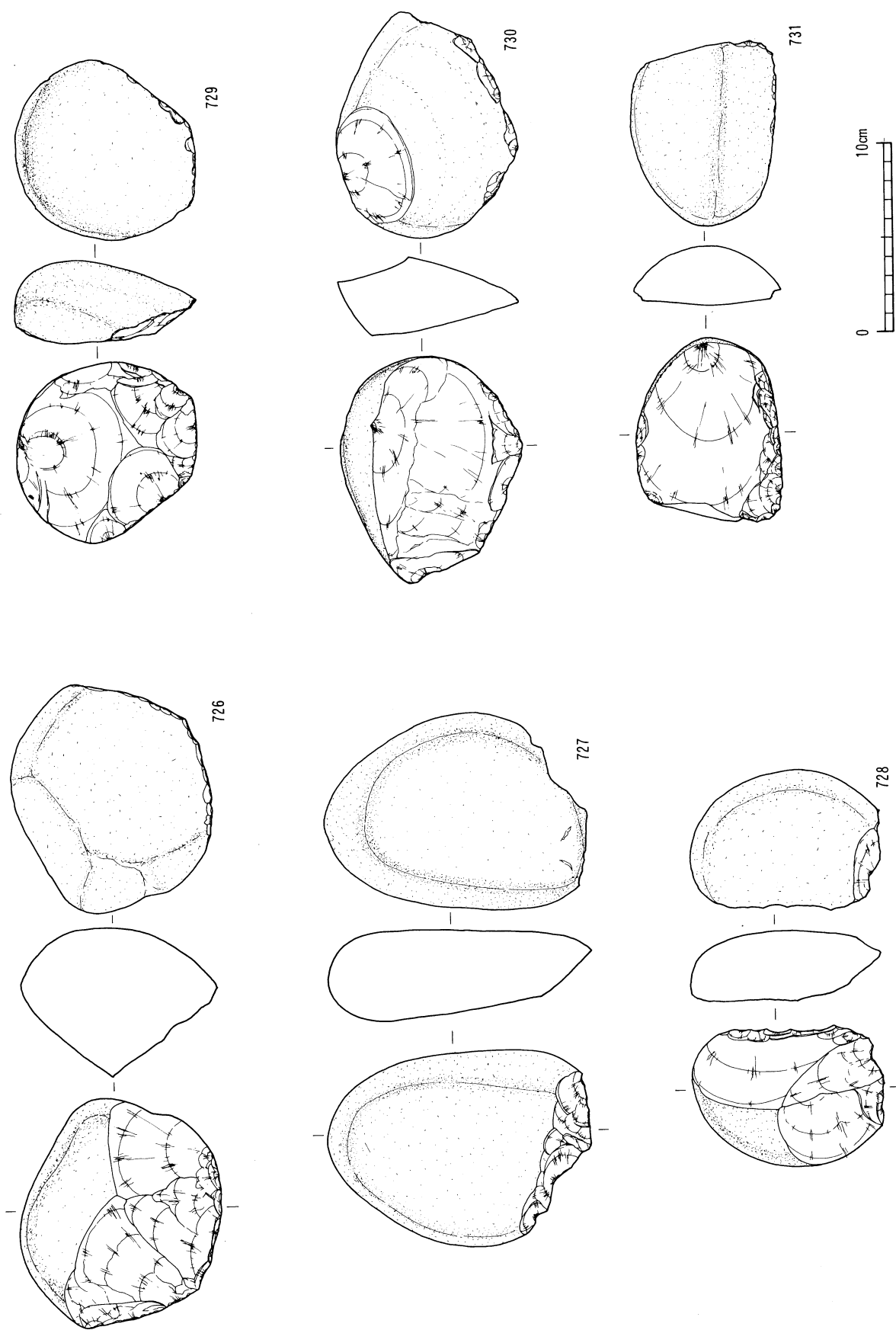
Ⅲc類 (802～805・810・818・824・825・829・830・832～835・837～839・842・845・850・851・854・855・857・858・868・871・892・897・913・915・942・946・950) 凹みの発達しない，表裏面上に集中するアバタ状の敲打痕，及び磨痕のみがみられる資料である。一部には極わずかに凹む様にみえるものもあるが，1mm以下の計測に誤差が生ずる程度のものはここに含めている。Ⅲb類に比べ使用された箇所数が多い資料が目につく。また複数の敲打範囲が連続し，帯状に連なるものもある。



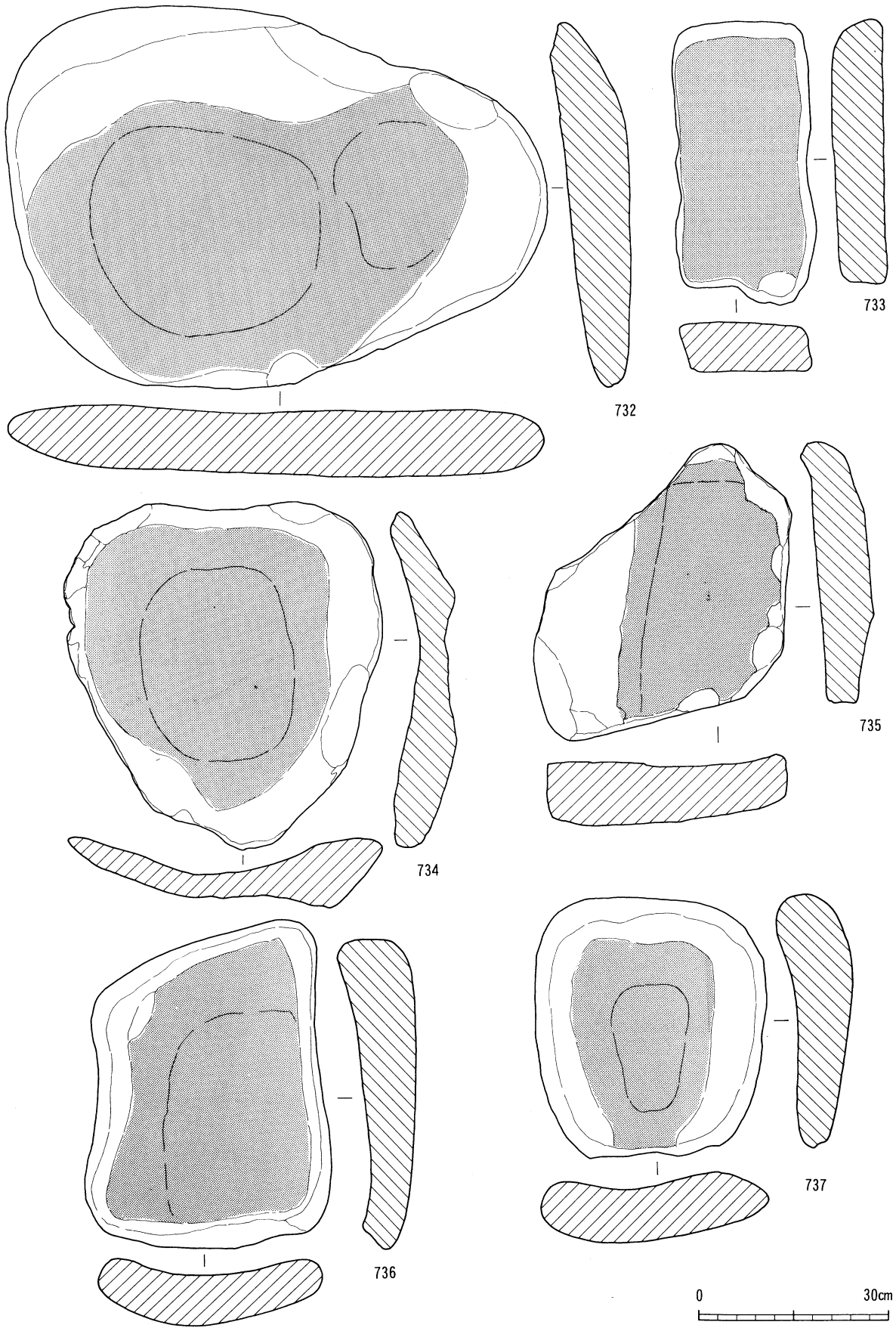
第60图 出土土器



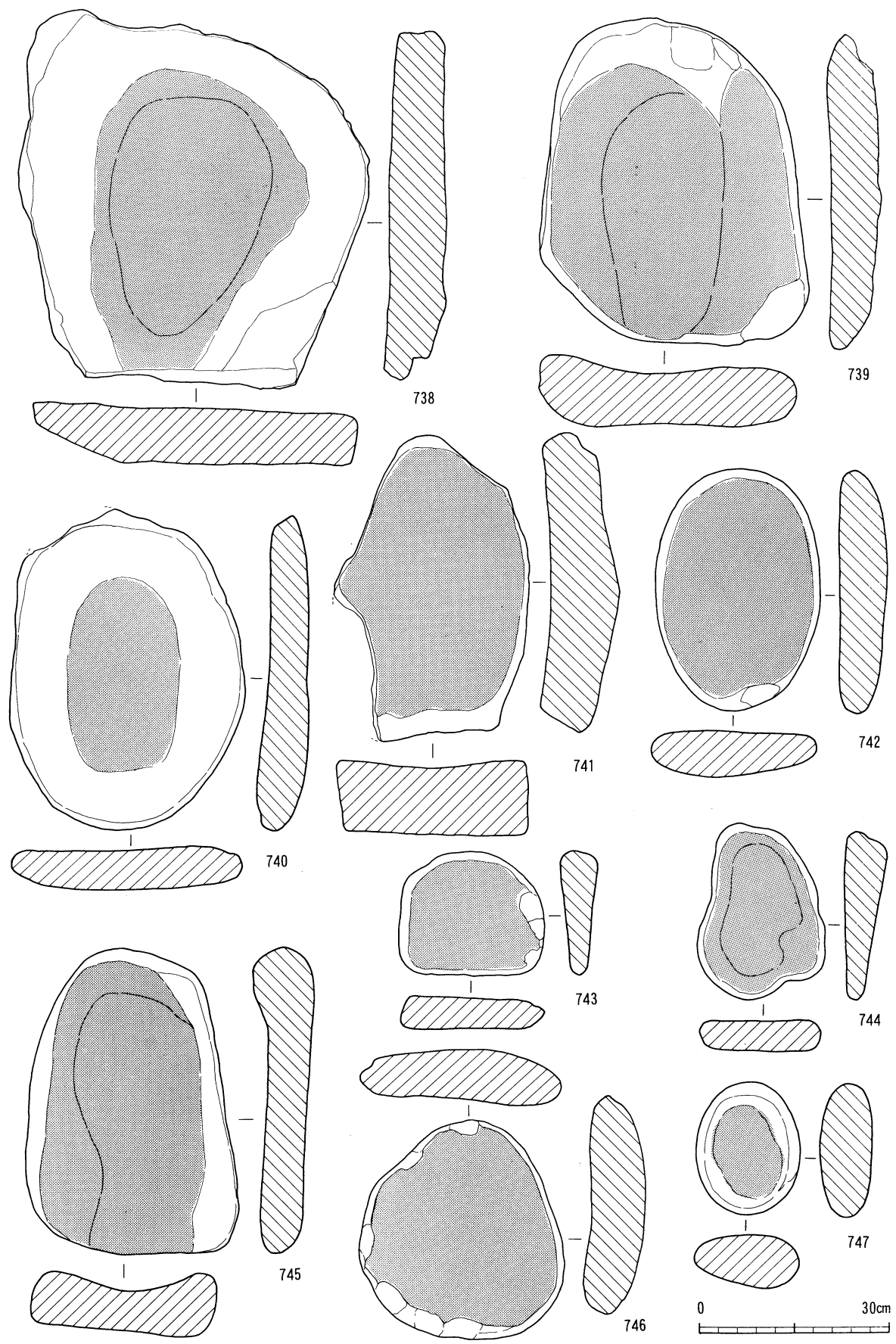
第61图 出土土器



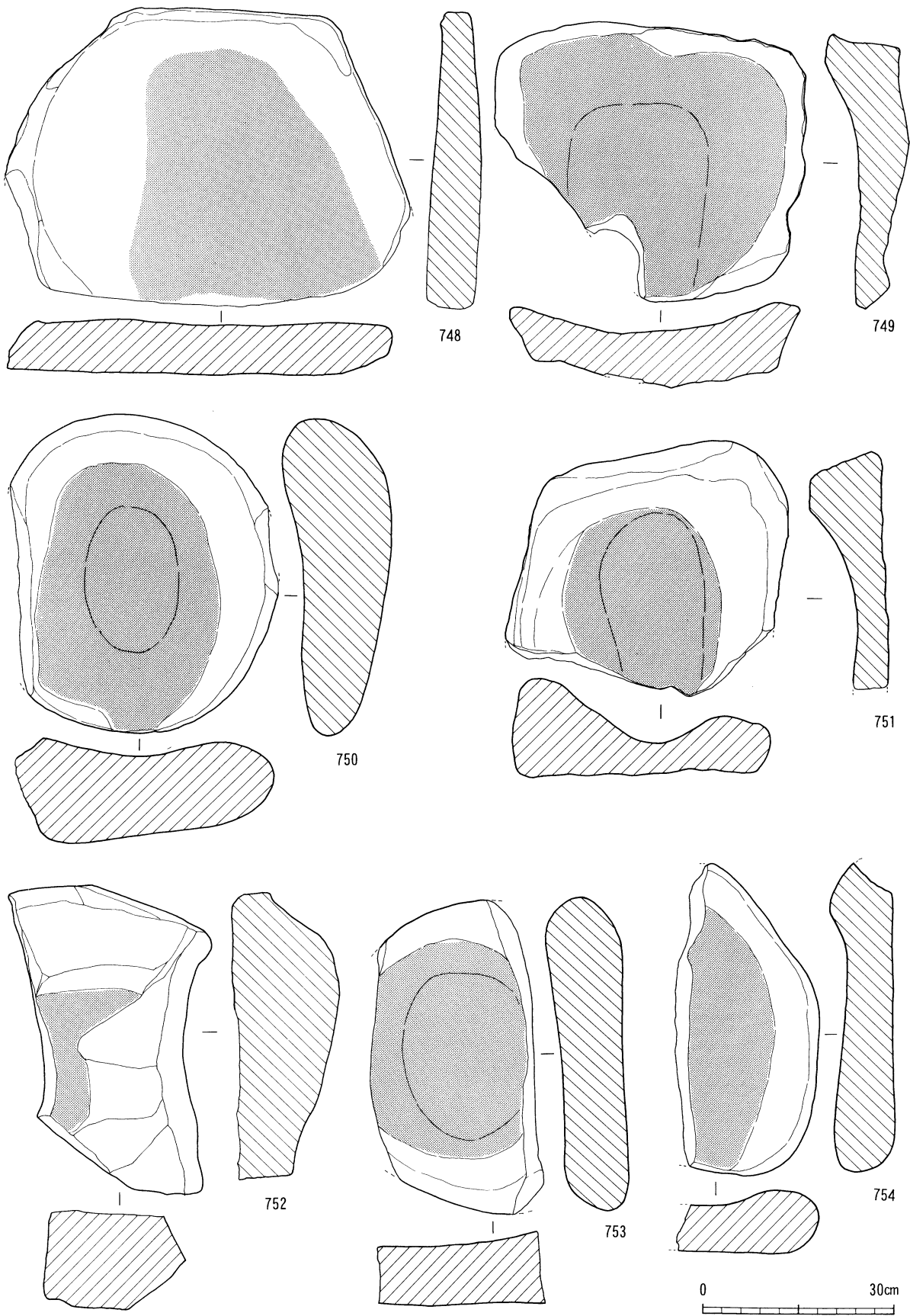
第62图 出土石器



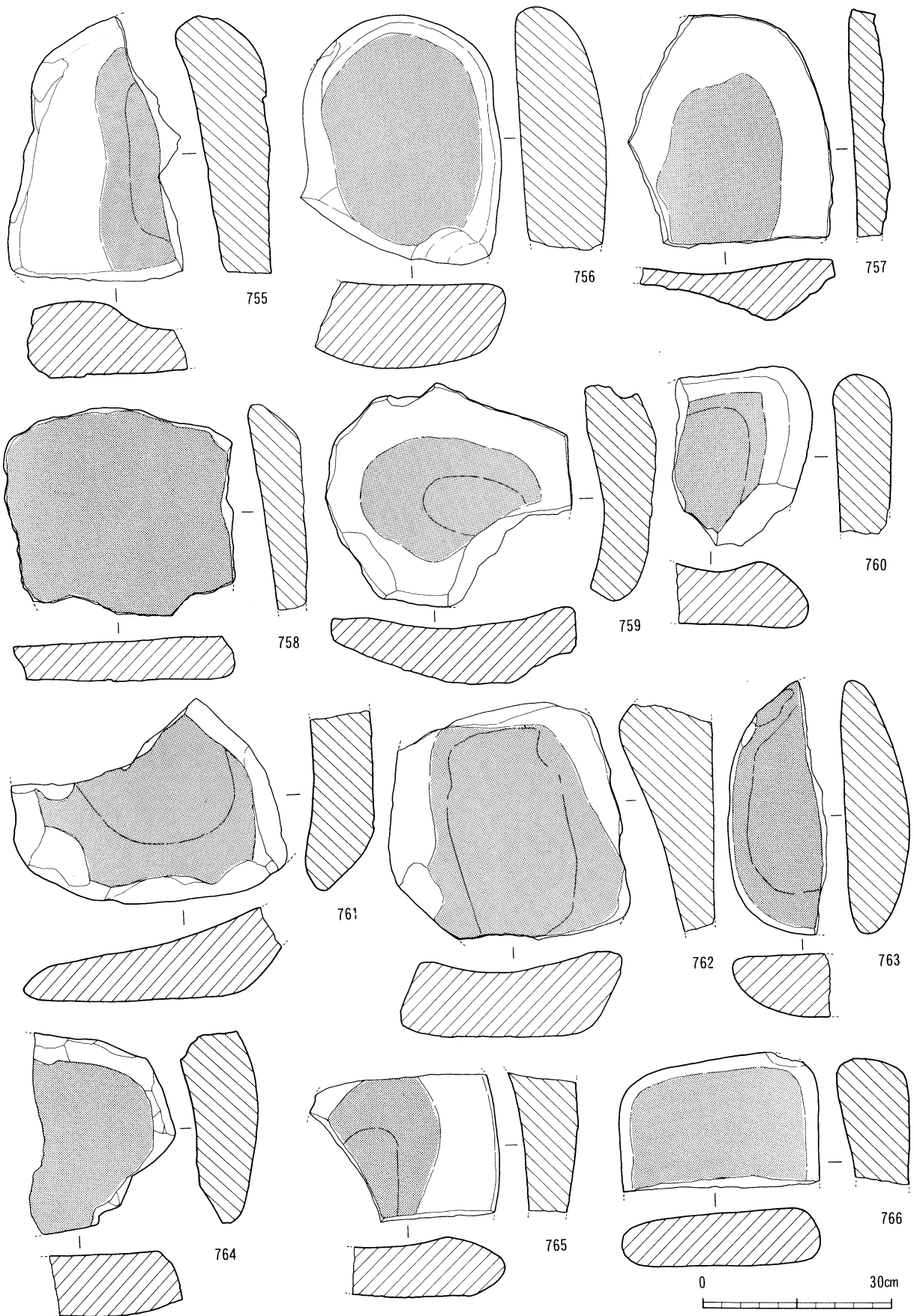
第63図 出土土器



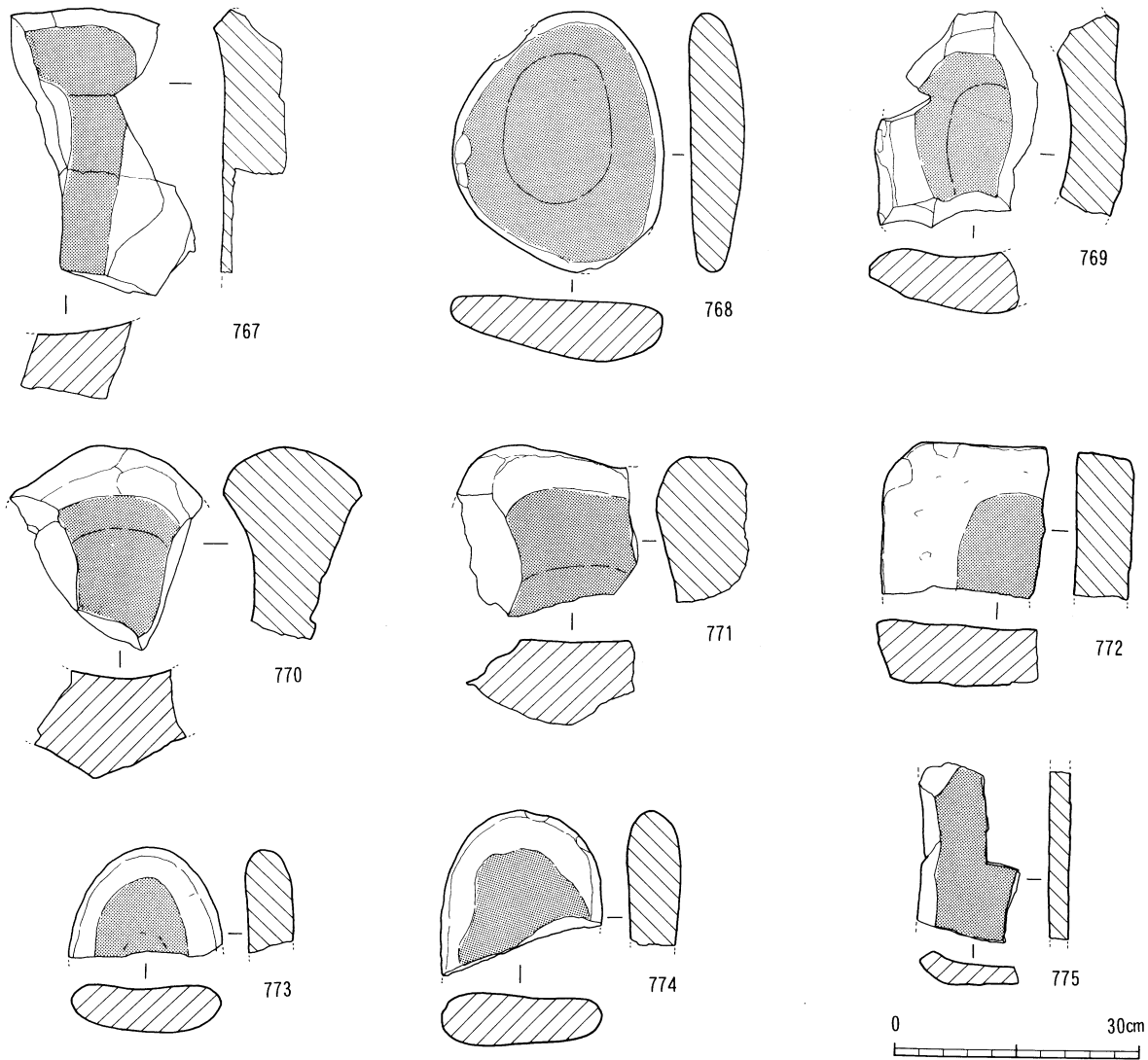
第64図 出土土器



第65图 出土土器

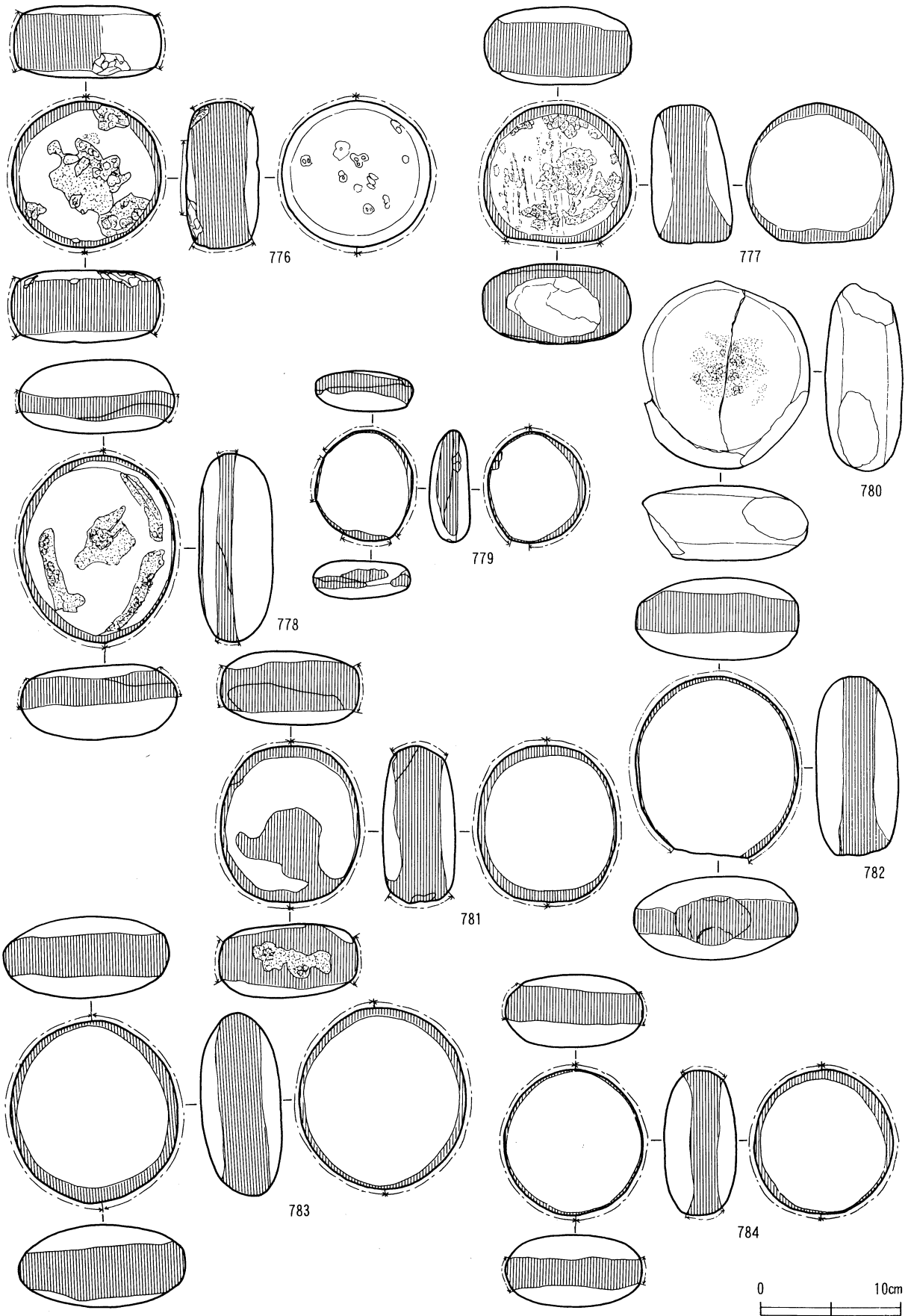


第66图 出土土器

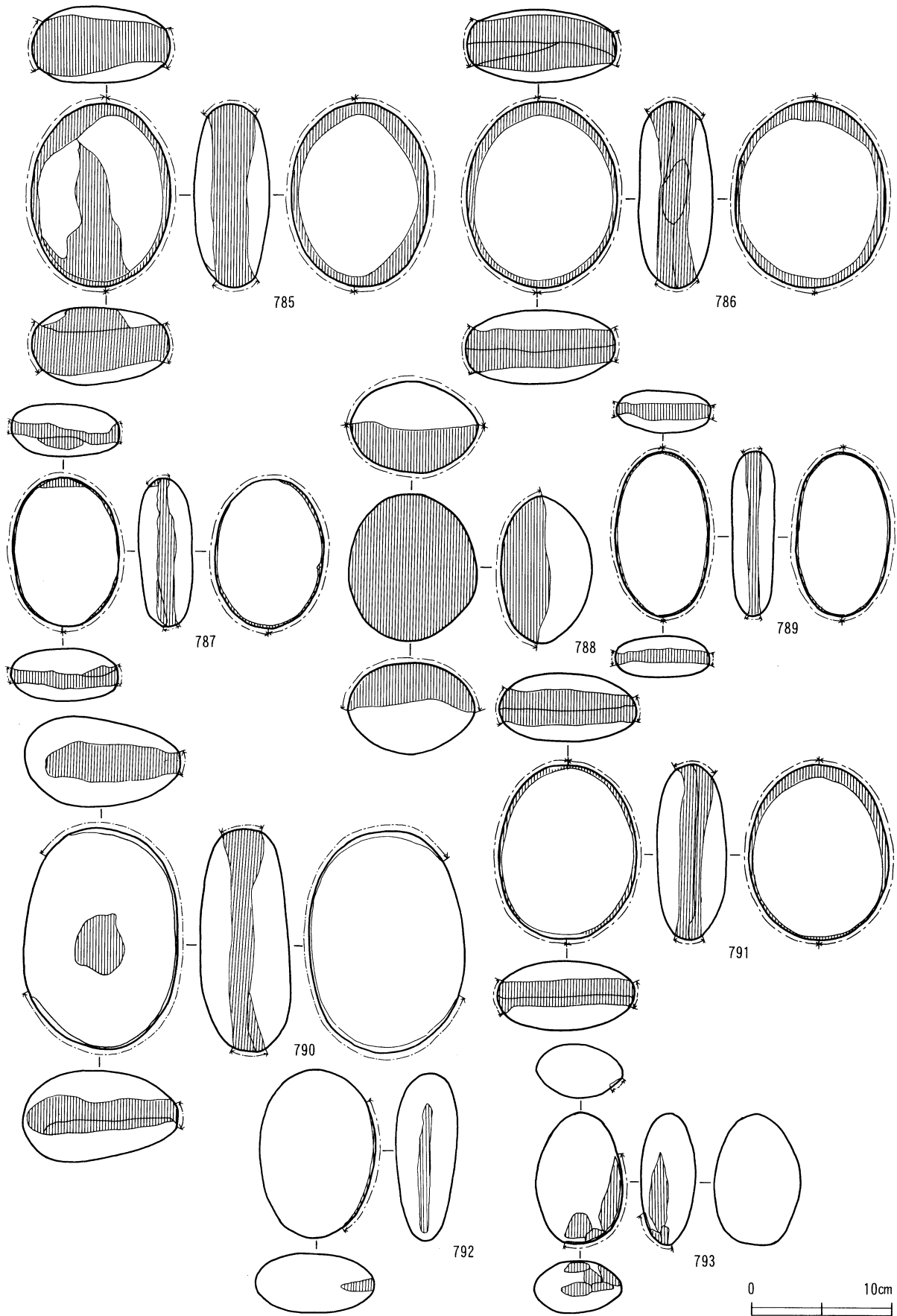


第67図 出土土器

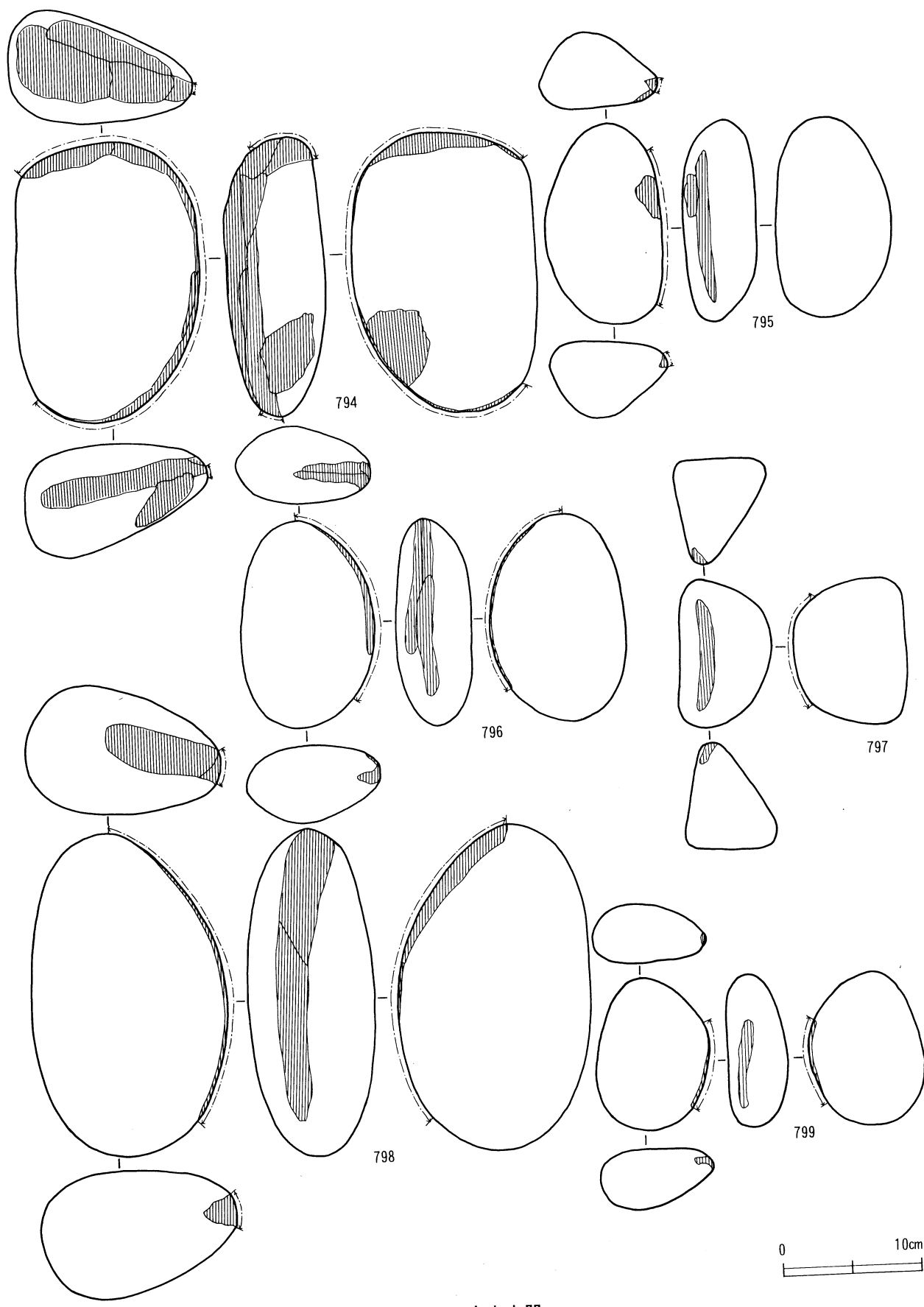
IV類(779・795~797・799・882・885・888・895・901・904・909・910・930・953~955) 200g~500g程度の比較的軽量のもの、1キロ前後のやや重量のあるものがみられるが、提示した資料数が少ないこと、使用痕の特徴に共通性がみられることからあえて細分を行わなかった。平面形が不定形な扁平な円礫の、直線的もしくは緩やかな弧状の側縁部、厚みに片よりある円礫の薄い方の側縁部分を使用するもので、対象物への接地面幅が広がる点に特徴がある。表裏面に合わせ正位置に置いた場合、水平面に対し45°程度の角度を持つ擦れたように磨滅した横長の面(擦過面)を持つ。しばしば表裏の2方向もしくは同一面での複数の擦過面が切り合う場合がみられる。表面はいずれも比較的平滑であり、一部に弱い磨面がみられるが、磨滅によって稜を生ずるような顕著な磨面はみられない。I類~III類に分類した資料中にも同様の擦過面とみなされる資料が存するが、量比的には相関性は低い。石材は



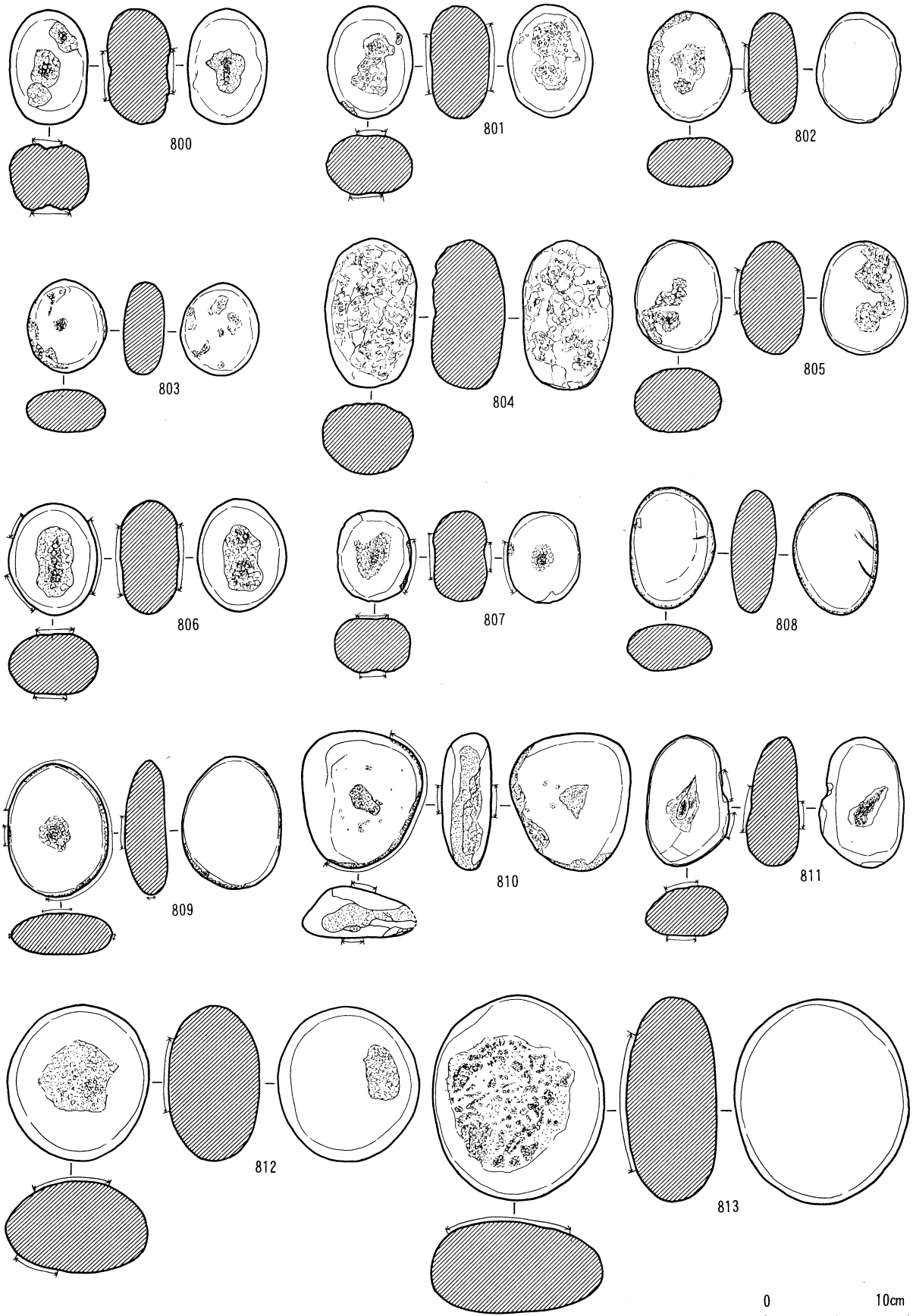
第68図 出土土器



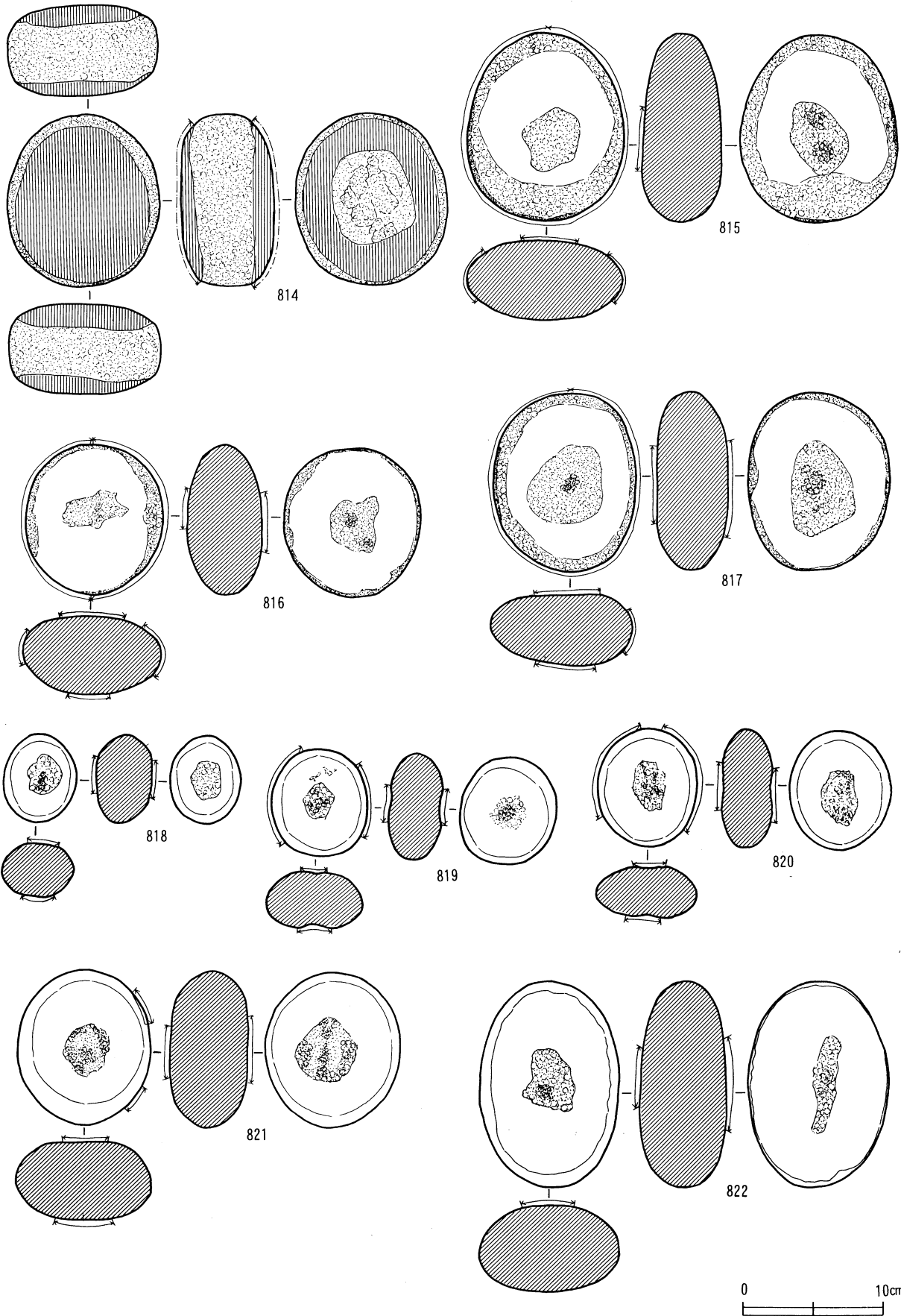
第69图 出土土器



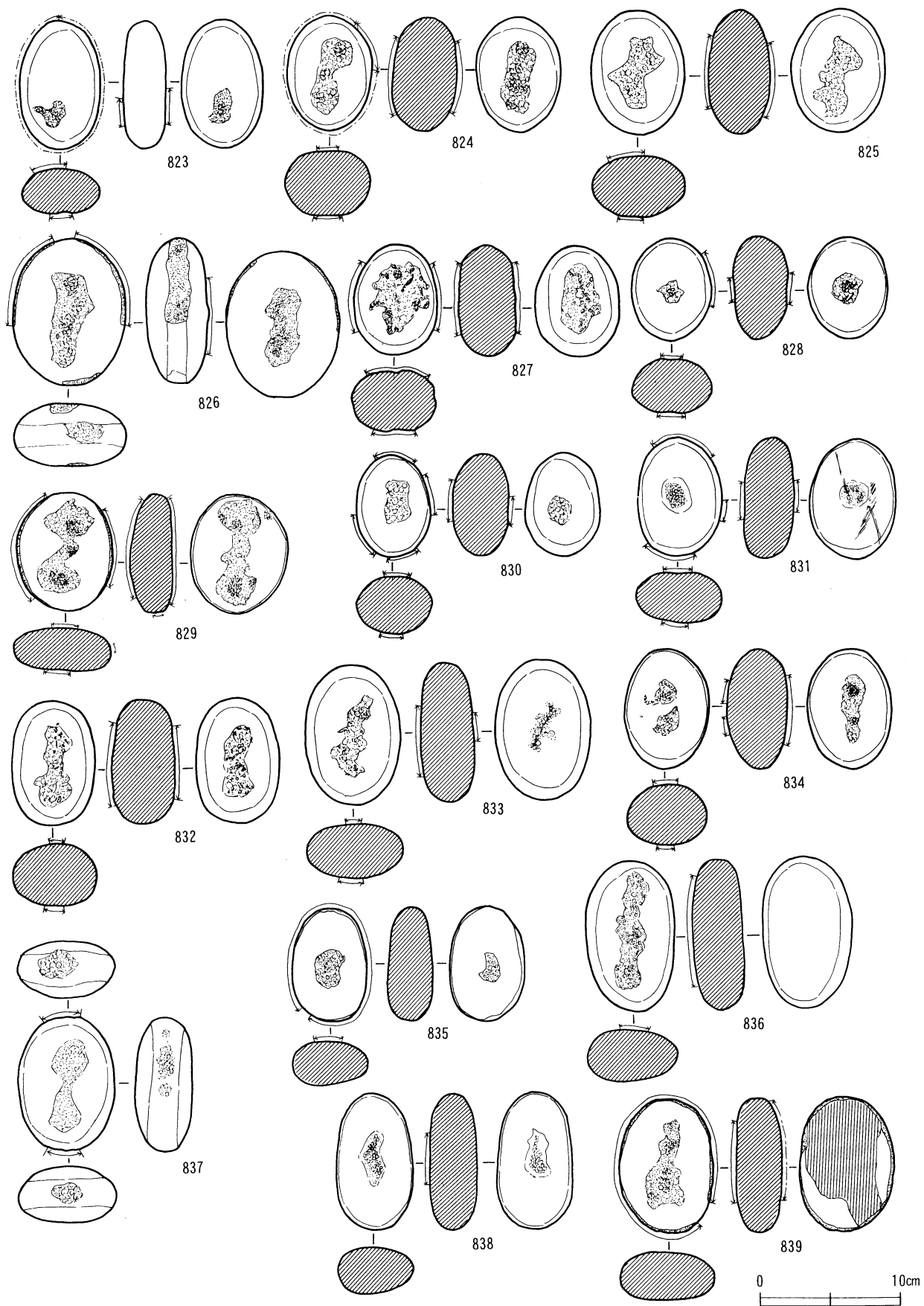
第70図 出土土器



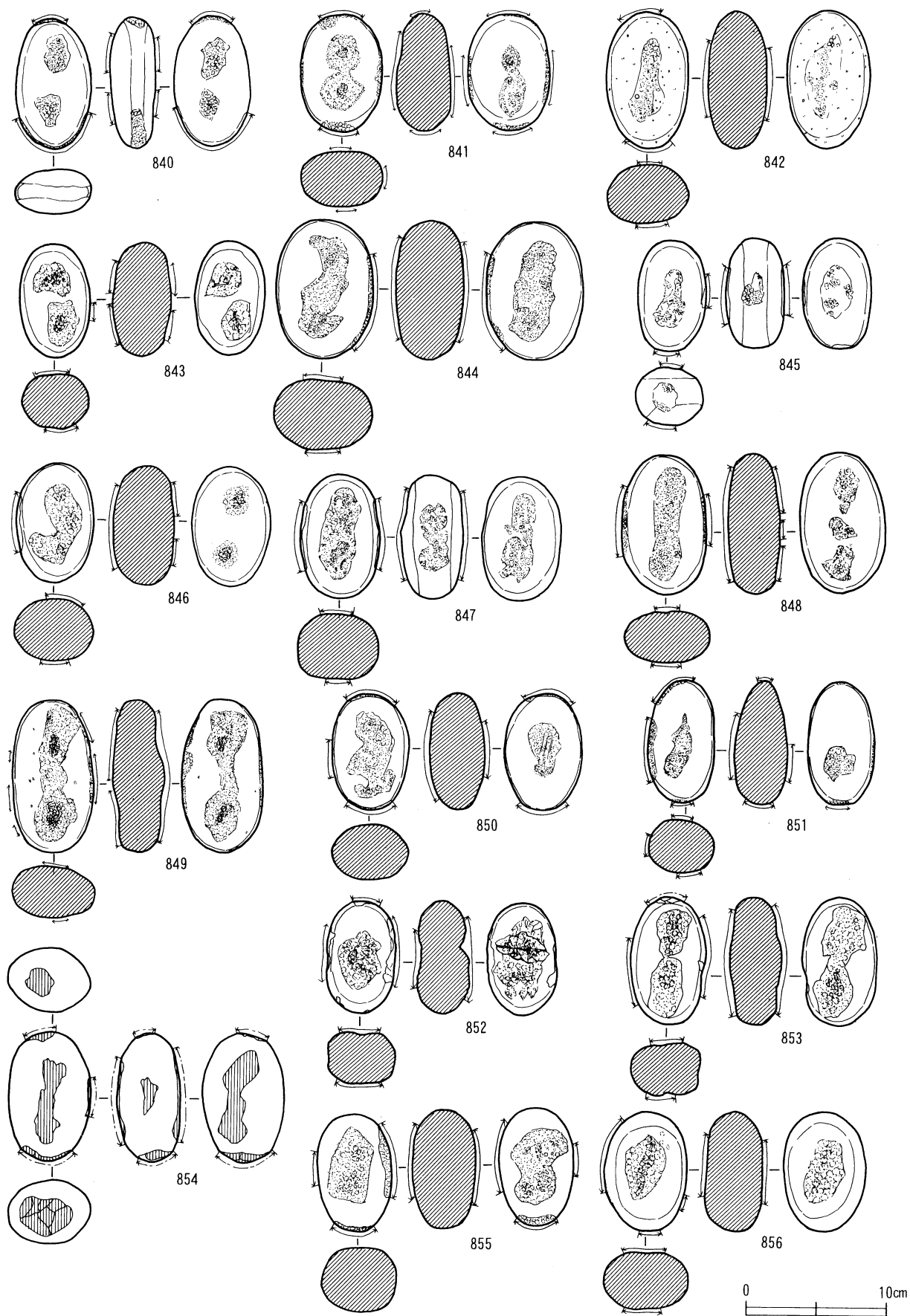
第71图 出土土器



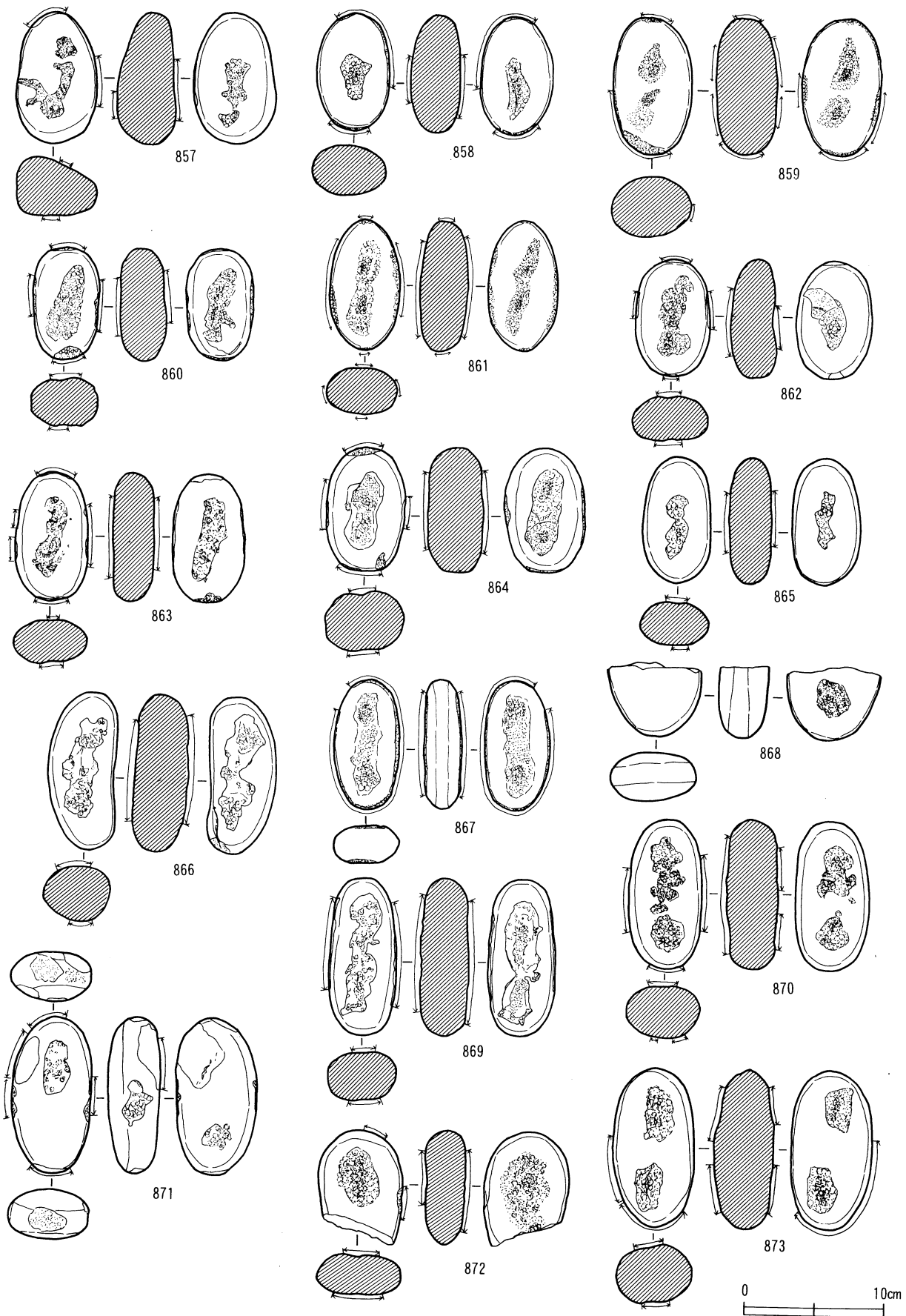
第72図 出土土器



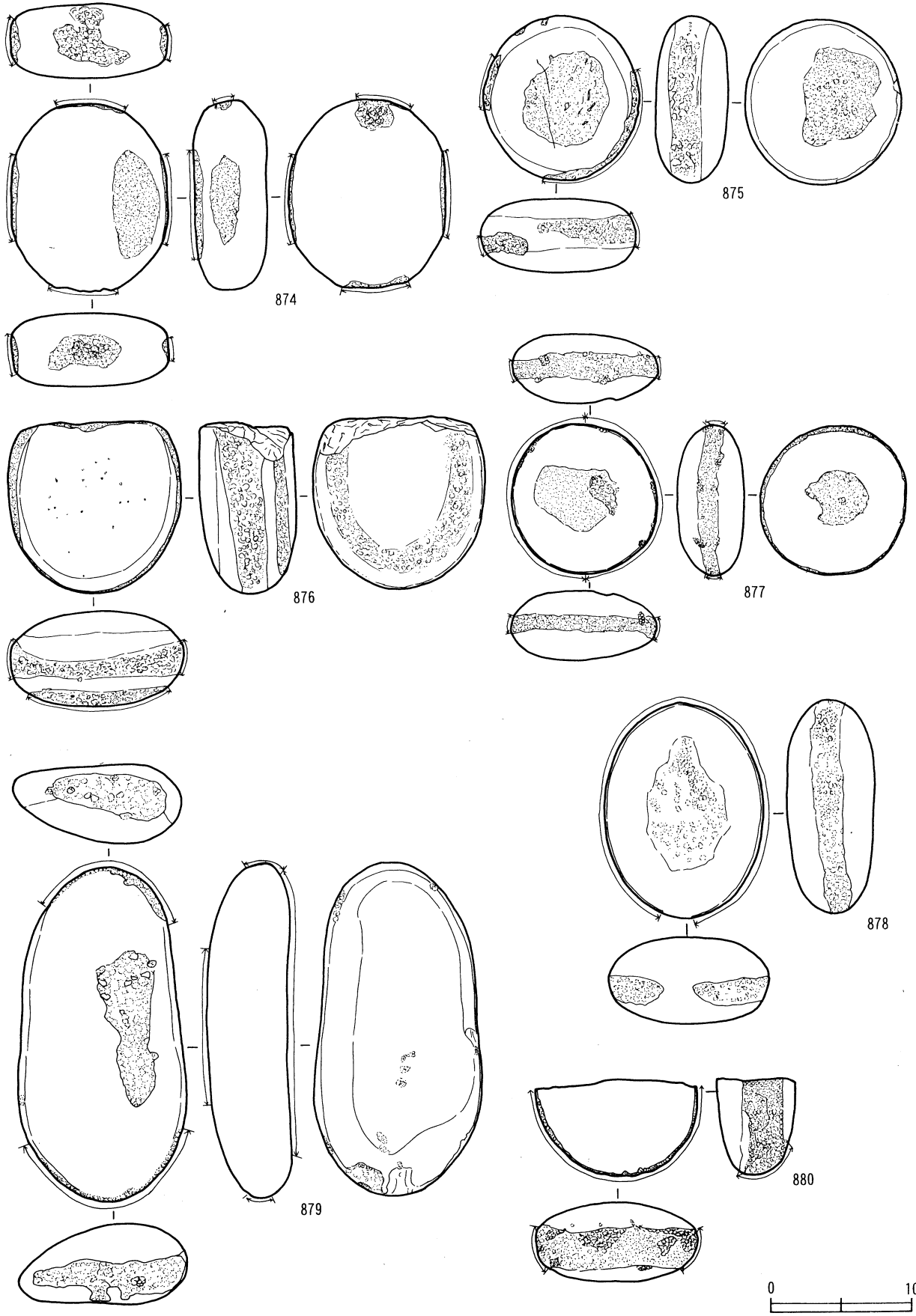
第73图 出土土器



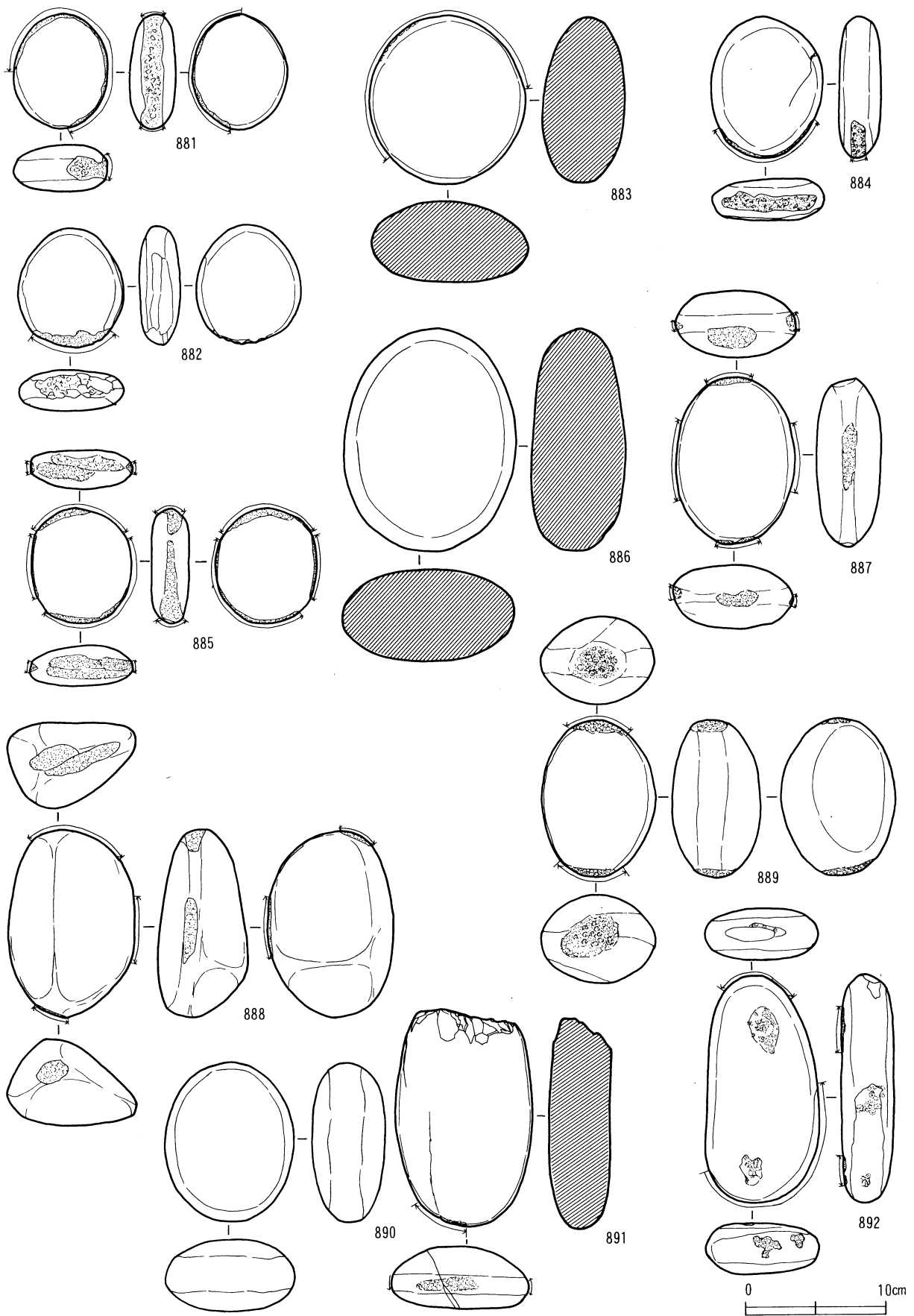
第74图 出土土器



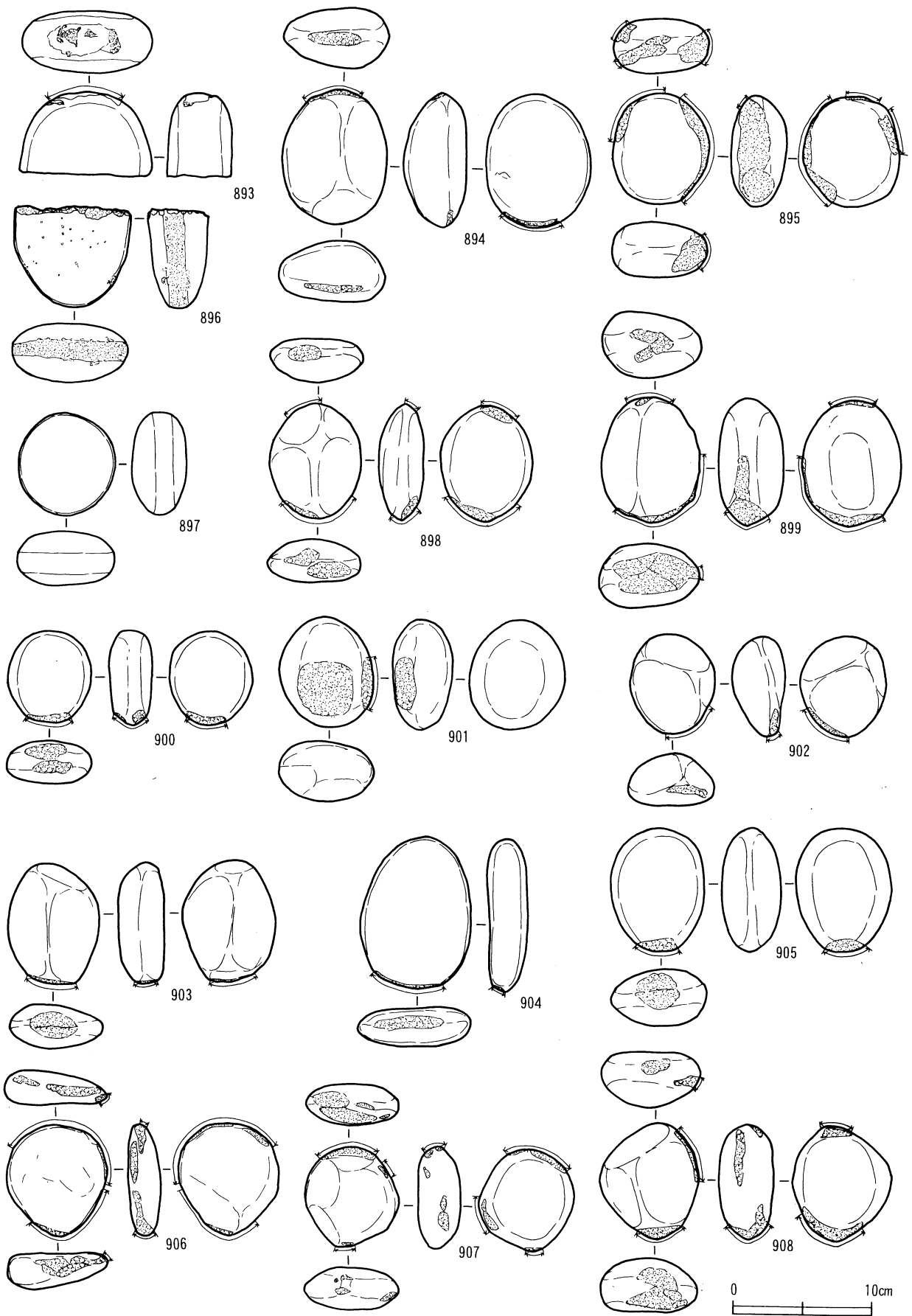
第75图 出土土器



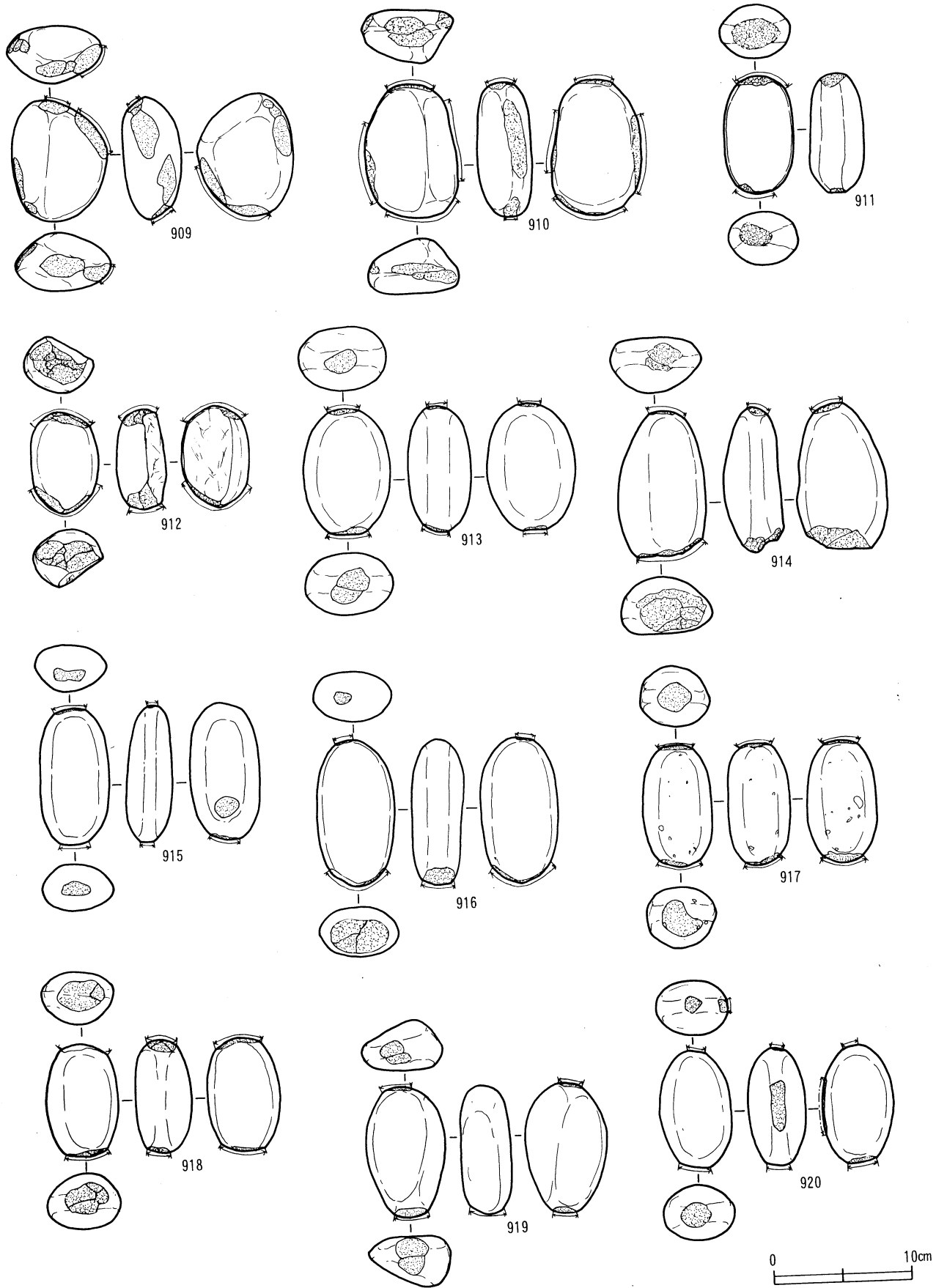
第76図 出土土器



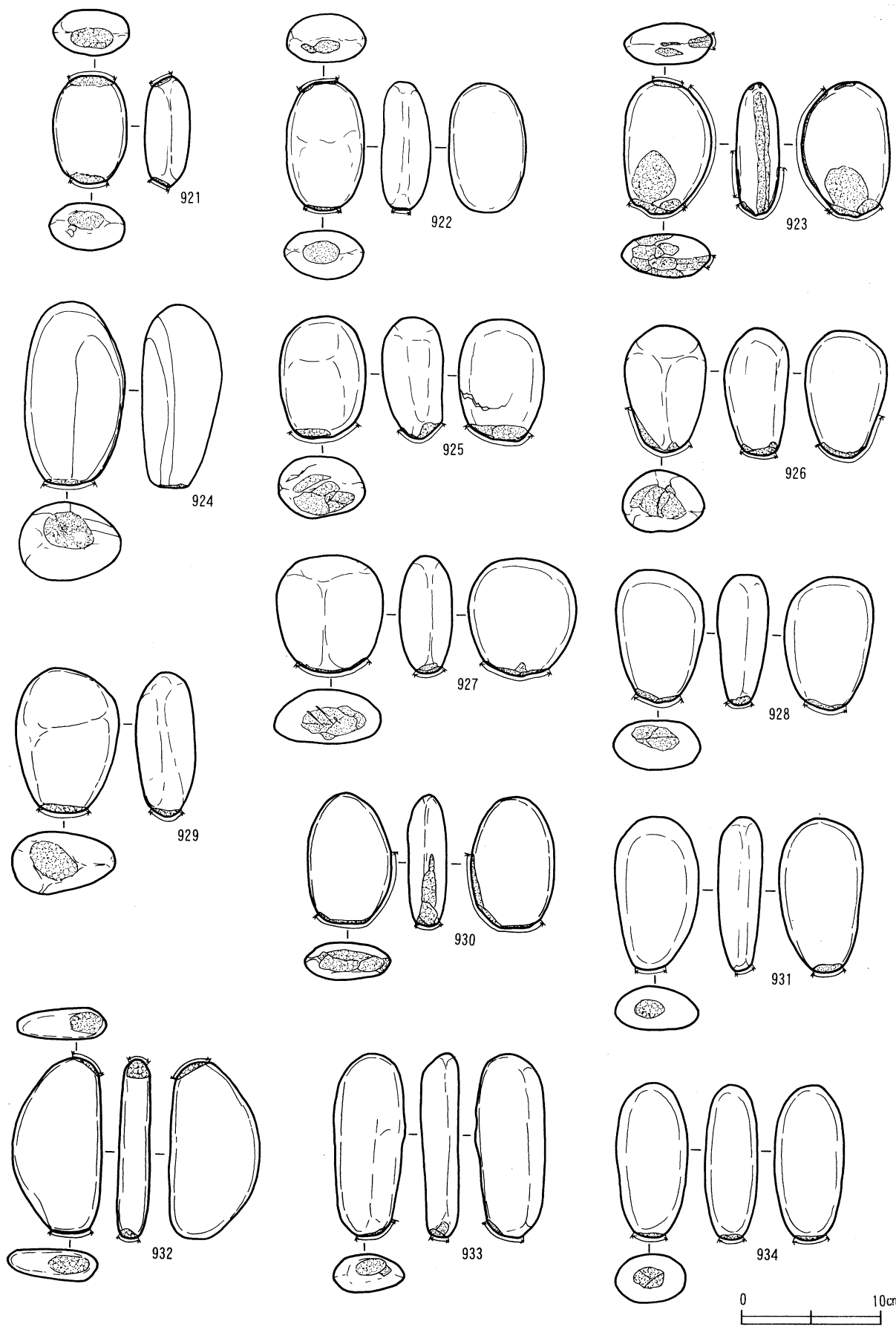
第77图 出土土器



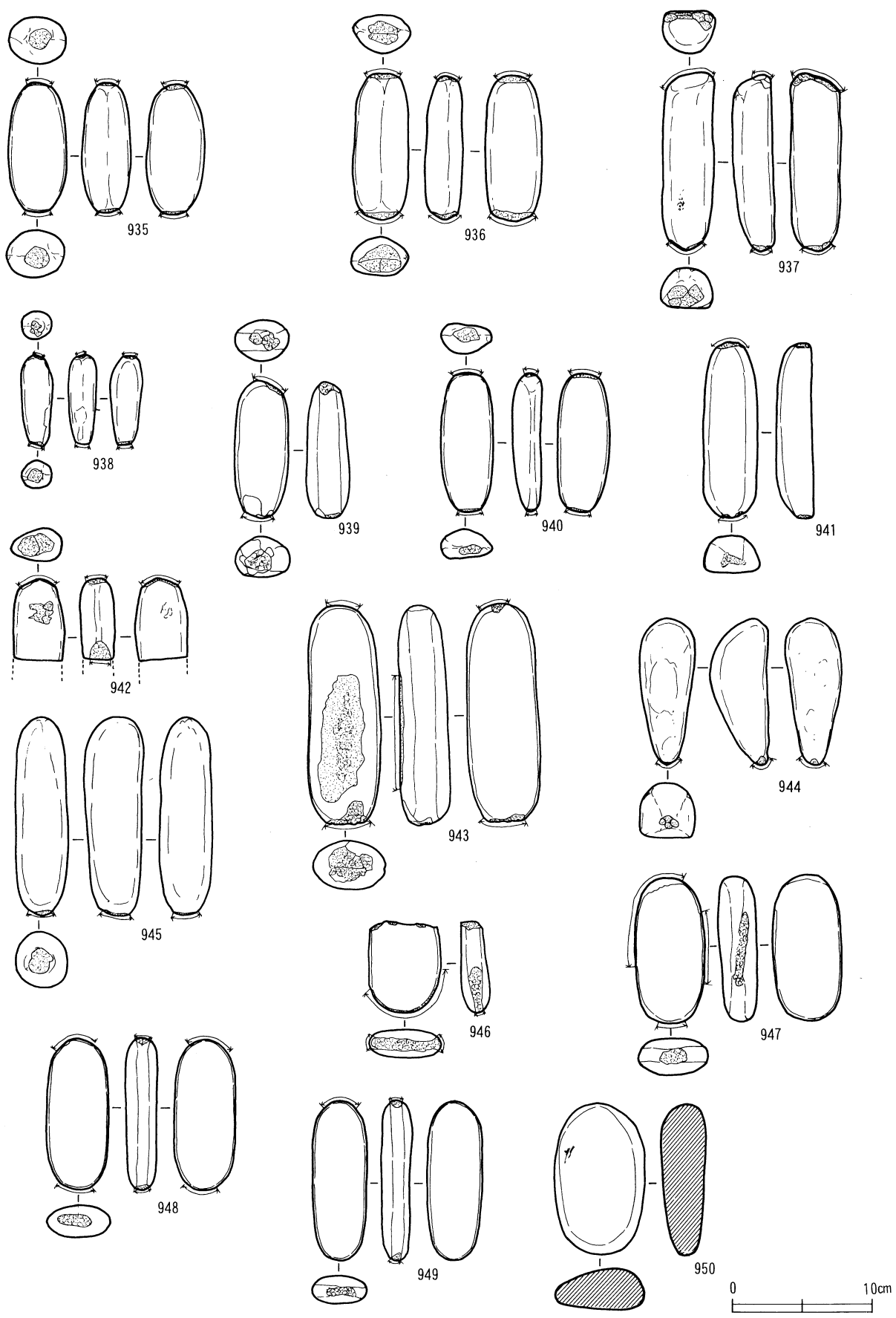
第78图 出土土器



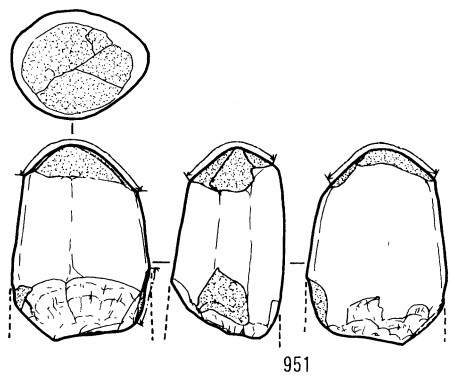
第79图 出土土器



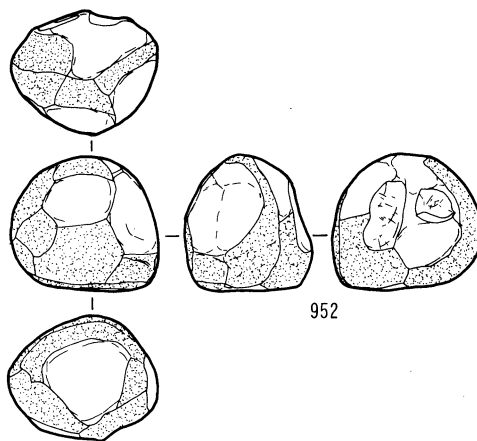
第80图 出土土器



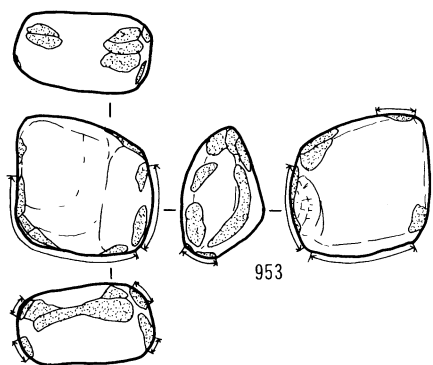
第81图 出土土器



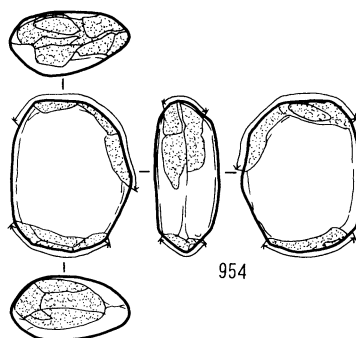
951



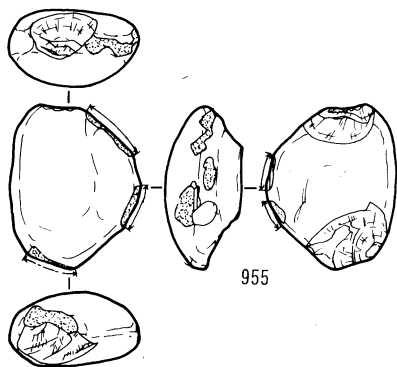
952



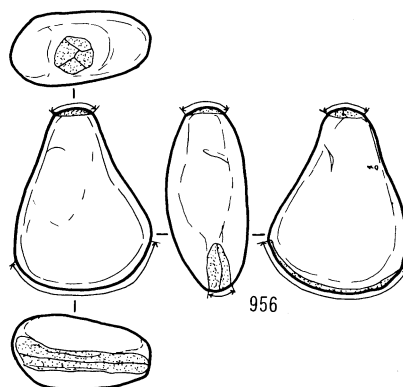
953



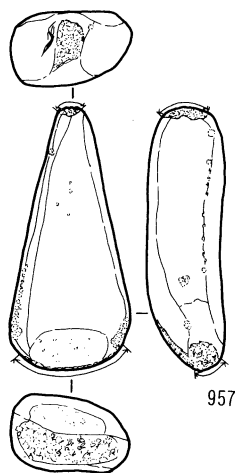
954



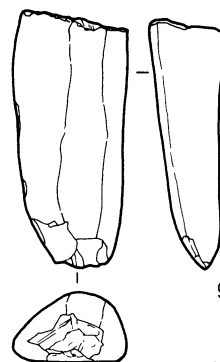
955



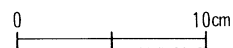
956



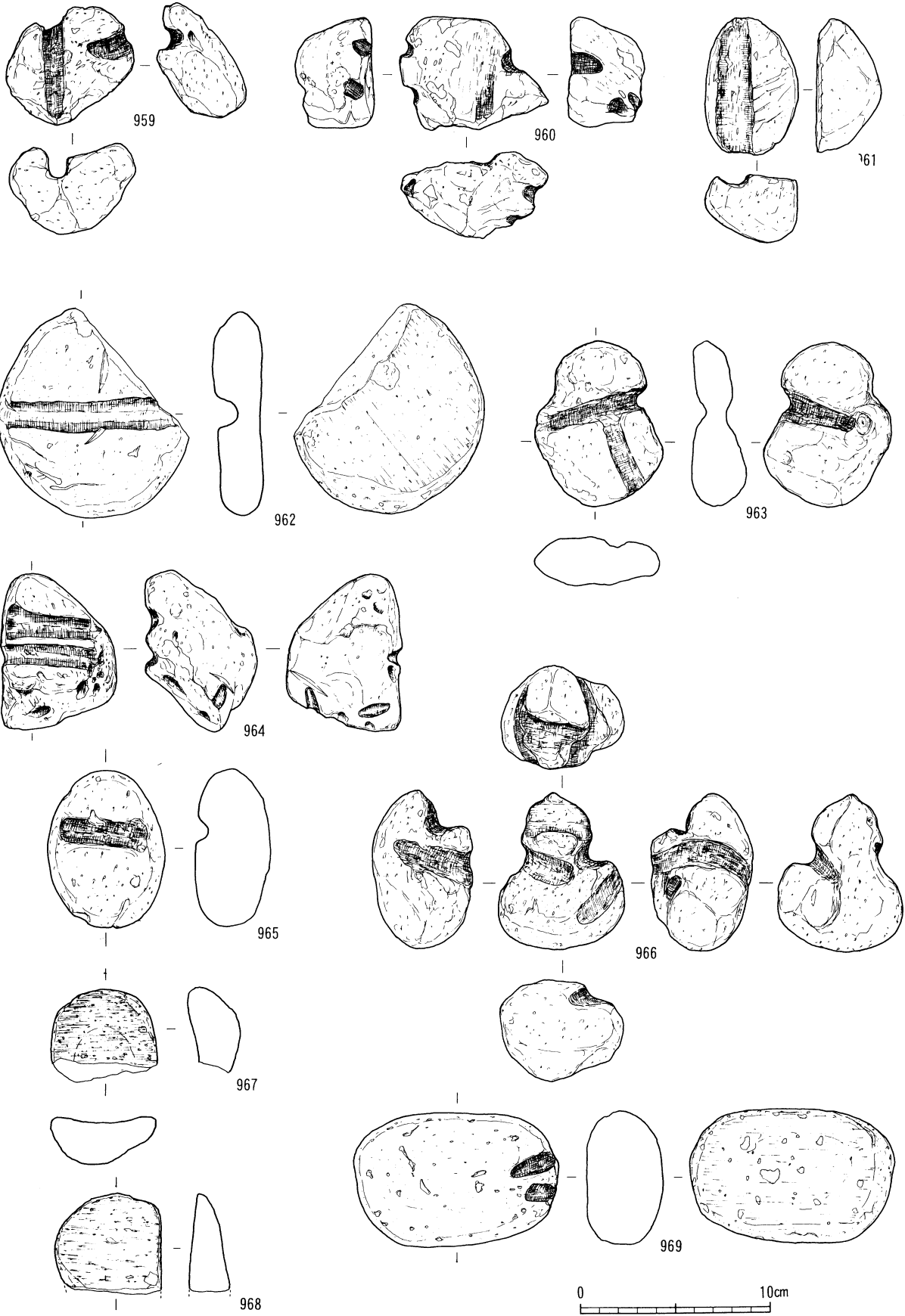
957



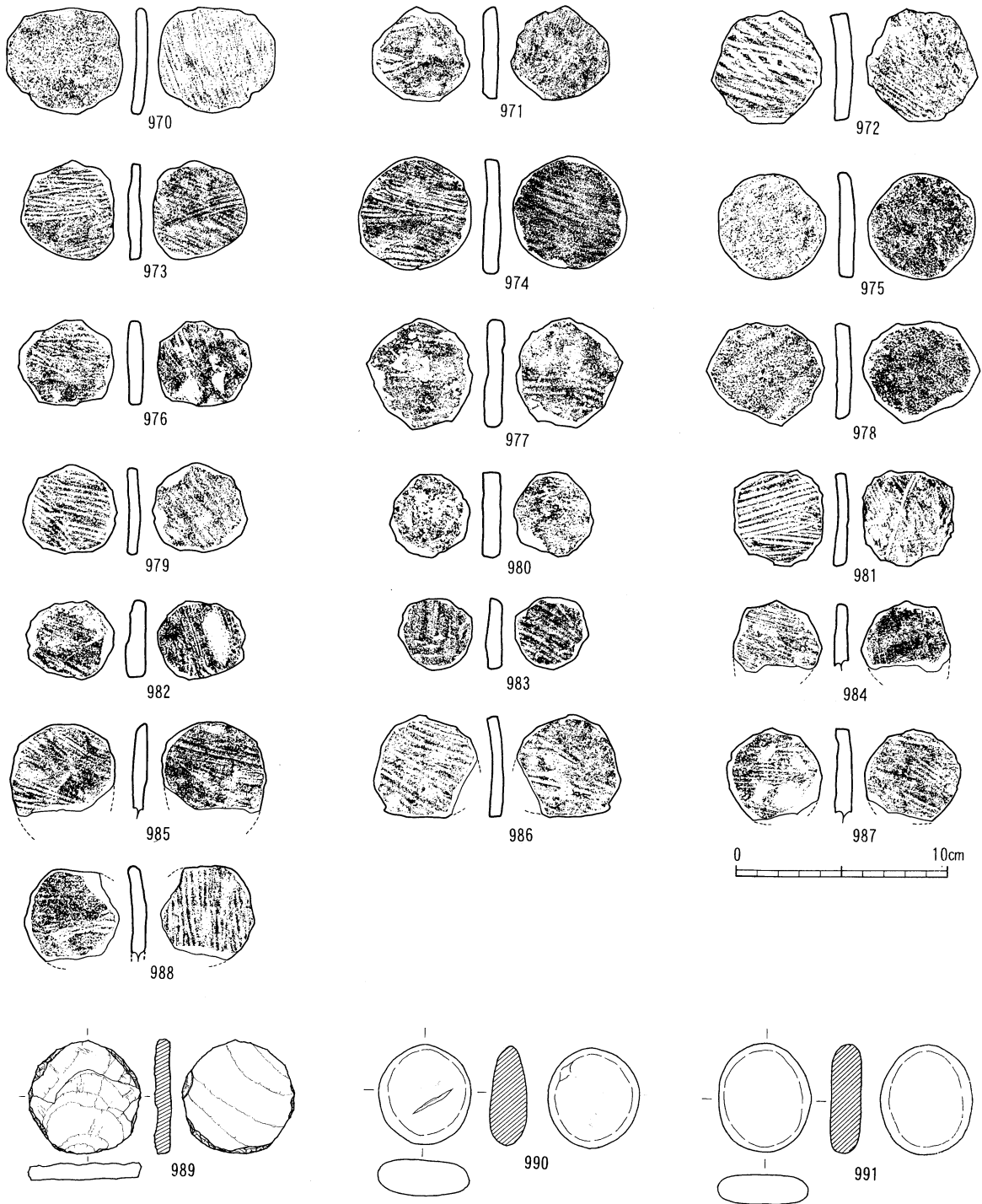
958



第82図 出土土器



第83図 軽石製品



第84図 円盤形（土製品・石製品）

882がホルンフェルス，図示したその他の資料はすべて砂岩製である。

V類 I～IV類に分類されない資料で，突出するやや丸みのある端部に集中した敲打痕がみられるものをV類とした。I～IV類中にも同様の使用痕をもつものがあり，観察表備考欄に示している。礫の形状や重量などの共通するⅢ類中に同様の使用痕が多くみられるほか，IV類に重複して端部に同様の使用痕がみられるものがある。石器等を製作する際に用いられるハンマーストーンに類似する特徴をもつ。面上は平滑なものが多く，部分的にやや弱い磨面をもつものもある。図示した資料の石材はすべて砂岩である。

Va類 (941・944・945・948) 使用の痕跡が比較的希薄な資料である。使用頻度の低い資料とみられるが，偶発的要因でもこのような痕跡が生ずる場合もあり明確に区分することは困難である。

Vb類 (911・924・935・943・957) 対象物に対し垂直に近い角度で用いた場合，もしくは振り子状の運動で使用した場合でも頻度の少ない段階で同様の使用痕が見られる場合がある。911及び913には表・裏面上にやや明瞭な磨面がみられる。

Vc類 (884・889・894・898～900・902・903・905～908・912・914・916～923・925～929・931～934・936～940・947・949・951・956) 棒状礫・短棒状礫・扁平棒状礫の両端部，扁平楕円形礫の長軸の両端，乳棒状礫・卵形礫の端部，一端が窄まる不定形な扁平礫の端部，隅丸三角形・方形を呈する不定形な扁平礫の端部に，比較的小さい敲打による「つぶれ」や擦れ状の小面（擦過面）が切り合ってみられる。IV類と近似した用法をもつものと見られるが，接地面が比較的狭く限定される特徴があり，剥片剥離や剥離調整など精緻な作業に利用されたとみられる。

その他 958は上端が折れ，下端は表裏方向に剥離が生じ端部に「つぶれ」がみられ，楔として用いられた可能性がある（第82図）。891は裏面に磨面があり，磨石から転用されたとみられるもので，一端に階段状の剥離がみられる（第77図）。879は長楕円形の扁平円礫で上下両端に敲打による「つぶれ」があり，表面には細長く延びる2条の磨面とアバタ状の敲打痕が，裏面には凹面を呈する明瞭な磨面がみられ，比較的重量があることから石皿・台石とすることも可能である（第76図）。952は第1長7.9cm，第2長7.8cm，第3長7.4cm，平坦な下面をもち，下面中央には磨面が，下面周縁から立ち上がり部分にかけてはアバタ状に敲打痕され丸みをもつ。また，表面の大部分と裏面右側縁部分にもアバタ状の敲打痕が，表面右縁から裏面左半には敲打によるとみられる複数の擦過面状の擦れつぶれた面が切り合い，頂部で屈曲して交わる稜線を造り出している。そのほか表面の2ヶ所，及び裏面の剥離部分に接する部分には磨面と見られる部分があり，全体に不正形な半球形状であるが，造形意図をもって造られた石製品ではないかとみられる。重量533gの砂岩製である（第82図）。

⑤軽石製品（第83図959～969）

軽石製で，加工もしくは使用の痕跡の見られるものを軽石製品として取上げた。11点を図示している。出土した軽石製品には，①溝状の凹みがあるもの（959～966・969）と，②扁平な軽石礫の片面が浅い凹面状を呈するもの（967・968）がある。①には軽石の比較的平坦な面上に溝状の凹みがあるものと，軽石の端部・側縁の稜部に溝状の凹みがあるものがあるが，同一

個体中に2様の溝を持つものもある。

⑥円盤状土製加工品（第84図970～988）

図示した資料のほとんどが、胴部片を再加工したものとみられるが、981のみ底部破片を利用したものである。周縁の加工には、①土器片周縁を急角度に打ち欠いただけのもの、②周縁につぶれや磨耗が見られるもの、③丁寧な「つぶし」もしくは研磨により周辺を平滑に整えたものがある。

⑦円盤状石製加工品（第84図989）

円盤状土製加工品に類似する石製品である。砂岩の剥片の周縁部に急角度の剥離を加え、円盤状に整形したもの。表裏面上のわずかに擦れたような痕跡を示す部分がある。長・幅の長さはいずれも約5.4cm、厚さ0.9cmと円盤状土製加工品の最大値の範疇に相当する。

⑧小型円礫（第84図990・991）

直径3cmから5cm程度の扁平な円礫及び球状の円礫が多数出土しているが、明瞭な加工もしくは使用の痕跡を見出せないものが多い。図示した2点は表面に弱い磨面が認められる。

第2表 石器観察表1

挿図	番号	器種	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	形式	刃部平面	刃部断面
55図	679	磨製石斧		Ⅲ	ホルンフェルス	(12.0)	6.5	3.4	(457.0)			
55図	680	磨製石斧	2DE	Ⅲ	ホルンフェルス	(11.3)	7.2	2.1	(185.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
55図	681	磨製石斧		Ⅲ	ホルンフェルス	(9.2)	6.6	3.1	(290.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
55図	682	磨製石斧	13M	Ⅲ	ホルンフェルス	(11.2)	7.2	(2.4)	(185.0)	不明	両凸刃	外湾刃
55図	683	磨製石斧	10L	Ⅲ	ホルンフェルス	(6.1)	6.6	2.5	(155.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
55図	684	磨製石斧		Ⅲ	ホルンフェルス	(8.1)	6.4	3.3	(280.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
55図	685	磨製石斧	14J	Ⅲ		(9.1)	(6.7)	3.2	(315.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
55図	686	磨製石斧	11M	Ⅲ	ホルンフェルス	(8.1)	6.0	(3.1)	(268.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
55図	687	磨製石斧	12M	Ⅲ	頁岩	9.1	5.4	1.2	80.0	定角式	弱凸弱平刃	直刃
56図	688	磨製石斧	13L	Ⅲ		16.3	(6.9)	4.3	(630.0)		両凸刃	
56図	689	磨製石斧	BE	Ⅲ		15.2	7.6	3.6	555.0	定角式		
56図	690	磨製石斧	4J	Ⅲ	ホルンフェルス	(16.1)	5.8	2.9	(555.0)	定角式		
56図	691	磨製石斧	11M	Ⅲ		18.1	7.6	3.4	765.0	定角式		
56図	692	磨製石斧	2DE	Ⅲ		(14.9)	6.6	3.2	(450.0)	定角式		
56図	693	石斧	11M	Ⅲ		15.6	5.8	3.1	(375.0)			
57図	694	打製石斧	2DE	Ⅲ	ホルンフェルス	14.7	5.9	2.6	325.0	撥形		円刃
57図	695	磨製石斧		Ⅲ		(12.0)	(5.8)	3.5	(400.0)	定角式	両凸刃	
57図	696	磨製石斧	11M	Ⅲ	ホルンフェルス	(9.5)	(6.4)	3.3	(335.0)	定角式		
57図	697	石斧	11M	Ⅲ	ホルンフェルス	(16.3)	5.6	3.0	(390.0)	(定角式)		
57図	698	磨製石斧	13K	Ⅲ	ホルンフェルス	(10.0)	5.3	3.2	(220.0)	(定角式)		
57図	699	磨製石斧		Ⅲ		12.7	5.9	2.9	300.0	定角式	両凸刃	外湾刃
57図	700	磨製石斧	9M	Ⅲ	ホルンフェルス	(11.5)	(5.3)	(3.6)	(290.0)	乳棒状		
58図	701	磨製石斧	14K	Ⅲ	ホルンフェルス	(13.1)	5.8	3.7	(420.0)	乳棒状		
58図	702	磨製石斧	10L	Ⅲ	ホルンフェルス	(11.7)	(6.1)	(2.3)	(230.0)	定角式		
58図	703	石斧	11M	Ⅲ	ホルンフェルス	(5.9)	(4.2)	(2.2)	(70.0)	不明		
58図	704	磨製石斧	9M	Ⅲ	ホルンフェルス	(9.0)	(5.1)	(2.3)	(180.0)	定角式		
58図	705	磨製石斧	13L	Ⅲ	ホルンフェルス	(11.4)	5.8	3.4	(365.0)	定角式		
58図	706	磨製石斧	12M	Ⅲ	ホルンフェルス	(10.5)	(5.2)	3.1	(225.0)	定角式		
58図	707	磨製石斧	13L	Ⅲ	ホルンフェルス	(9.3)	5.2	2.8	(200.0)	定角式		
58図	708	磨製石斧	13L	Ⅲ	ホルンフェルス	11.6	6.0	2.4	265.0	定角式	両凸刃	偏刃
59図	709	磨製石斧	12L	Ⅲ	ホルンフェルス	(8.5)	(4.9)	(3.0)	(175.0)	定角式		
59図	710	石斧	11L	Ⅲ	ホルンフェルス	(10.7)	(5.4)	(2.4)	(180.0)			
59図	711	磨製石斧	11L	Ⅲ	ホルンフェルス	10.6	4.9	2.2	(180.0)	定角式	両凸刃	外湾刃
59図	712	磨製石斧	2DE	土手	ホルンフェルス	11.5	5.0	3.1	245.0	定角式		

第3表 石器観察表2

挿図	番号	器種	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部主角	備考
60図	713	石核 (スクレイパー)	11N	Ⅲ	砂岩	8.7	8.3	3.6	284.0	55°	
60図	714	石核	2DE	Ⅲ	砂岩	13.5	7.8	5.8	692.0		
60図	715	石核	10C	Ⅲ	砂岩	10.7	8.1	6.5	582.0		
60図	716	石核			砂岩	13.6	10.8	9.5	1430.0		
60図	717	スクレイパー	12L	Ⅲ	砂岩	9.8	12.5	3.5	500.0	30°	
60図	718	スクレイパー	9K	Ⅲ	砂岩	7.9	9.3	2.5	200.0	35°	
60図	719	スクレイパー	11N	Ⅲ	砂岩	7.8	10.3	2.8	228.0	35°	
60図	720	スクレイパー	12L	Ⅲ	砂岩	7.2	11.0	3.3	300.0	35°	
61図	721	礫器	11L	Ⅲ	砂岩	10.7	16.7	6.4	1730.0	80°	
61図	722	礫器	2DE	Ⅲ	砂岩	12.0	9.7	5.8	940.0	70°	
61図	723	礫器	10L	Ⅲ	砂岩	11.6	9.0	5.2	717.0	80°	
61図	724	礫器	10L	Ⅲ	砂岩	11.0	13.6	3.9	845.0	75°	
61図	725	礫器	12N	Ⅲ	砂岩	10.2	11.6	4.1	555.0	70°	
62図	726	礫器	12L	Ⅲ	砂岩	10.6	12.0	7.9	1000.0	75°	
62図	727	礫器	10J	Ⅲ	砂岩	13.8	10.4	4.8	934.0	70°	
62図	728	礫器	13M	Ⅲ	砂岩	10.0	7.4	3.8	355.0	75°	
62図	729	礫器			砂岩	9.5	9.5	4.4	435.0	60°	
62図	730	礫器	11M	Ⅲ	砂岩	9.5	11.9	4.1	430.0	60°	
62図	731	礫器			砂岩	7.8	9.7	3.2	326.0	70°	

第4表 石器觀察表3

挿図	番号	器種	分類	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
63図	732	石皿	I a	9K	Ⅲ	砂岩	58.4	84.1	10.3	83.0	
63図	733	石皿	I a	11L	Ⅲ	砂岩	45.3	22.1	8.0	16.0	
63図	734	石皿	Ⅱ c	10K	Ⅲ	砂岩	53.9	49.0	8.2	31.0	
63図	735	石皿	I b	9K	Ⅲ	砂岩	41.6	38.6	8.2	21.8	
63図	736	石皿	Ⅱ c	9L	Ⅲ	砂岩	51.0	38.8	11.2	32.5	
63図	737	石皿	Ⅱ b	9L	Ⅲ	砂岩	41.4	36.5	10.3	27.0	
64図	738	石皿	I b	9K	Ⅲ	砂岩	57.4	55.0	9.0	48.0	
64図	739	石皿	I a	12L13L	Ⅲ	砂岩	51.9	43.0	8.0	35.0	
64図	740	石皿	I a	12K	Ⅲ	砂岩	51.3	37.1	7.6	22.0	
64図	741	石皿	I b	9K	Ⅲ	砂岩	46.7	30.6	11.0	25.5	
64図	742	石皿	I a	10K	Ⅲ	砂岩	38.9	26.0	7.6	12.4	
64図	743	石皿	I a	13K	Ⅲ	砂岩	19.6	23.3	6.1	4.5	
64図	744	石皿	I a	13L	Ⅲ	砂岩	27.8	20.1	6.6	4.9	
64図	745	石皿	Ⅲ b	2 D E	土手	砂岩	49.0	33.0	9.6	26.5	
64図	746	石皿	I a	9L	Ⅲ	砂岩	34.9	32.1	8.7	13.8	被熱
64図	747	石皿	I a	13K	Ⅲ	砂岩	21.1	16.6	8.4	4.5	
65図	748	石皿	I b	9K	Ⅲ	砂岩	46.5	62.7	8.0	44.0	
65図	749	石皿	Ⅱ c	9K	Ⅲ	砂岩	43.1	49.4	11.7	(24.0)	
65図	750	石皿	Ⅱ a	10K	Ⅲ	砂岩	50.4	40.5	16.2	49.0	
65図	751	石皿	Ⅲ c	9L	Ⅲ	砂岩	39.5	42.2	11.3	(31.5)	
65図	752	台石		12L	Ⅲ	砂岩	46.2	29.6	16.8	(30.0)	
65図	753	石皿	I a	13M	Ⅲ	砂岩	49.6	25.6	12.1	(26.0)	
65図	754	石皿	Ⅲ a	13J	Ⅲ	砂岩	49.2	(22.6)	9.8	(17.0)	
66図	755	石皿	Ⅲ b	2DE	土手	砂岩	(27.5)	(43.0)	12.4	(19.0)	
66図	756	石皿	I a	13K	Ⅲ	砂岩	39.6	31.7	13.5	(27.3)	被熱
66図	757	石皿	I b	9K	Ⅲ	砂岩	37.0	(31.8)	5.6	(12.3)	
66図	758	石皿	I b	12L	Ⅲ	砂岩	33.6	36.0	7.6	14.8	
66図	759	石皿	Ⅲ c	13L	Ⅲ	砂岩	35.6	39.8	10.6	(12.5)	
66図	760	石皿	Ⅱ b	2D	土手	砂岩	(28.1)	(21.5)	9.0	(9.5)	被熱
66図	761	石皿	I b	12K	Ⅲ	砂岩	(31.7)	(43.1)	(10.0)	(19.0)	
66図	762	石皿	Ⅱ b	12K	Ⅲ	砂岩	38.0	(36.9)	14.5	(28.0)	
66図	763	石皿	I a	13T	Ⅲ	砂岩	41.0	(15.7)	10.1	(8.2)	
66図	764	石皿	I a	11L	Ⅲ	砂岩	(33.4)	20.8	11.2	(14.0)	
66図	765	石皿	Ⅱ a	13L	Ⅲ	砂岩	(22.8)	(29.8)	10.2	(9.0)	
66図	766	石皿	I a	13L	Ⅲ	砂岩	(21.6)	32.1	11.2	(14.0)	
67図	767	石皿	Ⅱ b	13K13L	Ⅲ	砂岩	(33.8)	(18.4)	(7.8)	(5.7)	被熱
67図	768	石皿	I a	13J	Ⅲ	砂岩	(31.8)	26.4	6.7	(5.7)	
67図	769	石皿	Ⅱ	10L11K	Ⅲ	砂岩	(24.5)	(19.2)	(7.4)	(4.5)	
67図	770	石皿	Ⅱ	13K	Ⅲ	砂岩	(24.6)	(23.8)	(17.2)	(8.0)	被熱
67図	771	石皿	I a	19M	Ⅲ	砂岩	(21.5)	(21.4)	11.2	(6.2)	被熱
67図	772	石皿	I a	12K	Ⅲ	砂岩	(18.5)	(20.1)	(7.2)	(5.9)	
67図	773	石皿	I a	28E	土手	砂岩	(12.7)	(19.0)	6.0	(2.2)	
67図	774	石皿	I a	12L	Ⅲ	砂岩	(17.7)	20.1	6.7	(4.0)	被熱
67図	775	石皿	Ⅱ b	9K13L	Ⅲ	砂岩	20.6	12.3	2.8	1.0	

第5表 石器観察表4

挿図	番号	器種	分類	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
68図	776	磨石・敲石類	IIa	13M	III	安山岩	10.5	10.7	5.3	973.0	円盤状
68図	777	磨石・敲石類	IIa			砂岩	13.0	10.6	5.9	964.0	Vb 円盤状
68図	778	磨石・敲石類	IIa	9K	III	砂岩	13.4	11.3	5.4	1,208.0	
68図	779	磨石・敲石類	IV	13K	III	砂岩	8.1	7.0	2.9	244.0	
68図	780	磨石・敲石類	IIa	13L	III	砂岩	13.4	11.8	5.5	1,220.0	被熱
68図	781	磨石・敲石類	IIa	9K	III	砂岩	11.3	10.0	5.3	999.0	IV (円盤状)
68図	782	磨石・敲石類	I b	9K	III	砂岩	12.9	11.7	5.9	1,382.0	IV
68図	783	磨石・敲石類	I a	9L	III	砂岩	13.1	12.0	6.0	1,338.0	
68図	784	磨石・敲石類	I a	10L	III	砂岩	10.5	9.9	5.2	798.0	
69図	785	磨石・敲石類	I c	9L	III	砂岩	13.2	10.0	5.6	1,070.0	
69図	786	磨石・敲石類	I a	10J	III	砂岩	13.4	10.9	5.4	1,115.0	
69図	787	磨石・敲石類	II b	12L	III	砂岩	10.7	7.8	3.9	487.0	
69図	788	磨石・敲石類	II b	14J	III	砂岩	10.7	9.2	6.6	946.0	
69図	789	磨石・敲石類	I b	13K	III	砂岩	11.9	6.8	3.1	404.0	
69図	790	磨石・敲石類	IIa	12M	III	砂岩	16.0	11.2	6.6	1,735.0	IV
69図	791	磨石・敲石類	IIa	16K	III	砂岩	12.6	10.0	5.0	887.0	
69図	792	磨石・敲石類	II b	12L	III	砂岩	12.1	8.5	4.3	615.0	IV
69図	793	磨石・敲石類		9L	III	砂岩	9.5	6.3	3.9	317.0	
70図	794			13L	III		20.3	13.3	8.0	3,300.0	
70図	795	磨石・敲石類	IV	11L	III	砂岩	14.6	8.5	5.7	820.0	扁形円礫
70図	796	磨石・敲石類	IV	13L	III	砂岩	15.1	9.8	5.7	1,190.0	扁形円礫
70図	797	磨石・敲石類	IV	11L	III	砂岩	9.7	6.6	8.9	742.0	扁形円礫
70図	798			9K	III		23.5	14.2	9.3	4,420.0	
70図	799	磨石・敲石類	IV	13K	III	砂岩	11.1	8.3	4.5	590.0	扁形円礫
71図	800	磨石・敲石類	IIIa	13L	III	花崗岩	8.1	5.6	4.5	345.0	
71図	801	磨石・敲石類	III b	13K	III	花崗岩	7.9	6.1	4.3	310.0	
71図	802	磨石・敲石類	III c	11N	III	花崗岩	7.9	6.1	3.6	250.0	
71図	803	磨石・敲石類	III c	12	III	花崗岩	6.6	5.6	3.0	170.0	表裏磨り
71図	804	磨石・敲石類	III c	10M	III	花崗岩	10.5	6.5	5.1	555.0	Vb
71図	805	磨石・敲石類	III c	13M	III	花崗岩	8.0	6.2	4.6	340.0	表面磨り
71図	806	磨石・敲石類	III b	14L	III	花崗岩	8.0	6.4	4.3	320.0	
71図	807	磨石・敲石類	III a	11L	III	花崗岩	6.5	5.3	3.8	200.0	
71図	808	磨石・敲石類		12L	III	頁岩	8.6	6.0	3.2	235.0	表面風化
71図	809	磨石・敲石類	III b	16K	III	砂岩	9.5	7.1	3.0	260.0	
71図	810	磨石・敲石類	III c	10L	III	砂岩	9.7	8.7	3.6	440.0	IV
71図	811	磨石・敲石類	IIIa	11M	III	砂岩	9.2	5.9	3.8	290.0	
71図	812	磨石・敲石類	II c	11L	III	砂岩	10.9	10.1	6.5	980.0	
71図	813	磨石・敲石類	II c	12K	III	砂岩	14.5	12.2	6.4	1,648.0	台石
72図	814	磨石・敲石類	IIa	8E	III	砂岩	12.4	10.9	6.7	1,422.0	
72図	815	磨石・敲石類	II b	9L	III	砂岩	13.5	11.3	5.8	1,280.0	
72図	816	磨石・敲石類	IIa	2 G	III	砂岩	11.0	10.2	5.7	850.0	
72図	817	磨石・敲石類	II b	11K	III	砂岩	12.8	10.2	5.1	1,020.0	
72図	818	磨石・敲石類	III c	12L	III	砂岩	6.4	5.2	4.1	180.0	
72図	819	磨石・敲石類	IIIa	10M	III	砂岩	7.8	7.1	3.9	320.0	
72図	820	磨石・敲石類	IIIa	9M	III	砂岩	7.2	8.5	3.7	340.0	
72図	821	磨石・敲石類	II c	13K	III	砂岩	10.2	9.7	5.7	905.0	
72図	822	磨石・敲石類	IIa	9L	III	砂岩	14.8	10.1	6.3	1,340.0	
73図	823	磨石・敲石類	III b	12L	III	砂岩	9.3	5.9	3.3	260.0	
73図	824	磨石・敲石類	III c	13M	III	砂岩	8.2	6.2	4.7	350.0	
73図	825	磨石・敲石類	III c	10M	III	砂岩	8.9	6.7	4.6	370.0	
73図	826	磨石・敲石類	III b	15E	III	砂岩	10.6	8.2	4.7	560.0	
73図	827	磨石・敲石類	IIIa	14K	III	砂岩	8.0	6.0	4.2	315.0	
73図	828	磨石・敲石類	III b	12M	III	砂岩	7.4	5.9	4.1	230.0	
73図	829	磨石・敲石類	III c	13K	III	砂岩	8.5	7.1	3.2	250.0	
73図	830	磨石・敲石類	III c			砂岩	7.4	5.5	4.1	230.0	

第6表 石器観察表5

挿図	番号	器種	分類	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
73図	831	磨石・敲石類	III b	9N	III	砂岩	8.6	6.3	3.7	290.0	
73図	832	磨石・敲石類	III c	14J	III	砂岩	9.0	6.0	4.6	380.0	
73図	833	磨石・敲石類	III c	1L	III	砂岩	10.1	6.9	4.0	420.0	
73図	834	磨石・敲石類	III c	10M	III	砂岩	8.7	6.2	4.5	320.0	
73図	835	磨石・敲石類	III c	13J	III	砂岩	8.3	5.5	3.3	225.0	側面高打
73図	836	磨石・敲石類	III b	12L	III	砂岩	10.9	6.5	3.6	400.0	
73図	837	磨石・敲石類	III c	9M	III	砂岩	9.7	7.0	4.2	410.0	Vb 側縁高打
73図	838	磨石・敲石類	III c	13K	III	砂岩	9.8	5.6	3.4	290.0	側縁高打
73図	839	磨石・敲石類	III c	9K	III	砂岩	9.7	6.8	3.4	345.0	Vb 側縁高打
74図	840	磨石・敲石類	III b	4K	III	砂岩	9.4	5.5	3.4	255.0	
74図	841	磨石・敲石類	III b	12L	III	砂岩	8.4	6.0	4.0	315.0	Vb 側縁高打
74図	842	磨石・敲石類	III c	12M	III	砂岩	9.8	5.9	4.3	370.0	
74図	843	磨石・敲石類	III b	13K	III	砂岩	8.2	5.2	4.3	250.0	側縁高打
74図	844	磨石・敲石類	III b	8E	III	砂岩	7.0	9.9	5.0	525.0	側縁高打
74図	845	磨石・敲石類	III c	10L	III	砂岩	8.0	5.0	4.2	245.0	Vb 側縁高打
74図	846	磨石・敲石類	III b	13K	III	砂岩	8.7	5.7	4.5	315.0	
74図	847	磨石・敲石類	IIIa	10J	III	砂岩	8.9	5.8	4.7	370.0	側面高打
74図	848	磨石・敲石類	IIIb	9K	III	砂岩	10.1	6.2	3.8	350.0	Vc 側面高打
74図	849	磨石・敲石類	IIIa	14J	III	砂岩	10.9	5.8	3.9	325.0	側面高打
74図	850	磨石・敲石類	III c	10K	III	砂岩	8.4	5.6	4.0	255.0	Va
74図	851	磨石・敲石類	III c	10L	III	砂岩	8.9	4.8	3.9	252.0	Va
74図	852	磨石・敲石類	IIIa	15K	III	砂岩	8.1	4.9	3.8	220.0	Va 側面高打
74図	853	磨石・敲石類	IIIa	12M	III	砂岩	9.2	5.1	3.8	300.0	Vc 側面高打
74図	854	磨石・敲石類	III c	15	III	砂岩	9.6	6.1	4.6	370.0	Vc 側縁高打
74図	855	磨石・敲石類	III c	13M	III	砂岩	8.5	5.4	4.7	325.0	Vb 側縁高打
74図	856	磨石・敲石類	III b	15K	III	砂岩	8.6	6.0	4.2	315.0	側縁高打
75図	857	磨石・敲石類	III c	9K	III	砂岩	9.5	5.9	4.4	340.0	側縁高打
75図	858	磨石・敲石類	III c	4K	III	砂岩	8.6	5.4	3.6	245.0	Va 側縁高打
75図	859	磨石・敲石類	III b	11M	III	砂岩	9.9	5.8	4.5	395.0	Vb 被熱
75図	860	磨石・敲石類	IIIa	13L	III	砂岩	8.1	4.7	3.3	220.0	Vc 側面高打
75図	861	磨石・敲石類	III b	13L	III	砂岩	9.5	5.3	3.6	215.0	Va 側面高打
75図	862	磨石・敲石類	IIIa	11L	III	砂岩	8.5	5.5	3.3	230.0	Va 側縁高打
75図	863	磨石・敲石類	III b			砂岩	9.3	5.3	3.1	255.0	Vc 側面高打
75図	864	磨石・敲石類	IIIa	16K	III	砂岩	9.0	5.7	4.2	350.0	Vb 側縁高打
75図	865	磨石・敲石類	III b	13L	III	砂岩	9.2	5.0	3.2	230.0	
75図	866	磨石・敲石類	III b	13L	III	砂岩	11.2	4.8	4.0	350.0	Vc 側縁高打
75図	867	磨石・敲石類	III b	9M	III	砂岩	9.5	4.8	2.8	205.0	側面高打
75図	868	磨石・敲石類	IIIc	13L	III	砂岩	(5.3)	(6.8)	3.7	(180.0)	側縁高打
75図	869	磨石・敲石類	IIIa	11K	III	砂岩	11.3	5.0	3.6	330.0	Va 側面高打
75図	870	磨石・敲石類	III b			砂岩	10.8	5.4	3.8	350.0	側縁高打
75図	871	磨石・敲石類	III c	13L	III	砂岩	11.3	5.9	4.0	360.0	Va 側縁高打
75図	872	磨石・敲石類	IIIa	14J	III	砂岩	(7.4)	6.2	3.0	(220.0)	Va 側面高打
75図	873	磨石・敲石類	IIIa			砂岩	11.5	5.9	4.4	450.0	側縁高打
76図	874	磨石・敲石類	II b	11K	III	砂岩	13.5	11.3	5.4	1,280.0	Vb
76図	875	磨石・敲石類	IIa			砂岩	11.7	11.1	5.3	995.0	
76図	876	磨石・敲石類	IIa	13M	III	砂岩	(12.3)	12.3	6.9	(1,620.0)	被熱 外縁高打
76図	877	磨石・敲石類	IIa			砂岩	10.8	10.4	4.9	800.0	表面に凹み
76図	878	磨石・敲石類	IIa	12V	III	砂岩	15.3	11.4	6.4	1,600.0	
76図	879	(石皿)		11K	III	砂岩	23.9	11.5	5.8	2,470.0	台石
76図	880	磨石・敲石類	IIa	11M	III	砂岩	(11.6)	6.9	5.7	(620.0)	
77図	881	磨石・敲石類	I b	11L	III	砂岩	8.3	6.8	3.5	280.0	
77図	882	磨石・敲石類	IV	2G3G	III	ホルンフェルス	8.9	7.7	3.0	300.0	側縁録離
77図	883	磨石・敲石類	Ia	2G	III	砂岩	12.0	11.3	5.9	1,110.0	
77図	884	磨石・敲石類	Vc	12M	III	砂岩	10.1	8.1	3.0	350.0	扁平楕円形礫
77図	885	磨石・敲石類	IV	14K	III	砂岩	8.4	7.4	2.9	281.3	

第7表 石器観察表6

挿図	番号	器種	分類	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
77図	886	磨石・敲石類	II b	13L	III	砂岩	15.9	12.4	6.7	1,870.0	外縁部陥凹痕
77図	887	磨石・敲石類	II b	11L	III	砂岩	12.0	8.1	4.7	699.0	V c
77図	888	磨石・敲石類	IV	11L	III	砂岩	13.6	9.2	6.2	1,084.0	V c
77図	889	磨石・敲石類	V c	10L	III	砂岩	11.3	8.3	6.4	830.0	卵形礫
77図	890	磨石・敲石類	II b	10M	III	砂岩	11.5	9.2	5.4	790.0	
77図	891	(礫器)		12K	III	砂岩	15.2	9.9	4.5	1,100.0	端部表裏に剥離
77図	892	磨石・敲石類	III c	15K	III	砂岩	16.9	8.0	3.8	810.0	V c 側縁部凹痕
78図	893	磨石・敲石類	I b	10M	III	砂岩	(6.1)	(9.5)	4.7	(420.0)	V b
78図	894	磨石・敲石類	V c	15K	III	砂岩	9.8	7.6	4.6	483.0	扁平楕円形礫
78図	895	磨石・敲石類	IV	10L	III	砂岩	8.1	7.0	4.2	333.6	
78図	896	磨石・敲石類	II a	G 3	III	砂岩	(7.3)	8.5	4.5	(390.0)	被熱
78図	897	磨石・敲石類	III c			砂岩	7.5	7.1	4.0	290.0	
78図	898	磨石・敲石類	V c			砂岩	8.5	6.8	3.4	271.5	扁平楕円形礫
78図	899	磨石・敲石類	V c	13L	III	砂岩	9.2	7.2	4.8	445.0	被熱 卵形礫
78図	900	磨石・敲石類	V c	10M	III	砂岩	7.9	6.1	3.3	195.7	扁平楕円形礫
78図	901	磨石・敲石類	IV	16K	III	砂岩	8.1	7.0	4.5	350.0	
78図	902	磨石・敲石類	V c	10M	III	砂岩	7.4	6.3	3.9	240.5	扁平楕円形礫
78図	903	磨石・敲石類	V c	2F	III	砂岩	8.9	6.8	3.4	291.4	扁平楕円形礫
78図	904	磨石・敲石類	IV	10K	III	砂岩	11.2	8.2	2.8	380.0	
78図	905	磨石・敲石類	V c	13L	III	砂岩	9.1	6.9	4.4	380.0	卵形礫
78図	906	磨石・敲石類	V c	12M	III	砂岩	8.2	7.4	2.7	224.4	不定形扁平礫
78図	907	磨石・敲石類	V c	9M	III	砂岩	7.5	6.8	3.3	230.1	不定形扁平礫
78図	908	磨石・敲石類	V c	13M	III	砂岩	8.5	7.1	4.1	327.9	不定形扁平礫
79図	909	磨石・敲石類	IV	11L	III	砂岩	9.0	7.0	4.3	375.0	
79図	910	磨石・敲石類	IV	12M	III	砂岩	9.9	6.6	4.1	370.0	
79図	911	磨石・敲石類	V b	9N	III	砂岩	8.7	5.2	4.0	270.0	短棒状礫
79図	912	磨石・敲石類	V c	11N	III	砂岩	7.5	(5.1)	4.1	(172.8)	卵形礫
79図	913	磨石・敲石類	III c	12L	III	砂岩	9.3	6.4	4.7	387.5	IV V c
79図	914	磨石・敲石類	V c	14K	III	砂岩	10.7	6.6	4.3	449.0	乳棒状礫
79図	915	磨石・敲石類	III c			砂岩	10.1	5.2	3.5	267.6	V a
79図	916	磨石・敲石類	V c	11M	III	砂岩	10.8	5.8	3.8	287.5	短棒状礫
79図	917	磨石・敲石類	V c			砂岩	9.0	5.1	4.6	318.2	短棒状礫
79図	918	磨石・敲石類	V c	9K	III	砂岩	8.4	5.4	4.1	272.3	短棒状礫
79図	919	磨石・敲石類	V c	9M	III	砂岩	9.6	5.9	3.7	320.9	乳棒状礫
79図	920	磨石・敲石類	V c	12M	III	砂岩	8.7	5.3	4.2	269.1	短棒状礫
80図	921	磨石・敲石類	V c	12M	III	砂岩	8.0	5.5	3.5	225.3	扁平楕円形礫
80図	922	磨石・敲石類	V c	12L	III	砂岩	9.4	5.6	3.6	278.4	扁平楕円形礫
80図	923	磨石・敲石類	V c			砂岩	9.8	6.3	3.2	288.1	不定形扁平礫
80図	924	磨石・敲石類	V b	10J	III	砂岩	13.3	7.3	5.8	810.0	乳棒状礫
80図	925	磨石・敲石類	V c	14J	III	砂岩	8.9	6.3	4.5	430.0	卵形礫
80図	926	磨石・敲石類	V c	13L	III	砂岩	9.2	5.9	4.6	349.0	卵形礫
80図	927	磨石・敲石類	V c	12M	III	砂岩	8.7	7.9	4.0	440.0	不定形扁平礫
80図	928	磨石・敲石類	V c	12M	III	砂岩	9.7	6.4	3.7	331.7	不定形扁平礫
80図	929	磨石・敲石類	V c	12L	III	砂岩	10.4	7.4	4.6	560.0	不定形扁平礫
80図	930	磨石・敲石類	IV	10N	III	砂岩	9.6	6.2	2.8	260.6	扁平楕円形礫
80図	931	磨石・敲石類	V c	9K	III	砂岩	11.2	6.1	3.2	325.6	不定形扁平礫
80図	932	磨石・敲石類	V c	12M	III	砂岩	12.8	6.5	2.3	332.6	不定形扁平礫
80図	933	磨石・敲石類	V c	13K	III	砂岩	13.3	5.2	2.8	297.0	扁平棒状礫
80図	934	磨石・敲石類	V c	11K	III	砂岩	11.3	5.1	4.7	328.0	棒状礫
81図	935	磨石・敲石類	V b	11L	III	砂岩	9.4	4.2	3.6	223.9	棒状礫
81図	936	磨石・敲石類	V c	10L	III	砂岩	10.5	4.2	2.9	212.3	棒状礫
81図	937	磨石・敲石類	V c	10M	III	砂岩	12.7	3.8	3.0	243.9	棒状礫
81図	938	磨石・敲石類	V c	14K	III	砂岩	6.5	2.4	2.0	43.8	乳棒状礫
81図	939	磨石・敲石類	V c	10M	II	砂岩	10.2	4.0	3.2	180.0	棒状礫
81図	940	磨石・敲石類	V c			砂岩	10.1	3.9	2.2	133.3	扁平棒状礫

第8表 石器観察表7

挿図	番号	器種	分類	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
81図	941	磨石・敲石類	Va	10L	Ⅲ	砂岩	12.7	4.0	2.7	220.0	棒状礫
81図	942	磨石・敲石類	Ⅲc	13M	Ⅲ	砂岩	(6.0)	3.8	2.5	(89.7)	Va (棒状礫)
81図	943	磨石・敲石類	Vb	23G	Ⅲ	砂岩	15.8	5.2	3.7	520.0	棒状礫
81図	944	磨石・敲石類	Va	13K	Ⅲ	砂岩	10.6	4.0	4.0	234.1	乳棒状礫
81図	945	磨石・敲石類	Va	10M	Ⅲ	砂岩	14.4	3.9	4.0	379.0	棒状礫
81図	946	磨石・敲石類	Ⅲc	12L	Ⅲ	砂岩	6.4	5.3	2.1	115.0	側面敲打
81図	947	磨石・敲石類	Vc	14J	Ⅲ	砂岩	10.5	5.1	2.3	250.0	扁平棒状礫
81図	948	磨石・敲石類	Va	13L	Ⅲ	砂岩	10.9	4.6	2.4	200.0	扁平棒状礫
81図	949	磨石・敲石類	Vc	2DE	Ⅲ	砂岩	11.5	4.1	2.3	180.0	棒状礫
81図	950	磨石・敲石類	Ⅲc	10M	Ⅲ	砂岩	10.9	6.5	3.4	340.0	
82図	951	磨石・敲石類	Vc	土坑内	Ⅲ	砂岩	10.4	7.4	6.0	650.0	下面剥離後敲打
82図	952	石製品		11M	Ⅲ	砂岩	7.4	7.9	7.8	553.0	
82図	953	磨石・敲石類	IV	10L	Ⅲ	砂岩	7.3	7.4	4.4	375.0	端部・側縁剥離
82図	954	磨石・敲石類	IV	13M	Ⅲ	砂岩	8.2	6.4	3.5	269.4	両端剥離後敲打
82図	955	磨石・敲石類	IV	11K	Ⅲ	砂岩	8.7	7.0	4.1	318.8	端部剥離
82図	956	磨石・敲石類	Vc	11L	Ⅲ	砂岩	9.9	7.4	4.1	400.0	乳棒状礫
82図	957	磨石・敲石類	Vb	13N	Ⅲ	砂岩	11.1	6.5	4.2	500.0	(乳棒状礫)
82図	958	(礫器)		10M	Ⅱ	砂岩	13.3	6.2	4.0	420.0	端部表裏剥離

第9表 石器観察表8

挿図	番号	器種	区	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
83図	959	軽石製石器	12M	Ⅲ	軽石	5.7	6.7	4.1	24.78	
83図	960	軽石製石器	13M	Ⅲ	軽石	6.0	7.8	5.8	33.79	
83図	961	軽石製石器			軽石	7.0	5.0	3.5	20.11	
83図	962	軽石製石器			軽石	11.1	10.0	2.8	55.63	
83図	963	軽石製石器			軽石	8.8	6.7	3.0	28.84	
83図	964	軽石製石器			軽石	8.3	6.1	5.8	57.70	
83図	965	軽石製石器	11N	Ⅲ	軽石	8.4	6.2	4.1	46.23	
83図	966	軽石製石器	L		軽石	8.3	6.7	5.5	36.88	
83図	967	軽石製石器			軽石	4.6	5.7	2.7	16.08	
83図	968	軽石製石器	12M	Ⅲ	軽石	5.7	5.2	2.3	18.03	
83図	969	軽石製石器	12L	Ⅲ	軽石	10.6	7.1	4.1	98.82	

第10表 石器観察表9

挿図	番号	器種	区	層	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	加工	備考
84図	970	円盤形土製品	9L	Ⅲ	5.1	5.5	0.5	25.0	③	胴部片転用
84図	971	円盤形土製品	13M	Ⅲ	4.6	3.9	0.7	20.1	②	胴部片転用
84図	972	円盤形土製品	13L	Ⅲ	5.3	5.4	0.8	26.9	①	胴部片転用
84図	973	円盤形土製品	12N	Ⅲ	4.4	4.6	0.6	21.9	①	胴部片転用
84図	974	円盤形土製品	9M	Ⅲ	5.3	5.4	0.8	28.9	③	胴部片転用
84図	975	円盤形土製品	2D	Ⅲ	5.0	5.0	0.7	24.6	③	胴部片転用
84図	976	円盤形土製品	M	Ⅲ	4.5	4.0	0.7	17.0	②	胴部片転用
84図	977	円盤形土製品	2C	Ⅲ	4.8	5.2	0.8	26.4	①	胴部片転用
84図	978	円盤形土製品	10K	Ⅲ	5.5	4.7	0.7	26.2	①	胴部片転用
84図	979	円盤形土製品	8F	Ⅲ	4.4	4.2	0.5	14.7	②	胴部片転用
84図	980	円盤形土製品	9L	Ⅲ	3.6	4.0	0.8	17.9	①	底部片転用
84図	981	円盤形土製品	11N	Ⅲ	4.1	3.9	0.6	15.5	③	胴部片転用
84図	982	円盤形土製品	9M	Ⅲ	4.1	3.8	0.9	19.1	②	胴部片転用
84図	983	円盤形土製品	10M	Ⅲ	3.5	3.4	0.8	11.6	②	胴部片転用
84図	984	円盤形土製品			4.2	3.1	0.6	13.3	①	一部欠損, 胴部片転用
84図	985	円盤形土製品	11M	Ⅲ	4.9	4.1	0.7	21.1	②	一部欠損, 胴部片転用
84図	986	円盤形土製品	12M	Ⅲ	4.6	4.8	0.6	18.1	②	一部欠損, 胴部片転用
84図	987	円盤形土製品	13J	Ⅲ	4.5	4.3	0.8	21.6	①	一部欠損, 胴部片転用
84図	988	円盤形土製品	M	Ⅲ	4.5	4.2	0.7	15.6	①	一部欠損, 胴部片転用
84図	989	円盤形土製品	2DE	土手	5.43	5.4	0.9	35.3		
84図	990	小型扁平円礫	10L	Ⅲ	4.7	4.4	1.8	52.0		
84図	991	小型扁平円礫	13M	Ⅲ	5.2	5.4	1.5	52.4		

第V章 まとめにかえて

浅川牧遺跡は、種子島本島の東海岸にあたり、中央山塊から東に延びた標高約58mの舌状台地の基部に位置している。

今回の浅川牧Ⅱ遺跡は、縄文時代後期中葉を主体とする遺跡である。遺構としては竪穴住居が1基と土坑が66基発見された。

竪穴住居は直径4,5mの円形を呈し、深さは約50cmである。床面はほぼ水平となる。柱穴は確認できなかった。覆土からは一湊式土器のみが出土することから縄文後期中葉に位置づけられ、しかも一湊式に伴う住居として貴重な発見である。なお、住居跡が位置する一帯に遺跡は広がることが予想されたため、設計変更によって当住居跡も含め周辺は盛土で保存することとなった。これまで本県においては、縄文後期の竪穴住居の発見例は鹿児島市草貝塚や田代町立神遺跡で報告されているのみである。

土坑は計66基発見され、ピット状の小形から1m前後の規模で大小さまざまあり、全体的にその分布もまとまりのない状況であった。大半は素堀りの土坑で性格は不明であるが、その中でも3号、13号は規模も大きく深さも深いことや、土器や礫が浮いた状況でまとまって検出される特異な土坑である。他の土坑からも市来式が出土する事から縄文後期中葉に比定される。

出土土器については、縄文時代後期中葉の市来式土器が最も出度量が多い。Ⅰ類・Ⅱ類は縄文後期前葉に位置づけられている南九州を主要な分布域とする指宿式土器の範疇にある一群である。器形は頸部でわずかにくびれ、口縁部が緩やかに外反するものや、直行する口縁となる。胴部外面上半分を中心に展開する文様は、短線の2本平行沈線文・曲線文で末端は入組繋ぎ文を有すもので、指宿式の2本平行線文は磨消縄文を前提とした文様といわれる。Ⅰ類は磨消縄文を施した土器である。福田KⅡ式の影響を受けたものと思われる。異形土器として取り上げた393, 396, 397は鉢形土器の口縁部に立体的に飾り付けされた装飾部で394, 395は鉢形土器の口縁部である。文様は沈線文や連点文を施し色調は赤味を帯び、胎土の粒子が粗い特徴がある。器形・形状・文様構成から指宿土器に包括される土器である。この種の土器は山川町成川遺跡出土の土器(色調は赤味を帯び、胎土の粒子が粗い)と極似し、種子島の土器とは様相が異なっていることから、土器が直接持ち込まれたものと推定され南九州との交流を考える上で貴重な資料といえようⅡ類は擬縄文を施す一群である。2本平行沈線を基本とする文様間に貝殻腹縁刺突文で擬縄文とする。

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類土器は本遺跡の主体をなし、いわゆる縄文後期中葉の市来式土器様式である。市来式土器については河口貞徳氏によって市来Ⅰ～Ⅲ期に区分されている。

Ⅰ期に相当するものとしてⅢ類がある。器形としては、平縁口縁部(ⅢA)と4か所に頂部をもつ波状口縁(ⅢB)の2種があり、口縁部は外反しその上面を拡張して狭い文様帯(口縁断面が三角形を呈す)とする。なお、口縁の形状が内湾して稜を持つⅢA-1と充実して肥厚するⅢA-2に細分される。文様には貝殻文・沈線文・連点文を施す。文様帯が狭いことから単純な文様となる。頸部にも文様を施すものもあるが数は少ない。器面は貝殻腹縁で調整されている。松山式土器に比定される土器群である

Ⅱ期に相当するものとしてⅣ類がある。Ⅱ期の土器様式は最盛期から衰退期前の土器群で従来の

市来式土器の大部分が該当する。器形として口縁部上面は肥厚して間延びし、文様帯が発達して「く」字状に口縁下に稜をもつ。平縁口縁(ⅣA)と4か所に頂部をもつ山形口縁(ⅣB)の2種とがあり、そこに爪形状刺突文・凹線文・沈線文・貝殻腹縁刺突文等を単独にあるいは組み合わせで文様を施文する。ⅣA-4は口縁部は無文である。ⅣBの波状口縁の頂部裏面には連点文・爪形文・沈線文等で簡単な文様を付し、また文様が口縁部をあふれ胴上部まで広がる(292~303)ものもみられる。この時期になると深鉢の他に脚台付皿や小鉢や特殊な器形の土器が出土する。378~386は台付皿形土器である。また、387~392は壺形土器の口縁部である。形態や文様は市来式土器を基本にした華麗な文様を施文している。また、399は壺形土器の胴部と思われ沈線文やキザミ目文を丁寧に施している。この種の壺形土器は西之表市納曾遺跡、中種子町鷹取遺跡、本土では指宿市大渡遺跡、横川町蛭原遺跡で類例が報告されている。

Ⅲ期に相当するものとしてⅥ類がある。Ⅲ期は終末期の土器で従来の市来式と草野式の名残りで波状口縁部をもつものが多くなる。口縁部の肥厚がしだいに形式的なものとなって目立たなくなり、口縁部が緩く屈曲して逆「く」字形をなす。文様も華やかさは消えて、頸部に貝殻腹縁刺突文を付す平縁口縁(ⅥA)と口縁部や頸部に羽状・斜位に貝殻腹縁刺突文や短沈線文を巡らす山形口縁(ⅥB)があり、丸尾タイプの土器群である。この期の土器は、県本土の大隅半島から宮崎県南部にかけて多く分布し、薩摩半島や大隅諸島にはわずかに点在するのみである。なお、ⅥB-1に分類した一群は本田道輝氏の分類によると一湊式土器様式におよぶ可能性もあることを指摘しておきたい。

一湊式土器(453~640)は市来式土器のⅡ期後半頃に位置づけられている土器群である。器種は小さな平底で底部立ち上がりはわずかに内傾し、直線的に開いた胴部から直行する口縁部となる。口縁部は平縁と波状口縁の2種がある。口唇部は平坦に仕上げる傾向にある。器壁は均一で薄く金雲母を含むものが多い。文様帯は口縁部内外面上位と口唇部に縮小され、平坦な口唇部に篋キザミ目文と口縁部内外上位に篋キザミ目文と連点文を丁寧に施文している。

本土では薩摩半島加世田市上加世田遺跡で1点報告されているが、一湊式土器様式はその分布から地域的要素の高いものであり、大隅諸島に成立し、以後独自の文化圏の中で縄文晩期中葉頃まで存続するとされ、時間幅に対応させて細分化しようとする試みもある。

石器については、磨製石斧は定角式および乳棒状の2形態が出土しており、一般的に剥離→敲打→研磨の製作過程がみられるが、粗略な製品も多い。また、打製石斧としたもの以外にも、二次的に同様の使用が考えられる資料がある。楔状あるいは敲打器・打割器として転用されたとみられるものも多く、砂岩製の片刃・両刃の礫器にも同様の用法を想定できる。

剥片石器は砂岩剥片に調整剥離を加えたスクレイパー状の石器のみで、縄文時代に一般的な石鏃・石匙等の出土は確認されていない。これに対し磨石・敲石類、石皿は極めて大量に出土している。石皿には、「平坦、もしくは全体的に浅い凹面を呈する」Ⅰ類、「縁を残して、中央が弓なりに凹む」Ⅱ類、「幅広の縁をもち、中央が溝状に凹み断面形がU字形を呈する」Ⅲ類があり、機能部の状況もから数種の用法が並存するものとする。いずれも容易に移動することが困難な大型のものがみられ、すべて砂岩製である。磨石・敲石類は形状や形態、使用痕等に基づき細分したが、一般的な分類に即していえば、Ⅰ類は磨石、Ⅱ類が磨・敲石、Ⅲa・Ⅲb類が凹石、Ⅲc類は敲石、Ⅳ・Ⅴ類がハンマーストーンに該当する。使用石材のほとんどが砂岩である。凹石の用途については、

堅果類の打割具、発火具とする説があるが、Ⅲ類においてみられる「凹み」、「浅い凹み」、「アバタ状の敲打痕」は、その様態は異なるものの、しばしば同一個体中に共存してみられ、かつ礫面上の位置や大きさ（範囲）には共通する傾向があり、一連の使用によって連続的に生ずる場合があるとみられる。また、Ⅳ・Ⅴ類にみられる面取り状に敲打による「つぶれ」面や擦れ状の面（擦過面）は、石器製作の際に手ごろな礫を手握して振り子状に運動させ、剥片剥離や剥離調整を行った場合、ハンマーストーンの端部に残る敲打の痕跡と同じもので、ハンマーストーンの一つとみられる。また形態・重量・大きさの変異は作業対象の大きさや硬さの違いによるものと思われが、Ⅳ・Ⅴ類では200g～500gのものがほとんどで、Ⅲ類も同様の傾向を示す。石製品とした952は、底面の磨面を使用部とみる事も可能ではあるが、全体形はやや不正形ながら石冠、クガニ石等の石製品との関連も考えられる。

軽石製品の溝状の凹みをもつものは、溝幅が1.1cmを平均値とし、最大で1.4cm、最小で0.9cmと極めて近似した値を示す。溝の方向にそった線状痕が認められることから、細い棒状もしくは半弧状の丸みのある対象物を研磨するための研磨具としての利用も考えられる。

土製円盤型加工品は縄文時代各期の遺跡で出土するが、特に縄文時代後期に出土数の多い遺跡が多いとされる。図示した資料はいずれも無孔の円盤型で、周縁加工には精粗の差がみられる。またこれに類似した石製加工品が出土しているが、多数の土製品が出土した志布志町の中原遺跡などでも同様の石製品が出土している。

石器石材についてみると、石斧類を除くその他の器種のほとんどが砂岩の転礫を素材として利用している。遺跡の所在する種子島の中部以北では古第三紀に起源する堆積岩系の熊毛層群が基盤となっており、特に遺跡周辺の手前では硬質の砂岩円礫が豊富に供給される環境にある。種子島の縄文時代遺跡ではこれを反映して大型の石皿や大量の磨石・敲打石類が出土する例が各時期においてみられる。また、黒曜石・チャート・黒色安山岩など同島に産しない石材の搬入がほとんどみられず、石鏃・石匙など小型の剥片石器類がみられないという本遺跡の石器組成の特徴については、石材供給環境の変化により残存しにくい骨角器・木器等への代替が図られた可能性、人的・自然的要因を背景とした資源状況や文化的背景に基づく植物質食料への過度の傾斜など生業形態の特殊性、遺跡自体が生産活動の一部分のみ特化して行われる性格を持つ場合等、様々な要因が考えられ、今後の資料の増加を待ち検討したい。

参考文献

- 出口浩・繁昌正幸「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)』鹿児島県教育委員会 1983年3月
堂込秀人他「姪原遺跡」『横川町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』横川町教育委員会 1991年3月
吉永正史・東和幸「立神遺跡」『田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』田代町教育委員会 1990年3月
青崎和憲・繁昌正幸「上加世田遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』加世田市教育委員会 1985年
河口貞徳「南九州後期の縄文式土器―市来式土器―」『考古学雑誌 42』1957年
上村俊雄「一湊式土器の編年的位置について」『南島考古 10』沖縄考古学会 1986年
本田道輝「市来式土器」『縄文文化の研究 4』雄山閣 1981年
安達厚三「石皿」『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣
瀬戸口望・新東晃一「中原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)』志布志町教育委員会 1985年

新東晃一・堂込秀人「野大野A遺跡 上瀬田A遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』南種子町教育委員会1991年
鈴木道之助 『図録・石器入門事典〈縄文〉』柏書房1991年
中嶋哲郎・牛ノ濱修 『麦之浦遺跡』川内市土地開発公社 1987年
出口浩・繁昌正幸 「一湊松山遺跡」『上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書』 上屋久町教育委員会 1981年

版 图



浅川牧(Ⅱ)遺跡



浅川牧(Ⅰ)遺跡

図版 2



浅川牧(Ⅱ)遺跡発掘風景



浅川牧(Ⅱ)遺跡調査区

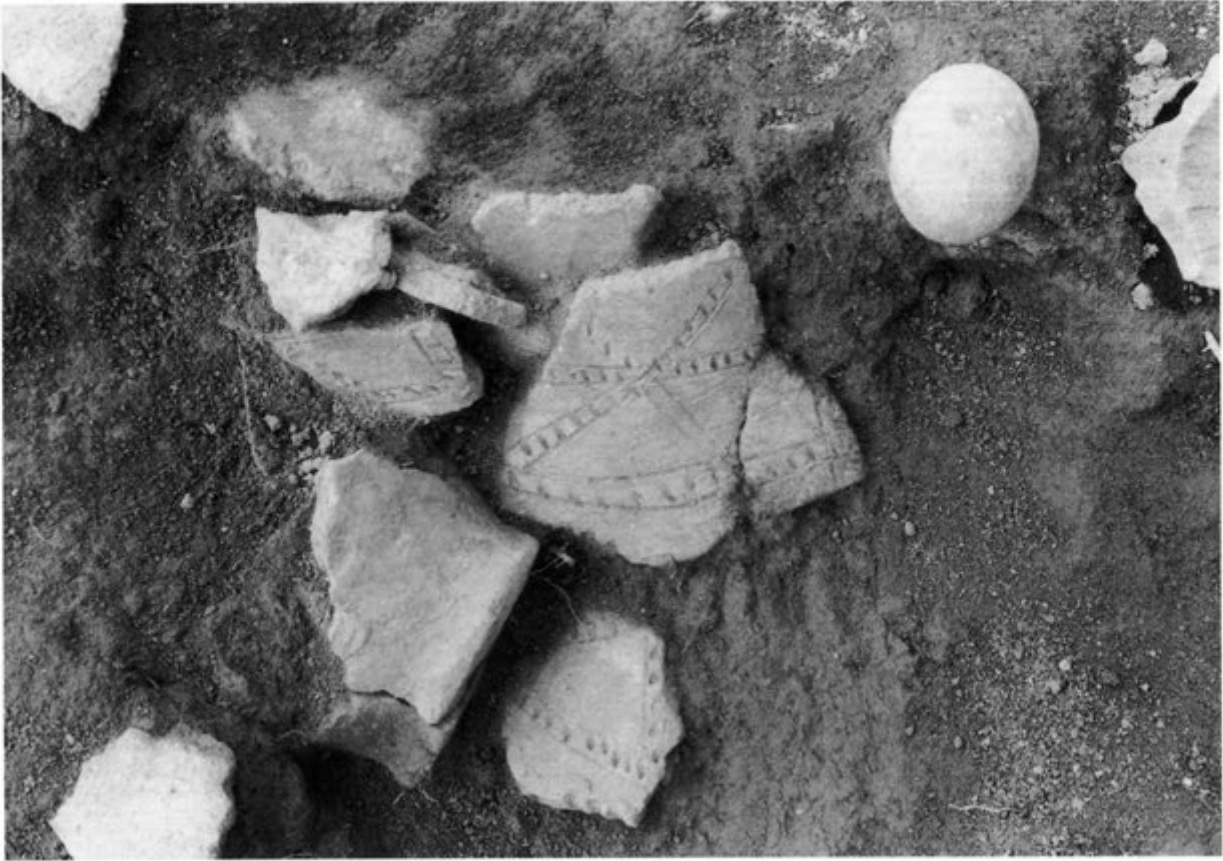


浅川牧(Ⅱ)遺跡



土坑出土状況

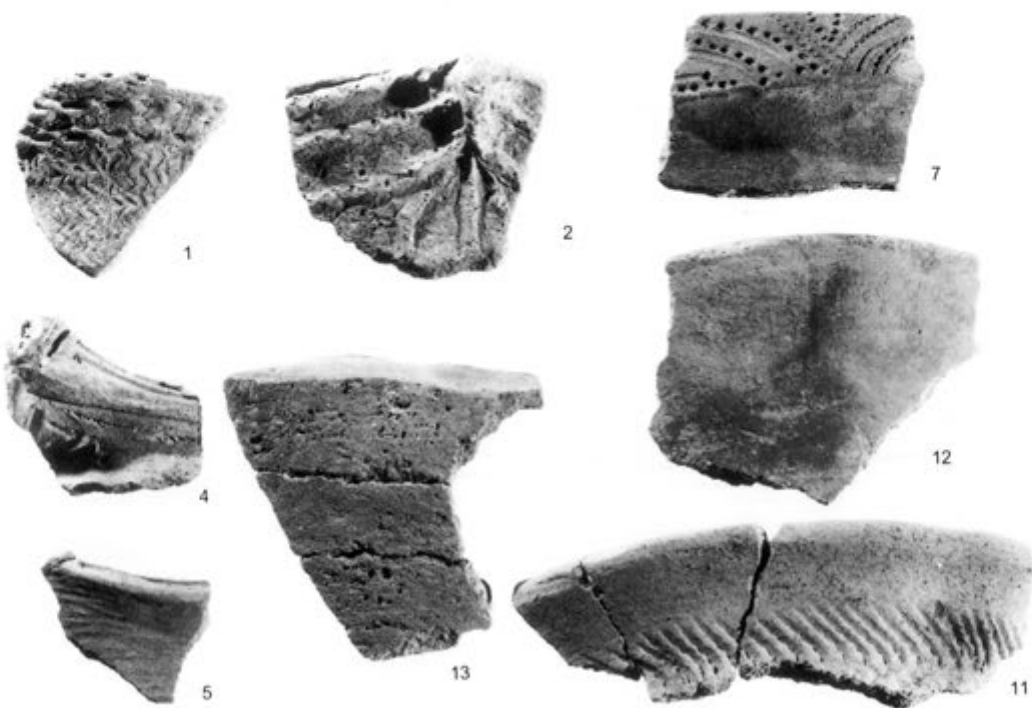
図版4



土器出土状況



現和中学校遺跡見学会





17



20



19



21



18



23



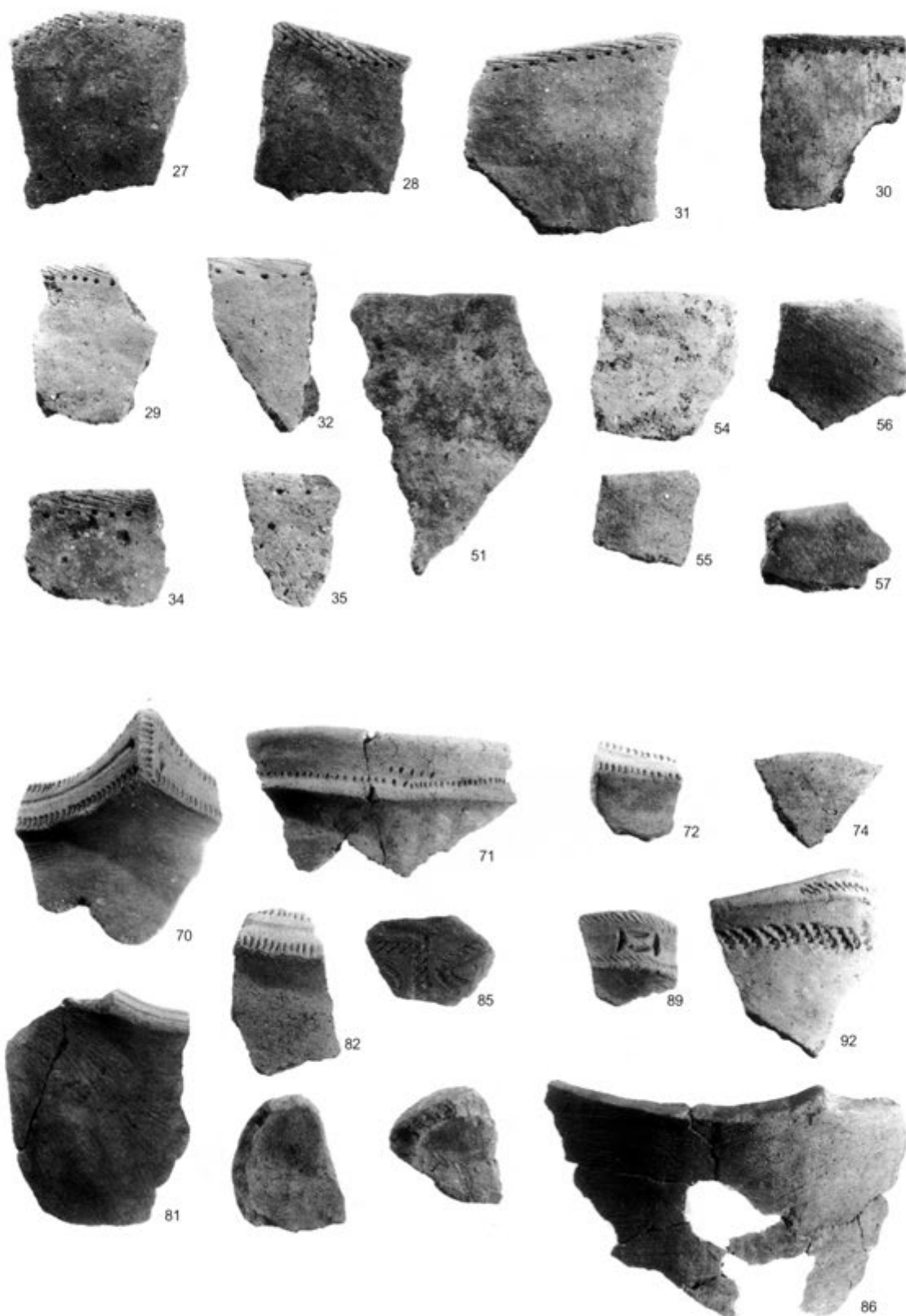
24



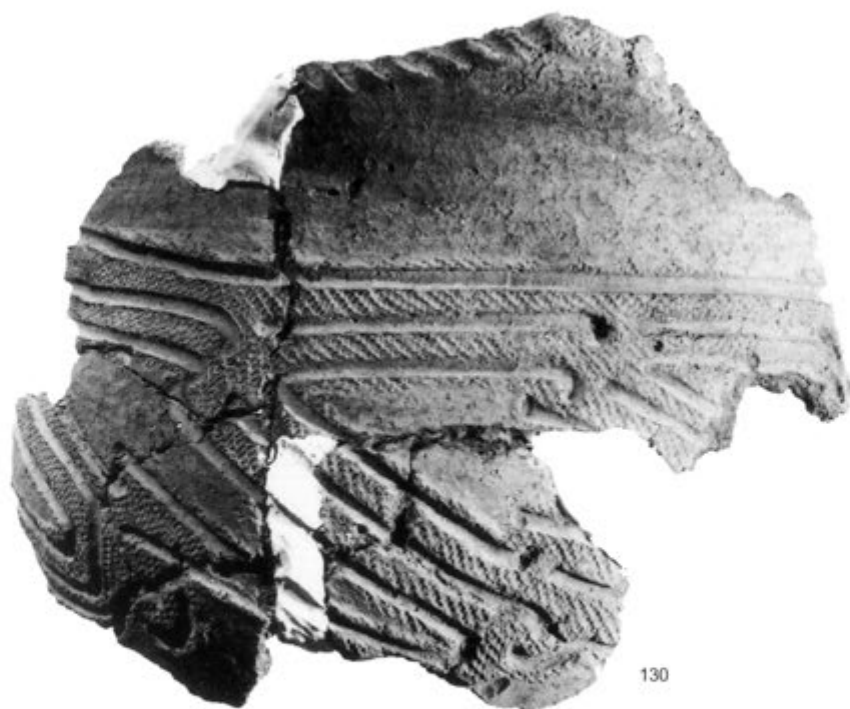
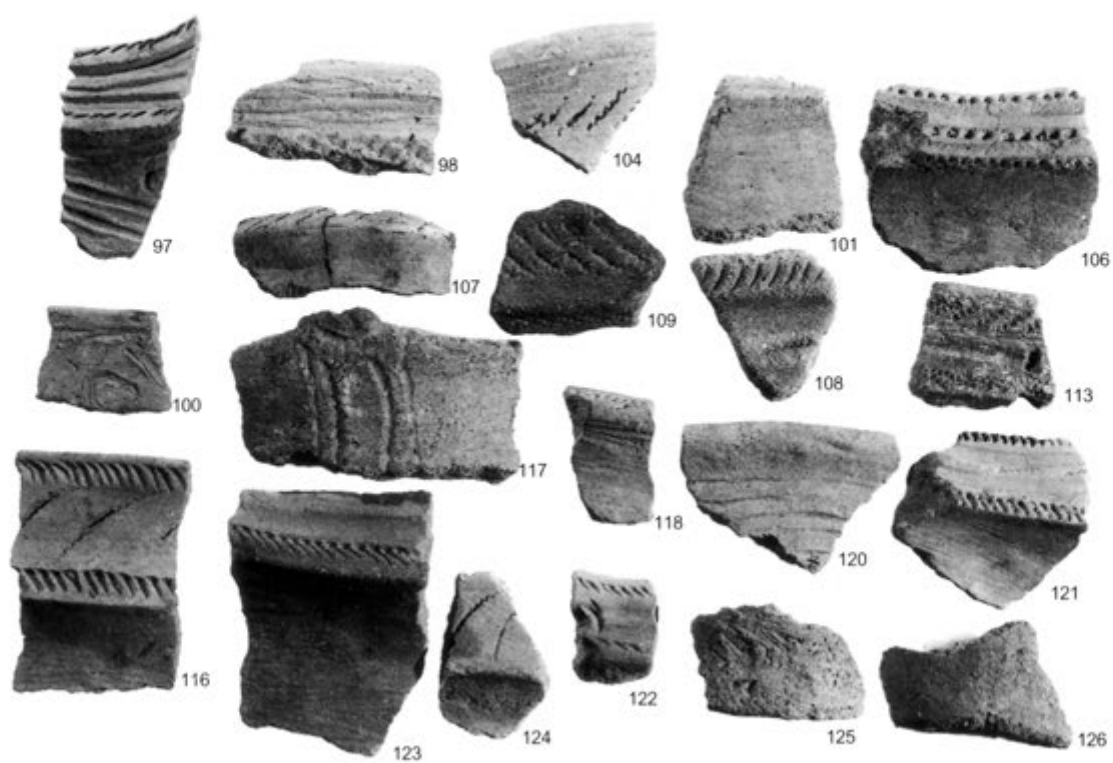
25

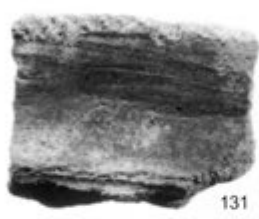


26

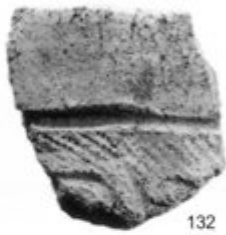


图版 8





131



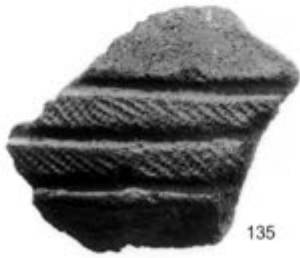
132



133



134



135



137



136



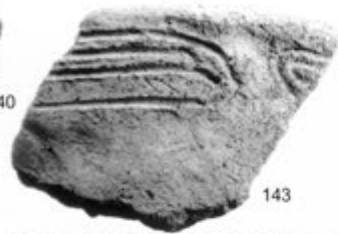
138



139



140



143



142



141



145



146



148



144



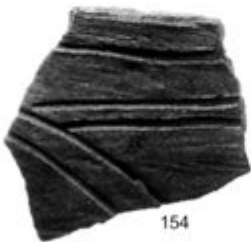
150



147



152



154



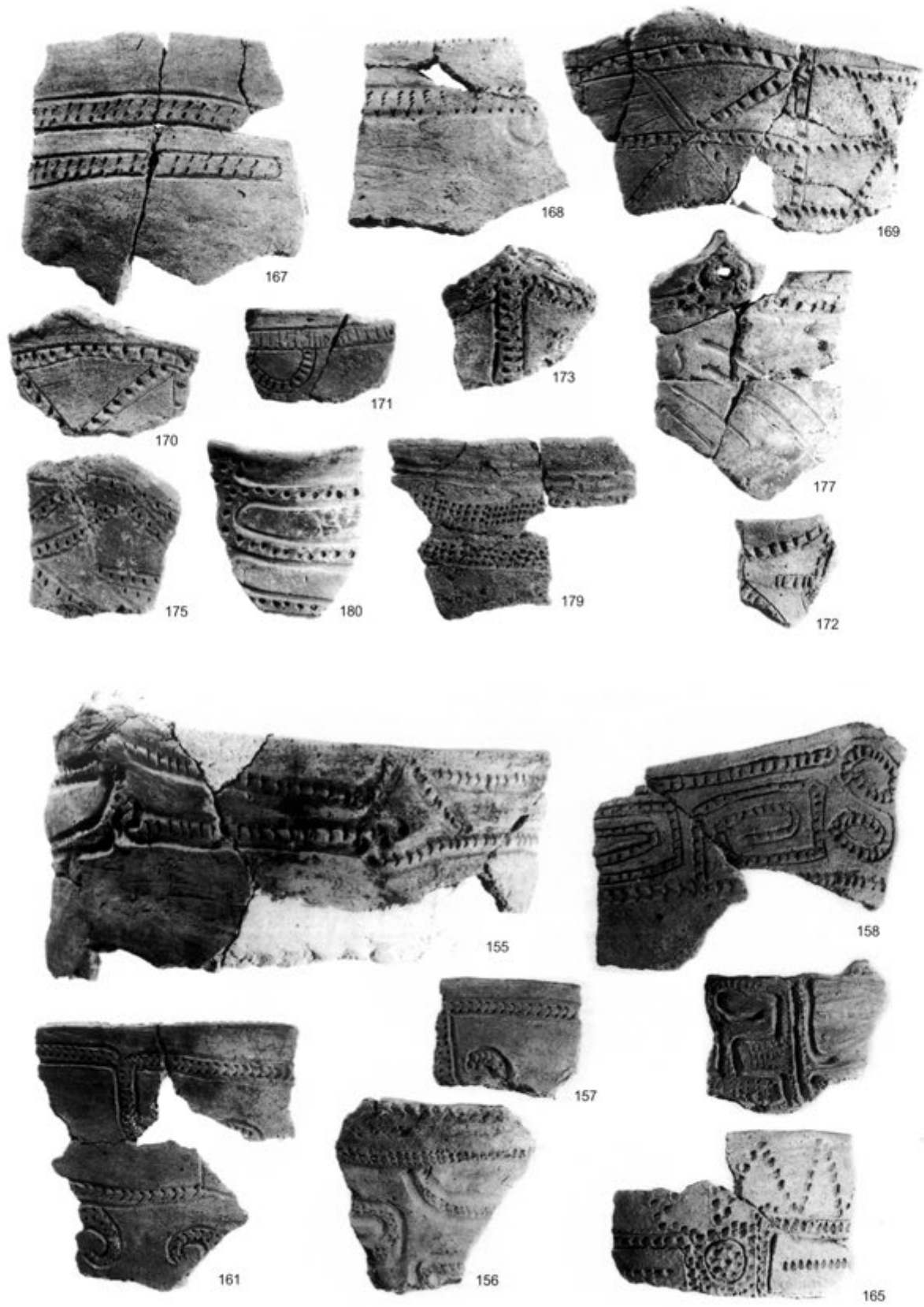
151

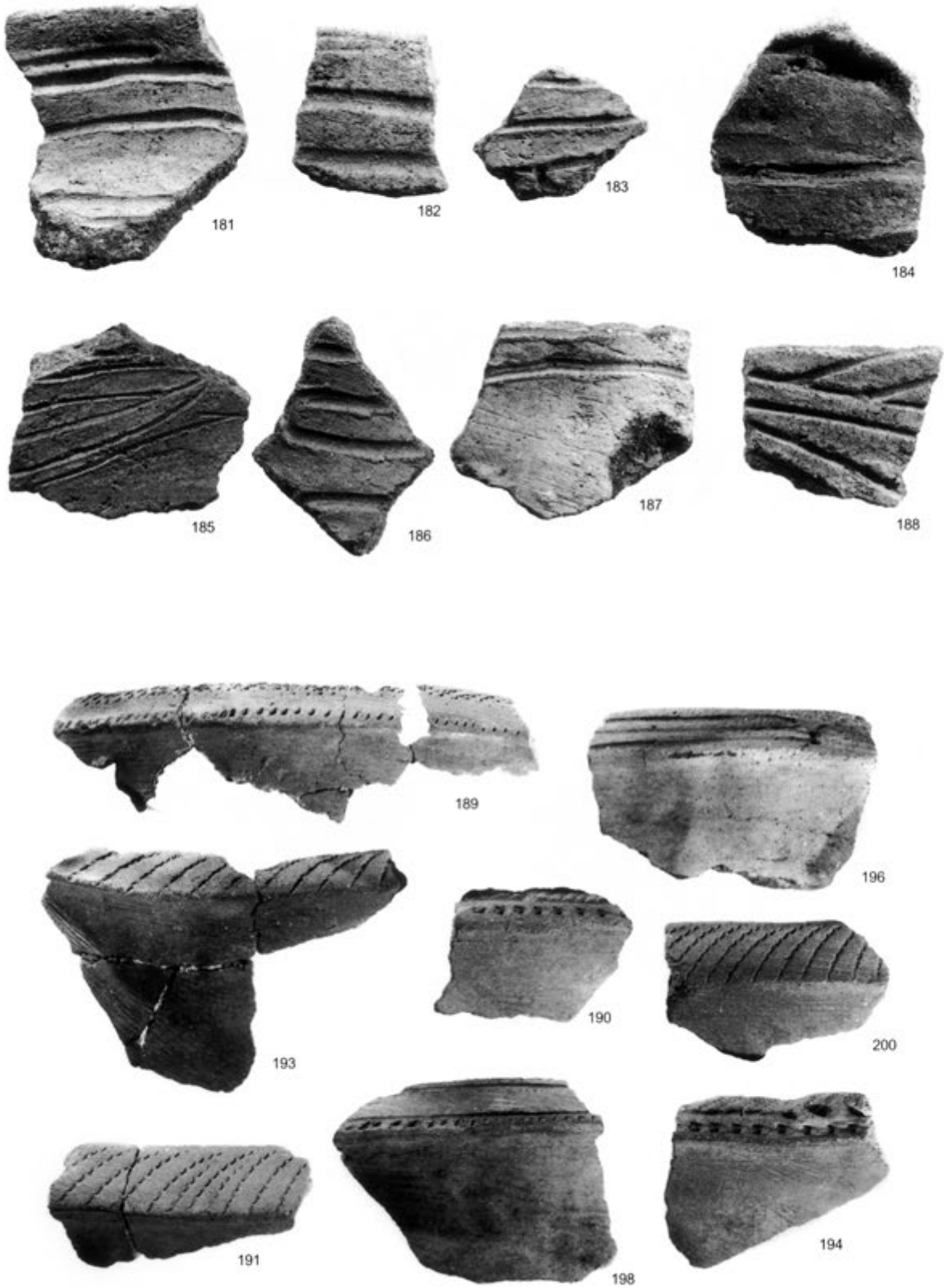


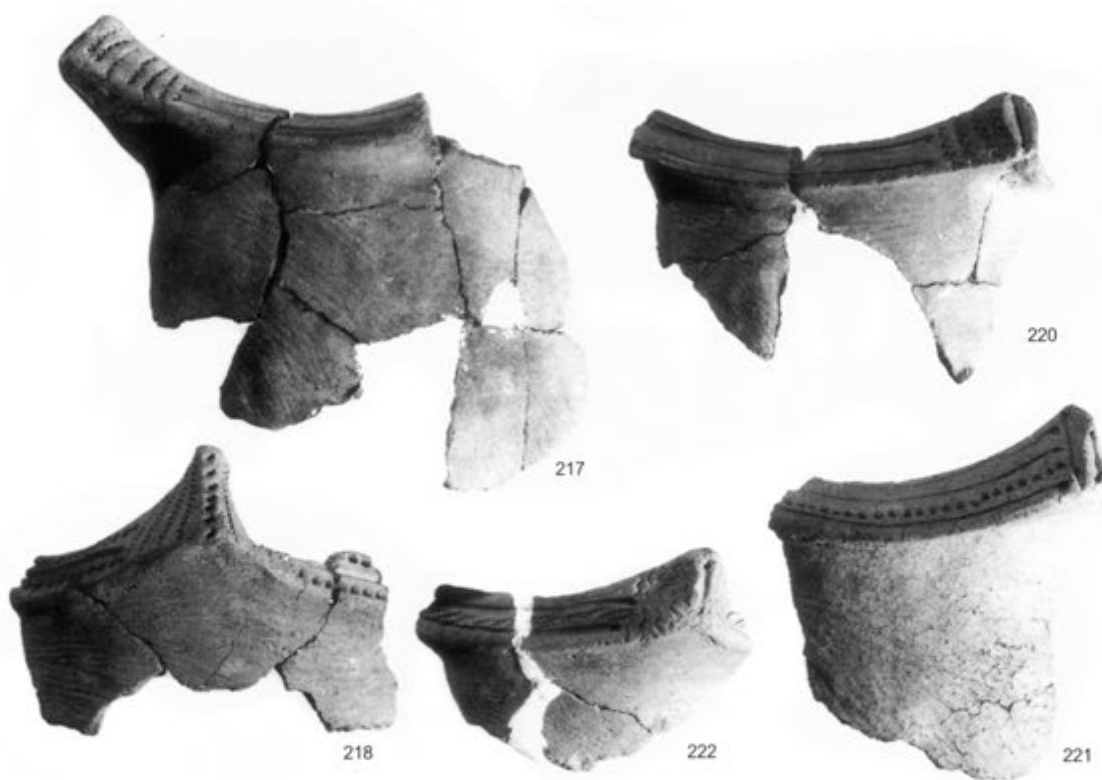
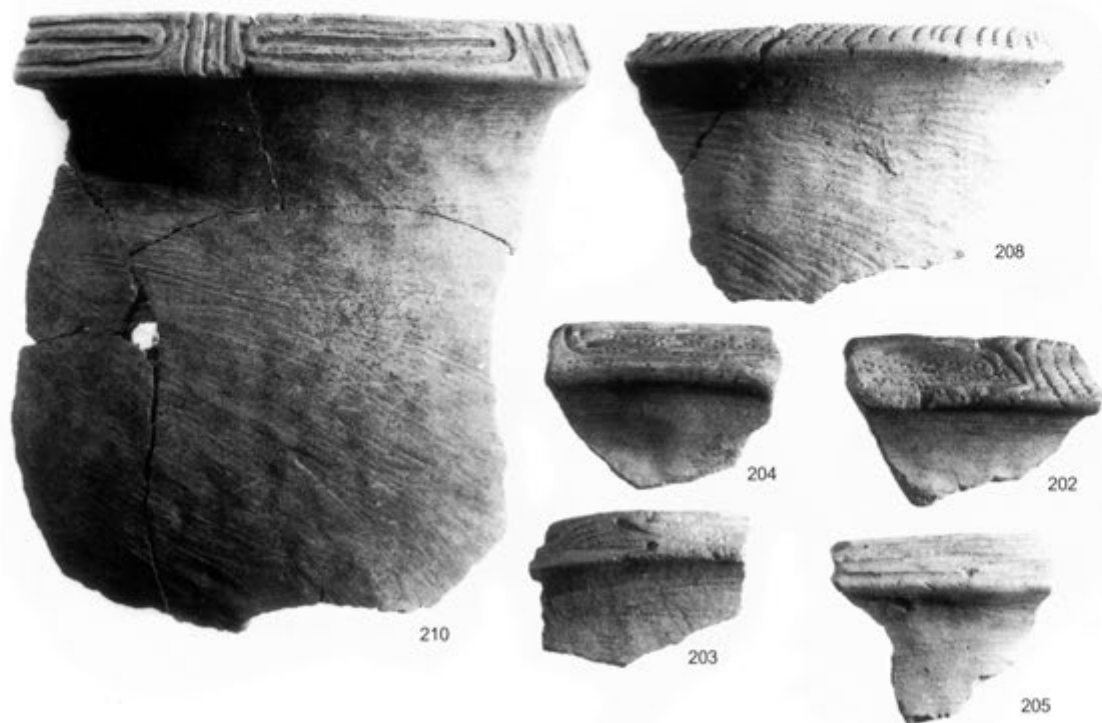
153



149









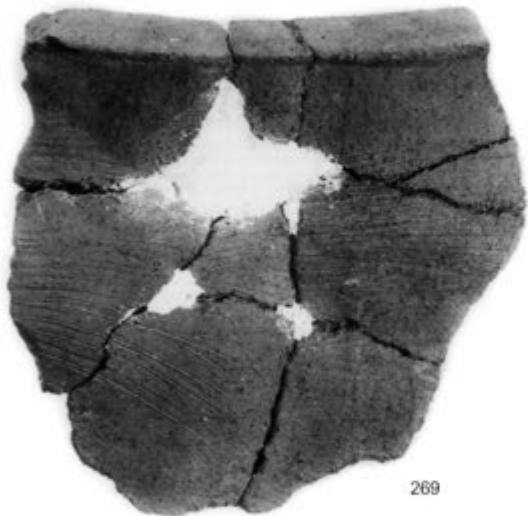
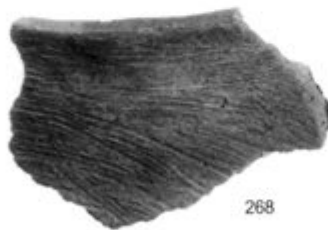
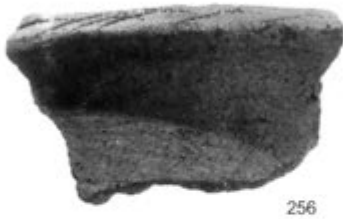
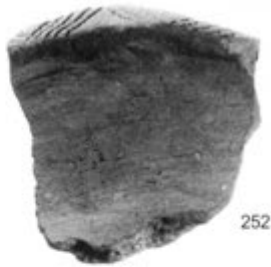
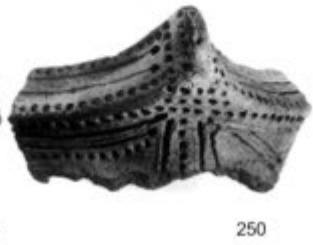
219



278



430





273



274



276



275



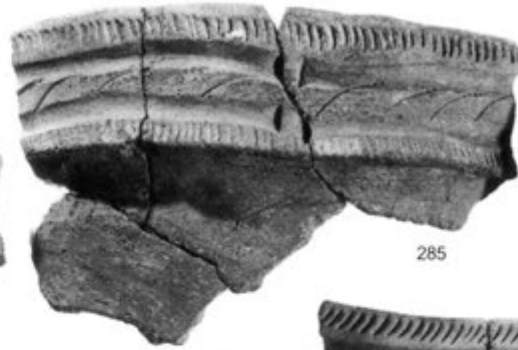
277



283



284



285



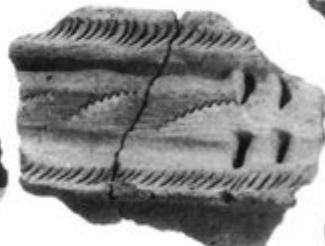
286



287



290



288



289



292



293



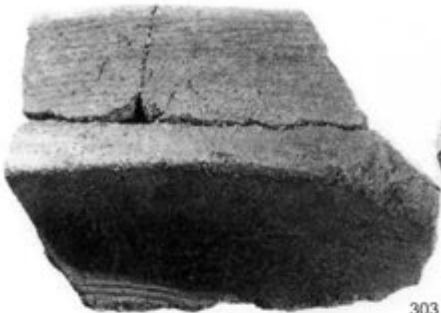
295



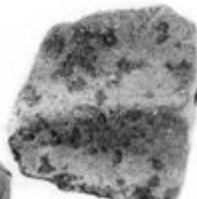
299



296



303



304



305



306



310



307



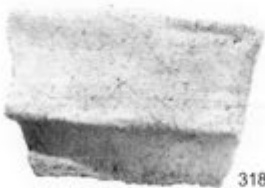
308



309



314



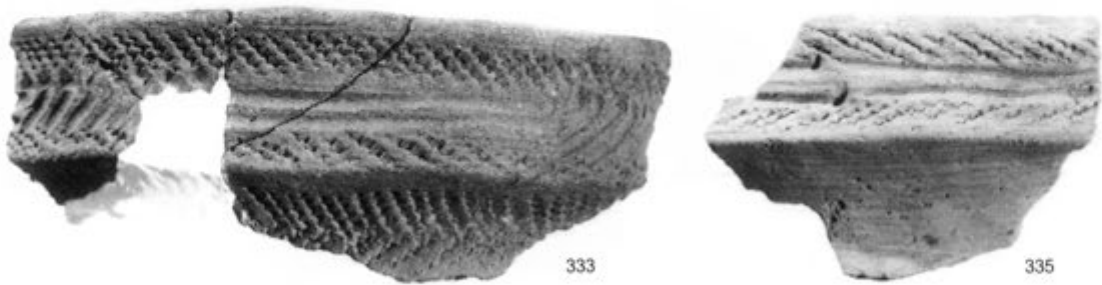
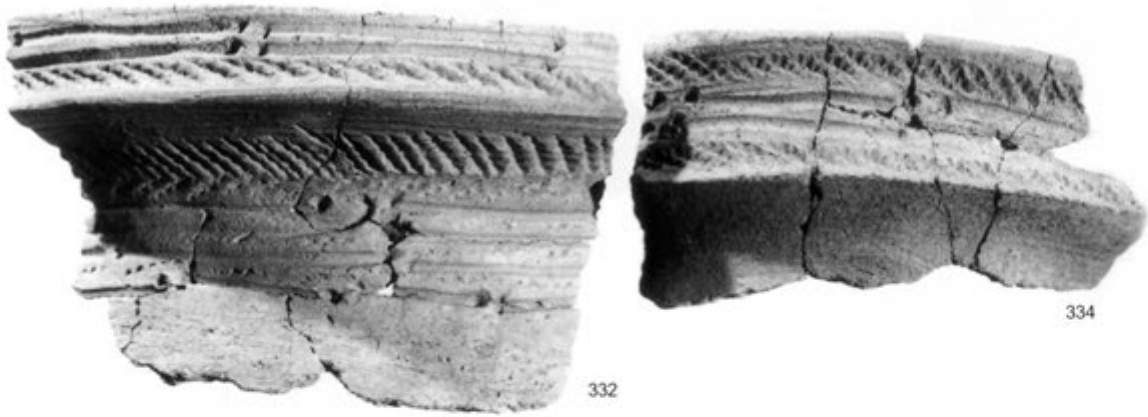
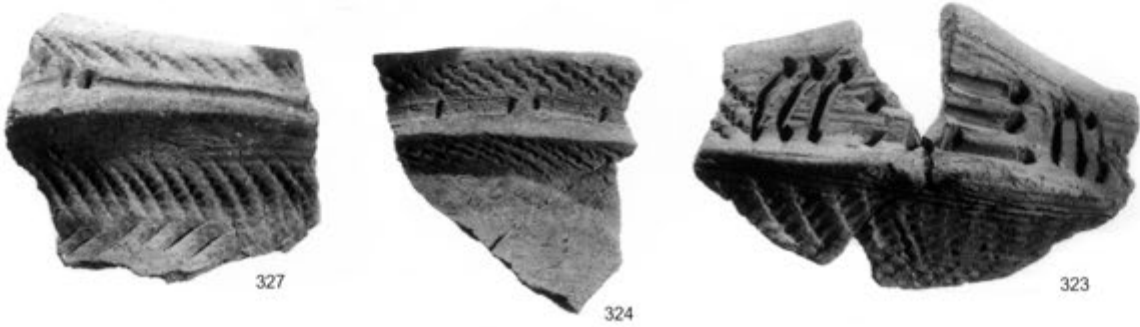
318

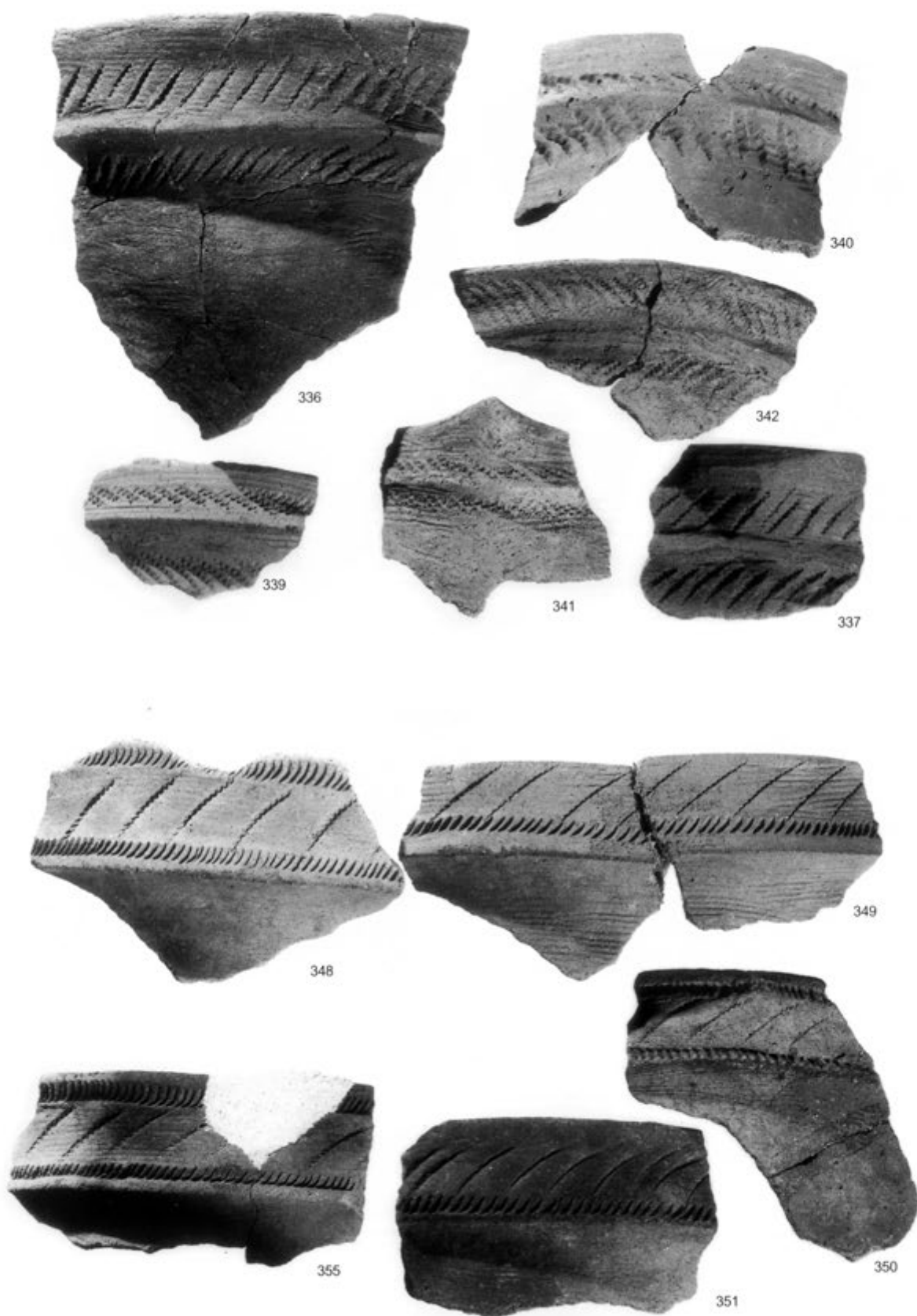


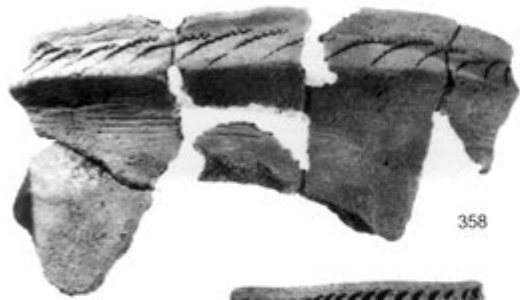
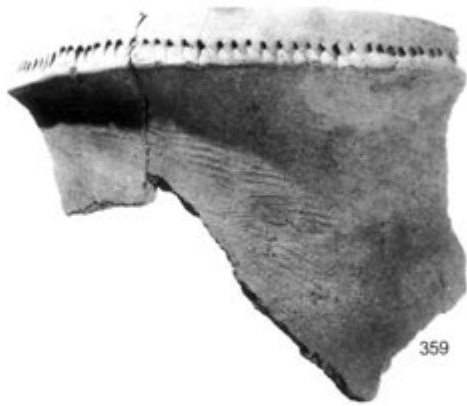
312



316











387



388



389



390



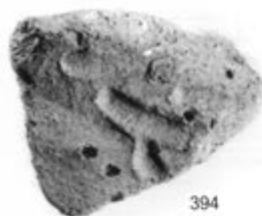
392



391



393



394



395



399



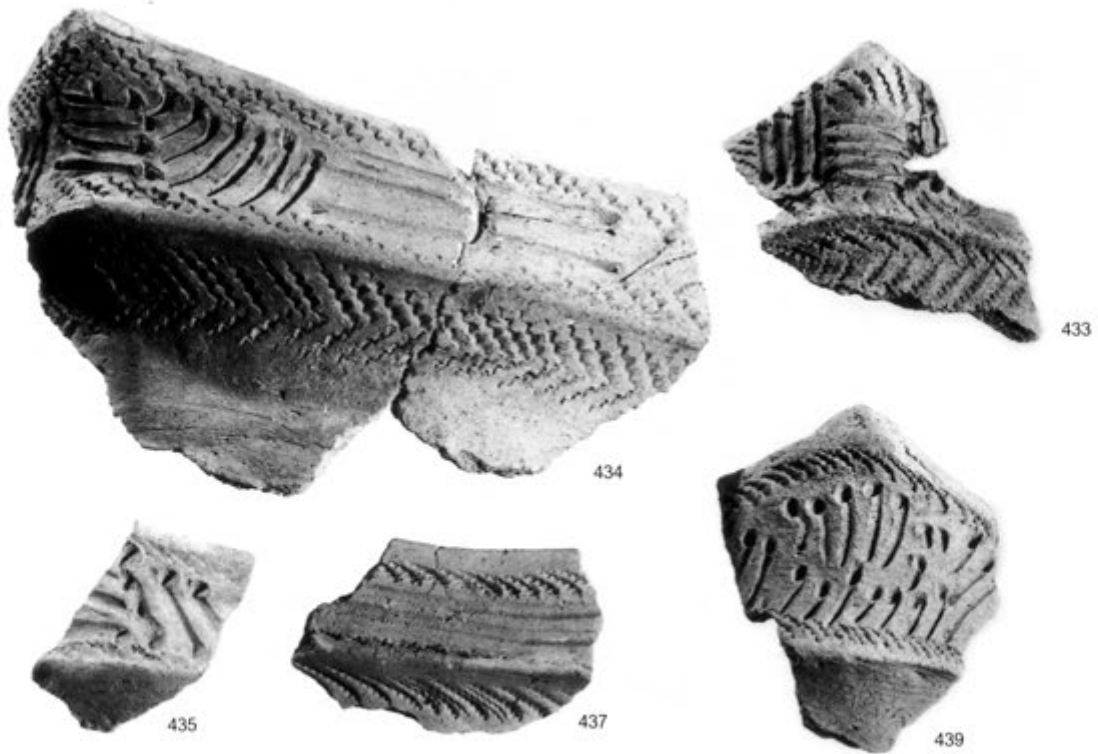
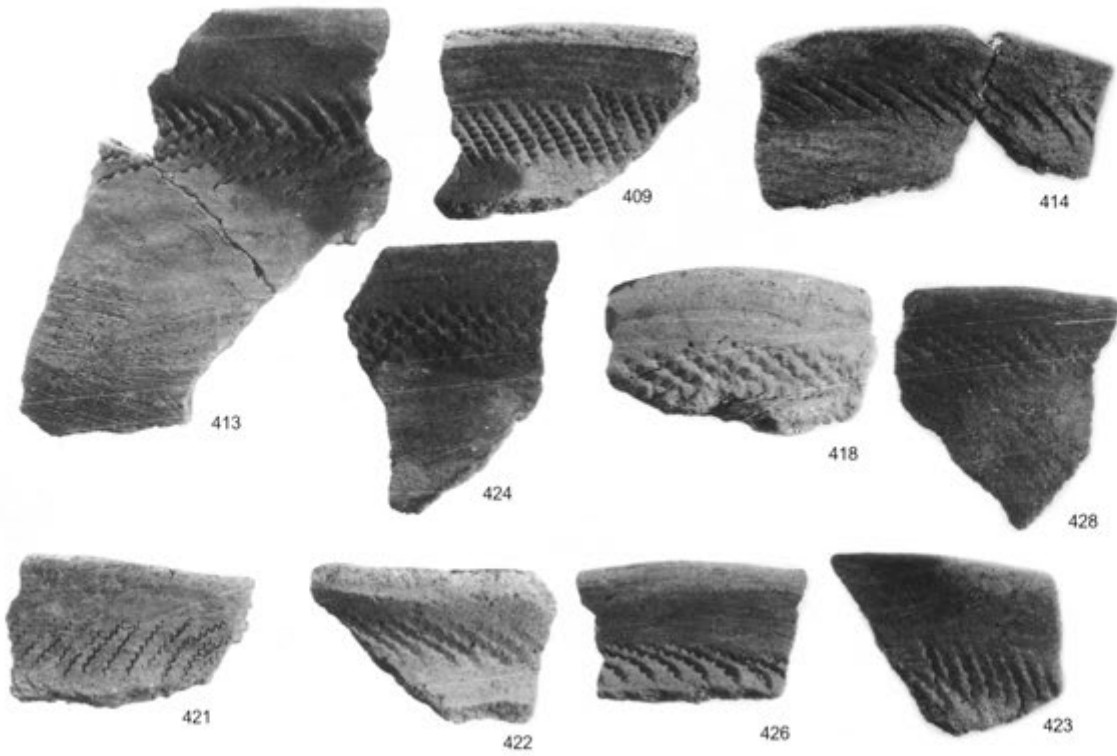
396

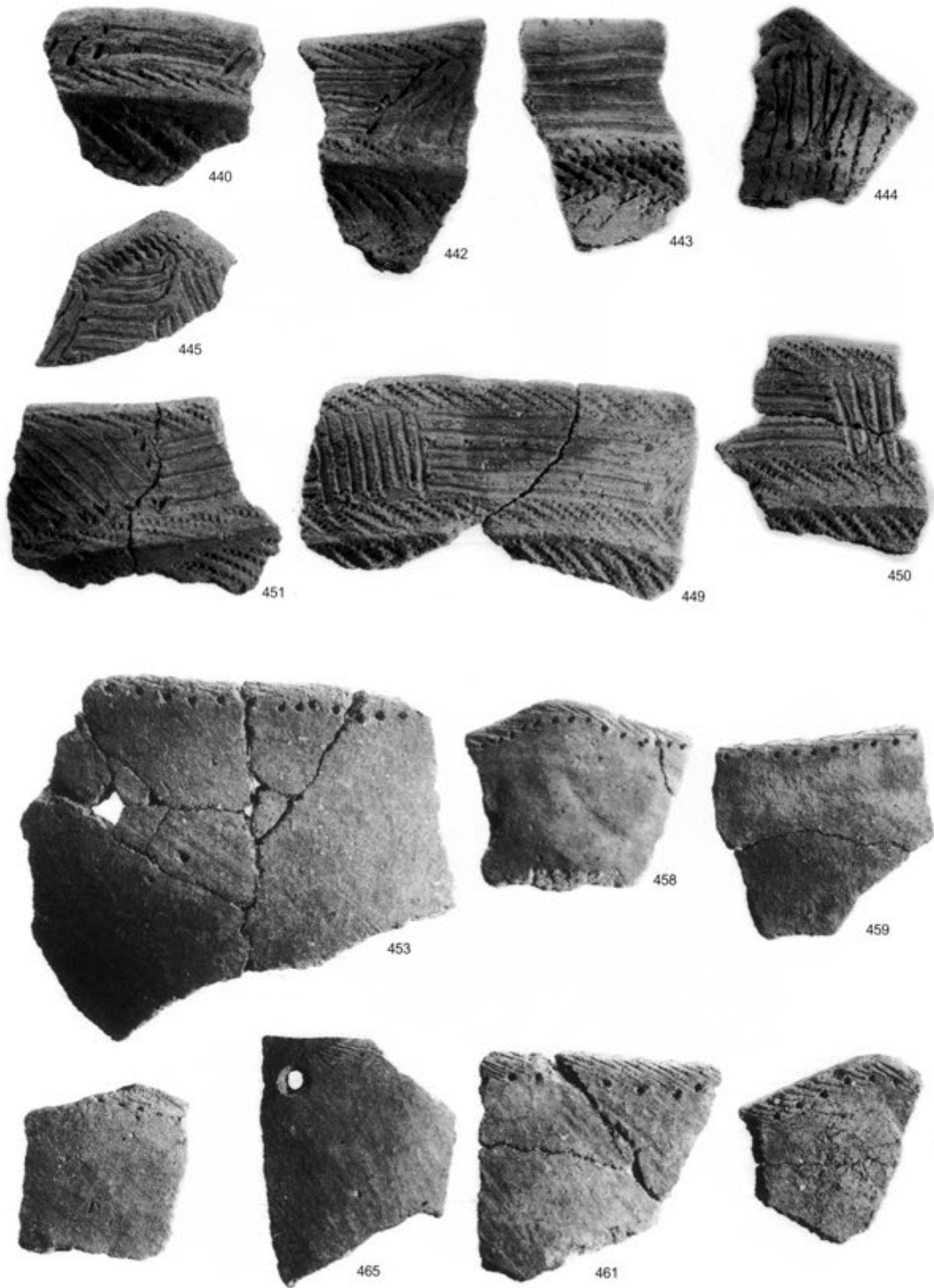


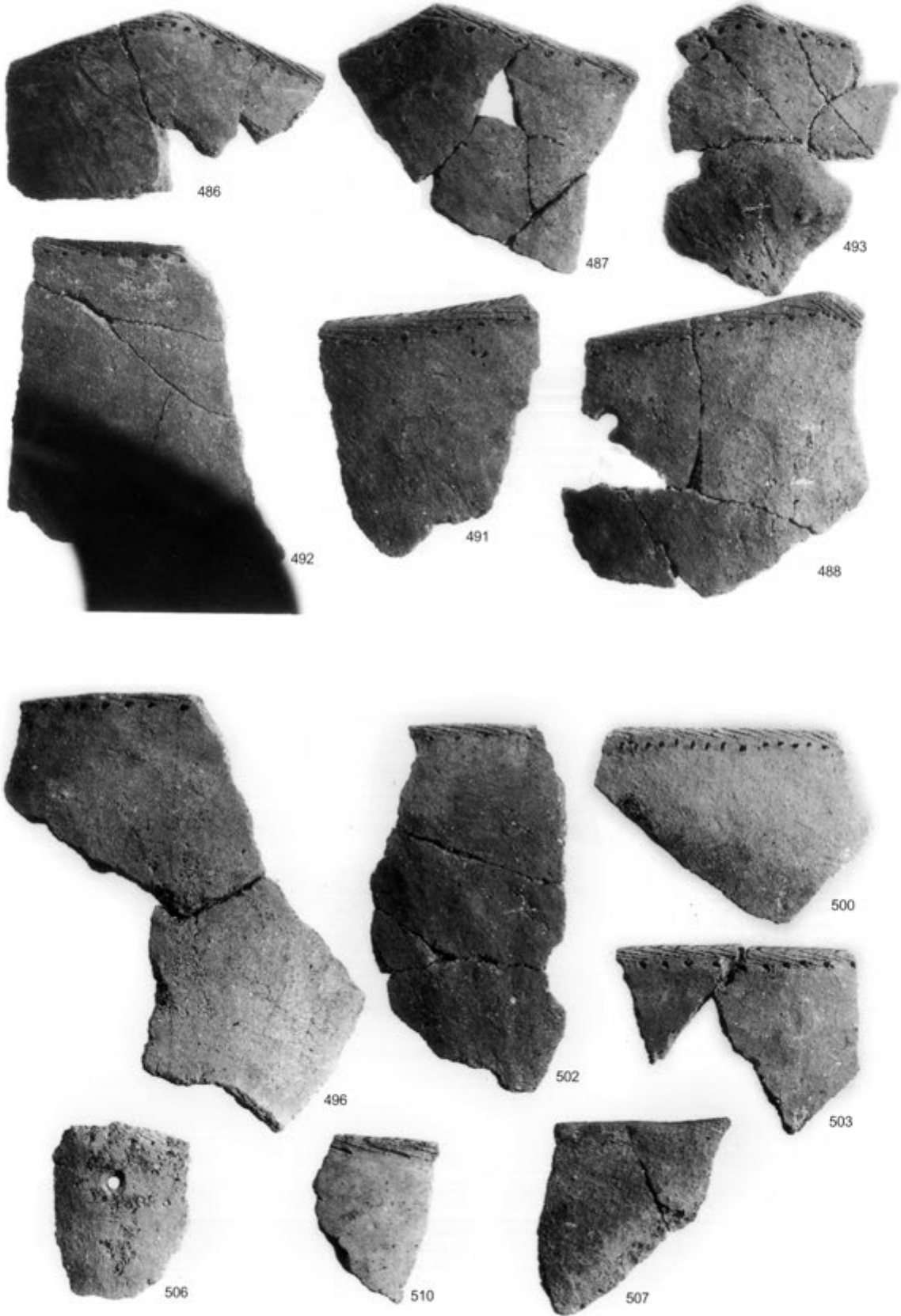
400

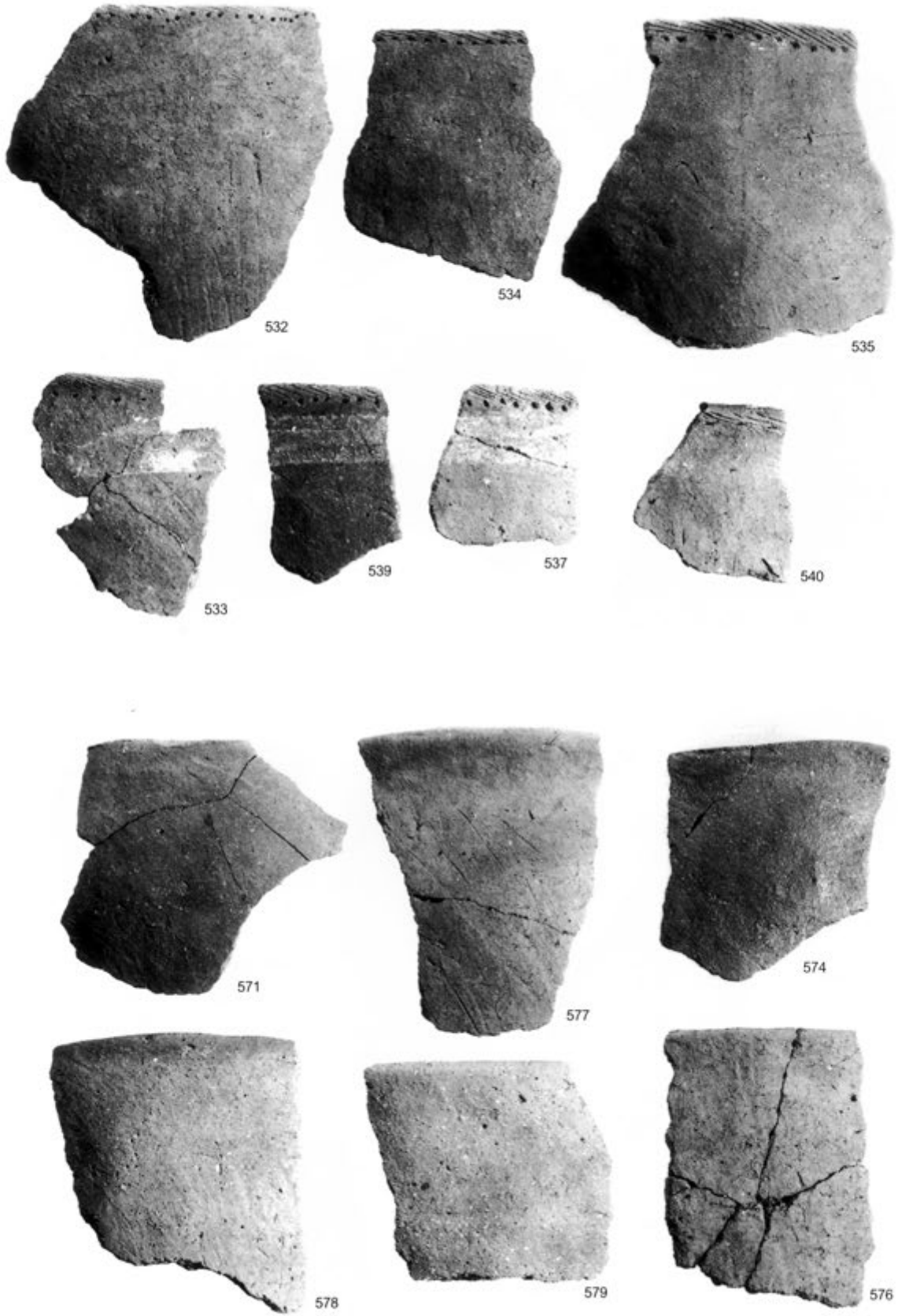


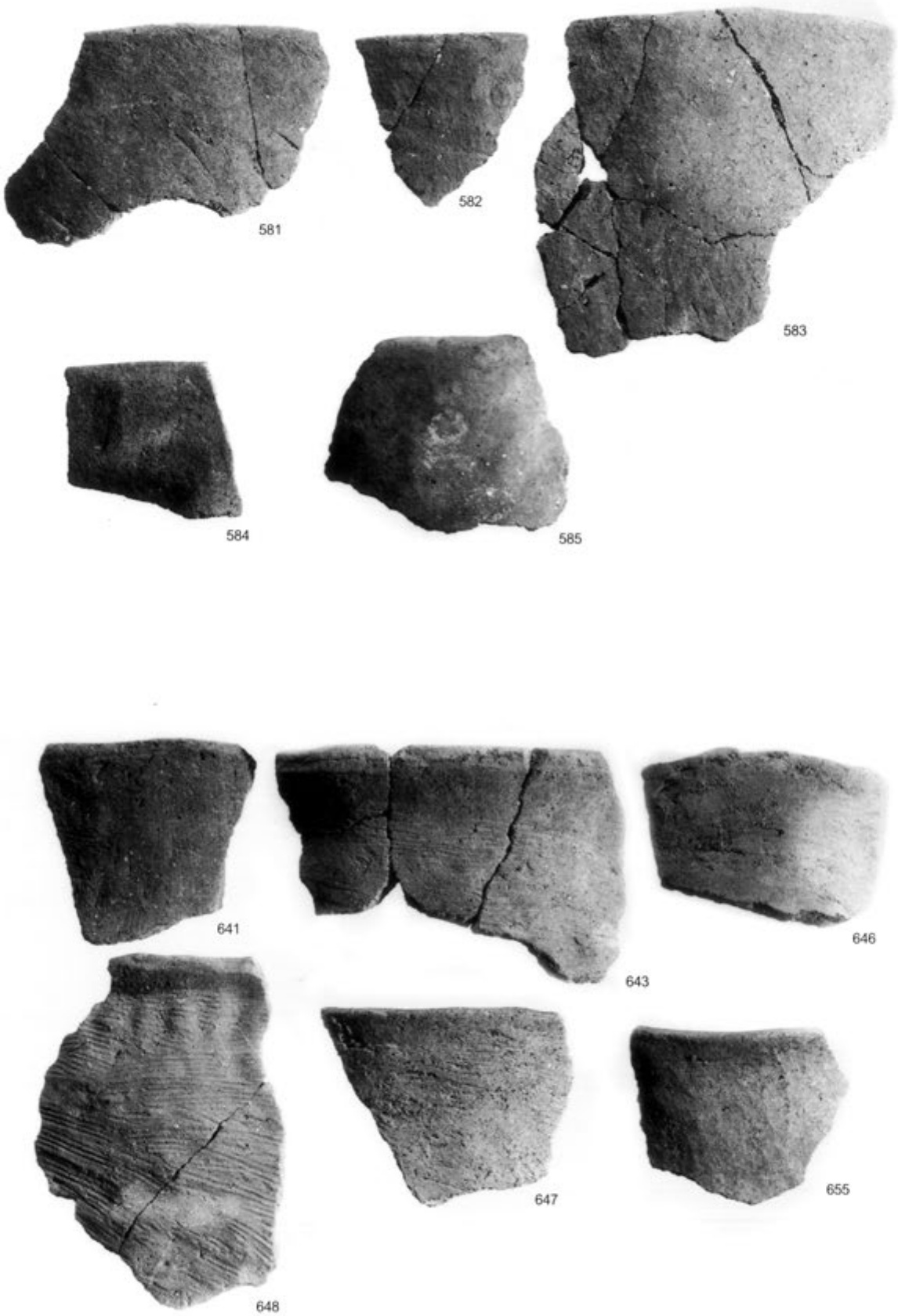
398

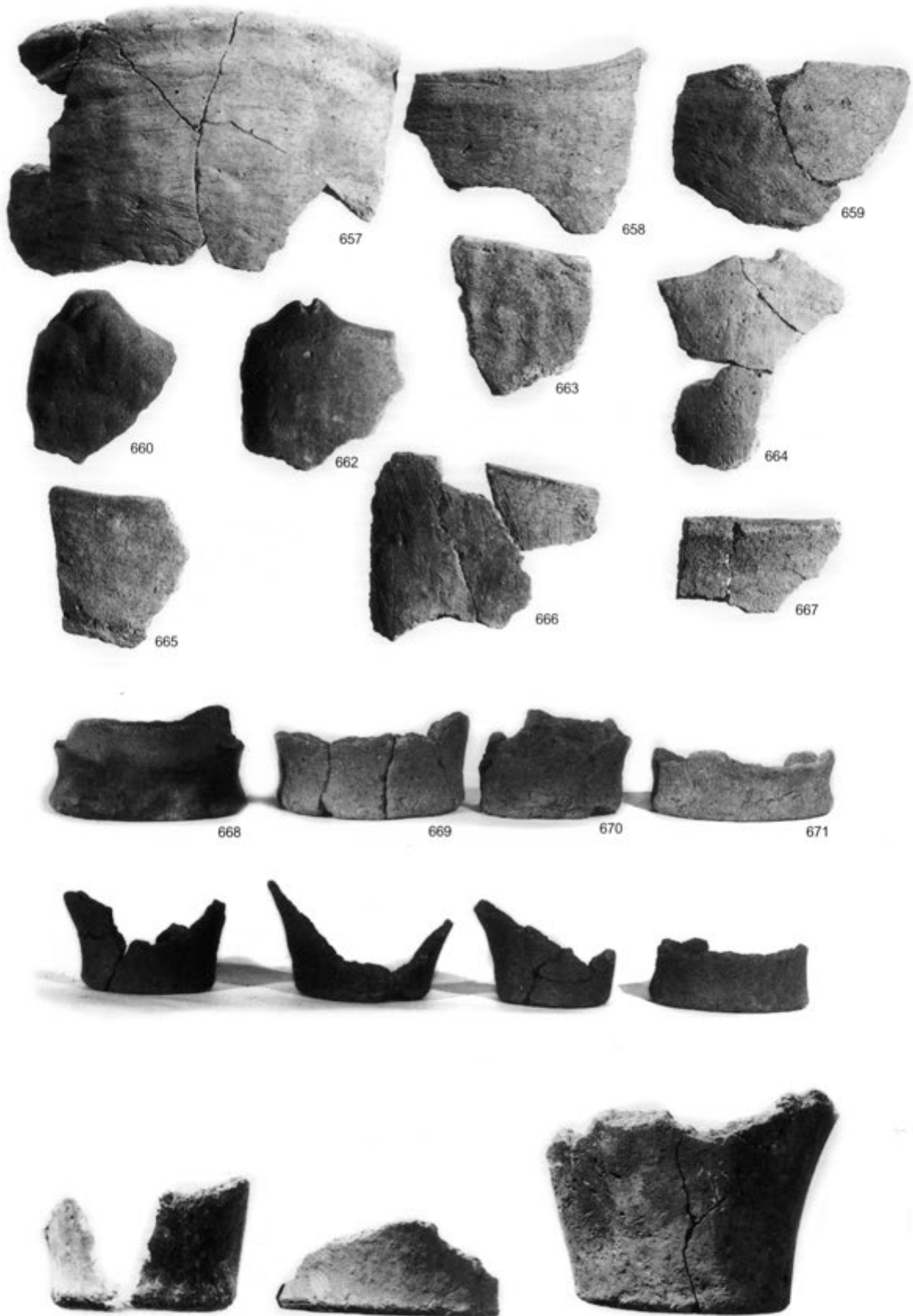














679



680



681



682



684



685



686



687



688



689



691



692



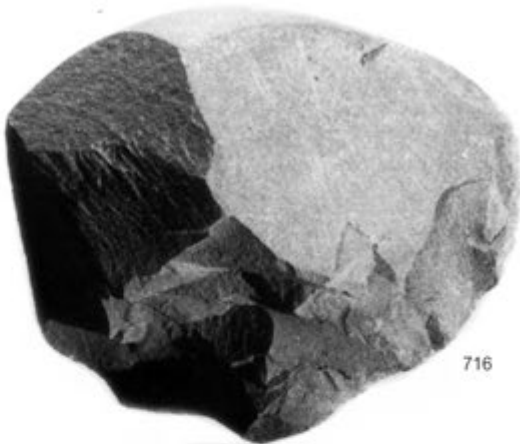
695



667



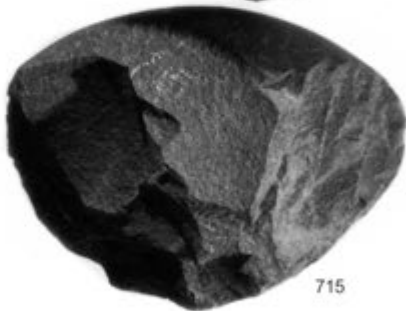
699



716



713



715



714



717



718



719



720



782



776



785



783



787



797





810



811



819



820



800



806



813



856



863



827



836



826



832



870



873



847



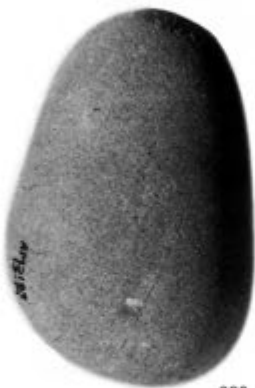
849



861



853



928



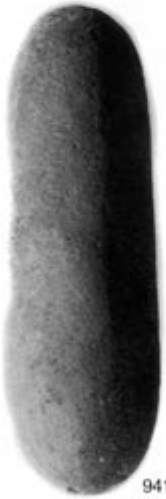
921



931



923



941



949



939



936



937



954



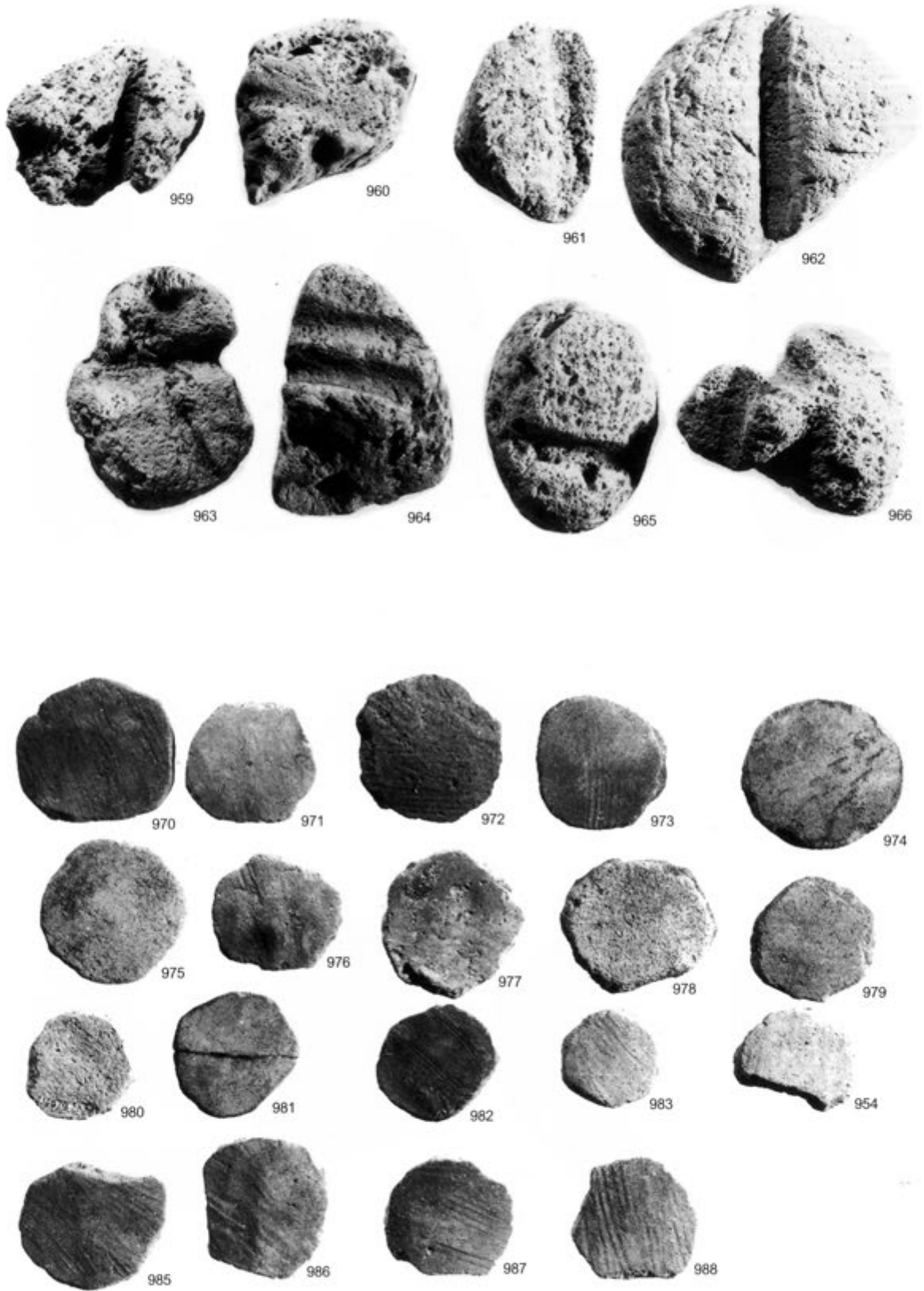
909



953



951



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(10)

浅川牧（Ⅰ・Ⅱ）遺跡

1994年 3月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252

印刷所 有限会社 アート印刷

〒892 鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL (0992) 47-5111